
遊戯王 僕らの進んで行く道

廃棄人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 僕らの進んで行く道

【Nコード】

N7136T

【作者名】

廃棄人形

【あらすじ】

遊戯王デュエルモンスターズを愛する僕、諏訪晃すわアキラは親友、榊洸さかきコウと遊ぶ為、今日もまた待ち合わせ場所へ向かっていた。

途中、妹からのデートのお誘いがあったり無かったりしたけど、僕はいつも通り道を歩いていた……………そんな時だった。

どこまでも白い男は、現れた。

彼は言う。

「私と、デュエルしないかい？」

——僕は進む。天使に導かれて。

——彼は歩む。悪魔に囁かれて。

————廃棄人形です。遊戯王のオリジナルストーリーでして、オリカ満載です！ また、友人である「紫苑の槍」様とのコラボ作品です。

こちらでは諏訪晃視点、「紫苑の槍」さんでは榊洸司郎視点でお楽しみ頂けたらと思います！

第一話 妹と洸司郎と白（前書き）

「紫苑の槍」さんの榊洸司郎サイドも宜しくお願いします！

諏訪晃サイドと榊洸司郎サイドを見て、この作品は完結します。

第一話 妹と洸司郎と白

今日は、とても暑い日だ。

流れ、垂れてきた汗を拭き取りながら僕は家に入った。家の中もむわっとした熱気に包まれ、無意識にも溜め息が零れる。

二階にある自分の部屋から遊戯王カードの入った鞆と、メインデツキの収納されたケースを手にとった。

ケースをベルトに引っ掛け、鞆を肩に部屋を出る。

「あ……制服のままだけど、良いよね」

そう自己完結し、リビングへ。

リビングには、妹の諏訪桜すわさくらがソファに座り……グッタリとしていた。

「……大丈夫、桜？」

「無理……プール行きたいよ」

「行きなよ。友達連れてさ」

僕がそう勧めると、桜はがばっと身体を起こして僕に詰め寄る。
ていうか、近いよ。

「お兄ちゃん、私とデー——」

「それじゃ、洸司郎のところ行ってくるね」

僕の親友である榊洸司郎さかきこうしろうの名前を出すと、桜はぶく、と半目で睨んで来る。

「またあ？ お兄ちゃん、洗司郎とばかり」

「まあまあ」

「怪しい！」

「何がっ!？」

びしっ、と僕を指差す桜に、僕もつい声を張り上げてしまう。

「洗司郎は男らしいし、お兄ちゃんは女の子みたいだし……うん、怪しい」

「いや、だからどこが？」

「鈍感なステータスにならないからねっ」

……いや、鈍感関係無くない？

なんて話しているだけで、時間は刻々と過ぎてしまう。

僕は、とにかく今日はゴメンね、と桜の頭を撫でた。

「むう……今度は一緒に行つてよ？」

「うん、分かってるよ。約束ね」

「私のせくしゝな水着で悩殺してあげるから！」

ふう、無視無視。

冷蔵庫の中にある林檎ジュースを一口飲んで、眼鏡のズレを直しながら玄関へ向かった。

「早く帰って来てね」

「一緒にお風呂は入らないよっ」

ええっ、という抗議を無視して、僕は家を後にした。

相変わらず……セミが煩かった。

◇
◇
◇

僕、諏訪晃と榊洸司郎は親友であり、ライバルだ。

詳しい理由は省略するけど、洸司郎は遊戯王の世界大会で優勝を狙っている。

その実、僕と洸司郎は世界大会の最終組の常連だ。決勝では僕とデュエルし、引き分けて終わった事もある。

そんなことを考えながら、僕は待ち合わせ場所へ走っていた。

「あ、そうだ」

ある店の前で、僕は立ち止まった。

カードショップ・フロスト。

中に入って、涼しげな風を肌を感じながら新しいパックが載ったファイルを開く。ぱらぱらとめくっていき、ある一ページ。

「あ、あった」

良かった、売り切れじゃない。

ファイルを手にカウンターへ持って行き、目当てのカードを指差しながらカード名を言う。

「【氷結界の喧騒】、お願いします」

「はい……480円」

500円を払い、20円のお釣りを財布に仕舞うと鞆に放り込み、カードはベルトのケースへ。

店の時計を確認すると、待ち合わせ時間まで後少ししかない。

「急ごう……！」

「——君、諏訪晃君かな？」

「!？」

その声は、後ろから。

振り向くと、少し離れた場所にその人は居た。

遠目だけど……肌と服の境目が判りにくい。肌や服だけじゃなく、髪と瞳までも白かった。

——なんか、気持ち悪い……。

それが僕の第一印象だ。

「そうですけど……」

「まあ、この完璧な私が間違えるはずも無いのだけどね」

………何この人、気持ち悪い。

「私と、デュエルしないかい？」

「デュエル……遊戯王？」

「そう。これを使ってね」

気付くと、男の左手にはアニメで見たデュエルディスクが嵌められている。そのディスクまでも、白い。

男の視線の先は僕の左手。視線を追ってみると、そこにあったのは赤と黒を基調にした、アニメでも見たこと事も無い形のデュエルディスク。

「えっ……!?!」

「断ったら、榊洸司郎君や諏訪桜ちゃんがどうなるかな?」
「なっ……」

コイツ……ッ!

ケースから紫色のスリーブで包んだデッキを取り出し、ディスクに装着。淡く光り、8000という数字が表れた。

訳も分からず、僕とその男のデュエルは開始された。

第二話 エンジェルとデュエルと人形（前書き）

晃のデッキには、オリカしか入っておりませんから（笑）

感想等、頂けたら幸いです。

第二話 エンジェルとデュエルと人形

「さあ、始めよう！ 私の名は、エンジェルとでも呼んでくれたまえ！」

口が勝手に動き、言葉を紡ぐ。

「「デュエル！！」」

手札を引く。暑さなんて関係無く、汗が頬を伝った。

デュエルディスクの手前にあるランプが、優しく光る。

「どうやら君が先攻みたいだね。完璧な存在ほど、不利に廻るものさ」

「……僕のターン、ドロー！」

スタンバイ通過、メイン。

手札を確認し、一つ深呼吸。

「僕は【ファーストドール第一人形 クー】を召喚！」

ディスクにカードを置くと、本当にモンスターが表れた！

空は、青空を模して造られた人形。クードールシリーズは全て、普通の人間大をした人形群だ。

「一枚伏せて、ターン終了」

【第一人形 クー】 ATK0、DEF1900。☆は？。

「ふうん、攻撃力が0なのに攻撃表示かい？」

「うん」

「ふむ……私のターン、ドロー」

間。

「私は【ヘカテリス】を墓地に捨て、デッキから【神の居城ヴァルハラ】を手札に加える」

エンジェルと名乗っただけあって、デッキは天使デッキのようだ。

「そして、ヴァルハラを発動！」

場に、神々しい城が現れ、僕とエンジェルを囲む。

まるでフィールド魔法のようで、何が来るかと僕は固唾を飲んだ。

「ヴァルハラの効果で、自分フィールドにモンスターが居なければ一ターンに一度、手札から天使族を一体特殊召喚出来る。現れよ――
――【神の御使いーガブリエル】！」

フィールドが光り輝く。咄嗟に眼をつむり、光が納まるのを待った。

数秒。

エンジェルのフィールドに居たのは、威厳のある顔付きで僕を見下ろす女性。背中には白い翼も生えている。

【神の御使いーガブリエル】 ATK2600 DEF1500、
☆?。

ソリッドビジョンによる威圧感に、汗を拭えない。

セミは、未だにけたたましく鳴いていた。



「まずは手始め……【神の御使いーガブリエル】で人形を攻撃ッ！」
攻撃しようとガブリエルが迫る。
僕は手前にある五つのボタンの中で、伏せカードがセットされている真ん中のボタンを押す。

「ダメージステップ、罨発動！
【狡猾乱舞^{こうかつらんぶ}】——！」

通常罨。クーとガブリエルが踊りだす。クーは軽やかに、ガブリエルは操られるみたいに滑稽に。
そして……攻撃力と守備力が変化した。

クー、ATK1900 DEF0。
ガブリエル、ATK1500 DEF2600。

「なっ……？」

「このカードの効果で、自分フィールド上のモンスターと相手モンスター一体を選択。お互いは攻撃力と守備力が入れ替わる——！」

——バトル続行ッ！

神の言葉を伝えるという天使ガブリエルは、一つの人形に敗れる。

エンジェルLP8000↓LP7600。

「くっ……」

「そしてクールの効果により、戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地に送った時、デッキから攻撃力0の人形を特殊召喚する！」

デッキを確認し、一枚のカードを横向きでディスクに置く。

「僕はデッキから、【フォースドール第四人形 セイ】を守備表示で特殊召喚する」

セイ星は藍色を基調とした人形。髪は長くて幼い女の子だ。

【セイ第四人形 セイ】 ATK0 DEF300、☆？。

小さい身体に秘めた力は凄まじく、チューナーとして新たな力へ進化する。

「ガブリエル様が一瞬で破壊されるとはね……その上、チューナーまで。流石だね、諏訪晃君」

「……………」

コイツ——本当に何者なんだろう？

どこまでも白い容貌、アニメに出て来るディスクにソリッドビジュン。

そして何より、まるで時が止まったような空間。
ここまで声を張り上げて、近くのカードショップ・フロストの店

長が静かなのはおかしい。

セミは、遠くで鳴いている。だから、時間が止まっているなんてのは幻想だ。

——視界に写らなく、声も聞こえない……………？

「私はカードを二枚伏せて、エンドさせて貰うよ」

「考えても分からない、か」

今、僕は洸司郎と桜を人質に取られてるんだ。負けられないのは、変わらない！

「行くよ、皆……ドローっ！」

第三話 人形と怒りと三大天使（前書き）

取り敢えず、デュエル終了までは更新しちゃうと思います。

第三話 人形と怒りと三大天使

暑さが、さらに増した気がした。

クーラーが壊れたのかと、様子を見に行こうと諏訪桜はキッチンから身を出し――。

パリン、と。

小さくも響く音が桜の耳朶を叩いた。

「お兄ちゃんの花碗が……」

嫌な予感が胸を過ぎる。

まるで……最愛の兄が、もう会えなくなるような、最低最悪の予感。

「お兄ちゃん………」



エンジェルの手札は二枚、僕はドローして五枚。
フィールド、手札、ライフと全て有利だ。

一つ不利を挙げるならば、精神面か。大切な二人を人質に取られ、外は熱気に包まれ、セミの鳴き声が鬱陶しいくらいだ。

眼鏡のズレを直し、制服のYシャツの袖を捲る。

(……モンスターは無し、か)

手札の魔法、罨を吟味し、思考する。

(………良し)

「まずは☆(レベル)4のクーに☆1のセイをチューニングッ！」

クーの廻りにセイが飛び、星となる。

それを見ながら、僕はケース内から声が聞こえた気がした。造られた、女性の声。

君は――――。

「散れ、刺し、斬るが良い。守る為に殺める制裁を！ シンクロ召喚、惨殺せよ【抹殺人形^{イレイドール} ライア】！！」

セミロングの髪、肌は赤く染まっている。手には一本のナイフが妖しく光っていた。

「へえ……」

「ライアは相手モンスターを破壊した時、デッキからドールと名の付いた魔法、または罨を一枚手札に加えられるんだ」

「……厄介だね。リバースカード、オーブンッ！！」

エンジェルが伏せていたカードが一枚、めくられる。

それは……カウンター罨。

「【神の警告】！」

「げっ」

「ライフを2000払い、そのシンクロ召喚は無効にし破壊させて貰うから」

エンジェルLP7600↓5600。

ライアが現れた神によって、バラバラにされる。

何故か……そう、何故かだ。僕はその様子に激しい怒りを覚えた。

デュエルは関係なく、ただ、ライアがいなくなる姿に――。

『オレは、大丈夫だぜ……だい、ダ……い、オ……?』

激しい頭の痛みは、彼女の悔しさを示しているのだろうか……?
……?

「ッ!」

潰してやる……ッ!!

「魔法カード、【ドールリサイクル】発動! このターンカードの
効果で破壊された人形をデッキに戻し、」

ライアをケースにしまって、デッキを手取る。

「そのLV以下の人形を特殊召喚する! 召喚、【サードドール第三人形 チー】

「！」

地^{チー}は、まだ幼稚園くらいの小さな女の子だ。茶色い髪。手にはピコピコハンマーが握られている。

ATK0 DEF100、☆？。
チューナー。

「チーの効果を発動！一ターンに一度、墓地に存在する人形を一体ゲームから除外する事で、デッキから同名カードを特殊召喚することが出来る！」

「なに……？」

「僕は、【第一人形 クー】をゲームから除外しデッキからクーを守備表示で特殊召喚する！」

おいで、クー。

空と地がフィールドに揃う。

LV6のシンクロモンスター、あの子だ！

「LV4のクーに、LV2チーをチューニング！ 祖が奏でるは鎮魂歌の終焉！ 戦局は今、幕を閉じるッ！ シンクロ召喚……謡え、^{プロウドール}【奏する人形 ソウカ】 ツ！！」

また、ケースから声が聞こえた。今度は違う声だ。

手にハープが握られた、美しき人形……ソウカは一瞬僕と視線を交わすと、不器用にウィンクをしてくれた。

可愛いくて、愛しい。そう感じた。

「行こう、ソウカ！」

『ふふ……わたくしにお任せあれ、マスター』

「ソウカが持つ効果は、守備表示を攻撃した時の貫通効果と、後一
つ――」

ソウカがエンジェルを睨む。そしてハーブを奏でた。

「戦闘ダメージを与えたら、デッキからドールと名の付いた魔法か
罠をサーチするんだ。ソウカ、あの人にダイレクトアタックッ！」

ATK2300、DEF0。

「……………」

エンジェルは、微かに微笑みながらその攻撃を受ける。

エンジェルLP5600↓3300。

「ソウカの効果発動！ デッキから、【ドールブロークン】を手札
に加え、メイン2。カードを二枚伏せる。ターン終了」

「私のターンだね、ドロ―させて貰うよ」

エンジェルの伏せは一枚、モンスター無し。手札は3。

一方僕も手札は3枚だけど、フィールドは圧倒している。

勝てる……………！

「クク……………アハハ」

エンジェルは、笑った。

「良いね……流石、私が選んだ“魂”だよ」

魂……？

笑い声が収まり、エンジェルは言う。

「諏訪晃君……行くよ？」

そう言いながら、エンジェルは手札からカードを一枚手に取り、プレイする。

「魔法カード【天界への序章】を発動しよう。墓地に居る神の御使いを手札に加え、デッキから光属性、天使族を墓地に落とす……………
…ガブリエルを手札に、デッキから【神の御使いーラファエル】を墓地へ」

ガブリエルにラファエル……後はミカエルで三大天使勢揃いだ。
ウリエルを加えれば、さらに四大天使になる。

「まずはヴァルハラの効果により、ガブリエルを特殊召喚！」

再び、女性の容姿をした天使が舞い降りる。

そして、

「畏発動！ 【光の懸け橋】！ ライフを1000払い、墓地に存在する光属性、天使族のモンスターを特殊召喚する。現れよ、【神

の御使いーラファエル】ッ!!」

エンジェルLP3300↓2300。

フィールドに現れたのは、美青年だった。柔和な笑みを浮かべ、羽が舞う。

「魔法カード、【織^{おりてんし}天使の集結】！ 自分フィールドに神の御使いが二体以上存在する時、手札から神の御使いを一体特殊召喚するこ
とが出来る」

「神の御使い……まさか!?!」

「三大天使、最後の一柱……【神の御使いーミカエル】、降臨!!」

青き甲冑を身に纏い、煌めく剣を構える美青年……ミカエルは、
執拗に僕とソウカを睨んでいる。

——彼等にとって、僕らは神に仇成す反逆者かな。

圧巻………天使の中で最高位である織天使の三柱が揃い、そう
答えるしか無かった。

ガブリエルATK2600、DEF1500。

ラファエルATK2700、DEF1800。

ミカエル、ATK2800、DEF1700。

「さて………美しきバトルフェイズに移行しよう」

三大天使が、迫る。

第四話 手加減された勝利と異世界と静かな別れ（前書き）

デュエル終了！

なんか目茶苦茶だったかな？

晃のフェイバリットカードは、

【華散り人形 ファラ】です。

応援宜しくお願いします！

第四話 手加減された勝利と異世界と静かな別れ

「ガブリエルで【奏する人形 ソウカ】を攻撃」
「くっ……」

LP8000↓LP7700。

ソウカが破壊され、墓地に送られる。悲しげなハーブの音色を残して。

ゴメン、と一言呟きリバーズカードをオープンさせる。

「罨カード、【ドールマスクレイド】！」
「……？」

「自分フィールド上の人形と名の付いたシンクロモンスターが戦闘破壊された時に発動可能！ そのシンクロ素材に使用したモンスターを特殊召喚する！」

ソウカの代わりに、クーとチーがフィールドに舞い戻る。どちらも守備表示だ。

第一人形 クーDEF1900。
第三人形 チーDEF100。

「ほう……ラファエルでクー、ミカエルでチーを攻撃」

僕のフィールドに残ったのは、伏せカード一枚。
けど、エンジェルの手札はゼロだ。

「私はターンエンド。さあ、どうするんだい？」

まだ……アレを引けば、勝機はある！

「僕のターン、ドローツ！」

頼む。桜と洗司郎を守らせて――。

「……来た……ようしっ！！」

エンジェルは楽しげに僕の様子を眺めている。
手札はこれで4枚。

「僕は【ファイブスドール第五人形 ヨウ】を通常召喚！」

出て来たのは、オレンジの髪をした人型人形。元気にはしゃいでいる。

太陽、ヨウATK0、DEF900。

チューナーで、LVは？。

「このカードは自分フィールド上にモンスターが存在せず、相手フィールド上にモンスターが居る時はリリース無しで通常召喚することが出来る！そして、このカードが召喚に成功した時、デッキから攻撃力が0の人形を特殊召喚出来る……！」

おいで。

「守備表示で、【セカンドール第二人形 カイ】を特殊召喚！」

海の深い青は、髪と瞳に色濃く合わされている。

どこか妖艶さを持つカイは、エンジェルを見ながらくすつ、と嘲笑した。

「LV3、カイにLV5、ヨウをチューニング！ 命を伝えるは神秘なる水滴。雫が流るるは花の涙！ シンクロ召喚……咲き乱れよ、

ブルームドール
【華散り人形 ファアラ】ッ！」

LVは？。フィールドに降り立つは、華で彩られた可憐なる女性型人形。

人形で無ければ無し得ない美しさは、一瞬絵画にも見えた。

『私を呼んで頂きまして、御光栄でございます、ご主人様』

「ごしゅ………？ う、うん。頼むよ、ファアラ」

もう、声がするのも驚く事は無かった。

◇
◇
◇

「バトルッ！ ファアラでミカエルを攻撃ッ！」

ファアラ、ATK3000、DEF2100。

「く……」

エンジェルLP2300↓2100。

「ファラはね。LV4以下のモンスターを戦闘破壊して墓地に送ったら、ドールの魔法か罠をサーチ出来る。LV5以上のモンスターを戦闘破壊したら、続けて攻撃出来るんだよ」

「く……」

「まあ、代わりにシンクロ以外で特殊召喚は出来ないんだけど——ファラ、続けてラファエルに攻撃ッ」

エンジェルLP2100↓1800。

「ラスト。ガブリエルにアタック！」

エンジェルLP1800↓1400。

「クク……」

「トドメだ！ ファラでダイレクトアタックッ！」

相手のフィールドはヴァルハラのみ。手札は無い。

エンジェルLP1400↓0。

「良しっ、勝ったー！」

「ククク……流石、君の魂は上質だ」

ソリッドビジョンが消え、エンジェルは慈愛を含めたような笑みで言う。

気が付くと、エンジェルの腕にあったはずのディスクが消えてい

る。というのに、僕の腕は未だに赤と黒のデュエルディスクが取り付けられていた。

「“かろうじて”、君の勝ちだよ……諏訪晃君」

「かろうじて……？」

「気付かなかったのかい？」

どういう……？

「例えば、君がソウカで直接攻撃してきた時、伏せてあった【光の懸け橋】を使わなかった」

「あ……！」

1000払い、墓地のモンスターを蘇生する罠、だったよね。

あの時、エンジェルの墓地に居たのはガブリエルだ。僕のソウカじゃ、勝てない。

「後は……」

「大丈夫、気付いたから」

「そうかい？」

——ガブリエルやラファエル、ミカエルの効果を使わなかった事。

「それより、桜や洸司郎は大丈夫だよね？」

「ん、何がだい？」

「何がって、人質って………！」

「誰も、危害を加えるなんて言ってないさ。どうなるかな、と言っただけ。勘違いは止めてほしい。私がそんな野蛮な事をするはずが

無いだろう？」

……………どっと疲れが出て来た。

確かにはやとちりだけど……………僕、この人苦手かも。

「さて、諏訪晃君」

「……………何？」

「不機嫌そうだね……………それより、君は試練をクリアした」

試練？

反芻するように呟くと、エンジェルは僕に手を翳した。

そして、

「えっ……………！？」

足元から、光の粒子となって消えていた。勿論、エンジェルじゃなくて僕が。

「なっ……………？」

「君には遊戯王デュエルモンスターズで巡り廻り、律法と化している異世界、ユグルに行つて貰う」

「え、あ……………い、異世界？」

現実だと教えてくれたのは、以外にも夏の暑さだった。

「ま、待ってっ！　せ、せめて洸司郎や桜……………父さんや母さんに挨拶させてよ！」

「無理だ。私の完璧な計算が狂うだろう？」

「そんな……………」

——また、会えるよね？

もう手が無くなっていた。感覚も、姿も。
僕はただ、眼を閉じ、時が来るのを待つ。

「良く分からないけど……………皆、さようなら」

現実的じゃないよ、全く。

——セミの鳴き声が、消えてしまった。



何も無い、安らかな空間。

息苦しさで心地良さが同居した空間で、僕は何かに流されるように浮遊していた。

「どこに行くんだろう？」

自分の声が響く。

異世界ユグル、という答えも漠然としていて、僕を納得させては

くれなかった。

「はぁ……」

と、溜め息を零した瞬間だった。

リュックの口が開き、中に入れていたカードケースにカードファイル、種類毎に入れていた数十枚というカードが空間内にばらまかれていく。

「わ、わっ！」

追い掛けようとクロールのように腕を動かすも、空回りして……あろうことか。

「あ、リュックまでええええ……」

腕からすっぽり抜けて、リュックサックまで空間内へ。

あの中には財布とかも入ってたのに……。

「…………泣きたい」

残ったのは眼鏡に赤と黒のデュエルディスク。ベルトに取り付けてあったメインデッキくらいだ。

人形デッキが残っただけマシかな。多分。そう信じたい。

「冴司郎……お父さんと仲良くね」

ゆらゆらと揺れながら、僕は脱力して眼を閉じる。

「タッグデュエルトーナメント……一緒に参加出来なくてゴメン」

洗司郎なら、大丈夫だろう。
昔は一人で、父親が嫌いで。泣きながら僕を殴ってきた洗司郎はもう居ないんだ。

「桜……約束、守れなくてゴメンね」

プール、行けないや。

きつと水着姿、可愛いだろうに……エンジェルのバカ。

「……ブラコンを直すキツカケにしなね、桜………」

父さん、母さん。

突然居なくなる親不孝者で、ごめんなさい。

僕の分まで、桜を支えてやって下さい。

「もう二度と、会えないかも……っ、しれないね……っ！」

——もう一度、さようなら。

眼鏡が、静かに僕から離れて。

メッセージを乗せたビンを海に流したように……浮遊するのが見えた。

第一章 第二話 異世界、ユグル

空は、青かった。

リュックも眼鏡も、その上財布や家族、親友を一気に失った僕は、ゆっくりと立ち上がって辺りを見渡した。

空は青く、目の前は長く続く一本道。道は出来ていると同時に、周りは草原だ。後ろを向く。

「……ふわぁ」

つい、変な声が出た。

大きな門だ。一番上の両側には、天使だろうか——翼を広げた女性の像が象られ、強固に閉じられていた。

「ここが………“ユグル”？」

そういえば、と手を翳しながら空に浮かぶ太陽を見つめる。

（……そんなに暑く、ない？ セミも聞こえないし）

少なくとも、日本じゃない。

そんな実感を持ち始めて、僕は少し身震いした。

と——。

「ようこそ、ユグルの一角、ルジェラへ」
「っ!？」

振り返ると、そこに居たのは僕をこの異世界に連れて来た張本人、エンジェルだった。

「……説明、してくれますよね？」

「そう、だね……まずは、君を連れて来た理由。それは、」

一拍。

「君が調べて欲しい」

「は……？」

「つまらないだろう？ 簡単に教えてしまったら」

つまらない、て……………。

「勿論、やることをやってくれれば、地球にも帰すよ？」

「やること……」

「そう。大丈夫、君なら解けるさ」

きつとね、とエンジェルは締め括った。

そして、白い装束の懷から、肩に掛ける大きなバッグを取り出し渡される。

「それは私からのプレゼント。中にはユグルの通貨であるリユールが入った巾着袋があるよ」

「あ、ありがとう……」

バッグから巾着袋を取り出し、中を見る。数枚の紙と硬貨が所狭しと入っていた。

これがリユールだろうか？

価値とか分からないから、何とも微妙な気分だ。

「そのデュエルディスクもあげる。バッグの中には仕舞っておくと良い」

言われた通り、僕は左腕から赤と黒のディスクを外してバッグに仕舞う。ちなみに、デッキはもう腰のケース内だ。

バッグを肩に掛け、重さを確認する。とはいえ、余り重くは無いんだけど。

「ついでにコレも必要だろう」

……………どこから取り出したんだろう？

エンジェルが待っていたのは、僕の身の丈を隠す程の大きさである灰色のローブだった。

手渡され、僕は礼を口にしながらバッグごと身体に羽織る。

「これからは旅になるだろう？ ルジェラで準備をすると良い。“マーカー”が付いていない限り、ルジェラは誰でも入れる」

「マーカー……………？」

……………そういえば、バイクで走りながらデュエルするアニメで主人公とかが付けていた気がする。

「それじゃ、健闘を祈る——私の完璧な計画を崩さないように、諏訪晃君」

「……………」

やっぱりこの人……………なんか、気持ち悪い。

エンジェル改めてナルシストにしたら、と提案しそうになる口を押さえて、僕は小さく溜め息を零した。

◇
◇
◇

ユグルの人々は、エンジェルみたいに皆白いんじゃないか、なんて考えを持っていた。

一先ず一安心だ。

皆、僕と同じように普通の肌をしていた。ただ一つ気になったのが、僕と似たローブを羽織っている人が少ないこと。

「よお、その旅人さん」

「……え？」

果物を売っている店員に話し掛けられたのは、どうやら僕らしい。髭を携えた店主は、1つのリングを僕に差し出しながら、ニンマリと笑う。

「アンタ、ローブ着てるっつーこたあ旅人だろ？ リンゴ、一つどうだい？」

どうやらローブは旅人の証らしい。他の国とかはともかく、少なくともルジェラはそう認識してくれた。

「えと……じゃあ、1つ」

「ほい、3リユールな」

……いえ、分かりません。

恥ずかしながらもリユールの数え方を教えて貰い、硬貨を渡す。

「しかし、リユールしらねえとはどこのモンだい、アンタ」

「え、と……す、凄い田舎でして、貧しいので、子供の僕はリユールを持たせて貰ったこと無いんですよ」

「はあ……」

納得……して貰えたかな？

取り敢えず一言断って、僕はその場を後にする。

一応、だけど……リユールも分かったし、食料と飲料を集めて、ルジェラを出よう。

「なんか……息苦しいし」

誰に言うでも無く、国の中心にある女神像を見上げながら呟く。

元々少食の僕は少しの食料と結構な数のペットボトルをバッグに詰め込んだ。

「あれ……?」

早速だけど出発っ！ と意気込んだ僕は、門近くで1人、膝を抱えている少女を見つけた。

藍色っぽい色をしたローブ。彼女も旅人だろうか？

髪の色は茶色。そういえば桜も生まれ付きの茶色だったな、なんて思った。

「……この匂い」

遠目で彼女を見ていると、微かに何かを呟く声が聞こえた。
そして、少女はぱっと立ち上がり僕を真っ直ぐに見つめ――。

「さっ、桜!？」

な、なんで桜がここに!？

「お兄ちゃんっ！」

「うわっ！」

抱き着かれ、少しよろける。

少し低めの身長に生粋の茶髪、ブラウンの瞳。その上、見慣れた
ツインテールが揺れていた。

間違いない……………妹の諏訪桜だ。

「な、なんで桜がここに？」

「お兄ちゃん……………」

僕の胸に鼻を擦り付ける姿は、正に猫のよう。

「お兄ちゃん……………」

「え？」

「わたしね、お兄ちゃんを追ってきたんだよ？」

未だ抱き着いたまま、桜は顔を上げて笑う。

その表情は、本当に嬉しそうだ。

「お兄ちゃんが消えてくの、見えたんだ。ほら、あの白い人の前で」

「あの時、桜が？」

「うん。わたしがお兄ちゃんリーダーで見付けた時には、もう殆ど」

消えちゃってたけど」

お兄ちゃんリーダーて。

「それで、あの白い人に詰め寄ったら“方法はある”って。それで、わたし、一ヶ月くらい精霊界に居たんだ」

「え、一ヶ月？　　というか精霊界って……」

「お兄ちゃんは分からないと思うけど、お兄ちゃんが異空間に居たのは約一日なの。で、精霊界は時間軸が違うらしくて、地球やユグルが一日経つと精霊界ではもう一ヶ月経ってるんだよ？」

……随分とお詳しい事で。

精霊界っていうのは、アニメで出て来た、あの？

「それで、精霊と契約すればこっちに来れるって。まあ、それでコッチに来れたのは良かったんだけど、その……」

ぐ。

非常にタイミング良く、桜のお腹が悲鳴を上げた。桜も顔を赤くして、僕から離れた。

「……先に腹ごしらえ、しようか」

「うんっ」

まあ、何にせよ。

桜と再会できて、僕は心底嬉しかった。

第一章↳第二話 異世界、ユグル（後書き）

実は……当初、桜を出す予定は有りませんでした。

けど……はい、友人間で活躍を期待している人が居たので、まさかのご登場（笑）

くそう、計算が狂った……謀られたッ………！！（違います）

第一章〜第二話 桜の精霊（前書き）

友人間での桜人気が高いです（笑）

それと……後半の下ネタ自重wwww
コメディって疲れるのが分かった廃棄人形でした。

第一章／第二話 桜の精霊

人影の無い路地で、僕は石階段に座って食事していた。
また買い直さないと。

どんだん胃に収められていく食べ物を見て、僕は密かにそう思った。

今度は、二人分だ。

「ふう……お腹いっぱい」

「良かった。それで、一つ聞きたいんだけど……」

「え、なにになにっ？」

さっきは混乱して気付かなかったけど、桜の右腕にはオレンジ色のデュエルディスクが。

僕の記憶では、桜は遊戯王をしていなかったと思うんだけど。

「桜って、遊戯王やってたっけ？」

「うん。本当はお兄ちゃんや洸司郎より強くなったら驚かそうと思ったんだけど……なんか二人とも、世界大会とか行っちゃうんだもん」

「あはは……成る程」

けど、まさか桜が遊戯王を。嬉しい限りだ。

日本に帰ったら、洸司郎と三人で出来るんだ。

「そうだっ、お兄ちゃん、デュエルしない？」

「え？」

「わたしのデッキの中に、さっき言った精霊がいるんだっ。自分の実力も知りたいし、ね？」

うん、良い機会だしやろう。

僕がそういうと、桜は勢い良く立ち上がった。

◇
◇
◇

先攻は、桜だった。

「わたしのターン、ドロー！」

さて……桜はどんなデッキを使うんだろう？

「わたしはモンスターをセット、カードを一枚伏せてターンエンドだよ」

「じゃあ僕のターンだね、ドロー」

桜のデッキは分からない。手札に第五人形が居るけど、このカード、実は相手にセットカードがあるとシンクロに使用出来ない。

桜の手札は四枚、か。

「僕は【シンクスドール第六人形 ツキ】を召喚！」

ツキ月は、大人っぽい穏やかな女性。だが、怒らせたら怖いんだ。

ツキ、ATK0、DEF500。LVは？。

「このカードが召喚に成功した時、デッキから守備力が500以下の人形を特殊召喚することが出来る。僕はデッキから、【第三人形チー】を特殊召喚！」

「はー……洗司郎の言ってた事、本当だったんだ」

「え……桜が遊戯王やってたこと、洗司郎知ってたの？」

「うん。だって、わたしだけじゃお兄ちゃんに追い付けない気がして」

うわー……何だろう、この疎外感。

「で、洗司郎はなんて？」

「“晃とデュエルする時は気を付けろ。手札一枚でシンクロしてくるからな”だって」

「……僕のデッキは筒抜けですか、そーですか」

かなり不利だね？

桜に限って、メタデッキは無いと思うけど……仕方ない。

「LV?、ツキにLV?、チーをチューニング！ 散れ、刺し、斬るが良い。守る為に殺める制裁をッ！ シンクロ召喚、惨殺せよ【抹殺人形 ライア】！」

エンジェルとのデュエルでは神警をされてしまった。

「気楽にね、ライア」

『おうよ。オレに任せな、マスター』

「良し——バトル。ライアで、裏守備モンスターを攻撃！」

ライアがナイフを構えて突進する。
桜の場で身を丸めていたのは、マスクド・ドラゴン【仮面竜】だった。

「【仮面竜】の効果を発動するよ！」

「同じく、ライアも発動！ モンスターを戦闘破壊したら、デッキからドールと名の付いた魔法、または罠を手札に加えられる！ 僕は【ドールギア】を手札に！」

「わたしは、デッキから【神竜ラグナロク】を特殊召喚！」

——神竜ラグナロク？

とすると……………キング・ドラグーン！？

「ふふん、気付いたみたいだね、お兄ちゃん？」

「……厄介だなあ」

ラグナロクを出したということは、伏せは通常モンスターの蘇生か、若しくは次のターンに融合出来るのか。
どちらにせよ、出されたら劣勢になるだろう。

「僕は【ドールギア】をライアに装備」

ライア ATK2450↓2750。 DEF0↓300。

「エンドだよ」

「行くよー！ ドローッ！」

ラグナロク……桜、予想に反してハイパワーだ。

「わたしは【融合呪印生物一闇】を召喚！」

……外見は、正直気持ち良いものじゃない。

けれど、そのモンスターのお陰でもう、奴が出て来る。

「【融合呪印生物一闇】の効果を発動！ このカードとラグナロクをリリースして、エクストラデッキから【竜魔人 キングドラグーン】を特殊召喚っ！」

空から舞い降りたのは、黒い翼をした竜。

自分フィールドのドラゴン族を、対象するカードから守るキングだ。

その上……手札から新たな軍勢を呼び起こす魔人である。

「わたしはキングドラグーンの効果を発動するね！ 手札から、【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】を特殊召喚！」

「げ……」

最悪なパターンだ。

通称レダメと呼ばれる黒き竜は、一ターンに一度、手札または墓地からドラゴン族を目覚めさせる……！

「レダメの効果により、頼むよ、わたしの精霊……！」

手札を一枚掲げる。

そのカードから、眩しい光によって包まれていく――。

「【皇神竜 こうしんりゅう ラグナレク】を攻撃表示で特殊召喚ッ！」

降臨する、神々しい神竜。輝き、煌めき、長く揺れる尾は幾重の鱗に包まれている。

長い銀の髭、鋭い爪に握り潰されそうとなっているのは赤い水晶と青い水晶。

紅の瞳は、真っ直ぐに僕を見つめている。

『汝が主の兄君、諏訪晃か』

「え……」

このモンスターも、ライアやソウカみたいに喋れるんだ。

ラグナレクさんの重くのしかかるような声は、まるで僕を威圧しているようだ。

『ほう……一目見たときは、女子おなこかと思ったが』

「お兄ちゃんは立派な男だよっ！ お風呂でも凄く大きい——」
「すっ……っ……っ……ぷっ！」

なっ、何言おうとしてんの桜はっ！？

『ふむ……成りとナニは違うか』

「貴方も何上手いこと言ってるの！？ 桜も当たり前ってみたいに頷かない！」

「お兄ちゃんの全てはわたしのモノ！」

『……これも、歪んだ性教育か』

「いやっ、違うから！」

「うん、違うよ！ お兄ちゃんは悪くない！」

あれ、いきなり桜が味方に？

なんて、不思議に思っていると、桜は顔を赤く染めてくねくねと身体をよじらせた。

「これから、お兄ちゃんに全部教えて貰うんだもん……♪」
「桜ーーーーーッ！！」

駄目だ、もう……………。

キングドラグーンにレダメ、さらに知らないカード、【皇神竜ラグナレク】というピンチなのに。

僕は変わらない妹に、溜め息を零した。

第一章〜第三話 皆がパートナー（前書き）

今更ですし、あらすじにも書いてありますが、この小説は紫苑の槍様とのコラボ作品です。

その為、紫苑の槍様の小説も読んで貰ってやっと、この作品の全てを知ることが出来ます。

ただ……時間軸は重要な場面以外はそこまで詳しく定めている訳ではございませんので、ご了承下さい。

感想、ご意見、質問などお待ちしておりますねっ！

第一章 第三話 皆がパートナー

——デュエルは、再開された。

「お兄ちゃんに教えてあげるねっ。ラグナレクは、自分フィールドに表側表示で存在する時、他のドラゴン族は魔法、罠の効果を受けないんだよ!」

「えっ、受けない?」

「そう!」

ラグナレク、ATK3500、DEF2500。

これで、対象を指定しないカードでも破壊することは出来なくなってしまうらしい。

「その代わりに、墓地から蘇生は出来ないしエンドフェイズには墓地のドラゴンを除外しないとフィールドに維持出来ないんだ」

「そっか」

まあ、流石にそれくらいのコストは必要だね。

桜の手札は二枚。

桜は一度手札を確認すると、視線を僕に向けた。

「バトルフェイズ! 【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】で……いれいずどくる? にアタック!」

レダメは2800、ライアは【ドールギア】を装備して2750。

「この時、【ドールギア】の効果が発動!」

「えっ？」

「装備モンスターが攻撃対象になった時、デッキからカードを一枚ドロ―する！」

「けど、バトルは続行だねっ！」

くっ……！

ライアが破壊され、装備した歯車と共に墓地に送られる。

晃LP8000↓7950。

「続けて、キングドラグリーンでダイレクトアタック！」

キングドラグーンの攻撃が、目前に迫っていた。

迫力なんて言葉じゃ表せないような、威圧と高圧の入り混じった
衝撃……！

「うああ……っ！！」

晃LP7950↓5550。

テレビで見たホラー映画じゃ感じられない恐怖。僕はつい、尻餅
をついてしまった。

「ご、ごめんお兄ちゃん！　そういえば、お兄ちゃんはディスク使
つてのデュエルは初めてなんだっけ……」

「だ、大丈夫……うん。ちょっと驚いたただけだから」

実際、ディスクは初めてじゃない。エンジェルとのデュエルで使
った。

ただあの時は、ダイレクトアタックを喰らっていない。
ばらまかれた六枚の手札を拾って立ち上がる。

——身体が、微かに震えていた。

「い、……良いよ、続きして」

「う、うん……じゃあ、ラグナレクでダイレクトアタック」

『済まぬが、我慢せよ』

死——ソリッドビジョンだと分かっている、その一字が脳裏に
浮かぶ。

また身体が後ろに倒れそうになるのを抑えて、僕はラグナレクの
攻撃を貰った。

晃LP5550↓2050。

「エンドフェイズに、墓地の【仮面竜】を除外してラグナレクを維
持してエンドするね」

「……………」

一度、深く深呼吸。

頭の中でソリッドビジョン、と繰り返して心を落ち着かせる。

「僕のターン、ドロー！」

桜の場にはキングドラグーンにレダメ、ラグナレクと伏せが一枚。
手札は二枚だ。

僕のフィールドにカードは無く、手札がドローして七枚だ。
これを打破するには、あの永続魔法が必要だ……。

「手札から通常魔法、【ドールサイクル】を発動！ 墓地に存在するライア、チー、ツキをデッキに戻して、」

ライアはエクストラ……デッキケースに。

「デッキから二枚ドロする！ 引いたカードが人形モンスター二体だった場合、お互いに確認してさらに一枚ドロする……引いたのは【セブンスドール第七人形 コウ】と【第一人形 クー】！ もう一枚ドロする！」

——来た！

「うわー……て、手札が九枚……」

「行くよ、桜。伏せカードによるけど、このターンで終わる」
「えっ？」

まずは、キーカードからだ。

「永続魔法、【ドールコンヴァート】！」
「ドール……コンヴァート？」

僕の背後に現れる、工場に似た機械。墓地に行った人形を糧に動く。

さあ、やろう。

「手札から魔法カード、【ドールインヴァイト】！ 手札の【第一人形 クー】を捨て、デッキからLV？以下の人形を特殊召喚する！
おいで、【第三人形 チー】！」

そして、【ドールコンヴァート】にクーが入っていく。
柔らかな笑みを僕に向け、クーは見えなくなった。

「【ドールコンヴァート】は、人形と名の付いたモンスターが墓地へ送られる度に人形カウンターが一つ乗る。そして、自分フィールドに存在する人形たちはカウンター一つにつき攻撃力200ポイントアップする！」

ラグナレクは、興味深そうに僕を見下ろしている。

桜は食い入るように僕を見つめ、目がキラキラしていた。

「チーの効果を発動！ 墓地のクーをゲームから除外して、デッキから同名カード、クーを特殊召喚する！」

「どうやら……【ドールコンヴァート】のもう一つの効果は使わなくて良さそうだ。」

「手札から、【第七人形 コウ】を通常召喚！」

虹^{コウ}はいつも無表情の女の子だった。召喚されてもずっと僕の方を向いている。

桜やラグナレクに背を向けて居るのは、これがコウのデフォルトだからかな……？

それはともかく、コウはLV？の非チューナーモンスターだ。

「まずはLV？、コウにLV？、チーをチューニング！」

——ただ、君は愛することを願う。

——ただ、君を愛することを誓う。

LVは?!

「見つめ、愛せ、我が御心。一途な心が辛辣な裁きを降す! シンクロ召喚……愛し狂え、【愛玩人形^{ドールベット} アリス】ッ!」

メイド服に身を竄した美人形。どこまでも美しく輝く金の髪に澄んだ蒼い瞳。

アリスは一度僕にお辞儀をして、桜とラグナレクを一瞥した。

【ドールコンヴァート】に、カウンターが二つ乗る。

「アリスの効果は、シンクロ召喚に成功した時、自分フィールドに居るアリス以外の人形モンスターの数以下まで魔法、罠を破壊する事が出来る! アリスの効果にチェインして、墓地のコウの効果を発動!」

シンクロして墓地に行ったはずのコウが、また僕の方を向きながら蘇る。

「このカードがシンクロ素材として墓地に送られた時、手札を一枚捨てて蘇生出来る!」

手札の使わない罠カードを捨てる。

「アリスの効果により、桜の伏せカードを破壊する!」

「あっ、【次元幽閉】が……」

危なかった。耐性も無いモンスターで攻撃していたら、除外されていた。

「アリスはシンクロチューナーだよ！　LV?のクーとLV?のコウにLV?のアリスをチューニング！」

LVは、?。

僕の最強モンスター、行くよ！

「命を伝う神秘なる水滴。雫が流るるは花の涙！　シンクロ召喚。咲き乱れよ——【華散り人形　ファラ】！」

召喚され、さらに人形カウンターが三つ乗る。
これでカウンターの数は六個だ。

ファラATK3000↓4200。

「攻撃力、4200!？」

「バトル！」

ファラが構える。

それと同時に、ラグナレクたちも身を固めた。

「ファラでキングドラグーンに攻撃！」

竜魔人が、崩れ落ちる。

LP8000↓6200。

「ファラの効果により、LV?以上を戦闘破壊し墓地に送ったら続けて攻撃する事が出来る！」

「……洗司郎が言ってたお兄ちゃんの相棒って、この子だったんだね」

「違うよ、桜」

確かに、ファラは僕の最強モンスターだし、助けられた事もいっぱいある。

けど、

「僕にとっては、皆が僕のパートナーなんだ！　ファラ、続けてレダメにアタック！」

「あっ！」

桜LP6200↓4800。

「ラストッ！　ファラで、【皇神竜　ラグナレク】を攻撃！　《百
花繚乱——花吹雪》！」

『これが、主が想い焦がれる者の力か……』

『あの子だけではございません。ご主人様……晃様は、自分よりも他人を優先出来るお強い方ですから。だからこそ、私たち人形は全て、持つてはならない感情が生まれたのです』

何やらファラとラグナレクが会話したらしいけど、僕には聞こえなかった。

微かな微笑みを携え、ラグナレクは消えていく。

桜LP4800↓4100。

「トドメ、だね。ファラでダイレクトアタック！」

桜LP4100↓0。

静かに、ソリッドビジョンは消えていく。

桜が、笑顔で走ってくるのが見えた。

第一章 第四話 桜の想いと、晃の決意（前書き）

そういえば……皆さん、人気投票やコラボとかしてますよね。

あれって、どうやるんでしょう？

メインの登場人物が全員出てからやってみたいと思ってますので、
どなかか教えて頂けませんか？

しかし……シリアスって書きやすいですね（汗）

ギャグは全然書けないのに（笑）

第一章 第四話 桜の想いと、晃の決意

「それにしても……お兄ちゃん、やっぱり強いね」

「そう？　僕にしたら、桜があんなに強かった方が驚きだよ」

「……………殆ど歯が立たなかったけどね」

ラグナレクという、地球には無かったカードを使ったとは言え僕のライフはかなり削られた。ドロローが良かったから勝てたものの、次はどうなるか分からない。

正直なところ、思っていたよりも強くてビックリしたくらいだ。

なんて雑談を交わしながら、僕たちは宿を探していた。

デュエルが終わる頃、空はオレンジ色に染まり日が落ちる準備を始めていた。

旅の出発は明日の朝と決めた僕と桜は、本日泊まる為の宿を求めてルジェラの都市、エイフィールミアを進んだ。

「ん……ここで良いかな？」

「私はお兄ちゃんと同じ部屋ならどこでも良いよっ！」

「それは出来ない相談」

「ええ」

もう子供じゃ無いんだから。

僕がルジェラに入った際に通った門と程近い宿。大きくも小さくも無いその宿の看板には、『ヤドカリ』と書かれていた。

その文字の上に小さく、“宿仮”と書かれているのは……ギャグのつもりだろうか。

……気にしないでおうつと。

中に入ると、人の数はそれ程多くなかった。多分だけど、殆ど近くの大きな宿（というかホテル？）に行っちゃったんだろう。

「すみません。二人、入れますか？」

「あ、はい。予約はしていますか？」

「いえ、してないです」

店員の男性が手に持ったファイルをペラペラとめくる。その中の一ページを指で追いながら見終えると、柔和だが申し訳なさそうに微笑みながら男性は頭を下げる。

「すみません。空いてはいるのですが、予約無しの場合同室になって貰わなければならないのですが」

……えっ。

って桜、目をキラキラさせて僕を見ないで。

「……………お願いします」

負けた。

「流石お兄ちゃんっ」

あそこまで期待した妹を裏切ることなんて、僕には出来ないよ。軽く溜め息を零したくなる心境のまま、僕は軽い手続きをしたのだった。

◇ ◇ ◇

夕食を終え、シャワーも浴び終えた僕は早々にソファに身を任せ
た。桜は僕がシャワーを提案すると飛ぶように向かっていった。

一体何を期待しているのかは分かりたくないけれど、桜のブラコ
ンも困ったものだと思う。

少なくとも——お父さんとお母さんは何とも言えない思いだった
ろうに。

「まあ……嫌われるよりマシ、だよね」

それよりも、だ。

僕はソファの隣にある机に置かれたデッキケースを手に取り、一
枚のカードを抜き取る。

【華散り人形 ファラ】。

「異世界……ユグル、か」

とんでもない事になったと思う。異世界だとか、デュエルデイス
クとか……遊戯王をやっている身として、懂れていなかったと言え
ば嘘になる。

けれど正直……本気で行きたい、来たいとは思わなかったんだ。
お父さんやお母さん……桜を置いて行けない……そう思ったから。

「……結局、桜もこっちに来てるし」

正直、頭の中は混乱だらけだ。

エンジェルにディスク、ソリッドビジョン。喋るモンスターたち、桜が1ヶ月間居たという精霊界なる場所。

まだ、実感が沸いていないんだ。

もしかしたらこれは夢で、僕の憧れが映し出された幻影なんじゃないかって。いや、そう考えた方が自然なのかもしれない。

「……………」

僕は――――。

「おにーちゃん♪」

「……………桜？」

「えへへ」

いや、えへへじゃなくて。

「なんでそんな格好してるのっ!？」

桜の姿は、バスタオル一丁だった。いや、もしかしたら下着は着てるかもしれないけれど、流石にそこまでは分からない。

髪は濡れ、時折雫が滴る。露出された白く細い脚と控えめな胸が逆に煽情感を煽らせた。

「だって、これから夜だよ？」

「いや、夜は分かるけどね？ ほら、後は寝るだけだし…………ね？」

「うんっ。お兄ちゃん“と”寝るだけだね」

と、という部分を強調しないで欲しい。僕はこのままソファで寝

て、桜はベッドを使って貰うつもりなんだから。
そう桜に説明すると、

「えっ!? 駄目だよそんなのっ!」

「当然だよ! 僕と桜は兄妹だよ!」

「だから萌え……燃えるんだよ。それにお兄ちゃんじゃなきゃ……
嫌だな」

「嫌だって……」

それより、この格好のままじゃ湯冷めして風邪を引いてしまう。
僕はそのままソファに掛けたままだった灰色のローブを手に取ると、桜に近付いて羽織らせてやる。

「とにかく、今日は色々あったんだから寝よう? ね?」

「……うん、分かった。また今度だね」

「今度も無いから!」

一言そう言って、桜にバスローブを着るよう提案する。素直に頷いた桜は、僕が目を閉じている間に着替え終えた。

「あれ……お兄ちゃん、入らないの?」

「僕はソファで良いよ」

妹とは言え、桜は13歳(数えて14歳)。女の子と一緒に布団は気が引ける。

なんて僕の心情は完全無視で、桜はベッドから出て僕の腕を引っ張った。

「駄目だよっ。お兄ちゃんも一緒に寝るの!」

「いや、けどさ……」

「じゃなきゃ、わたしは床で寝ちゃうから」

う……………。

桜は変なところで頑固なんだから、言い出したら聞かないんだ。桜には聞こえない程度に嘆息すると、同じベッドに身体を預けた。すると、桜は僕の腕を抱いて逃がさないとしても言うように身を寄せてきた。

「さ、桜……………」

「わたしね……………」

いつになく、真剣な声色。横目で桜を見ると、その目尻には涙が滲んでいた。

「一ヶ月もお兄ちゃんに会えなくて、凄く寂しかったんだ」
「あ……………」

そっか。そういえば桜は、一ヶ月の間精霊界ってところに居ただっけ。

僕としては未だに訳の分からない場所だけれど、事実、桜はここに居る。何より妹が言ったんだ。信じないといけない。

「精霊界で契約を果たす為に、【神竜 ラグナロク】のところに行つて…………そこに居たのは見た事も無いおっきなモンスター」

「…………それが、ラグナレク？」

「うん」

抱き締めた僕の手を、恋人のように絡み握って来る。

「契約する為に…………ううん。お兄ちゃんに会う為に、凄く頑張った

よ。いっぱいデュエルして、頭下げて、声が枯れるまで叫んで……」

「どうして、そこまで……」

「わたしにとって、お兄ちゃんはわたしの全てだからだよ」

桜の顔が上がる。至近距離で見詰め合い、自然と顔が熱くなった。流石桜……妹ながら、凄い美少女だ。なんて事を思ってしまう。

「お父さんもお母さんも、仕事が忙しくて殆ど帰らなかったし……使用人さんは余所余所しかった……お兄ちゃんは、ずっと一緒に居てくれたでしょ？」

確かに……昔は四六時中一緒に居た。最初は兄として、妹を守らないと、という義務感から。途中からは桜の方が僕の後ろを着いて回っていた。

「わたしはお兄ちゃんとずっと一緒。どんな世界だろうと、お兄ちゃんとなら恐くないし寂しくも無いよ」

「……………」

「お兄ちゃん……………」

唇に、温かな感触。避けようと思える暇も無く、桜の唇は僕の唇に交わっていた。

——キス。数年振りのキスは、妹……桜と行われた。

「だーいすき」



ベッドの上で、桜の穏やかな寝息がする。

僕はベッドから抜け出して、ソファに腰を下ろしていた。入れた
コーヒーを口にして、苦い、と小さく呟いた。

「……そっか……」

『桜様も、寂しかったんですね』

「ファラ？」

気が付くと、ソファの後ろに【華散り人形 ファラ】が微笑んで
いた。その視線は眠る桜に向けられ、慈愛の籠もった優しい表情。

「……僕さ」

『……………?』

「ユグルに來た時……桜に出会った時」

僕は。

僕は、多分。

「まだ夢心地だったんだと思う。現実感なんて全く無くて、自分の
中ですぐに納得して。しかも、一人じゃなくて良かったって……
…思ってたんだ」

『……………』

「だから桜が居て、すぐに許容できた。ううん、しちゃったんだ。自分だけがこんな事に巻き込まれた悲劇の主人公ぶって、けれど桜も居たって……嬉しくなっちゃったんだろうね」

最低だ。

桜は巻き込まれただけなんだから。僕がエンジェルとやらに誘われて、碌な抵抗もしないで……結局、桜も巻き込まれる形になった。

「僕は……僕が出来るなら、守るよ。桜をね」

『お手伝い致します、御主人様』
マイ・マスター

静かな声が頭に響く。

窓の外では、美しい満月が光を放っていた。

第一章／第五話 レグラス村（前書き）

なんか……少しずつ文字数が増えているような？

最初は2000文字くらい、とか言いながらこの話は5000超え。

これは……デュエル有りならもつと？

……まあ、良いか。

ちなみに、こちら、晃サイドでは出来たらどんどん投稿し、洗司郎サイドは少しずつ更新していく予定です。

感想、ご意見、ご要望など……お待ちしております（＾０＾）／

第一章 第五話 レグラス村

バッグの中に数日分の食べ物と飲み物が入ったのをもう一度確認して、僕と桜はエイフィルミア……もとい、ルジェラの門を抜けた。食料等を入れた為か、デュエルディスクが入らなくなって僕は左腕に取り付けた。桜も元々バッグが無いから、右腕に付けている。

「綺麗に一本道だね」

「うん……この道ってどこに進んでるんだろう？」

「さあ……」

地図なんて物も無いし、僕らはただ一本道を歩くしかないらしい。涼しげな風が流れているけれど、ローブを着ているからか熱いくらいだ。

雲一つない空で輝き燃えている太陽に少し恨みの念を込めながら、僕たちは鈍足に歩を進めた。

「そういえばお兄ちゃん、これからどうするの？」

「うん？ えっと……取り敢えず大きな街に行きたいかな」

「大きな街？」

そう、と頷く。

「何をするにしても、ユグルの情報が足りないし……何をどうするかはそれから決めるかな」

勿論、情報収集ならばルジェラでも良かったけれど、エンジェルは「これからは旅になるだろう？」と言った。とすると、エンジェルが言う“目的”はルジェラじゃ出来ないと言う事だ。

それなら、エンジェルの言った通り旅をして、立ち寄った場所
で情報収集した方が二度手間にならなくて済む。

——尤も、最終的な目的地が結局ルジェラだった場合は無意味だ
った事になるんだけどね。

「桜、大丈夫？」

「うん。お兄ちゃんが居るからね」

「それ、関係ある？」

もう歩き出して結構経つ。30分か……数時間か。太陽の位置か
ら察するに、まだ1時間も経っていないだろう。

見たところ、桜はまだ元気だ。まだ中学生とはいえ、元々の体力
なら僕よりもあるからね、桜は。

そんなことを考えて情けなくなってきた僕……ふと空を見上げる
と、向かう先には暗雲が立ち込めていた。

「雨、降りそうだね」

「お兄ちゃん。分かれ道だよ」

「え？」

……本当だ。真ん中に看板があって、道は二方向に分けられてい
た。

「えっと、何々……」

桜が看板に目を寄せて、読み上げる。

「左がレグラス……右がサーヴァイルだって」

ううん、どっちに行こうか。

空をまた見上げる。どうやら暗雲は少し右側……サーヴァイル方面の方が濃いみたい。だったら、

「レグラスってところに行こう」

「わたしはお兄ちゃんに着いてくだけだよ？」

そっか。

そう呟いて、僕と桜は左の道を選び、進んだ。途中、お昼時になつて食事がてらに休憩したりしながら。

ルジェラを出発してから——5、6時間くらい経っただろうか？

「僕が居ると、大丈夫じゃなかったっけ？」

「お兄ちゃん。わたし、過去は気にしないんだよ？」

「……………さいですか」

只今、僕の背中には桜が乗っていた。

別段重くも無いから良いとは言え……僕もそろそろ疲れてきた。

いや、実際は桜が根を上げる前からうあ………という感じだったけどさ。

「あれ……町じゃない？」

「え……あ、本当だ」

もうすぐ夕方になりそうな時間帯。眼を凝らすと、門らしき物が見えた。

木造の門だ。

町というよりは村に近い。看板を見つけてから1時間くらい歩いて、その村——多分レグラス——に到着した。

「ん、しょ……と」

桜が背から降りて、僕は村を見渡した。門番らしき人物は居なく、高台のような場所にも誰も居なかった。

留守かな、なんて少々有り得ない事を考えてしまう。

と……1人の男性が近付いてきた。

「久し振りだな……旅人か」

「あ、はい……えと、ここはレグラスで間違い無いんですか？」

「ああ。辺境の地、レグラス村……若輩ながら、村長をしているゲイラだ」

村長、という割には確かに若い感じがする。見たところまだ40代……いや、30代だろうか？

キツイ目付きをした村長、ゲイラさんは僕と桜を眺めて、ふっと笑う。

「お前たちの名を聞かせてはくれないか」

「あ……僕は諏訪晃。こっちはいもうー」

「恋人の桜っ！」

「……………」

いや、良いけどね？ 別に。高校に来てまで公言していた時よりはマシだし。

「今は訳あって持て成しは出来んが……来るが良い。一晩くらいなら泊めてやる……今日はもう遅い」

助かる……今日はもうすぐ夕方だ。僕はともかく、桜に野宿はさ

せたくなかったんだ。

「ありがとうございます！」

「ありがとうございますっ、ゲイラさん！」

僕と一緒に桜も頭を下げる。ゲイラさんは特に何も言わず、僕らに背を向けて歩く。

僕たちも追い掛けるように村の中を歩く。

ルジェラに居たからか……本当に、レグラス村は小さく感じる。

一軒一軒の家は古めかしいし、それ程大きくもない。

玄関にある布は、扉代わりだろうか。一部のゲームでこんな村があった気がする。

見てみると、数人の小さな子供が様々な草花を竹で出来たざるに入れて持ち歩いていた。薬草とかなんだろう、多分。

村の一番奥。他の家とは違い結構な大きさがある家の中にゲイラさんが入って行った。

「……………」

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「え……う、ううん。入ろう」

——何か、音……ううん、声がした気がしたけど。気のせいかな。

布を退けて中に入ると、少し離れた正面には木造の机。ゲイラさんは既に腰を下ろしており、改めて村長なんだと認識させる。

僕と桜はゲイラさんの目の前に来ると、ふん、と鼻を鳴らす。

「2階の一番奥にある部屋は自由に使って良い。恋人なんだ、一部

屋で良いだろう？」

「え、いや——」

「わあい、ありがとうございますっ」

「……またかい」

……まあ、良いか。

「食事が出来たら呼ぶ。何かあれば、使用人に言ってくれ」

はい、と頷くとゲイラさんは机に詰まれた書類に眼を通す。もう特に話すことは無い、ということだろう。

僕と桜は、一先ず2階の部屋へ行く事にした。



中は以外と広く、テレビとかは無いけれどあんまり不自由は無さそうだった。桜はともかく、僕は元々テレビとか見ないし。

ベッドも大きく、複数入っても余りある位だ……ただやっぱり1つしかないから、桜のテンションは鰻上りである。

「お兄ちゃんっ！」

「うん、却下」

「まだ何も言っていないよっ!？」

1つしかないベッドを凝視して、桜が声を張り上げる事と言えば数少ない。それが僕に向けてとなると、1つに絞られる。

僕は一言で一蹴すると、鞆を机の上に置いてベッドに腰を下ろし

た。桜もむう、と頬を膨らませながらもベッドに座る。

——グ……ガアアウ……………。

「え？」

「……？ どうしたのお兄ちゃん」

「いや……」

また、声。しかもさつきよりも明確に聞こえた。唸り声だ。
立ち上がり、窓の外を眺める。桜には聞こえていないみたいだし
……………。

一体、誰……………いや、“何”？

と、桜が僕を訝しげに見つめながらも思考を巡らせていると、コンコン、と扉がノックされる。

「どうぞ」

「あの……失礼、します」

中に入ってきたのは、かなりの美少女だった。
金色に輝く髪はセミロング程の長さで、どこも括られずに下ろしている。綺麗に澄んだ蒼い瞳は真っ直ぐに僕と桜を見つめ、柔和に微笑んでいた。

「私、ローラ＝レイフェル・メイサと申します。村長の娘になります、お客様が来たらしいので、挨拶しようと……」

「そうなんだ。僕は諏訪晃。こっちは……」

「桜だよっ！ お兄ちゃんの恋人！」

「……今、兄妹だって自分でバラしたよね？」

「……………はっ！　しまった……………わたしとしたことが！」

やれやれ。

必要以上にショックを受けている桜を置いて、僕はローラさんに向き直る。

「僕たちは旅の途中なんだ。今日一晩だけ泊めて貰う事になって」
「……………そう、なんですか……………こんな時に……………タイミング悪いです」

「え？」

タイミング？

そういえば村長も、“今は訳あって持て成しは出来ん”とか言っていた。

「何かあるの？」

「え……………し、知らないんですか？　明日の儀式の事……………」

儀式？

桜に視線を向けると、わたしも知らない、と首を振っていた。

「その儀式の為に、この村は出来たんですよ？」

「儀式の為に出来た村……………」

そういうわれても、やっぱりピンと来ない。

「儀式って、何やるの？」

「さあ……………私も詳しい事は……………」

その表情は、暗い。何かあるんだろう、と思ったけど……………。

——余所者が口出しして良い事じゃ無い……よね。

外の風景を眺めながら、いつの間にか僕はまた、先程の唸り声について考え始めていた。



夜——。

桜はもう寝静まっており、僕は1人外に出ていた。デッキとデッキケースは持ってきたけれど、デュエルディスクは持って来てないからあんまり意味は無い。

ゲイラさんの家から少し離れた場所。綺麗な空が眺められる丘の上で、僕は寝転がった。

「……………」

さっきの唸り声、タイミングの悪い（もしくは良い）儀式……そして、ローラさんの暗い表情。

まさか……………。

『ご主人様』

「…………ファラ？」

『失礼致します。少々、ご主人様に伝えておきたい事が御座います』

身体を起こす。僕よりも普通に背の高い【華散り人形 ファラ】が、神妙な面持ちで立っていた。

しかし……今更ながら、これがアニメで良く見た精霊って奴だろうか。たまにファラ以外——ライアやソウカ、アリスたち——も出てくるから、皆精霊って事になるけど。

閑話休題。

「どうしたの？」

『この村……レグラスにて行われる儀式についてです』

一瞬、身体が固まる。

さっきまで頭にあった予測が、また脳裏に浮かび上がった。

『レグラスより多少離れた場所……せいこん瀨魂の洞窟と呼ばれる場所にある存在が眠っているらしいのです』

「ある、存在？」

『はい。魔王、と名に冠された存在です』

魔王……………。

反芻するように呟くと、それに呼応するかのようにまた唸り声が頭に響く。

「…………封印、ってこと？」

『そうなります』

魔王……か。

ここが遊戯王で廻っている……言わばアニメのGXや5D'sみたいな世界だとすれば、それは精霊、ということになるんだろう。……多分。

「じゃあ、儀式って……」

『……ローラ様の事も踏まえて、恐らく……ご主人様の考えている事が事実かと』

今にも泣き出しそうなローラさんの暗い表情。ゲイラさんの娘。着ていた服は余り見て無いけど、確か……地球で何回か見た巫女服。

もしかして、とまさか、という言葉が混合する。

そうだ。ここは遊戯王の世界。とすると、儀式という言葉も……！……！

「ローラさん……生け贄、ってこと……！？」

『恐縮ながら、私が調べさせて貰ったところ……間違いないかと思われます』

ファラの静かな声音が。

頭に響く呻き声と重なって。

少し……目眩がした。

第一章〈第六話 命運を賭けた儀式（前書き）

かなりの悪役登場です（笑）

晃がユグルに来て、初の大イベント。

感想等、お待ちしております！

第一章 第六話 命運を賭けた儀式

「……………ま……………キ……………」

声だ。聞き慣れたソプラノ声……。

「……………の内……………」

そういえば、目眩がしたからすぐに戻って眠ったんだっけ。うっすらと瞼を上げる。すると、目の前に桜の顔――。

「うわっ、何してしてるの桜ッ!？」

「あぁっ! 起きちゃ駄目だよ、お兄ちゃん!」

むう、と頬を膨らます桜。いや、その仕草は可愛いけど、なんであんなに近かったの……………?

「折角、今の内にキスだ! って活き込んだのに」

「……………僕、寝てる間に襲われかけた?」

「大丈夫、ディープキスまでしかないつもりだった!」

「そっか……………ディープまでならギリギリ……………アウトだよっ! てか普通にキスするだけでもゲームセットだから!」

はぁ、と溜め息を吐いて時計を見やる。もう朝の8時。ゲイラさんの話では、そろそろ朝食の時間だ。

……………8時。8時……………8時!?

「桜、ローラさんはっ!？」

「む……………なんでお兄ちゃん、ローラを気にするの?」

「そんなヤキモチ妬いてないで！ 教えて、ね？」

もしかすると、もう儀式とやらに行っているかもしれない。

「……ローラは、少し前に出掛けたって」

出掛けた……まさか、もう………？

僕はデッキケースをベルトに掛けて、バッグを持ってローブを羽織った。

「ど、どうしたのお兄ちゃん？」

「ローラさんを追い掛ける」

「……なんで？」

目を細めて僕を見つめてくる。

「桜も行く？ 悪いけど、ローラさんの命が掛かってるんだ。すぐに決断して」

「えっ……命？」

「――先に行くね」

今、こうしている間に儀式とやらが始まるかもしれない。

急がないと。

僕が部屋を出ると、桜もローブを手にもすぐ追いかけてきた。困惑する桜の顔を横目に、階段を降りる。

「……もう、出発するのか」

玄関へと向かう途中、ゲイラさんが物静かに訊く。そういえば…

：ローラさんはゲイラさんの娘。村長なのだから、儀式の事も知っているはず……。

「……ローラさんは、儀式に向かったのですか」

「……ローラに聞いたのか」

「本日、儀式があるという事だけ」

詳しい事は知りません、と言う。僕とファラの考えも、あくまで予測の域を出ない。真実は、レグラス村の人間のみぞ知る、と言ったところか。

桜は僕の横で首を傾げている。だが、神妙な雰囲気だという事は察しているのか、口は出さない。

「……ああ、もう出発した」

「………そうですか。それでは」

それだけ知れば十分だ。僕はゲイラさんに背を向けて歩き出す。

「………どこへ行く？」

「僕は旅人ですよ？ 風の向くまま気の向くまま……自分を信じて」

僕は桜と共に、レグラス村を後にした。



「後どれくらいで着きそう？」

『このままのスピードならば、後少しだと思われます』

僕と桜は、ファラの答えを聞きながら森の中を走っていた。ローブのフードを被って、降り注ぐ豪雨を遮りながら存外進みにくい道を通っていく。

「けどそれ、本当なの、お兄ちゃん？ ローラが儀式の……その、」

桜とローラさんは結構仲が良くなったらしく、桜はもう呼び捨てで呼ぶくらいだ……と、どうでも良い事を考えた。

ともかく……瀟魂の洞窟と呼ばれる場所へ向かいながら、僕は桜に儀式についての事を話した。

「分からない……けれど多分、そうだと思うんだ」

「……………そっか」

——生け贄なんて……ッ！

「もう……真名^{マナ}みたいな事は、させてたまるか……………！」

森が、少し抜ける。

木々が、まるでその部分だけ避けているかのように開いた空間。前に森、後ろに岩壁で囲まれた洞窟の入り口。

その入り口には火の消えた松明^{たいまつ}が2つ置かれていた。

「……居た！」

その洞窟の前。巫女服に身を纏った金髪の女性……ローラさんが、

洞窟に向かって祈りを奉げていた。

左腕には水色をしたデュエルディスク。既にデツキはセツトされている。

「――我が身を生け贄とし、汝の御心を鎮めよ。邪悪に染まる荒涼（うつりよう）の魔王よ、聖する肉体欲するは、天壤の煌きに導かれた御子と崇められし我を。さあ、微かなる力のさざめきを、今この場に君臨し宋（そう）裏させよ」

ローラさんの、凜とした声が響く。凜として、それで居て澄んできて。優しく伝うその声に、僕は……否、僕と桜は言葉を挟めることが出来なかった。

……刹那。

洞窟の奥から暗い……それこそ、闇と形容せし存在が舞い降りる。その黒い塊は巨大な竜の姿を象り、赤き瞳がローラさんを見下ろす。桜が、僕のローブの裾を掴んだ。

『クク……次の贄は汝か』

「はい」

低く、耳朶に残る声のような、“音”。耳から入った気がしなくて、少し震えた。

『汝も聞いておろう？ 賭けだ』

「存じております。早速……」

『その前に、』

黒き竜が、縮小されていく。見上げなければいけない闇が、僕らの目線に合って行く。

人型だ。

瞳と肌以外、黒一色に染められた長髪の男が、漆黒のデュエルデイスクを左腕に付けて君臨した。

その闇――魔王は、視線をローラさんから僕と桜に向ける。

「その2人は何者だ？」

「2人……？」

ローラさんが、振り返る。

「っ……！ さ、桜様に諏訪様っ！？」

僕は一度深呼吸して、ローラさんに近寄っていく。頬を流れる汗を一度拭い取って、僕と桜はローラさんの隣に移動した。

「やっぱり、僕たちの思った通りだったね……」

「な、なんでここに……？」

「君を追って来た。心配だったからね」

生け贄なんて、赦さない。魔王とやらの封印が目的だったとしても、例えば神や仏様が許しても、僕は僕が出来る限り、阻止してみせる。

「それより、アイツは？」

「我の事か」

クク、と喉で笑う魔王。

「我が名は【魔王ディアボロス】が直系、【魔将王ディアブルム】^{なり}也！」

雷が轟く。ディアボロスといえば、地球にてストラクチャーデッキに収録された闇属性のモンスターだ。

魔王、と冠した割に効果が地味だった覚えがある。

だが、仮にも魔王……その魔王の子供なんだ。少なくとも、封印という手段を使わなければならないほどの力を持った魔王である。

「……賭けて、何のことなの？」

「なあに、我はまだ世界を滅ぼす程の力など無いのでな。蓄える意味を踏まえ、こう封印されておる訳だが………退屈なのだよ」

「退屈？」

目を細める。隣では、桜とローラさんが顔を見合わせた。

「1年に1度、封印が崩れぬよう贄を寄越して来る。その贄を慰み者にし、蹂躪し、陵辱し尽くし……1年も経つ頃、最後には腕、脚、性器……そして頭。順に貪っていくのだよ。無論、我が力にて、死の安楽を得る事などさせぬさ！」

醜い晒いが耳朵を叩く。桜が耳を押さえて蹲り、^{うずくま}ローラさんは視線を逸らした。

僕はただ、真っ直ぐに魔王を見つめる。

「だが、それでも退屈……快楽は得ても、満足感は得れぬ……ならば、相手に希望を持たせてやろう、と思ったのだよ」

「希望？」

「そう……それは儀式と冠した、デュエルだ。巫女とデュエルし、希望を持たせる……勝てば自由。我はまた、1年後まで引き下がる。だが……」

だが。

その言葉の続きは、少しの間を置いて紡がれた。

「我が勝てば、死した後も我が眷属として生き続けるのさ！ 勝てば自由という希望も、やっと得た死という快楽^{けらく}も絶望へと変える！ 最高では無いかっ……！！」

たまらない、と言った様子で叫び、晒い、狂う。
とうとう、ローラさんの瞳から一滴の涙が零れ落ちた。

「そう……ねえ、魔王さん」

「……なんだ、人間」

心の奥から湧き上がる恐怖と、怒りと、不安と……そして、自信。
どれもが僕を奮わせる要素となって、駆け巡る。

「1つ、提案があるんだけど良いかな？」

「提案、だと？」

桜とローラさんが、不思議そうに僕を見つめてくる。一方で魔王は怪訝そうにしていた。

「その賭けデュエル……僕がしても良いかな？」

「ほう……？」

「おっ、お兄ちゃん！？」

「な、何を……！ 諏訪様！」

ローラさんが僕の手首を掴む。僕の奮えとは違う、それこそ恐怖と畏怖しかない大きな揺れが、ローラさんから伝わってきた。その頬には、一筋の涙。

「けれど、これはレグラス村の儀式だからね……僕はローラさんのデッキを使う、という条件でさ」

「駄目です、諏訪様っ！」

大丈夫。

負けない……こんな奴に、絶対負けない！

「駄目です、駄目……駄目です！ 諏訪様は何の関係も御座いません！ これは私の運命……宿命なのです！ その為に生まれ、育てられたのですからっ……！ 私がっ………！？」

「ローラ」

ローラさんの言葉を止めたのは、桜だった。

桜は泣きそうな顔で……けれど、涙を堪えて首を横に振って、笑った。

「お兄ちゃんを信じて。お兄ちゃんって、穏やかな性格してるけど、実は結構頑固なんだよ？」

「ですけど……！」

「お兄ちゃんは、人を助けようと動いたら誰よりも強いんだ。洗司郎よりも……ずっと」

洗司郎が誰なのか、ローラさんは知らないはず。けれどローラさんは、唇を噛みながら言葉を止めた。

僕は魔王に向き直って、目を細める。

「どうかな、魔将王さん？」

「クク……自ら危険に晒されに来るとは、トンだ痴呆ちほうだな」

魔王は僕を嘲笑した瞳で一瞥して、腕を組む。

「しかし……いつも巫女といえば女人なのだ。良いだろう……たまには男で愉しむのも悪くない……いや、我が力を試すには良い機会だ。貴様を両性人間とし、人体実験として利用するのも悪くは無い……ゾンビと化した昔の巫女共と乱交させるのも………」

面白い。

そう静かに呟いて、口元を緩めた。

ローラさんはまだ納得いかないという表情だったが、魔王がもう乗り気なのだ。もう覆せないだろう。

ディスクからデッキを取り出し、巫女服の懷から15枚程度のカードと一緒に手渡してくれる。

「……これは………」

僕が地球で、作ろうとしていたデッキだ。多分、人形シリーズの次に好きなカード群だろう。

幸い……スリーブは使われていない。元々、遊戯王という分野を楽しむ為に始めた訳じゃないからだろうか。

そうだ……ローラさんにとって、このカードゲームは自分の運命を決める決闘の為に教えられたんだ。生まれてから、楽しいか思ったことも少ない……いや、無いのかもしれない。

余計、勝たなきゃ、と心底思った。

「私は、まだ……納得していません」

エクストラデッキのカードをケースに仕舞い、ついでに一枚のカードをそのデッキに付け足してディスクにセットしたところでローラさんが言う。

「けれど………信じます」

不安など無い力強い双眸が、僕を貫く。

「私は、諏訪晃様……貴方が勝つ事を、信じていますから」

いつの間にか、だろうか。

そう、多分……雷が堕ちた頃から。

雨は止み、暗雲だけが、このデュエルの結末を静かに待っていた。

第一章〈第六話 命運を賭けた儀式（後書き）

さて、次からはデュエルです。

ちなみに、話中に出て来た『真名』という少女。

実はプロットにも書かれておらず、「紫苑の槍」様にも相談せずに出て来たキャラです（笑）

「紫苑の槍」様、スイマセン（――メ）

第一章／第七話 魔王VS守護者たち

ローブを脱ぎ、ローラさんに持って貰う。バッグは桜に手渡して、ディスクを構えた。

桜とローラさんが離れて行き、ディスクを展開させる。

ターンランプが、光った。

晃LP8000.

ディアブルムLP8000.

「「デュエルッ！」」

先攻は僕だ。ただ、初手を見る限りそれ程良くは無い。

さっきエクストラデッキやメインデッキを確認した時、僕の知らないカードが数枚あった。とすると、ユグルで創られたカードということになる。

その辺のプレイングは気をつけないと。

「僕のターン、ドロー！……………僕はモンスターを一体セットして、ターンエンド」

「ほう？ 随分と謙虚な始まりだな……………我のターン、引かせて貰う」

魔王…………ディアブルム。魔王ディアボロスの直系だとすると、使うのはそのカード群だろうか？

「我は【ダブルコストン】を通常召喚！」

あれは……………闇属性モンスターをアドバンス召喚する場合、2体分

に使用できるモンスター。

「我は【二重召喚^{デュアルサモン}】を発動。効果により得た追加の召喚権によって、【ダブルコストン】を生け贄に【魔王ディアボロス】を召喚する！」

ッ……！

リリースを生け贄、と前の言葉を使い現れたのは、黒き竜。ステータスはダムドと全く同じディアボロスは、僕をゆっくりと見下した。

「ククク……ッ！ ああ、我が父君……なんとお懐かしい」

感慨深そうに笑みを浮かべるディアブルム。その瞳に愛情といった感情は無く、ただ無色に濁っていた。

「父君で、裏守備モンスターを攻撃ッ！」^{ディアボロス}

「っ……裏側モンスターは【氷結界の番人ブリズド^{ひょうけつかい}】！ブリズドが戦闘破壊され墓地に送られたらデッキからカードを一枚ドロースる！」

「ふん……やはり氷結界か。昔から変わらぬな」

——変わらない？

「……………初めて賭けのデュエルをしたのは今から数十年前、と聞いてます。その時から巫女は皆、そのデッキを使っているんです」

僕の疑問に答えるように、目を細めながらディアボロスを見上げ、ローラさんが言った。

「私たち巫女は、そのデッキを代々受け継いで来ました。内容も、

昔と変わっておりません」

それは意地か、ただ単にカードが揃っていないからなのか。

「そう……だから、我はそのデッキなどお見通しという訳だ」
「くう……」

それだと、凄い不利だ。桜とのデュエルと言い、僕はそんな状況のデュエルに恵まれている気がする。

地球で洗司郎と行った大会でも、「あ、人形の人だ」みたいな言われ方したし。

……僕が人形みたいじゃないか。好きだから良いけど。

「我はこのままエンドだ。さあ、貴様のターンだ」

「僕のターン……っ」

「この時、ディアボロスの効果により、確認させて貰う」

カードを見せる。ディアブルムはにやりと口元を緩め、デッキボトムを宣言した。

ディアボロスはドローカードを確認し、そのままかデッキの一番下にするか選べるカードだ。

改めてカードをドロー。

ディアブルムの手札は3枚減った。けれど、相手の場には2800のモンスター。

この手札じゃ、攻略は出来ない……なら！

「僕は【強欲なウツボ】を発動！ 手札にいる、【氷結界の術者】と【グリズリーマザー】をデッキに戻し、3枚ドロー！」

手札は変わらず7枚。多少は手札事故も直った。けど――。

「モンスターをセット。エンド」

「それでは私のターン……ドロー」

ふむ、と引いたカードを見て思考する。

そして、

「このままバトルフェイズに移行。ディアボロスで攻撃」

「く……モンスターは【氷結界の術者】だよ」

今は特に意味を成さないモンスターだ。

「私はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

ディアブルムの手札は残り1枚……ここを打破出来れば。

「僕のターン……」

ディアボロスの効果で見せ、またデッキボトムへ。

改めて、僕はドローして、

「罠^{トラップ}発動、【強烈なはたき落とし】。そのカードは墓地に捨てても
らおう」

「う……」

捨てられたカードは、【氷結界の破術師】。今来ても意味は無かったから、良かったと言えば良かった、かな？

相手の場は3枚。これは……動くか……。

「お兄ちゃん……」

「諏訪様………」

心配する2人の声が聞こえる。不利な状況、手札は豊富だけど、防戦一方から不安が増してきたのだろう。

僕は2人に笑いかけて、行動する。

「僕は【サルベージ】を発動！ 墓地の【氷結界の術者】と【氷結界の番人ブリズド】を手札に！」

まずは手札コストの為の確保。

「そして、手札の【氷結界の紋章】を発動！ デッキより、好きな氷結界を持つてくる……僕は【氷結界の守護陣^{しゅごじん}】を手札に！」

手札に温存……というより、デッキ内容を完全に把握していない時に、持って来るカードが分からなくて使用出来なかった紋章を発動する。

「【氷結界の軍師^{ぐんし}】を通常召喚！」

出てきたのは、老人だ。僕にとっては、デッキを廻す為には必須なカードと化している。

「軍師の効果で、さっきサーチした守護陣を墓地に捨てて、1ドロ―する！」

出来れば後少しで打破したいところ。

「魔法カード、【浮上】を発動！ 墓地に存在するLV3以下の魚族、海竜族、水族のいずれかを表側守備表示で特殊召喚する！ 僕は軍師によって捨てた守護陣を特殊召喚！」

蘇生した氷結界……姿は犬。最初見たときは獣族だと思ったものだけど、意外と水族だったんだ。

ほう、とディアブルムは呟く。その表情は余裕に満ち溢れている。

「僕はLV4、軍師にLV3、守護陣をチューニング！」

LV7……封印された龍が、解き放たれる――――。

「神槍しんそうの如き氷の龍よ。凍て付く息吹で世界を蹂躪し、破壊の渦を巻き起こせ……シンクロ召喚！ 凍り付け、【氷結界の龍 グングニール】――！」

氷結界とは、氷の龍を封印した“氷結界”を守護する者を言う。第一の龍はブリューナク、第三の龍はトリシューラ。その間に存在する第二の龍。

グングニールが、咆哮を上げながら解き放たれる………ッ！！

「グングニールの効果を発動！ 手札の【氷結界の番人ブリズド】と【氷結界の三方陣】を捨てて、【魔王ディアボロス】と……」

グングニールの、圧倒的威圧感。ディアボロスの破壊がほぼ確定しているというのに、ディアブルムの顔は余裕だ。

しかも、晒いを含んでいるくらいだ。

セットモンスターを破壊しようとしたけれど………嫌な予感がある。

「セットカードを破壊だっ！」

「ふん……」

セットカードは、【次元幽閉】。桜といい、流石優秀カードなだけあって、投入率が高い。

初めて、ディアブルムの笑みが崩れる。

「バトルっ！ グングニールで、裏守備モンスターを攻撃！」

「モンスターは【ジャイアントウィルス】。このカードが戦闘破壊され墓地に送られたら、相手に500ポイントのダメージを与えデツキから同名カードを特殊召喚出来る」
「く……」

晃LP8000↓7500.

破壊された球体状のモンスターは増殖し、表側攻撃表示でデッキから2体、特殊召喚される。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

手札を結構使った……。けれど、形勢は逆転したと見て良いと思う。

ディアブルムが自ターンを宣言し、ドローする。

「ククク……成る程、やはり父君は我に勝てと仰るか」

「……？」

「我は【ジャイアントウィルス】2体を生け贄に捧げ、2体目の【魔王ディアボロス】を召喚する！」

再び……竜が舞い降りる。漆黒の竜と氷の龍が対峙した。

「バトル……ディアボロスで、グングニールを攻撃！」

「つう……っ！」

晃LP7500↓7200.

神の槍の名を持つ氷の龍は、魔王と冠された竜に打ち滅ぼされる。

「さて、貴様の手札も減った……そろそろ、このカードを伏せておこう」

——手札が減ったから、伏せた？

まさか……………。

「ターン終了だ」

「僕のターン！」

カードはディアブルムに見せるも、そのままドロさせられる。引いたカードは、【グリズリーマザー】。リクルーターである。このカードを引かせてくれる……とすると、やっぱり、僕の予想通りのカードかもしれない。

もしも発動されたら、痛い……………！

「僕はモンスターをセット。ターンエンド」

「ふむ……我のターン、ドロ」

にやり、とディアブルムの口元が緩んだ。

「我は魔法カード、【闇の誘惑】を発動。2枚ドロし……【ジャンク・シンクロン】を除外する」

ドローカード……まだ、ディアブルムの笑みは止まらない。

「もう1枚のドローカード、【貪欲な壺】を発動。墓地に存在する【ジャイアントウイルス】3枚、【ダブルコストーン】、【魔王ディアボロス】をデッキに戻し2枚ドロする」

今や、僕と同じ手札枚数だ。

状況は完全に不利。さて、どうしよう……………？

「我は【ミスト・デーモン】を生け贄無しで妥協召喚する」

く……攻撃力は2400。ディアブルムは恐らく、僕の伏せモンスターが【グリズリーマザー】だと分かっているはず。だとすると、【ミスト・デーモン】はアタッカーではなく……。

「罠カード、【魔のデッキ破壊ウイルス】を発動。【ミスト・デーモン】を生け贄に、さあ……貴様にウイルスを渡してやろう！」

確認させられるモンスターと手札。伏せモンスターは【グリズリーマザー】で、3枚の手札は【大波小波】と、ユグルで創られた魔法カード、【氷結する水滴】……そして、【氷結界の修験者^{しゅげんしゃ}】。

【グリズリーマザー】と修験者が、墓地へ行ってしまう……伏せカードはブラフの【強欲なウツボ】。

がら空きだ……！

「さて……では、登場しよう。【魔王ディアボロス】を糧に、我は

最後の手札……【魔将王ディアブルム】を特殊召喚するッ！」

どくん、と。

闇が、僕とディアブルムを包んだ。

第一章〈第七話 魔王VS守護者たち（後書き）

氷結界は、私……作者が一番好きなカード郡です。

【浮上】のおかげで強くなりますねー（笑）

第一章く第八話 僕を、信じてくれて（前書き）

以外とデュエルが長引いてる……。

おかしいな、もっと短いはずだったのに。

皆さん、応援宜しくお願い致しますm（ ）m

第一章 第八話 僕を、信じてくれて

闇が2人を包んで、姿が見えなくなりました……。

隣では桜様が、飛び出したいのを我慢しながら見つめています。
勿論、私も……。

何も見えない。何も聞こえない。また、雷が落ちて壮大な音が轟きます。

「諏訪様……」

信じる——そうは言っただけで、相手は魔王……いや、魔将王。
多少、力は弱まっているとしても以前、世界に闇を蔓延^{はびこ}らせた暗黒です。

ただ……少し、ほっとしてしまう自分が嫌いでした。

私がこんな闇に包まれるのは、絶対にイヤで……代わりに戦ってくれている諏訪様にお礼を言いたくなる……そんな自分が、本当に嫌いです。

闇が……収まっていく。

否、正確には2人を包んだ闇が魔将王のフィールドに凝縮されていき、一匹の竜を象っていたのです。

【魔王ディアボロス】の上を行く巨体と禍々しさ。

身体が……動かない。

鳥肌と、身体の震えが……止まらないんです——。



魔将王……ディアボロスの子供。
一体、どれ程の強さを持っているんだろう？

「ククク……バトルフェイズ！ 魔将王のダイレクトアタック……！」

「ぐ……あ、あ……ああああアああああアああああアッ！？」

熱い……痛い……いたい、イタイっ！

「クク……！ 痛いか、熱いか！ これが一度世界の滅ぶ前、一部の人間が持っていたというチカラだッ！」

服は、燃えてない。火傷もしてない。

なのに……いたい……僕は成す術も無く、その場に倒れてしまふ。

「お兄ちゃんっ！」

「諏訪様っ！」

確か……アニ、メとかで……闇のデュエル……とか……世界
の、滅ぶ……ま、え？

「さあ、どうする！？ コレを喰らい続ければ、貴様は命を落とす！
尤も……我が死など、赦す訳も無いがな！」

喧しい笑い声。気が付くと、隣に桜とローラさんが走り寄って来ていた。

抱き起こされ、名前を呼ばれる。息絶え絶えにしている僕は、どうにか立ち上がろうと脚に力を入れる。

「だっ、駄目です！」

ローラさんに腕を押さえられ、立ち上がれない。

「もう、良いですから……諏訪様と桜様は……逃げて、ください」

「ロー、ラ……さん？」

「私が……時間を稼ぎます。だから――」

「何を言うかと思えば……」

全く。

僕は未だに鋭く刺す痛みを我慢しながら、右手を動かす。

ローラさんの目尻に浮かんだ涙を優しく拭うと、安心させようと微笑む……けれど、上手く出来てる自信が無いや。

「まだ……」

ローラさんの手を退けて、身体に鞭打って立ち上がる。

また流れていた涙を服の裾で拭ってから、まるで小さな子供を撫でるようにローラさんの頭に手を置いた。

「終わってないよ……僕と、ローラさんのデュエルはね」

桜に目配せすると、桜はこく、と小さく頷いた。

ローラさんを連れて、離れていく。

僕は落ちた手札を拾って、ディスクをしてデュエルをしているデ
ィアブルムを睨む。

【魔将王ディアブルム】 ATK3300・ DEF1500・

晃LP7200↓3900・

「そうで無くては……エンドの前に聞いておきたい。貴様の名は？」

「……諏訪……晃……っ！」

「そうか。では改めて、諏訪晃………：汝のターンだ」

深呼吸。

痛みはまだする。息苦しくもあるし……正直、身体も震えてる。

けど……声がするんだ。

——レグラス村に来た時、聞こえた呻き声が……僕を、呼んでる。

「僕の、ターン！」

「この時、ディアブルムの効果が発動する。相手のドローカードを
お互いに確認する」

カードは、【融けた邂逅】……テキストを読むと、墓地に存在す
る氷結界モンスターのLVを1つ下げ、表側守備表示で特殊召喚す
るらしい。

「ふん……厄介だ。ディアブルムの効果により、そのカードはゲー
ムから除外して貰おう」

……除外、か。

デッキケースに入れながら、思う。

ディアボロスと同じく、効果は結構地味だ……いや、もしかしたら他に何かあるのかもしれないけど。

「その後、改めてドロー出来るぞ？ 尤も、【魔のデッキ破壊ウイルス】の効果によって結局、我に見せる事になるが」

ドローして、確認する。カードは【浮上】。

「良し……僕は【浮上】を発動！ 墓地に存在する、【氷結界の番人ブリズド】を守備表示で特殊召喚！」

【氷結界の番人ブリズド】DEF500.

「ターンエンド」

「防戦一方だな……私のターン、ドロー」

ディアブルムはドローカードを一瞥し、すぐにバトルフェイズへ移行した。

「魔将王よ、ブリズドを破壊せよ！」

「く……ブリズドの効果により、1ドロー！」

「ウイルスは、ドローならば効果が続く。見せて貰おう」

カードは【凍らない呼応】。魔法カードだ。

「……我はエンドを宣言する」

——静かにして。もうすぐ……もうすぐ呼ぶから！

頭に響く呻き声に心の中で叫んだ。

「僕のターン！」

ドローカードは、【サルベージ】。

「ディアブルムの効果により、ゲームから除外する」

「……改めて、ドロー！ カードは……… 【氷結された楽園^{エデン}】！」

初めて見るカード……けれど。

始めよう……。

「フィールド魔法、【氷結された楽園】を発動するッ！」

………さむっ！

思わず身体を震わして、腕を擦る。

辺りは雪と氷に包まれ、様々な大きさの木々も硬く凍り付いていた。

「楽園の一つ目の効果を発動！ 手札を一枚捨てて、デッキから氷結界と名の付いたモンスターを手札に呼ぶ！ 僕が呼ぶのは【氷結界の御庭番】！」

L V 2 の、非チューナー。僕が日本で作ろうとした氷結界デッキのレシピでは、コレに加えジャンクロンも入れようとしてた……と、閑話休題。

「楽園、二つ目の効果！ 相手の場にモンスターが居て、僕の場合に

モンスターが居ない場合1ターンに1度、氷結界と名の付いたモンスターを1体特殊召喚する事が出来る……！ 僕は【氷結界の御庭番】を守備表示で特殊召喚！」

氷結界のイケメン担当……いや、今はそんな冗談を考えてる状況じゃないね。

「僕はブリズドの効果でドロートしたカード……【凍らない呼応】を発動！ 墓地に存在する水モンスターを除外して、そのモンスターの攻撃力以下のデッキに眠るチューナーモンスターを手札に持つてくる！」 【グリズリーマザー】を除外し、【デブリ・ドラゴン】をサーチ！」

——我を……呼べ、担い手！

「【デブリ・ドラゴン】を召喚！ このカードが召喚に成功した時、僕は墓地にいる【氷結界の破術師】を特殊召喚する！」

「破術師……？ いつ墓地に……」

桜が首を傾げる。そういえば、デュエルディスクでデュエルをしていると落ちたカードとかが確認出来ないんだよね。

「さっき、【強烈なはたき落とし】を使われた時にね。この点はお礼を言わなきゃ」

「ふん」

さて……今、呼ぶよ。

「LV2の御庭番とLV3、破術師にLV4、【デブリ・ドラゴン】をチューニング！」

LVは……9。

氷結界に封印されし最古の龍……そして、最強の三つ首龍。

そのチカラは、魔王にも負けはしない！

「大気を纏う絶対零度。最古の力よ、今、全ての世界に終焉を告げん！ シンクロ召喚……荒れ狂い果てろ、【氷結界の龍 トリシューラ】……………ッ！！」

楽園に、封印の解かれし最強の龍が舞い降りる。三つ首の龍……一本一本の首は、それぞれフィールド、墓地、そして手札を荒らす。

「トリ、シューラ……………」

「す、凄い迫力だね……」

「……私、実はまだ出した事無いんですよ」

——ガああアアああアアあつああアア！

叫ぶ。狂う。グングニール以上の咆哮。

そうだよ……君だったんだ。僕がレグラスに着いた時から、開放しろって呼んでたんだよね？

「トリシューラの効果を発動する！ フィールドの【魔将王ディアブルム】、墓地の【ミスト・デーモン】！ そして、手札のカードをそれぞれゲームから除外する！」

「くっ……………！ まさか……………」

良しっ！

「氷結界モンスターは、楽園が場にあると、その氷結界モンスター

の数×100ポイント攻撃力と守備力が上がる……バトルだ！ ト
リシューラで、ダイレクトアタックっ！」

「っう！」

トリシューラATK2700↓2800.

ディアブルムLP8000↓5200.

「ターンエンド」

「私のターン……ドロー！ ……ターンエンドだ」

「僕のターン、ウィルスのラストターンだ！」

カードは2枚目の【デブリ・ドラゴン】。そのまま墓地へ送られる。

「楽園の一つ目の効果！ 手札を1枚捨てて、デッキから【氷結界の武士】をサーチして、召喚！」

武士が、威厳ある瞳でディアブルムを睨んだ。

「バトル！ 武士でダイレクトアタック！ 続いて、トリシューラでダイレクトアタック！」

武士ATK1800↓2000.

トリシューラ2700↓2900.

ディアブルムLP5200↓3200↓300.

「ターンエンド」

「……私の、ターンだ」

このままなら……勝てる。

デュエルの終盤。最早、語ることは何も無い。

「クク……あは、アハハハハっ！」

「……!？」

突然高笑いを上げたディアブルムは、ドローカードを見て狂喜した。

「汝は強い。今までの巫女の誰よりも……恐らく父君だったならば簡単に負けていただろう。しかし、我は違う！ 我は父君を超え、いずれ世界を統括する存在!!」

負けられぬのだよ、と気持ち悪いくらいに晒う。

やがて晒い終えたディアブルムは、引いたカードをディスクに差す。

「我が創り出したカード……途中、天使や悪魔と名乗る者が邪魔をしてきたが、父を犠牲に完成させたチカラ！ 魔法カード、【魔将王の私怨^{しえん}】、発動ッ!!」

父……ディアボロスを、犠牲に……私怨？

「このデュエル中に【魔将王ディアブルム】が特殊召喚に成功していたならば、墓地のカードを全てゲームから除外し、ライフを半分払って発動！」

ディアブルムLP300↓150.

「フィールド上と手札のカードを全て……ゲームから除外するっ！」
「なっ……？」

トリシューラも、武士も。ブラフだったウツボ……そして、凍り付いた楽園でさえも、私怨によって創られた闇に覆われる。

終焉の……深淵。

全てが、カラになった。

「その後……除外されている【魔将王ディアブルム】の効果が無効化し、召喚条件を無視して特殊召喚する……！」

眼を見開いた。

そんな……確か、ディアブルムの攻撃力は3300.

ギリギリ残るけど……手札は、ゼロ。

「行くぞ、諏訪晃！　ディアブルムよ……少女を救う勇者に、絶望の炎をッ！」

「うわ……ああああああ……あ……あ、え？」

痛みが、やってこない。

見ると……桜とローラさんが、身を挺して炎を受け止めている。
熱さと、痛み。僕の代わりに、女の子2人が……！

「桜！　ローラさんっ！」

炎が止む。黒い炎が治まると、桜とローラさんはばたりとその場に倒れてしまう。

「桜……ローラ、さん……」

このままじゃ……死んじゃう……？
そんな……そんな……ッ！

「おに、い……ちゃん」

「桜……」

「わたしは……信じてる。だって、お兄ちゃんは誰よりも強いんだよ……？」

誰よりも。

そう反芻して……桜は笑った。そしてゆっくりとした動きでポケットから“ある物”を取り出して、僕に手渡した。

「これ……精霊界に、落ちてたの……」

これは……僕がいつも掛けてた、眼鏡だ。ユグルに来てからは視力が直ったみたいに快調だったから、気にしてなかった。

僕は眼鏡を掛けて、ありがとう、と言った。

「……うん」

桜が、気を失う。

ローラさんが、ディスクに装着されたデッキに手を乗せて、喉を振るわせた。

「私も……信じてます……」

——助けなきゃ。

「デッキと……何よりも、諏訪様を」

——守らなきゃ。

「一緒に、戦ってるんですもの……そうですね、諏訪様？」

「うん、うんッ……だから、待ってて！ 絶対勝って、君を自由に
するから！」

「はい……信じてます」

ローラさんも、気を失う。

2人を守るように立ちはだかって、僕は左腕を構えた。

晃LP3900↓600.

「さあ、今度こそ最後だ……！ 我はターンを終了する！」

そう、これが最後だ。

僕を信じてくれた2人……僕は、2人の為に戦うんだ。

暗雲が……風に、流されて———。

第一章く第九話 決着。太陽と流れ星（前書き）

やっとローラ編が終わった……いや、実際はそんなに話、多くは無いですけど。

一日一話投稿を頑張ろうと奮起してますが、以外と辛いですね（笑）

このままじゃ、かなりの長編になる気が……。

感想、レビューがあればやる気がUPしますので、宜しければ願
い致しますm（m

第一章 第九話 決着。太陽と流れ星

どくん、どくん、どくん……………。

緊迫とした空気と、心の奥底に潜む不安という名の芽。それは鼓動となって、僕に伝えてくる。

後ろには、気を失って息絶え絶えとなっている桜とローラさん。なのに、僕の右手は言う事を聞かず、ディスクに向かってくれない。負ければ……恐らく、死よりも過酷な日々が永遠と続くんだろう。

僕だけじゃない……ローラさんも。僕に依存していると言って過言じゃない桜も、どうなるか想像出来ない。

（動いて……動いてよ、僕の手ッ！）

2人は、僕を信じてくれた。僕を信じて、庇ってくれたんだ。その期待を、裏切る気なの？

自問して、唇を噛む。震えを止めようと強く噛んだから、血が滴った。

こんな……こんなデュエルは、嫌だ。何で僕がこんな眼にあってるんだろう？

『行くよ、洸司郎。ファラでバフォメットに攻撃！』

『くう……けど、次のターンに逆転するぜ、晃？』

楽しかった日々が脳裏に浮かぶ。親友で、ライバルで……ずっと続くと思ってた、平和な日々。

『あ、晃……君。えと、その……』
『うん？』

『……ほ、本当に私で……良いのかな、って』

『真名は、僕じゃイヤ？』

『そ、そんな！ 私は、晃君じゃなきゃ、駄目……ていうか……
…その、あう』

あんな日々が終わって、唐突に訪れたこんな“非日常”。
僕がしなきゃいけないことなんて、まだ全然思い浮かばない。こ
のままやって、ちゃんと地球に戻るかも分からない……けど。

僕は、地球に戻って、やりたい夢があるんだ。

真名の為に……今は、桜やローラさんの為に。

「僕は………負けない！ ドローッ！」

僕も、信じるよ。

カードは、応えてくれる――。

「僕は魔法カード、【氷結界の喧騒】……発動ッ！」

それは、地球でエンジェルとのデュエル直前。カードショップ・
フロストで買った一枚のカード。

さつき、咄嗟にデッキへ組み込んだ、41枚目のカード！

「エクストラデッキに存在する、氷結界シンクロモンスターを選択
！ そのLV分、墓地に存在する氷結界と名の付いたモンスターを

除外する事でシンクロ召喚する事が出来る！」

氷結界に封印された、最初の龍。

「墓地の【氷結界の修験者】と【氷結界の術者】を除外し、墓地シンクロ……！」

最後の封印された龍を、解き放つ！

「その翼を広げ、世界を膠着の渦へ巻き込め！ 台風の如き氷の羽ばたきが、勝利への軌跡に導く……！ シンクロ召喚、吹き荒べ……【氷結界の龍 ブリューナク】……！」

3匹目の、咆哮。その姿は凶暴さに溢れ、今すぐにもディアブルムを討ち滅ぼさんと威嚇していた。

「く……だが、攻撃力も勝てぬ上に、手札はゼロの為、効果を使う事も出来ぬぞ？」

「勿論、そんなことは百も承知……だけど、喧騒の効果がこれだけだと思わないことだよ」

「何……？」

喧騒——これは、この場の逆転カードだ！

「喧騒の効果は、そのシンクロ召喚したカードがフィールドを離れる場合、ゲームから除外される……それと、効果が無効化されてしまう——代わりに、」

【氷結界の龍 ブリューナク】 ATK 2300 ↓ 4300.

「な、に……？」

「そのモンスターは、除外されている氷結界モンスターの数×50
0ポイント、攻撃力が上がるんだ」

今除外されているのはトリシューラ、武士。舞姫に術者だ。

「貴方の私怨……それはいつか、自分を滅ぼすよ」

「まさか……我が、負ける……だとお!？」

「バトルッ! ブリユーナク……ディアブルムにアタック! S C
ream freeze!」

ブリユーナクの氷の息吹が……魔将王を凍て付かせる。

「そんな、馬鹿なっ! ああアアあああああああああああ
あッ!!!!」

ディアブルムLP150↓0.



「勝った………おわ、った」

膝を付く。既にディアブルムの姿は無く、洞窟の奥が闇に覆わ
れているみだ。

暗雲が、晴れる。太陽の温かな光が、まるで祝福してくれるか
のように輝いた。

「桜、たちを……」

ヤバイ……身体が、動かない……。

ぼたり、と静かに倒れてしまう。意識が遠くなっていくのが分かるのに、それに抗えない。

暗い。暗い……。どこまでも続く暗闇。桜とローラさんの姿も見えなくなつて、僕はそのまま意識を失つた。



「……た……けど……」

「……とう……ます」

声……？

「ん……」

「あ、起きた！」

上半身を起こすと、背中に手を廻して支えてくれる。目を開けると、支えてくれたのはローラさんみたいだ。

心配そうに顔を覗きこむ桜は……何故か異様に近い。

「……えと？」

「良かった……お兄ちゃん、ずっと眠ってたから……」

「かれこれ3日間、眠り続けてたんです」

3日、か……。

辺りを見渡す。

傍に寄って来たのは桜とローラさんのみだったけど、周りにはゲイラさんや数人の村人と思われる人たちが集まっていた。

「まさか、本当に勝つとはな……我等は一度も勝つ事など出来なかったというのに」

ゲイラさんが感嘆を込めた瞳で僕を見つめながら言う。

その気持ちは他の村人も同じなのか、尊敬や畏敬といった思いで僕を見ていた。

「偶然です……それに、デッキはローラさんでしたから。僕じゃなくても勝てましたよ」

「謙遜するな。お前……いや、君のおかげでローラが救われたのだ。礼を言う」

そう言って、ゲイラさんは頭を下げた。その様子に驚きを隠せない様子で、ローラさん含めた村人たちが眼を見張っていた。

「あ、頭を上げてください！ あくまで僕の自己満足だったんですから」

「ならばせめて、持て成しくらいはさせて欲しい。これも、俺の自己満足だ」

「え……。じゃあ、お願いします」

準備をしてくる、とゲイラさんたちは部屋を出て行く。

部屋に残ったのは、僕と桜、ローラさんの3人だけだ。僕はもう

一度横になって、ふう、と一息吐く。

「そういえば、もう2人は大丈夫なの？」

「うんっ。わたしたちは結構早く起きたよ？」

「私たちは、2人で痛みを分け合いましたから。余りダメージは有りませんでした」

……そっか。

良かった、と呟いた。皆無事だったから、全て良し、かな。

視線を動かすと、木彫りの机が映る。そこには僕の制服やローブ、バッグにデュエルディスクが並べられていた。ローブのポケットが膨らんでいるから、そこにデッキケースがあるんだろう。

「それで、諏訪様……このカードなんですけど」

「ん……？ ああ、【氷結界の喧騒】か」

ローラさんのカードの束……多分氷結界デッキ……の一番上にある喧騒を取り出して、僕に見せる。

「僕が持ってたカードだよ」

「そうなんですか……」

「そういえばお兄ちゃん、氷結界作ろうとしてたもんね」

……まあ、異空間にカードがばら撒かれちゃったからもう無理だねどね。

今更思い出して、再び泣きたくなる。

……忘れよう。

「それ、あげるよ」

「え、けど……」

「もう使わないからね」

「……ありがとうございます」

微かに微笑んで、デッキを巫女服のポケットに仕舞う。そういえばなんで今も巫女服なんだろう？　これがローラさんの私服……な訳無いよね。

「ずるい！　お兄ちゃん、わたしには？」

「またいつかね」

「むう……ローラを敵と認識するよ」

「え！？」

ジトー。

まあ、元気で何よりだ。あんなことがあったんだし、気に病んでないか心配だったんだけど……。

「ごめん、2人とも……僕、もうちょっと寝るよ」

「あ、うん……お兄ちゃん、頑張ったもんね」

「……………お休みなさいませ、諏訪様。お持て成しの準備が出来たら、起こします」

「うん、ありがと」

僕は2人が見守る中、また眠りに付いた。

◇ ◇ ◇

桜は未だに料理を食べている。お酒を飲もうとするのを制止するのは意外と骨が折れる。

僕はそんなお酒の空気に酔って、外に出た。

涼しく心地良い風が頬を撫で、僕は大きく深呼吸した。

「桜様、元気ですね」

「！……ローラさん」

ビックリした。

ローラさんは相変わらずの巫女服で、僕の隣まで歩いてきた。空を見上げ、幾千、幾万もある星々を見つめた。

「星って……こんなに綺麗だったんですね」

「……うん」

日本じゃ見たことが無い程に、綺麗だ。中途半端に丸くなっている月も、美しい夜空を映えさせている。

「私は……生まれてから、生け贄の巫女として、育てられてきました」

ローラさんは、静かに語る。

「魔王を呼び起こす術式……男性を悦ばせる方法……経験はありませんが、知識だけなら耳年増ですね」

そう言って、ローラさんはふふ、と笑う。僕はそんな冗談にも笑えなくて、無言を貫いた。

「そんな運命の元、私は生まれてきましたから。友達と呼べる人も居ませんですし、諏訪様のように、助けようとしてくれた人も御座いません」

運命、とか。宿命、とか。

僕はそんな言葉が嫌いだった。けれど、ローラさんはそう思わないと辛かったんだろう。

それこそ――ディアブルムの炎よりも、数倍の痛みが、ローラさんを捉えていたに違いない。

「初めてでしたね……桜様と、仲良く話したのも……人を、信じた事も」

そう言って、ローラさんはまた笑う。さっきとは違って、本当に嬉しそうに聞こえて、僕も微笑んだ。

「諏訪様は、私にとって命の恩人なんです。いいえ、私にとってはそれ以上に大切なものを守ってくれた……一生掛かっても足りないほどの恩を、私は感じています」

「そんな……」

「大袈裟では有りません。命、貞操、未来……その全てを、諏訪様は救ってくれたのですから」

ローラさんが僕の方を向いた。僕も向き合って、真っ直ぐにローラさんの瞳を見つめる。

「出来れば……私も、諏訪様と桜様の旅に御同行したいのですが」

「へ……?」

「恩を返したいんです。どんな方法かを探す為にも……私は諏訪様

と一緒に居たいんです」

……まるでプロポーズみたいだ。っと、そんな冗談を言う空気でもないよね。自重自重。

「桜様は、諏訪様さえ良ければ構わないそうです」

「……けど、ローラさんはもう自由なんだよ？ 僕は別に気にして無いから、わざわざ旅に同行しなくても……」

「諏訪様」

唐突、だった。

ローラさんは僕に一気に近付いたかと思うと、背伸びをして顔を寄せる。そして――。

唇に、柔らかい感触。

「……これが、私が貴方と一緒に居たいもう1つの理由です……」

…“ 晃様 ”」

「ローラ……」

流れ星が、落ちる。

空に、雲は1つも無かった。

第一章 第十話 サーヴァイルと奴隷少女

「あの……本当に行くんですか？」

「まあ、一番近いみたいだし……」

あの日から、2日が経った。

以外と傷……特に精神面だったけど……の治りは早く、早々に僕、桜、ローラの3人はレグラス村を発っていた。前日……ゲイラさんとのゴタゴタがあったけど、虫。……違う。無視。

頬に飛んできた虫を払いながら、僕は右に居る桜、左に居るローラを交互に見やる。

「けれど、その……」

「お兄ちゃん、わたしもちょーっと気が引けるなあ、なんて……」

「あれ、桜も知ってるの？」

「うん。精霊界でも結構有名で」

僕たちが向かっているのは、レグラス村から北に向かった方向の街、サーヴァイル。

各々が違う色のローブを揺らしながら、僕たちは草原を進んでいた。

「ふうん……けど、やっぱり食料とかも調達しないといけないし。流石にここからユグルの中央国家……エデラウン、だっけ？　まだは遠すぎるよ」

「それは……そうだけど」

「……サーヴァイルってどんなところ？」

桜がここまで恐縮するのも珍しい。お父さんとお母さんが仕事で外国に行く時も、まだ小さいからと桜を連れて行こうとした時、僕が居ないからと泣き喚いた記憶がやけに新鮮だ。

僕が首を傾げると、ローラが視線を僕から外しながら口を開く。

「あそこは……世界で一番大きな闇市場があるんです」

「闇市場？」

「そう。まあ……通称“奴隷国”だよ」

——奴隷？

反芻して、胸の奥に棘が刺さったように痛んだ。

「外面は凄惨な平和な国だけど……その実態は、政府にも黙認されてる奴隷商人が居る場所なの」

「……………」

「あの、晃様？」

奴隷……この世界の文化かどうかは知らないけど、許せないことだ。

僕からしてみれば、殺人よりも重い罪だと思ってる。

勿論、自分から志願したりしてるなら話は別だけど……無理強いしてるなら、絶対に——。

「……お兄ちゃん、暴走しないでね？」

「あの、暴走って……」

「お兄ちゃん、人の不幸を見ると動かずには居られないんだよ。わたしや洸司郎……あ、お兄ちゃんの一番の友達ね。で、わたしたちの間じゃ、それを暴走って呼んでる」

結局、洗司郎も手伝ったりしてるけどね、と後付けして桜は溜め息を吐いた。

別に手伝って、と頼んだ事はない。僕と同じく、洗司郎も優しいんだよ。僕と違って、力もあるし……。

そういえば今頃、洗司郎はどうしてるだろう……？



わいわいがやがや。

なんて、漫画のような表現を使いたくなるような賑わいを見せる国、サーヴァイル。

奴隷国と呼ばれているのと同時に、サーヴァイルは貿易国らしく、電車のような乗り物も走っていた。

「ここが……サーヴァイル、ね」

一日の野宿を終え、昼頃の時間帯。僕たちは人が流れ行く様を見つめていた。

「さて、と。お兄ちゃん、まずどうしよつか？」

「え？ えと……取り敢えず腹ごしらえでもしようか」

丁度近くにピケル・クラン食堂と書かれた店がある。その看板の両側には【白魔導師ピケル】と【黒魔導師クラン】の絵が描かれて

いた。

扉を開けて中に入ると、ウェイトレスだろう女性が出迎えてくれる。

(……?)

ウェイトレスの首には、赤い輪……首輪？

頭にクエスチョンマークが浮かぶ。けれど、そんな事は関係無しにテーブルに案内されて、僕たちは腰を下ろした。

「あの人……奴隷だね」

「はい、そうですね」

「え？」

テーブルに着いてすぐ、桜とローラが声を潜めて言う。

「奴隷って、誰かの所有物になったらああいう首輪とか、何か目印を付けられるんだよ」

「所有物……」

喉が震える。心の奥底から湧き上がる怒りに、僕は抑えるのに必死だった。

運ばれて来たメニュー表を眺めながら、少しずつ力を抜いていく。

「僕は――」

「やっと見付けたぞお、フィジー……!!」

オムライス、と言おうとした時だった。

大声を張り上げた太った男が、僕たちを出迎えてくれたウェイト

レスに詰め寄っていた。

側近だろうか……背の高い大男が、ウェイトレスの手首をひね上げている。

「な、何……？」

「良くも俺様から逃げ出したなあ……まさか、まだこの国に居ると思わなかったけどお……」

元々背の低いウェイトレスが持ち上げられ、太った男と視線が合う。

「奴隷の癖に生意気だぞお……？　まあ、その方が調教のし甲斐があるけどねえ……」

ゲヒヒ、と気持ちの悪い笑いが耳に残る。

——助けないと。

特に考えも無く、身体が勝手に動いて男に近付く。どうやら、僕以外に近づく人は居ないらしく、馬鹿を見るような眼で眺められた。

「ううん？　何か用か、ガキィ………？」

「その手を離してよ」

「コイツは俺様の所有物だからなあ……どう扱おうと勝手だろお？」

カチン、と来た。

ウェイトレス——外見は中学生くらいだろうか。少女の眼は無表情に、けれど真っ直ぐ僕を見つめていた。

助けて、と。その翡翠色の瞳が、語っているように見えたのは僕だけだろうか。

「僕はその奴隷制度に、賛成してる訳じゃ無いから……止めない訳にはいかない」

「ふうん……？ ギロ、やれ」

ギロと呼ばれた大男が女性から手を離し、僕に迫る。
大丈夫……洗司郎とマジ喧嘩した時よりも怖くない。

ギロさんの腕が振り上げられる――。

「遅い！」

身体の巨体差が仇となったね。

僕は太った男とギロさんの間をすり抜けて、行く末を見守っていた少女の腕を取って逃げる。

「桜、ローラ！」

「あ、待ってよお兄ちゃん！」

「お、置いてかないで下さいよ！」

椅子に置いて来たバッグをローラが拾って、僕たちはそそくさとピケル・クラン食堂から逃げる。後ろから男の間延びした声が聞こえるけど、スルー。

とにかく人気の少ない路地裏に連れて来た僕は、はぁ、と息を吐いて壁に背を預けた。

「あゝ、緊張した……」

「もう、逃げるなら逃げるって言ってよっ！」

「ごめんごめん。あ、ローラありがとう」

ローラからバッグを受け取り、ローブを一度外してから肩に掛け、また羽織る。

そして、僕は少女に向き直った。

「大丈夫だった？」

「……ん」

こく、と頷く。

ショートカットの髪をした、かなりの美少女だった。藍色の髪はさらさらで、つい撫でたくなる。身長も桜よりも小さくて、可愛い。

翠色の瞳は無表情だけど、真っ直ぐに僕を見つめている。

「……………んで」

「え？」

「……………なんで……………助けてくれた、の？」

その顔は、心底不思議そうだった。

「えと……………なんで、って言われても……………」

「わたし……………奴隷」

「奴隷だろうがなんだろうが、僕は見過ごせないよ……………というか、フィジーって君の事？」

また頷く。

随分と寡黙な子らしい。

「……フィジー＝オールド・ランナ……………通称……………フィー」

「そうなんだ。僕は諏訪晃。こっちの2人が……………」

「ローラと申します。以後、お見知りおきを」

「わたしは桜だよ。宜しくねっ、フィーちゃん！」

各々が自己紹介して思うけど、ローラって変に堅苦しいよね……性格だろうから何も言わないけど。

僕、ローラ、桜と順番に顔を眺めて、一言呟く。

「……ありがとう」

やっぱり、彼女を助けられて良かったと思う。

無表情だから分かり難いけど、嬉しそうなのが分かる。僕はなるべく優しく頭を撫でた。

「あ、ずるい！」

「私にもしてください！」

「「ゑ？」」

……今言ったの、ローラ……だよね？

僕と桜がハモってローラの方を見ると、顔を赤くして視線を逸らしていた。うん、間違いない。ローラだ。

「……………」

「……………」

「……こ、これからどうするの、お兄ちゃん？」

「……えと、適当に何か買って食べようか？」

「無視ですかっ！？ 勇気出して言ったのに……！ あ、視線を逸らさないで下さいっ！」

何も言わないよ。僕は桜に任せる。

桜の肩に手をやって、にっこりと笑ってローラの方へ背を押してあげる。桜の悲痛な叫びなんて聞かない聞こえない。

……………良し。

記憶の消去を終えた僕は再び、少女……フィーちゃんに向き直った。

「フィーちゃん。これからどうしたい？」

「……これ……から？」

「うん。フィーちゃんが望むなら、奴隷制度なんて無視して連れ出すよ。まあ、フィーちゃんが良いならだけど……」

考え込む。

もしかしたらフィーちゃんには家族が居るかもしれないし、奴隷制度に逆らう事は出来ないかもしれない。

けどやっぱり、僕は奴隷なんて無くなれば良いと思ってる。双方同意ならともかく（それも中々変だけど）、強制的な束縛は絶対に許せない。

「……わたし……」

「うん？」

フィーちゃんはウェイトレスの制服のポケットから一枚の写真を取り出して、僕に見せてくる。

その写真には、フィーちゃんと仲良さそうに並んで写っている少女の姿があった。

「……妹……リイナ」

「リイナちゃん？」

「ん……唯一の家族……」

唯一……とすると、もう両親は……。

「ウェーリアに……連れてかれたから」

「ウェーリア……そこで、リィナちゃんを探したいんだ？」

再び、コク……と、力強く頷く。気が付くと隣には桜とローラが復活して、写真を眺めていた。

「分かった。それじゃ、今日はもうすぐ夜になっちゃうし……ちょっと危険だけど、今日はこの国に泊まろう」

「分かった………あ、1つだけ」

あの男たちに見つかるかも……そう危惧しながら言って、フィーちゃんは物静かに、（僕たちにとって）驚愕の事実を告げた。

「フィー、で良い………わたし、これでも18歳」

「」「~~あ~~」「」

年……上………？

第一章〈第十話 サーヴァイルと奴隷少女（後書き）

終わり方がおかしい件には突っ込まないで下さいお願いします。

そして、展開が早いなあ。

今回ばかりは反省。

仕方ない、本当はこのままウェーリアに向かう予定だったけど予定変更しますか！

番外編……というよりオマケ？（前書き）

今回はオマケです。

ゲストは我が主人公、晃！！

番外編……というよりオマケ？

作者「いやゝ、第一章もここまで進んだか」

晃「……こんな事で番外編するんだね」

作者「え、おかしい？」

晃「……ううん。別に良いんだけどね」

作者「しかし、前の話が中途半端だよゝ」

晃「次の展開考えて無いから、作者は番外編を急遽入れたんだよね」

ギクツ。

作者「あははは……何を言うかね、君は！　わわ、私がそんなことをする訳ぎゃっ」

晃「動揺しすぎだよ……噛んでるし」

作者「ふん……良いもんね良いもんね。晃なんてヒロイン皆に刺されば良いんだ」

晃「君が言うのと冗談に聞こえないからね！　って、何プロットに書き足してるのっ!？」

作者「にやにや……にやにや」

晃「作者の人気凄くダウンするよ！ 良いの!？」

作者「……………」

晃「あ、消した」

作者「ところで、このままプロット通りに書いてくと『紫苑の槍』様が書いてる『遊戯王 俺達が歩いていく道』とかなり差が出る上に、最終的な話数かなり開くケド……」

晃「それ、僕じゃなくて君から言うんだね」

だって自覚してるもの。

作者「私はパソコンから書いてるけど（投稿は携帯）、『紫苑の槍』様は携帯で執筆&投稿だから、スピードが遅くなるって。パソコンうゝ、っていつも言われてます、ハイ」

晃「どうでも良いけどこのプロットさ」

作者「何勝手にプロット読んでるのっ!？ というか、君がそれ読んじゃ駄目だからねっ!？」

晃「プロットプロット、って言ってるけど……設定しか書いて無いよ？ この先の展開はどこへ？」

作者「私の頭の中」

晃「……………」

作者「そのメモ帳は君やヒロインたちの設定、後はオリカとかを書いてるだけだよ。呼び方が面倒だからプロット」

晃「……ヒロイン4人……」

作者「ねえ、ネタバレだよ？　ねえねえ、返して？」

晃「しかもヒロインの中に桜が居るけど、そこには突っ込んで良いのかな？」

作者「わあい、その言い方エロ——」

晃「うん？」

作者「ゴメンナサイスイマセン貴方にはいつか女装させますのでユルシテ」

晃「その言い方だと僕が女装癖みたいじゃんっ！」

作者「大丈夫。既に初対面の人には眼鏡っ娘として認識されてる場合も多いから」

晃「初耳っ!？　ていうか、多いの!？」

作者「さて………余談は置いといて（ひょいっとメモ帳を返して貰い）、この作品が掲載されるまでの裏話をちよこっと………『紫苑の槍』様に内緒で教えましょう」

晃「君、内緒多くない？　桜を登場させたのも内緒だったし、真名の事もそうだったよね？」

作者「事の始まりは、そう……僕がまだ遊戯王の存在を知らなかった時のこと」

晃「いきなり嘘！？　その時はまだ『紫苑の槍』さんに会って無いからねっ！」

作者「遊戯王を始めて、60枚ギリギリ、全てをドラゴン族（大半が通常モンスター兼最上級）にしていた頃」

晃「……酷い。ブルーアイズとレッドアイズ3枚積みはある意味格好良かったけど、メテオドラゴンとかベビードラゴンとか……初代遊戯王ファン？」

作者「それから一時引退……そしてGXが始まって再開」

晃「あ、GX自体始まって無かったんだ」

作者「今度はブラマジデッキを作成。ブラマジでHEROデッキと戦った時は燃えた（ブラマジガールの意味でも萌えてた）」

晃「……最後の副音声は聞かなかった事に………」

作者「そして引退……再開した時は、またブラマジデッキを作って大会でたなあ」

晃「……裏話じゃなくて思い出話じゃない？」

作者「まさかの大会初戦……相手はライロ。しかも全盛期………
何あれチート」

晃「……けど勝ってるよ？　ねえ、相手事故って無いよ？　君何者なのさ」

作者「そして高校生になって、ほんの数週間前……数ヶ月？　いや、そんなに経って無いから数週間前かな」

晃「やっと裏話に到着だね。ふう、長かった……（やりきった的な感じで汗を拭う）」

作者「私はある事情で高校を中退したんだけど、その後も合流のあったリア友に誘われたんだよ。「ねえ、遊戯王小説書かない？」と」

晃「それが『紫苑の槍』さんだね。遊戯王に関しては一番話合うみたいだよ」

作者「そして設定を考えて……というより、この異世界設定とかは9割程私が考えたんだけど」

晃「あの時はすらすらと思い浮かんで、翌日にはもう執筆してたんだよ。その時はまだ携帯だったんだ」

作者「そしてうんたらかんたらあって、今に到ると」

晃「えっ、何そのうんたらかんたらって。凄い気になる言い方されたよ?」

作者「ところでさ」

晃「あ、スルーですか、そうですか」

作者「この小説って、人気無いのかな……」

晃「え、どうしたの?」

作者「感想とか全く無いし……唯一の感想がリア友って……」

晃「まだ始めてから1ヶ月も経ってないじゃん。元気だしなよ、ね?」

作者「慰めてくれるのは私が書いた主人公……」

晃「それメタ発言っ!? というか、その発言はそこはかたく駄目な気がするっ!」

作者「……………orz」

晃「……落ち込み方もネタに走ってる……………いや、作中はギャグ書けないからここでやってるんだろうけどさ」

作者「……………orz」

晃「………………。だ、誰か感想宜しくねっ!」

作者「ところで、」

晃「え?」

作者「他作品とのクロスオーバーとか、人気投票とかってどうやるの?」

晃「……………興味津々なんだね。眼がキラキラしてるよ。さっきの君は何処どこへ」

さて、気を取り直して。

作者&晃「これから、宜しくねっ!」

晃「あれ、作者の名前変わってる!?!」

ちゃんちゃん。

第一章 第十一話 フィーの涙と黒い男

夜――。

そういえば、僕って夜に行動する事が多いなあ、なんて思いながらある大きな屋敷の前に立っていた。

なるべく小さな宿屋を選んで、今頃桜とローラ、フィーは眠っているだろう。

余談だけど、年上だったからフィーさん、と呼んだら睨まれた。ちよっと怖かったのは内緒。

街の人の情報だと、フィーを狙っていた男はサーヴァイルでも有数の大金持ちだとか。そして、ソイツが住んでいるのはこの屋敷だと言う。

「話し合い……で済めば良いけど」

多分無理だろうな、と内心諦めモード。今の僕はいつものローブを羽織って、腕にはデュエルディスク。後はデッキの入ったケースしか持っていない。

ただ、眼鏡は制服のポケットに仕舞っている。ユグルに来てから視力が直ったのか分からないけど、度のある眼鏡は気持ち悪くなってしまう。

「む……誰だ、貴様？」

「え、と……こ、この屋敷の主人にお話が………」

「そんなこと、許される訳無いだろう。帰れ」

……ですよね。

ガードマンの男性に一蹴され、僕はどうかと首を捻る。
と――。

「……わたしの客人、です……………」

「え……ふ、フィー!？」

声がした。暗闇の中、フィーは静かにそう告げる。

その姿は――裸、だった。

首輪以外を身に付けていない、一糸纏わぬ姿。

「わわっ、何で裸なの!？」

急いでローブを脱ぎ、フィーに掛けてやる。全く隠そうとしないのは慣れているのか、フィーの視線はガードマンに向けられていた。一方でガードマンは、フィーを蔑んだ瞳で見下した後ふん、と鼻で笑った。

「成る程……その男が、昼にお前を攫った男か」

「はい……謝罪したいと申しましたので、連れてきました……………」

「……良いだろう。お前がどんな折檻を受けるか、楽しみだな」

ニヤニヤと厭らしさの籠もった眼でフィーを見つめる。その瞳には先程まで裸だったフィーが映っているのか、僕はその視線を遮るように立ちはだかった。

「入れ」

門を開け、道を開けてくれる。

謝罪する気なんてさらさら無い。けれど、今はこうした方が正解だろう。

ローブで全身を覆ったフィーに着いて行く形で、僕は屋敷内に侵入した。

「ありがとう、フィー。助かったよ」

「良い……それより、どうしてここに」

「えと……ま、まあちょっとね」

フィーの事で喧嘩……もとい、話し合いをしに来たと言うのが少し恥ずかしくて、僕は言葉を濁した。

けど、流石年上の女性。僕のそんな態度でも感づいたのか、そう、と小さく呟いた。

「わたしは……」

「え？」

「……………ここで奴隷として、色々されてきた」

突然の話に、生唾を呑み込む。

「主に性的なもの……わたしはこの屋敷じゃまだ13歳……………処女は守った」

処女、て。随分とストレートに言っちゃうんだね。

「けど……辛かった」

ここまで露骨に表情が曇ったのは、初めて見た。

唇を噛み、悔しそうに……辛そうに、床を眺めながら俯く。その間も、僕たちは歩みを止めなかった。

「リィナとは引き離されて……複数の男がわたしの身体を……………」

「もう良いよ。もう、良いから……」

フィーの言葉を遮って、僕は制止した。
話さなくて良い。

——涙を流している事に気付けないくらい、辛いなら……話さなくて、良いから。

僕はフィーを抱き締めて、涙を拭うように顔を胸に押し付ける。
その身体は小さくて、華奢で、年上なんて思えないくらい……か細い。

「もう大丈夫……僕が居るからね」

「っ……ふ……うええ……」

暫く——誰も通らない廊下の中心で、フィーは子供のように泣いていた。



「……………ん……ありがとう」

「どう致しまして」

涙が止まり、落ち着いてきたフィーが僕の身体から離れる。制服……正確にはYシャツだけど……は涙でびしょびしょになり、鼻水も付いていた。

それを見て、フィーが申し訳無さそうに頭を下げる。

「この程度でフィーの心が少しでも軽くなるなら、幾らでも濡らしてよ。胸くらい、いつでも貸すよ?」

「……………そう」

ありがと、と小さく言う。

そして、フィーは突然シャツの裾を掴み、引き寄せた。

「え…………?」

「…………ん」

……………またですか。

ユグルに来て、早くも3回目。目の前に広がるフィーの顔を眺めて、僕って変な運命だな、なんて自嘲してしまう。

「……………わたしは……………」

「え?」

「……………なんでもない」

視線を逸らして先に進むフィーを追いかけて、僕も屋敷内を歩く。フィーの横顔が少し赤いように見えるのは気のせいだろうか?

そんなフィーが、少し可愛い。

屋敷の一番奥の部屋……………フィーは一度ノックをして、返事を待った。

「……………入れよ」

「…………? 失礼します」

フィーが一瞬首を傾げて、扉を開く。
僕も一度深呼吸をして、中に入り――。

「……なに、これ」

中に居たのは、3人の男性だった。いや、ある意味では1人しかないのかもしれない。

大男……ギロさんは、血を吐いて倒れていた。もう全く動いていないのは……考えたくも無い。

2人目……食堂で会った、太った男。間延びした喋り方が気持ち悪かった彼は今や、もう1人の黒い男に踏まれて動いていない。

「なに、これ……!？」

黒い男はニヤリと笑って、太った男性を蹴り飛ばした。
軽々と吹き飛んだ男性は、本棚にぶつかって幾本もある書物に埋もれてしまった。

「テメエが天使側の選んだ人間かよ？」

「……てん、し？」

「あア？ テメエも教えられてねえのかよ……アイツと一緒に、調べさせようってか？ 物好きな奴等だなア」

黒い……いわば、エンジェルの真逆の存在。

服も、肌も……ついでにデュエルディスクも黒い。その黒さが固まった血を思い起こさせて、一瞬身体が震えた。

勿論……恐怖に、だ。

「……貴方……誰」

「あん？ お前……あア、豚の奴隷だった奴か」

豚……とは、太った男性の事だろうか。

「俺ア……ま、デビルって事で良いや。個別名称言っても意味ねエしよ」

「……なんでこんな事を」

「聞いてくれよ！ こいつらよお、お前を見つけたら殺そうとしてたんだぜエ？ 殺し屋雇おうとしてたくれエだ。まっ、んなことがさせねエし」

「………だから、殺したの？」

「おうよっ！ だってな？」

——瞬間。

黒い男……デビルは、突如僕の視界から外れる。そして、

「——俺がテメエを殺すんだよ。獲物取られてたまっか」
「っ……！！！」

いつの間に後ろに……っ！？

フィーと一緒に後ろを振り向くと、またそこに姿は無い。振り返って視線を戻したら、口元を歪めて僕らを眺めていた。

「……僕を殺す？」

「ああ！ まあ、規約により直接手を下す事は許されねエよ？ けど、ちゃあんとテメエを殺す方法もあんだなあ、これが」

……規約？

さっき、このデビルは天使側だとかなんとか口走ったよね。だと

すると、やっぱりエンジェルが僕にさせようとしてる事と関係があるということだ。

決まり事があるってことは、それを定めた存在が居る……こんな“異常”な存在を納めているってことだから、さらに上の者が居るんだ。

しかも……………。

エンジェルは、デュエルを試練だと言った。そして、デビルの腕にもディスクがある。

さらに、その規約が必要な出来事は遊戯王デュエルモンスターズが第一の世界。

と、すると――。

「デュエルだよッ！ 闇のデュエルとか、サイコデュエルとか改め、^{カオス}混沌デュエル……これに負ければ、テメエは死ぬ！」

「混沌……デュエル」

フィーが反芻する。

やっぱり、僕を殺す方法はそうだろうと思った。

ただ……。

また、ディアブルムとのデュエルみたいな痛みを味わんなきゃいけないの……？

「怖いか、恐いかっ！ ハッ！ そうじゃなきゃ面白くねエ！」

「……でも、デュエルを受けなきゃ良いんじゃないの？ 僕は別に、君と戦う理由なんて――」

「そうそう、情報じゃそんな奴だって聞いてんぜ？　だが安心しろよ。ちゃんと理由、作ってあんぜ？」

そう言って、デビルは懷から1つの鍵を取り出した。それを見て、フィーの身体がぴくツと動く。

「知ってツかよ？　奴隷の証として取り付けられたモンにはよ、呪いみたいのがあんだよ。所有者の奴が死んじまったら、同時に奴隷も死ぬって奴がよ」

「……な」

本に埋もれた男性を見る。全く動いている気配は無い。けれど、フィーは死んでない。隣で話を聞いている。ってことは、

「ソイツはもうじき死ぬぜ？　呪い、掛けてやったんだよッ！　後数時間ともたねェだろうな」

「っ……！！！」

「んで、その奴隷が付けてる首輪……それを外す鍵がこれってこつた」

……つまり。

「デュエルに勝てば、それをくれるってこと？」

「ご名答。おめえ、頭良いじゃねェか。ま、もっと分かり易く言う
と、だ」

分かってる。分かったよ――。

ディスクを構え、デツキをセット。ディスク展開、ライフ表示…

……………！

「これはテメエと奴隸の命を賭けた、混沌デュエルってこった！」

フィー、待ってて。

そんな首輪、すぐに外してあげるから！

「「デュエルッ！！」」

第一章〜第十一話　フイーの涙と黒い男（後書き）

読み返すと、この小説って地味に下ネタ多いなあ（笑）

第一章 第十二話 混沌デュエル

「先攻は俺だなッ！ ドローッ！」

少し離れた所で、ファイが見守ってくれている。数時間後とデビルは言ったけれど、正直いつ来るのか分からない死は恐怖しか無い。早めに終わって、首輪を取って……出来れば、何事も無かったかのように桜たちのところに戻って眠りたいところだ。

「俺は【暗闇時計】^{ディムクロック}を攻撃表示で召喚する！」

【暗黒時計】 ATK 2300.

「……でいむくろっく？」

というか、LV4で2300……ということは、デメリットアタッカー？

「カードを2枚伏せて、エンドするぜ」

「……僕のターンだ、ドロー！」

あの時計を象った黒いモンスターはどんな効果なのか、気になる。けれど分からない以上、慎重に動かざるを得ないか。

「僕はモンスターをセットして、永続魔法【ドールコンヴァート】を発動！ ターンエンド！」

「お前のエンドフェイズ時、【暗黒時計】は攻撃力が500ポイント下がる。俺のターンだ！」

【暗黒時計】 ATK2300↓1800.

成る程。どうりで元々の攻撃力が高いわけだ。
けど、きつと効果はこれだけじゃないはず。どうなる……？

「俺はさらに【闇時計】^{ダーククロック}を召喚！ バトルだ！」

【闇時計】 ATK2000.

「【闇時計】でアタック！」

「モンスターは【第二人形^{セカンドドル} カイ】！ このモンスターが戦闘によって破壊され墓地に送られたとき、デッキから攻撃力0の人形モンスターをリクルートする！ 特殊召喚、再びカイ！」

カイが破壊され、デッキからまたカイが登場する。勿論守備表示だ。

「チッ……なら、【暗黒時計】で攻撃するぜ！」

「カイの効果によって、僕は【第四人形^{フォースドル} セイ】を特殊召喚！ そしてセイの効果を発動！ このカードが人形と名の付いたモンスター効果によって特殊召喚された時、手札の人形モンスターを特殊召喚出来る！」

もうデビルに追撃モンスターは居ない。展開するなら今だ！

「手札に存在するセイを特殊召喚！ そしてそのセイの効果！ 【^{サードドル}第三人形 チー】を守備表示だ！」

場に現れる3つの人形。全部チューナーだけど、手札にはカイを含めてこの3匹しか居なかったんだから仕方ない。

「さらに、カイが2匹とも墓地に送られた為【ドールコンヴァート】に人形カウンターが2つ乗る！」

「チッ……俺はターンエンドだぜ」

「僕のターン、ドロー！」

これで手札はデビルと同じ3枚。伏せカードが気になる……残念ながら手札にモンスターは居ない。

元々人形デッキの特徴から、魔法、罠カードの方が割合が多いんだ。仕方が無い。

「僕はチーの効果を発動！ 墓地に存在するカイを除外して、デッキから同名カードを特殊召喚する！ 3枚目のカイを特殊召喚！」

なんか、今回は序盤に何回も登場するね。ごめんね、過労死させてちゃって。

「LV3、カイにLV1、セイをチューニング！ 夢綴るは未来の変化！ 望む軌跡の先に映るは汝の献身！ シンクロ召喚……夢よ、叶え！ 【実験人形^{モルモット} テト】！！」

いつも思うけど、語呂悪。

なんてテトに失礼な事を思いながら、フィールドに降り立った白衣を纏った少女。その手には画用紙とペンが握られている。

「思ったより……元気そうだね」

『テトが貴方の実験台になりたいと望んだからネ！』

画用紙に書かれた文字が、僕に向けられる。デビルがにやりと笑

い、ファイが首を傾げていた。

そう……“設定”では、テトは言葉を喋れない。

「良し——この時、【ドールコンヴァート】に4つ目のカウンターが乗る！そして、【ドールコンヴァート】の効果を発動！このカードに乗っている人形カウンターを任意の数取り除き、自分フィールド上の人形モンスターを選択する。その取り除いた分、そのモンスターのレベルを上げる、もしくは下げる事が出来る！」

【ドールコンヴァート】に乗る人形カウンターが2つ、取り除かれる。

「選択するモンスターはテトだ！LV6となったテトに、LV2チーをチューニング！」

まだ序盤だけど、出陣だよ。

「命を伝う神秘なる水滴。雫が流るるは花の涙！シンクロ召喚、咲き乱れよ、【華散り人形^{ブルームドール}ファラ】ッ！！」

フェイバリットカードだ！

さらに、再び【ドールコンヴァート】のカウンターが4つに戻った。

「はっ！流石、選ばれただけのこたああるな、オイ？」

「まだだ！僕は手札から【ドールサイクル】を発動！墓地のテト、カイ2枚をデッキに戻して2枚ドロロー！」

ちなみに余談だけど、【ドールサイクル】の他に【ドールリサイクル】というカードもある。後者は確か、エンジェル戦で使った。

なんでこんなに酷似したカード名にしたのかは知らない。ミスだろうか？

「僕はまだ、通常召喚を行ってない！ 今引いたカードの中の一枚、ファーストドール【第一人形 クー】を召喚！ そして、LV4のクーにLV1のカードでシンクロする！」

【ドールコンヴァート】のカウンターが6つに増えた。

「散れ、刺し、斬るが良い！ 守る為に殺める制裁を……！ シンクロ召喚、惨殺せよ【抹殺人形 イレースドール ライア】……！」

実はこのデッキで一番登場比率の高いライア。やっぱりLV5だから出しやすいんだろうか？

「【ドールコンヴァート】の効果を発動！ カウンターを2つ取り除いて、【闇時計】と【暗黒時計】のLVを1つずつ上げる！」

「あ？ なぁんでLV上げんだよ？」

「それは、ファラがLV5以上のモンスターを戦闘破壊したら続けて攻撃出来るからだよ！ しかも、回数制限無しでね」

「……なんつーシナジー」

……確かに。

【ドールコンヴァート】人形カウンター6↓4.

「さらに、人形カウンターの数×200ポイントずつ、自分フィールドの人形モンスターの攻撃力はアップするんだ」

ファラ ATK3000↓3800.

ライア ATK 2450 ↓ 3250.

「バトル！ ファラで【暗黒時計】に攻撃！」

「おっと、んな大ダメージ喰らってられるかよ！ リバーストラッ

びょうしんそうじやく

プ、【秒針送寂】！ 自分フィールド上の時計と名の付いたモンスター
の攻撃力を0にして、バトルフェイズを終了させる！」

「な……」

【暗黒時計】 ATK 1800 ↓ 0.

「それで、【暗黒時計】は攻撃力が0になったら破壊される。自身の
効果で破壊されたら、デッキから同名カードを手札に呼んでこれ
るッつー訳だ」

デビルの手札に、暗黒時計がサーチされる。

これで、デビルの手札は4枚……僕の方が一枚少ない、か。

「僕はこのままエンドする」

「お前のデッキ、以外と罠とか入ってねえんだな。俺のターンだ」

確かに、シンクロモンスター以外は皆攻撃力0だけどさ。罠カード
は確か、5枚も入っていないと思った。それでもモンスターの比
率も少ないから、殆どが魔法で占めている。

だからか、強力なカードが多いのに大会だと見慣れなかったんだ
よね、人形シリーズ。

「ぐっ……!!」

「っ!?! ファー!!」

そんな事を考えていた時だった。突然、ファイが首元を押さえな

がら床に膝を付いた。

傍に寄って支える。

首輪が、フィーの首を絞めようと動いていた。

「豚の死がちけえんだろうよ！ 早く決着しねえと、死んじまうぜ？」

「く……！」

そうだよ、チンタラしてられない。

フィーが苦しんでるのに……「もう大丈夫」なんて、フィーを抱き締めてあげたのに！

「——これじゃ、何も変わらないじゃないかっ!!」

死なせない。

フィーを助けて、ウェーリアに行くんだ。皆で、1人残らずに。

「……あ、れ………」

「え？ フィー？」

フィーの指が、棚の上にある箱を差す。

フィーを優しく床に寝かせて、その箱を持ってフィーのところにゆっくりとした動作で箱を開けると、そこにあったのは遊戯王のデッキだった。

「これ………わたしの、デッキ………」

「え……」

「取り上げられて………コレを取りに、戻ってきた……」

……そうだったんだ。そんな危険な目にあってまでも取り戻した

かった、大切なデッキなんだ。

「コレ、使って……………」

「は!？」

デッキを僕に差し出しながら、物静かに言う。その眼には決意のようなものが宿っていて、僕は反射的に受け取ってしまった。

「それ…………わたし、自身…………だから……………コレを使って、勝って欲しい…………」

「だ、だからって…………何も、こんな時に…………!」

もう時間が無いのに!

「くっ…………アッハハハハっ!! やっべ、ンだよコレ、くっそ愉しいぜ! 良いぜ、やろうじゃねェか!」

そう言って、デビルは指をぱちんと弾いた。するとフィーの首輪が締め付けを止めて、絶え絶えとしていた息が整っていく。

「豚の呪いを解いたぜ。もうちつと長生きするだろうよ! 尤も、長すぎると結局死んじゃうだろうケドなあ!？」

「…………フィー、大丈夫?」

「……………」

首肯。どうやら呪いを解いたのは本当のようで、顔色も元に戻った。

安心して立ち上がり、人形デッキの代わりにフィーのデッキをデスクに差し込む。さらに手渡されたカードの束と一緒にケース内へ入れて、元の位置に戻っていく。

「手札は5枚にして良いぜ？ 勿論、フィールドもこのまま。良いハンデじゃねエか」

何のデッキかは確認していない。ハンデをくれるというなら大人しく貰っておこう。

自動のシャッフルを終えたデッキから、カードを5枚引く。

「……この、デッキは………」

「んじゃあ、デュエル再開ッ！ 俺のターンだ！」

デュエルは、新たに始まった。

僕は、頭の片隅で、微かに思う。

——僕、他人のデッキ使ってばかりじゃない？

第一章／第十二話 混沌デュエル（後書き）

【ドールサイクル】と【ドールリサイクル】の件ですが、ミスです（汗）

しかし、余り【ドールリサイクル】の方は登場しないと思うので、お許し下さい（笑）

第一章 第十三話 混沌デュエルの終わり

「俺のターンのスタンバイフェイズ、【闇時計】の針が1つ戻る」

12時を差していた針が戻って、11に。

「リバースカードオープン、速攻魔法【セメタリークロック】！
手札を1枚墓地に送り、墓地に存在する時計と名の付いたモンスター
1の数に付き1つ、【闇時計】の針が戻るぜ」

11から10、そして9に。捨てたのは時計と名の付いたモンスター
なのでろう。

一本しかない針は、3時間の時を戻した。けれど、【闇時計】に
変化は無い。

「手札コストに使用して、墓地に存在する【邪悪時計】エヴァイルクロックの効果を発
動する。このカードが墓地に存在するとき、デッキに眠る同名カー
ドを任意の数墓地に落とせる。俺は2枚の【邪悪時計】を墓地へ」

墓地に時計がどんどん溜まっていく。一体、何をしようとしてる
んだろう？

「手札から、2枚目の【セメタリークロック】を発動！ 手札1枚
を捨て、墓地の時計の数は5枚。よって、【闇時計】の時計の針は
9から4へ」

8、7、6、5、4……。

「俺は【壊滅時計】ルインクロックを召喚。このカードが召喚に成功した時、墓地

の存在する時計と名の付いたモンスターを任意の数デッキに戻し、その数分、【闇時計】の針を戻せるぜ！」

完全に【闇時計】主体デッキだ。とすると、あの針が1週すると強力な効果、または強力なモンスターが出てくると思った方が良い。

けれど……僕のフィールドは【ドールコンヴァート】とフアラ、ライアだけ。フィーのこのデッキじゃ手札から邪魔するカードは無い。

「行くぜ！ 俺は墓地に居る【邪悪時計】2枚と【暗黒時計】2枚をデッキに戻し、【闇時計】の針を1週させるッ！」

3、2、1……………12.

【闇時計】が……禍々しく輝く――。

「ハハハッー！！ 行くぜエ……………！ 針が1週した【闇時計】と他のモンスター……………【壊滅時計】をゲームから除外し、デッキより現れる……………ッ！
アビスクロッカー【深淵時計 グルフ】！！」

どん、と。どん、と。どん……………と。

鼓動が小さく感じるくらいに……………否、何も感じられない。

闇よりも暗い深淵は、視覚……………聴覚……………触覚を麻痺させるかのよう
に僕を襲ってきた。

勿論……………それは錯覚。暫くして視界が晴れると――。

「……………え？」

ファラも、ライアも……永続魔法である【ドールコンヴァート】も、フィールドには残っていない。

その上、ライフも殆ど残っていなかった。

晃LP8000↓50.

「な、何が……？」

「テムエは何も聞こえなかっただろうから、教えてやるよ。コイツの攻撃力は5000。んで、墓地に存在する時計と名の付いたモンスターの数攻撃出来んだよ」

コストは除外だったから、墓地に居る時計は……確か、【邪悪時計】が1体だけのはず……。

……そっか、そういうことか！

「分かったようだな？　そ、墓地には【邪悪時計】1体だけだったんだけど、【邪悪時計】は墓地に居る時、同名カードを落とせる効果を持つてる。つうわけで墓地は3体だから、3回攻撃が可能って訳だ。しかも、コイツは戦闘破壊したモンスターをゲームから除外できる」

頭の中で計算する。【ドールコンヴァート】の効果でファラの攻撃力は3800だったからダメージは1200……ライフは8000－1200で6800.

ファラは除外されたとして……ライアの攻撃力は変わらず3250. ダメージは……1750だから、僕の残りライフは680

0—1750∥5050.

最後のダイレクトで、僕は50になった、と……。

「んで、ゴルフのさらなる効果は墓地の時計を除外して、フィール
ドの魔法、または罠を破壊する。念の為って奴だ」

……【ドールコンヴァート】のLV増減効果は、人形モンスター
じゃなくても良い。それを知ってか知らずか……破壊されたらしい。

「くっ……………！」

「さあて、どうする？　ちなみにゴルフが破壊されても、除外され
てる時計どもが揃って出てくるぜ？　俺はカードを1枚伏せてエン
ドだ」

「……………僕の、ターン……………ドロー」

引いたカードを見れない。ディアブルム以上のピンチと恐怖。ま
るで命綱無しで綱渡りをさせられている気分だ。

脳裏に浮かぶ、死という言葉。

手が震えて、言う事を聞かない――。

「大丈夫」

……声だ。

優しく、包み込むような、物静かで単調な、声――――。

「わたしが見てる」

……………フィー……………？

「死ぬ時は、一緒」
「っ……！」

ああ、もう。

桜と言い、ローラと言い……フィーと言い。

どうしてこうも僕を勇気付ける方法を、熟知してるんだろう。僕
って、分かりやすいのかな……？

「大丈夫……うん、大丈夫」

ディアブルムの時だって、勝てたじゃないか。桜やローラが、僕
を信じてくれたんだ。フィーも、疑いの無い眼差しで僕を見続けて
いる。

信じるんだ。

自分を……そして、フィーと、フィーのデッキを。

カードは、応えてくれるさっ！

「行くよ……！」

——それ……わたし、自身………だから。

「僕は【ワン・フォー・ワン】を発動！ 手札の【スクラップ・ソ
ルジャー】をコストにしてデッキから、」

——そんなこと無いよ。

「【レベル・ステイラー】を守備表示で特殊召喚……！」

——君は、僕を元氣付けてくれたんだから。

「そして、【スクラップ・キマイラ】を通常召喚する！！」

——ありがとう、ファイ。

「キマイラの効果によって、墓地に存在するスクラップチューナー……【スクラップ・ソルジャー】を特殊召喚！ LV4【スクラップ・キマイラ】にLV5、【スクラップ・ソルジャー】をチューニング！！」

君のデッキは………君を助ける為に、今、命を吹き込まれる！

「募る鉄屑が双龍となりて復活せん！ その身に宿る2つの魂よ、荒神こうじんの如くその場を荒らせッ！ シンクロ召喚。轟け、【スクラップ・ツイン・ドラゴン】……ッ！！」

それは、捨てられた廃棄物だった。

森羅万象、全ての物に宿るという魂……それは双龍となって、叫びを轟かせる。

「デビル。君は、こう言ったよね？ “ゴルフが破壊されても”って。それなら、バウンス……手札に戻るのなら、どうかな？」

「あんだと……？」

「僕は、スクラップ・ツインの効果を発動する！」

その伏せカードはブラフだろうか？ もしもブラフだったなら、そのせいでゴルフは退場する事になる！

「僕の場の【レベル・ステイラー】、君の場の伏せカードと……
【深淵時計 グルフ】を対象に選択！ 【レベル・ステイラー】
を破壊して、伏せカードとグルフを手札に戻すっ！」

「な、なんだとお！？」

さじんしょうは
「砂塵翔波！！」

スクラップ・ツインの巻き起こす風が、2枚のカードを吹き飛ばす。

「バトルフェイズ……！ 【スクラップ・ツイン・ドラゴン】でダイレクトアタック！！」

「ぐ……アアアッ！！！」

衝撃に耐え切れず、デビルの身体が吹き飛ばされて机に激突する。

デビルLP8000↓5000.

「僕はカードを一枚伏せて、ターンエンドだよ」

「く……俺の、ターン……ドロー！ ……モンスターを一枚伏せて、エンドだ」

「僕のターンだ、ドロー！」

モンスターだけって事は、アレは引いたカード。魔法、罠カードを伏せなかったってことは、ブラフで間違いないらしい。

1枚だけならバウンスできないから、また伏せなかったんだろう。けど……。

「無駄、だね。僕は【スクラップ・エリア】を発動。デッキから【スクラップ・オルトロス】を手札に加えて、特殊召喚！ オルトロスは自分フィールド上にスクラップモンスターが居ると特殊召喚出

来るモンスターだよ」

このターンで……終わる！

「オルトロスが特殊召喚した時、効果発動！　オルトロスを破壊する！！」

「何……！？」

「そして、オルトロスがスクラップと名の付いたカードで破壊された時、墓地のスクラップを回収できる！　僕は【スクラップ・キマイラ】を手札に戻す！」

オルトロスもスクラップモンスター。回収効果を発動可能だ。

「そして、キマイラを召喚！　効果で【スクラップ・オルトロス】を特殊召喚！　オルトロスのスクラップ破壊効果は自身の効果で特殊召喚した時だけだから、効果は発動しない！　LV4、キマイラにLV4、オルトロスをチューニング！」

スクラップデッキの主役……来い！

「眠れる魂が動き出す！　犠牲を糧にただ、破壊を願う……！　鉄屑の演舞を眺め、傍観するが良い！　シンクロ召喚……躍動せよ、【スクラップ・ドラゴン】！！」

スクラップ・ツインよりも一回り小さい、けれど強大な存在の龍が舞い降りる。

鉄屑で造られた龍は、ツインと同じく場を荒らす！

「ツインのレベルを食べて、再び墓地より【レベル・ステイラー】を特殊召喚！　そして【スクラップ・ドラゴン】の効果を発動！

僕の場のステイラーと、君の場のモンスターを対象！ その2枚を破壊するッ！」

「そんな……俺が……!？」

モンスターは2枚目の【壊滅時計】。手札に【バトル・フェーダー】系統は無い。
……終わりだね。

「バトルフェイズ——終わりだ！ 全員で攻撃っ！」

【スクラップ・ドラゴン】、【スクラップ・ツイン・ドラゴン】が、デビルを襲う。

デビルLP5000↓2200↓0.

「クソがアアアアああああアアアあっああっッ!!！」

漆黒の、闇。

その闇がデビルを一呑みにして……首輪の鍵がちりん、と床に落ちた。

第一章／第十三話 混沌デュエルの終わり（後書き）

展開
w
w
w

いやしかし、こんな無理矢理感が私だと思ってf ^
| ^ ;

第一章↳第十四話 晃のデッキ構築指南Part 1 (前書き)

晃って、作者よりも数段頭良いなあ、なんて思わせる一話です。

どうぞ！

第一章 第十四話 晃のデッキ構築指南Part 1

「はぁ……はぁ………」

デュエル終了……デビルが居た、闇の収まった場所を眺め僕は一息吐く。

今のデュエル……僕とフィーの命と同時に、デビル……彼自身の命も賭けていたのだろうか。アニメで見た闇のデュエルと同じだ。

やっぱりー。

いや、今はそんなことよりも、だ。

僕は床に落ちた鍵を拾うと、フィーの方を向く。

「……フィー!？」

倒れ、てる。

近寄る。冷や汗で身が冷たいが、拭う暇も無い。

抱き上げて、慌てて鍵を首輪にある鍵穴に差し込んで回すと、小さな音を立てて首輪が床に落ちる。

「フィー! フィーッ!!」

そして……うっすらと、眼が開いた。

「……………ぶい」

ゆっくりと指でVサインを作ったフィーに、僕は安堵の吐息を零した。



少しの休憩……後、^{のち}宿屋へ戻った僕とフィー。
フィーは眠る様子も無く、じーっと様子を眺めている。一方僕は
というと、

「ちゃあーんと、説明してくれるよね……お兄ちゃん？」
「なんでこんな夜中に……フィー様とどこに居たのですか？」

……正座していた。

「えっと……話すと長くなるんだけど………」
「いくら掛かっても構いませんよ？」

……なんで2人とも、笑顔なんですか。恐いです。

「……………実は、」
「「フィーちゃん（様）は黙ってて（ください）」」
「……………」

フィーでさえ一蹴。ある意味、ディアブルムやデビルよりもピン
チな気がするの、僕の気のせいだろうか……？

「……うん、えっと……………フィーの首輪を外しに行ってみました」
「フィーちゃんのか？」

「そう。昼間見た、あの男の人が居る屋敷に行つて……」

「……だから、首輪が外れてたんですね」

納得、と言った風にローラが頷く。ふう、なんとか無事に開放され――。

「じゃあ、どうしてフィーちゃん、裸なの？」

……開放、されないみたい。

ちなみに裸じゃなく、僕のローブを羽織っているんだけど……そんな訂正を言ったらさらに冷たい眼で見られるだけだろう。

「それは、ほら……えと、」

奴隷制度なんて殆ど知らない僕は、つい言葉を濁してしまう。そんな様子に2人は変な方向へ考えが巡ったのか、顔を赤くしてさらに迫ってくる。

どうやらこの2人も奴隷制度は詳しく知らないみたい……ただ単に興奮して気付いて無いだけかもしれないケド。

「……サーヴァイルでは、」

フィーの口上に、2人の動きが止まる。今度は遮る事はしないみたいだ。

「……奴隷の持ち主が居る屋敷では、基本的に裸……」

「え、そうなんですか？」

コク。

首肯して、2人の怒りが収まる。

ふう、今度こそ……………。

「けど……わたしが晁にキスしたのは確か」

「へえ〜え？」

「晁様……やっぱり」

フィーが敵に！？ とうか、やっぱりって何っ！

——その後……誤解（まあ、キスは事実だけどさ）を解く事が出来たのは日が昇ってからだった。

トホホ。



サーヴァイルは貿易国……勿論、それは情報を集める僕としてはピッタシの国だ。

3人は今頃、宿屋内で寛いでいるだろう。少しだけ豪華な宿に移り変わったから、退屈もしないはず。

ここは奴隷国……女性だけで歩くには危険だ。

しかも、僕が異世界の人間だって知ってるのは桜だけだし、その桜も僕がなんでユグルに連れて来られたかは知らないみたいだから情報収集は僕だけの仕事だ。

「えと……………何を調べれば良いんだろう」

場所はサーヴァイルにある図書館。

首を傾げながら、僕は本棚に並ぶ書物を眺めていた。

「……………」

僕が、ディアブルムに攻撃を受けた時。彼は、世界が滅ぶ前の力、
と言っていた。そして、ここは遊戯王が主の世界……殆どの人が遊
戯王をしてるし、ディスクも所持している。

と、考えると……“世界の滅ぶ前”も遊戯王をしてる、と考えた
方が良いのだろうか。

別のカードゲームを、という可能性は結構低いだろう。やっぱり
一番は、同じカードゲームか。

（世界が滅ぶ前……か。一体どれくらい昔の事なんだろう。歴史の
本は……………こっちか）

歴史の本が並ぶ棚を、ずらっと見通す。余り目の引く題名は少な
く、殆どが神話や伝説についてだ。

その中で、一冊。『世界の滅亡と現代』と書かれた分厚い本が。

「ん……………あたっ！」

背伸びして取ろうとしたら、指に引っ掛かって落下……………額に。
本の角って痛いんだぞっ！ しかも分厚いし！！

少しの間悶絶して、そろそろ周りの視線も痛くなってきた頃……
まだ痛む額を押さえながら本を持って机に。

……小さい字。

制服の胸ポケットから眼鏡を取り出し掛けて、ページを開く。

「……………小難しいっすわ」

つい口調が変になってしまった。

それはともかく、流石に難しすぎる。考古学者とかならともかく、元々一高校生だった僕には内容が分かりかねる。

……真名辺りなら、理解できたんだろうけどなあ……。

「……ま、分かったこともあったし良いか」

分かった事と言えば、世界が滅んだのは今から約三千年前。やっぱりその時も遊戯王が発達し、世界を危機にしたり救ったりするのも遊戯王だったらしい。

そこら辺は、今と変わりはしない。

ただ、昔はもっと世界は広い上に奴隷制度も無い、若しくは少なかったらしい。

「……………まだこれくらいじゃ、全然分かんないや」

ズレかけた眼鏡を外して胸ポケットに仕舞って、本を持って立ち上がる。

本棚に入れ直す時、また額に落ちてきたのは誰も見ていなかった、と思いたい。



——場所はそれなりに大きな宿屋。

絶対出ないでね、という言葉が素直に聞いている桜、ローラ、フィジーの3人は机の上に各々のカードを並べ、デッキ構築をアドバイスしあっていた。

尤も……桜は元々文無し、ローラは生け贄として育っていた為金は無く（ゲイラはド忘れである）、フィジーも奴隷だった為手持ちは無い。

「あれ、けどこのカード結構腐りそうじゃない？」

「そうですね……やはりこのカードは3枚にしたいです」

「……むう」

イコール……アドバイスは出来ても、カードの入れ替えは出来ない。

暫くして、デッキを仕舞った3人はローテーションでデッキを回している。

「ただいまー」

晃が帰ってくる。おかえり、という三者三様の声を聞き届けた晃は椅子に座り、大きく伸びをした。

「ねえ、何しに言ってたの？」

「ん……内緒だよ」

「そればかり」

「ごめんごめん。いつかちゃんと教えるから」

今はローラとフィジーのデュエル中で（ディスクは使用していない）、既に再開されている。

「そういえばお兄ちゃん、フィーちゃんのデッキ使ったらしいね」

「うん。まあ成り行きでね」

「けど……スクラップって使ったこと無かったよね。殆どテキスト見ずにプレイしたらしいけど、どうして？」

そう桜が首を傾げる。使い慣れていないカードは間違いの無いように、基本的にはテキストを確認してからプレイするのが基本である。

しかし勿論、

「洸司郎と色んな大会出てたし……いっぱい戦ったからね。ある程度は分かるよ」

晃のような例外も多いが。しかし実際は、晃の持つデッキは人形のみで、遊戯王のルールを知った小学生以降からずっと使っている。唯一持つ2番目のデッキは、家の自室に眠っている。文字通り、宝物箱に鍵を掛けた状態でだ。

「じゃあ、わたしのデッキも？」

「勿論、まあ、流石に知らないカードも多かったけどさ」

例えば、【氷結された楽園】と言ったカードだ。この辺りはOCGされていないのか否か、晃の知識に無い。

……と、そこで疑問が浮かぶ。

（あれ……？　　そういえば、なんで他のカードは地球でもOCG化

されてるんだ？　ここはエンジェルが言っていた通り、“異世界”のはずだし」

内心、首を傾げる。

「……スクドラの効果……」

「【デモンズ・チェーン】を発動します！」

むう、とフィジーが唸っているのが聞こえる。

「【デブリ・ドラゴン】を召喚します！」

「罨……【デモンズ・チェーン】……………」

うう、とローラが唸っているのが聞こえる。

そんな様子に、晃と桜は苦笑いを隠せない。お互いのフィールドに【デモンズ・チェーン】があるのも嫌な光景である。

少しして、最終的に【ハリケーン】から始まり【スクラップ・ツイン・ドラゴン】と【デモンズ・チェーン】の2枚を突破出来ずにローラが敗北した。

「うう……悔しいです」

「……屑鉄強し」

氷に鉄……切り札はどちらも龍。そういえば桜も切り札は竜だったな、なんて晃は思った。

「そうだ、皆にお土産あったんだ」

バッグから3つの箱を取り出し、桜、ローラ、フィジーそれぞれに手渡す。

中を開けると、結構な枚数の入ったカードだった。

「途中にカードショップが数件あったからさ。竜魔人に氷結界にスクラップ……それぞれ使えるかなあ、ってカードを探して買って来たんだ」

「わあ、ありがとう！」

「ありがとうございます！」

「……ありがとう」

後はコレ、と言って晃はケーキを取り出す。ショートケーキが4つ。

「流石晃様……何と言うか、周りの事をいつも考えてますね」

「まあ、昔から手の掛かる妹がいたから」

「どういう意味かな、お兄ちゃん!？」

「どうどう、と宥める晃。」

カードの事は取り敢えず置いて、ケーキを食べ始めてから晃は桜を見ながら言う。

「桜のデッキさ、確か高レベルのドラゴンが12体居たよね？ それで低レベルが【仮面竜】3体とラグナロク、融合呪印生物だけ。低レベルはともかく、高レベルはもうちょっと減らすか、【トレード・イン】入れた方が良いと思うよ？」

「うん、だよね……流石に多いと思ってんだ」

「後、奈落や聖バリ、激流とかも怖いからトラスタかスタンピング。さっきのカードには【F・G・D】もあるから未来融合入れて見ると良いよ」

取り敢えずすらすらとそう言って、今度はローラに。

「ローラのデッキには、【リミット・リバーズ】が必要だと思うんだ。確かに【浮上】が強いけど、リミリバの利点は相手ターンに発動して、攻撃を阻害出来る事。ドゥローレンで再利用も出来るし」

「あ、そうですね……」

「それと、ちょっと安定性は下がるけど【シンクロ・キャンセル】を差し込んで見ても面白いかも。抜くカードは直接氷結界にシナジの無いガンターラやグルナードかな。大僧正だいそうじょうとのシナジを汲んで激流葬は入れたいかも」

そして最後……フィジーに。

「フィーのデッキは、まず【スクラップ・キマイラ】は3枚必須だと思う。逸早く墓地とキマイラを揃える為にも、スコールを2から3、かな。後オルトロスは序盤に来ても腐るしエリアで持ってこれることを考えると、1枚が安定するかも。後、サーチャーやソルジャー落としたいからシャークとか」

「……………ん」

「罨はやっぱり荒野だったりフリーチェーンの【サンダー・ブレイク】辺り、後はキマイラが奈落とかされたら痛いしフリーチェーンということで【強制脱出装置】かな。ライコウ、カーガン辺りは抜いても良いと思うよ？」

3人ずらつと言い終えた晃は、ケーキの最後の一口を飲み込んだ。手に付いてしまったクリームを舐め取ると、3人が晃の方をじーつと見ているのに気付いた。

「な、何？」

「いや……お兄ちゃん、もしかして皆のデッキ内容覚えてるのかな
ーって」

「まさか、そんな訳無いよ」

あはは、と手を振る。

そうだよね、と3人の視線が外れて、晃は机に置かれていたお茶
を一口飲んだ。

「メインデッキは把握出来てるけど、エクストラまでは流石に憶え
てないよ」

「「「……………」」」

“天然”でそう言った晃は、またぼーっとした3人を見て、ん？
と首を傾げていた。

第一章／第十五話 ウェーリアと孤独な女性

流れる景色に身を委ね、私は貴方を想い焦がれる――。

そんな、昔聞いた事がある歌詞が頭に浮かんだ僕は、歌詞通りに流れる窓の外を見ながら考えに耽った。

見たことも無い景色。時折ある小さな村や街なんて素通りし、僕たちは電車（なのかな？）に乗ってウェーリアに向かっていた。

(…もう少しだね)

結構長い間電車に揺られていた僕たち。正面に座るローラや隣に座る桜、斜めのフィーはぐっすりと眠っている。

ウェーリア……そこにはユグルでも最大の闘技場……もとい、決コト

フィーはサーヴァイルで。フィーの妹、リイナちゃんはウエーリアで買われた。リイナちゃんを探して、僕たちはウエーリアへ向かっていった。

（ウェーリア、か………一体、どんな所なんだろう？）



空は快晴、太陽は熱く燃え滾り、流れる空気も少し熱く感じた。場所はウェーリア。

色んな国から強者がコロッセウムに来るという、かなり大きな国だ。

「それでは、まずどうしましょうか？」

「……リイナを探す」

「うん、わたしもそれで良いと思うよ」

僕を取り残して、3人が話し合う。

周りを見渡すと、サーヴァイルよりも人口が多い。特にデュエルディスクを腕に備え付けている人が多い。

屈強そうな人は少なく無いけれど、どちらかというと僕みたいに小柄な感じの方が多い気がする。

「お兄ちゃんもそれで良い？」

「え？ えと……ちよつと待って」

正直なところ、リイナちゃんの情報は無いに等しい。この街にいる、というのとフィーの記憶する容姿とかだけだ。

「……少し、別行動取らない？」

「別行動？」

「そ。僕は宿屋の予約とか取ってくるから、3人はリイナちゃんの情報を集めて欲しいんだ」

宿屋を探すなんて、1人で十分だ。だと言って、女の子1人で行動させるのは忍びない。フィーはすぐにでもリイナちゃんを探したいだろうし。

「だから……そうだね」

近くの柱に備え付けられていた時計を眺めて、

「2時間後にまたこの場所で待ち合わせよう？　僕も予約を済ませたらすぐに人聞きを始めるからさ」

「そうですね、分かりました」

真っ先にローラが頷いて、桜とフィーも納得してくれる。

3人がこの場から離れるのを見送った僕も、宿屋を探して歩を進めたのだった。



「さて、と」

予約を終えた僕は、まずどうしようかと息を吐いた。

人聞き……情報を集めるのに一番適しているのはやっぱり酒場だろうか。

けど、酒場なら多分桜たちが向かっているだろうし……………。

「僕は人通りの少ないところでも行ってみようかな」

独り言を呟いて、僕は裏路地に入った。

太陽の光が建物に遮られ、そこは薄暗い。たまにゴミの詰まった袋が積まれ、結構臭い。

使えなくなったデュエルディスクや、世間一般的に弱いと言われているカードも数枚落ちていた。

「……これは、【ゴキボール】？」

凄い。久し振りに見た気がする。

アニメやゲームでも実はそれなりに登場する通常モンスターで、実はリクルーターにも耐えられる守備力を持っている。

それ以外にも色々落ちているカード群を拾い集めながら、僕は結構広い路地裏に辿り着く。

「……来過ぎたかな」

もうすぐ3桁にも到着しそうなカードをバッグに仕舞いながら呟く。

辺りに人は居ない。居るとすれば野良犬や野良猫、人の姿なんて全く居ない。

——と、溜め息を零そうと息を吸った時だった。

「ぐあああああ！！」

「ッ!？」

悲鳴。男の悲鳴だ。

声がした方へ向かう。死角になるだろう場所で息を潜めて、少しずつ盗み見を始める。

（あれは………）

居たのは、背の高い女性と膝を付いた男性。デュエルをしていて、男の方が負けてしまったのだろうか。

「くそ……俺が、俺が負けちゃうなんて……ッ！」

「もう良いだろう。私の勝ちだ」

「く……ほらよ、俺が持つてる最高のレアカードだよっ！」

そう言っ、男性が女性にカードを投げ渡す。

まるで手裏剣のように向かっていったカードを2本の指で挟むように受け取った女性はそのカードを一瞥すると、ふん、と鼻を鳴らして投げ返す。

男性の前にとん、と落ちたカードを呆然と眺めていた男性に、女性と言う。

「先程言っただろう。私はアンティなどしてはいないと。要らぬから、とっとと去れ」

「……ちいっ」

壮大に舌打ちをした男性は、カードを拾って一目散に逃げていく。途中、僕の前を走って行ったけれど気付いてはいないらしい。

ふう、と一息。

「……で、そこに居るのは誰だ？ 隠れてないで出てきたらどうだ」
「げ……」

バレてたんだ。

僕は渋々と言った感じで、女性の前に顔を出す。

「旅人か……」

僕のローブを見ながら、女性は呟く。

女性の髪は紫色だった。長い髪を頭で結んで、ポニーテールにし

てる。釣り目のキツイ性格を思わせる瞳の色は灰色で、少しだけ荒んでいる様に見えたのは僕の気のせいだろうか。

どちらにせよ……僕よりも背が高いのは本当に恨めしい……訂正、羨ましい！

「貴様も、私を一連の事件の犯人だと？」

「えと………？」

一連の事件？

僕が首を傾げると、女性は違うのか、と逆に不思議そうに僕を凝視した。

「ならば、何故ここに？」

「僕はちよつと聞きたいことがあってね」

「聞きたいこと？」

うん、と首肯する。

「リイナちゃん……リイナⅡオールド・ランナっていう女の子、知らない？」

「リイナ……知らないな」

「そか……ありがとう」

「いや……役に立てなくてすまない」

……そんな申し訳無さそうにしくても良いのに。優しいんだなあ、この人。

「ねえ……」

「ん、なんだ？」

「……一連の事件って、何なの？」

「……………」

一度、女性は眼を伏せた。
そして目を開けた女性は、少しの自嘲を含めた笑みをした。

「いずれ、すぐにでも知ることになる。私に聞かなくても良いだろう？」

「……だったら僕は、君から知りたいな」

本当は、聞かなくても良い事なのかもしれない。
洗司郎なら……どうしたかな。

けれど僕は、結構お節介焼きだからね。うん。

女性はふう、と嘆息して、僕に背を向けた

「……仕方ないな。ここでは何だ、移動しよう」



そこは、古く小さな家だった。

いや、家というには少し……質素、と言えば良いんだろうか？

場所によっては馬小屋よりも小さく、ウェーリアにある他の家とは違って全て木で出来ている。

ドアを開く時にはキィ……という不気味な音が響き、鍵なんて勿論存在しない。電気も無く、数本の蠟燭が並べられていた。

キッチンだと思われる場所に水道やガスなんて無く、料理した形跡も感じられない。

なんと言うか、一言。

“寂しい”……そんな、小さな彼女の家。

「汚く狭い場所だが、我慢して欲しい」

「そんな……ここが君の？」

「ああ……思ったよりも恥ずかしいものだな、異性を中に入れると
いうのは」

そう言った彼女の顔は、少し赤い。ペットボトルに入れられた水を木のコップに入れて、差し出される。

……自作、だろうか。このコップ。所々が雑だ。

「そういえば、紹介がまだだったな。私はリズ……リズⅡフォルン・サレイルと言う」

「僕は諏訪晃。宜しくね、フォルン・サレイルさん」

「ふふ……リズで良い。言い難いだろう」

「じゃあ僕も、晃で良いよ」

簡単な紹介を終え、暫しの沈黙がその場を占める。僕はコップに入れられた水を飲んで、喉を潤した。

「少し前からか……」

僕が木彫りの机にコップを置くと同時に、リズが話し始める。

「この辺りに、アンティ勝負を仕掛ける奴が現れた」

アンティ……確か、賭けデュエルの事だったはず。自分の持つレアカードやデッキを賭けてデュエルをして、勝ったら相手のカードを貰う……否、奪うデュエル。

「ウェーリアだけではなく、中央国家エデラウンや貿易国、サーヴァイルでもアンティデュエルは犯罪行為だ。政府やギルドは、犯人を追っている」

ギルド……僕よりもユグルに詳しい桜やローラの話によると、ユグルにはエデラウンを拠点とした“デュエリストハンターズギルド”というのがあるらしい。

日本で言う警察。依頼されれば犯罪以外はなんでもする慈善機関らしい。詳しい事は、僕には分からない。

「被害は結構多くて、年齢層も幅広い。無差別に狙っているから、恐らく手当たり次第なのだろうな」

そう言うってから、リズはふっ、と自嘲する。

「そこで、私は犯人として追われているという訳だ」
「えっ」

お、追われてるっ？

「身寄りも無く、こんな寂れた場所で住む不気味な女……怪しまれるのも頷ける」

「……けど、違うんでしょ？」

「勿論。そんな事をせずとも、私は強くなって見せるさ」

その瞳は、決意に満ち溢れている。

その決意に秘めた、内なる想いはかなり大きそうだ。僕には計り知れない程の、大きな“何か”。

僕は一瞬、言葉を失ってしまった。

「……リズは、これからどうするの？」

「変わらない。追って来た輩は返り討ちにするのみ。そして……近々始まるトーナメントに優勝する」

「トーナメント？」

そう、とリズは頷く。

「前のシングルデュエルトーナメントの景品は要らなかったが、今回は違う。今度のタグデュエルトーナメントの優勝商品は、あるペンダントが出される」

「ペンダント……」

「……尤も、私にはパートナーなど居ないのだがな」

タグデュエル、か。

「そうだ！ 晃、お前私のパートナーとして出場してくれないかっ？」

「えっ!？」

「この際強さなどどうでも良い！ 私とここまで普通に会話してくれたのもお前が初めて……どうだ？」

……近い、近いって。

眼前まで近寄られている僕は一步下がりがりながら、申し訳なさそうに笑う。

「ごめん、止めとくよ。足手纏いになったら嫌だし……」
「……そうか。無理強いはしないが」

……少しの罪悪感。

けれど、僕にはやる事がある。リズには悪いけど、断らせて貰う事にするよ。

僕は水をぐっと一気に飲み干すと、立ち上がって大きく伸びをした。

……………つとと、立ち眩み。

「そろそろ行くよ」

「……そうか。こんな場所ですまなかったな」

「こっちこそ、タッグ組めなくてごめんね」

出迎えてくれるリズに手を振って、僕はリィナちゃんのことについて聞き込みを再開した。

途中——どこまでも黒い男と擦れ違いながらも、僕は気付く事は無かった。

第一章／第十五話 ウェーリアと孤独な女性（後書き）

リズの性格が難しいっ……！

桜やローラもそうなんだけど、やはりベースのキャラは決めた方が良かったかな？

第一章 第十六話 二度目の混沌デュエルへ

桜、ローラ、フィーは既に戻ってきていて、僕は一番最後だったらしい。

僕が最後に戻ると、視線が集まる。その顔は少し思案顔で、晴れた表情ではなかった。

「どうだったの？」

「それらしい子は居た、という情報はありました」

あ、そうなんだ。だったらどうして暗い顔をしてるんだろう？

「……ただ、近頃は見ていないらしい……」

「最後に見たのは、ほら……あの決闘場コロッセウムでやったシングルデュエル
トーナメントでだって」

桜が指差したのは、まるで野球場のような建物だった。

「そっか……」

もう違う国とかに移動した可能性もある。ただその場合、奴隷として買った男（または女）と共に、という可能性が高い。

……いや。

上手く逃げ出した、という可能性も高くは無いかれどある。希望は捨てちゃいけないよね。

「でね、お兄ちゃん」

「え？」

僕がこれからどうしようか、と思案していたところで桜の声が思考を遮断させる。

「わたしたち、今度やるタッグデュエルトーナメントってやつに出てみようかな、って思うんだ」

「え、どうして？」

「もしかしたら、何か分かるかもしれませんし……まだこの国に居ないと決まった訳では有りませんから」

桜の言葉を繋げるように、ローラが言う。

確かに……形式は違えど、トーナメントが開催されたのはあの決闘場だろう。シングルでも出た人が居て、リイナちゃんのことを知っているかもしれない。

「うん、良いかもね」

「それで……」

フィーが、上目遣いで僕を見る。

「……アッキーはわたしと出る」

「……アッキーって僕のこと？」

頷かれる。初めて呼ばれたよ、アッキーなんて。

それはともかく、タッグデュエルトーナメントに出るには勿論2人必要だ。僕たちの人数は4人。丁度分けられる人数だ。

……とは言え。

「違うよっ！ お兄ちゃんは、わたしと出るの！」

「わ、私も見様と出てみたいです！」

……………ですよね。

僕を挟んで喧嘩（というか取り合い）を初めて、僕は小さく溜め息。

——あ、そうだ。

「ねえ、だったら、もう1人誘えないかな？」

「……もう1人？」

「1人、パートナーが見つからない人が居るんだ。僕は出なくても良いから、その人含めた4人で参加しなよ。ね？」

「……………その人、女性？」

じとーっ、と桜が半目で睨んでくる。その横にはローラとフィーも妙に据わった瞳で見つめてくるから、ソリッドビジョンで出てくる【寄生虫パラサイト】よりも恐く感じる。

……………うん、結構良い例えだったかもしれない。冷や汗が気持ち悪いなあ。

「……………うん、女性、だよ？」

「お兄ちゃんの浮気者ーっ！」

「ええっ!？」

ちよ、大声上げないでっ！
！！
蔑んだような視線が僕に集まるから

「晃様……………そんな」

「……………わたしというものがありません」

「ちよっと待って！　これ端から見ると僕が3股したみたいだから！　いや、ある意味で間違っただけじゃないけどさっ！」

こんなんヤダ。誰か助けて。こ、洸司郎おーおーッ!!

届かぬ声は心中のみで轟いて、僕は静かに泣いた。

……………ぐすん。

◇
◇
◇

彼女は、独りだった。

そう、まるで……………昔の洸司郎みたいに、孤独な殻に籠もっている。誰も寄せ付けずに、ただ独りで戦い続けている。

僕は、そんな人を3人見てきた。

洸司郎と、桜と……………真名と。

だから、分かる。孤独な殻に籠もって、独り寂しく戦う人は……………呼んでるんだ。叫んでるんだ。

——“独り”は、嫌だと。

「えと、リズー? 居るー?」

「へえ……………もう呼び捨てにするくらい仲が良いんだね、お兄ちゃん?」

「……………あの、その話は終わった、よね?」

「終わってないよっ!」

「天然でも許せません」

「……………制裁」

『恐らく終わっていないかと』

ふ、ファラまで……。というか、制裁って……！

……良し、無視しよう、うん。

ところで少し前に聞いたんだけど、ファラやライアなど、僕のデツキに眠る精霊は桜たちの眼には写らないらしい。

まだ精霊を見れないローラたちはともかく、桜も見えない理由は分からない。いずれ話しますの一点張りである。

と、それはともかく……結局桜たちを宥めて結構時間が経っているというのに、リズからの返事は無い。

「リズー？」

おかしいな……。もしかして、出掛けちゃったのかな？
仕方ない、出直すか……。と、僕が踵を返した時だった。

——コツン。

足に、何かを蹴るような感触。

下を見ると、1つのデツキが入りそうなケース。拾って、首を傾げた。

「それ、誰の？」

「さあ……」

——政府やギルドは、犯人を追っている。

——私は犯人として追われているという訳だ。

ぞくり、と。嫌な予感が電光のように脳裏を突き抜ける。

「探そう」

「晃様……？」

「手分けして、ポニーテールの女性を探して！ 髪の色は紫、瞳は灰色！ ここを中心として桜は北、ローラは西、フィーは東！ 僕は南に行くからっ！」

「ちょ、お兄ちゃんっ！？」

駆ける。（恐らく）リズのデッキケースを手に、ローブを翻しながら走る。

過ぎ行く人や視線を振り拭って、僕は髪の毛を主に見ながら探した。

と、そこで路地裏への道が僕の足を止めた。

（そういえば、僕とリズが出会った時も、人通りの無い場所だった……もしあの人も政府やギルドの人間だったなら、裏に行く場合もある）

冷静に。闇雲に探しても見つかる可能性は少ない。

裏に行く、ということは人目に付きたくないと言う事。理由は……多分、政府やギルドもまだリズが犯人だと特定していないから。万が一リズが無実だとバレたら、信用が無くなるから。

けれど……どうして、家から連れて行った？

リズの大事なデッキを落として行くほど乱暴にしたとすれば、主

だった理由は2つ。1つは証拠が見つかったから。けれど、それはリズが犯人じゃないって言ってる……僕はそれを信じる。

後1つは……。

（何らかの理由で、政府やギルドとは無関係の……そう、例えば犯人とかが連れ去った、とか）

もし後者だとしても、また疑問が頭に浮かぶ。
リズを連れ去る理由だ。

政府やギルドはリズを犯人だと推定していた。犯人からすれば、泳がせていた方が自分は楽のはずだ。

（……考えても仕方ない………よね）

僕は路地裏へと、また駆けた。

◇
◇
◇

目隠し、だろうか？

私の目の前は真っ暗で、何も見えない……手も足も縛られ、椅子に固定されていた。

音は……しない。1人……なのだろうか。

こんな暗闇で、思い出す……あの日の事。

私がまだ子供の頃……それこそ、デュエルモンスターズも覚えたばかりで、両親はアカデミアに入学申請をしてくれたばかりだった頃だ。

同じ年頃の友達とデュエルモンスターズを中心に遊んで帰って来た私に待っていたのは、信じたくない“事実”だった。

『おかあ、さん……………?』

お母さんが、死んでいた。目の前には父が狂気の箒もった瞳でお母さんを見下ろしている。

『は、はは……! これが、これが歴史に残っている“闇のデュエル”というものかつ!』

ディスクには、父のエースモンスターが見えたけど、ソリッドビジョンはもう見えない。幼い私の眼に写ったのは、亡くなった母と狂気の父、そして電気の点いていない暗闇。

『おお、リズ……お帰り』

『な、なん……で』

『私は見つけたのだよ! 歴史の……一端を……ッ!』

信じられなかった。父の嬉しそうな笑みも……不思議に光る紅き瞳も。

『もっと試したいが……リズ。君はまだ幼く、弱いね………もつと強くなってから、私と』

———殺し合おう。

静かに告げた台詞と共に、次の瞬間、私は気を失っていた。

そんな、夢のような現実……私は暗闇に来る度、眠りにつく度……
：瞼にこびり付いて離れない。

そして……唯一の手掛かりなんだ。タッグデュエルトーナメント
の優勝商品であるペンダントはもしかすると、母が父に送ったプレ
ゼントだった可能性がある。

事件が起こった日も、父はペンダントをしていた……いつか、父
に復讐すると誓って、私は今を生きている。

「おや、お目覚めかい？」

「っ……！」

幸い、口は塞がれていない。耳朵を叩いたのは、少し高めだけど
男性の声だった。

「ボクの名前は……そうだね、彼と同じように名乗ると、“デビル
”だ」

「でび、る……？」

「そう。何を隠そう……いや、隠しては無かったのだけど、例のア
ンティ事件はボクが行った事だよ」

「な……っ！」

男……デビルと名乗ったコイツは、飄々と言つてのけた。

「最後にはお札を兼ねて君と戦^やろうとしたのだけれどね……まさか、
デッキを落とすとは思わなかった。いやはや、ボクの誤算だね」

「……何が目的だ」

「おや、勝気だね。嫌いじゃないね、そういう人間は。ボクの最終目的は1つだけだよ」

だんだん、と足音が聞こえた。私は勿論の事、隣に居るだろうデビルのものでも無い。

また、別の足音――。

「諏訪晃君………君を殺す事だけだよ」

「リズッ！」

この声は……晃！？

「君は……デビル？」

「実際は違うのだけど、晃君にはその方が分かり易いだろう？」

しゅる、と……目隠しが外される。

少し離れた場所には、さっきまで一緒に居た晃が汗を垂らしながら立っていて、同時に私の隣には黒い服に肌、果ては腕にディスクまで黒い男が立っていた。

「さあ、ボクの目的は知っているだろう？ 勿論、戦わなかったり君が負けたりしたならば、晃君だけではなく……この子も死ぬ事になる」

「っ………！ また………ッ！！」

「君は他人の為に戦った方が力が出る、という情報が来ているからね。人質を取らせて貰うよ」

そう言って、男はディスクを展開する。晃もディスクを構えて、ベルトに取り付けられたケースに手を伸ばし――。

「つと、そういえば、前の時はフィジーという人間のデッキを使っただけ？ 君の事だから、持って来ているんだろう？ この子のデッキを」

晃は何も言わず、男を睨みながらローブのポケットからケースを取り出す。

私の、デッキが入った物だ。

「見せてくれ。君の、選ばれし者として選別された君の才能を、力を！ 他人のデッキを使って、どこまで戦えるだろうね、晃君？」
「全く……なんで僕は、他人のデッキを使う事に関してこうも縁があるんだろうね」

私のデッキケースからデッキを取り出して、内容を見ずに眼を閉じる。

「リズ。君の魂、^{デッキ}少し借りるね」

不利な戦いだ、止める！

そう言いたいのに、声が出ない。喉が潰れたように振動しなかった。

隣で、デビルと名乗った男が笑ったのを見て、コイツのせいだと悟る。

これじゃ……応援も、出来ない。

私は………力不足だ………！

「さあ、始めようか。混沌デュエルを」

空が、暗くなる―――。

「デュエルッ!!」

第一章〜第十六話 二度目の混沌デュエルへ（後書き）

私のクオリティ発動！

“強制展開”！！（笑）

どんな展開になっても、生暖かい眼差しで見守ってください。

第一章 第十七話 劣勢のデュエル

晃LP8000.

デビルLP8000.

「ボクの先攻かな、ドローフェイズ……ドロー」

手札を確認し、どんなデッキかを把握する。内容は見て無いから、勿論デッキの内容なんて分からない。

手札を見て、成る程、と目を細める。

後は、このカードたちが“何枚ずつ”入っているかを把握したいところだ。

「ボクは【終末の騎士】を召喚。効果により、デッキから【ネクロ・ガードナー】を墓地に送り、ターンエンド」

相手はまず守りに……この光景は、幾度と無く見てきた。
さて、どうするか。

「僕のターン、ドロー！」

——よし、まずは。

「僕は魔法カード、【封印の黄金櫃^{おうごんひつ}】を発動！ デッキより、【未来融合ーフューチャー・フュージョン】を除外！ モンスターをセツトして、ターン終了！」

黄金櫃の際、デッキをある程度確認。内容は把握出来た。

後は、相手のデッキ……ただのダークデッキか、それとも前のデ

ビルみたいになにか僕の知らないカードが入ってるのか。

「じゃあ、ボクのターンドロー。ふむう……では、【ダーク・グレファア】を召喚して、効果を発動。手札の【ダーク・クルセイダー】をコストに、デッキより【ゾンビ・キャリア】を墓地へ」

これで、相手の墓地に存在する闇はネクガ、クルセイダー、ゾンビの3体。3体といえば、思い付くモンスターは一体だ。

デビルの手札は4枚……その手札には触れず、では、と呟いた。

「このままバトルフェイズへ。そうだね……【ダーク・グレファア】で裏守備にアタックをしよう」

「モンスターは【仮面竜】！ 効果により、僕は【ドル・ドラ】を特殊召喚する！」

攻撃力は1500。【終末の騎士】は1400だから、倒される事は無い。

デビルはふう、と肩を竦ませてバトルフェイズを終了した。

「【終末の騎士】を守備表示に変更して、カードを2枚セット。ターンエンドだよ」

デビルの手札は2枚……伏せが2枚だから、まだ攻めるべきじゃない、かな。

「僕のターン、ドロー！」

手札は5枚。

「バトル！ 【ドル・ドラ】で【終末の騎士】を攻撃！」

一匹の竜が、黒き騎士を破壊する。

「僕はこのままターンエンド」

「やれやれ、聞いた通り謙虚だね、晃君？　ボクのターン、ドロ」

謙虚、と言われてもね。確かに序盤は沱司郎みたいに派手さは無かったけどさ。

「さて、伏せカードも無いしやろうか。まずは【ダーク・グレファ―】の効果を発動し、【ダーク・ネフティス】をコストにして【墮天使ゼラート】を墓地へ」

【墮天使ゼラート】……最上級の闇属性モンスターだ。やっぱり、普通のダークデッキと考えた方が良いのかもしれない。

と、そう考えた時だった。

伏せカードが、開く。

「リバースカードオープン、【リビングデッドの呼び声】！　墓地に存在する【終末の騎士】を特殊召喚して、デッキから【ダーク・ボルテニス】を墓地に。そして、2体を生け贄とする！」

デビルの場に居る【ダーク・グレファ―】と【終末の騎士】が消えていく。

そして、代わりに現れる黒き龍――見下すように、僕を咆哮する。

「【ダーク・ホルス・ドラゴン】を生け贄召喚ッ！！」

レベルは、8。攻撃力はかの有名なブルーアイズと同じ、3000のドラゴンだ。

「バトルフェイズに入るよ。ダークホルスで、【ドル・ドラ】を攻撃する」

黒い竜が、小さな竜に迫る。

ダークホルスの放つ黒い炎は僕と【ドル・ドラ】を包んで、燃やす……！

「ぐ、アアアアああアあああつ……！」

——ま、また……！

痛みとは違う、熱さ。火傷をしたかと錯覚するほどの刺すような熱が、身体を駆け巡る。

「あっ、晃……！」

「良かったね、リズⅡフォルン・サレイルさん。このデュエルでは、身体に直接被害が及んでしまうんだ。君の代わりに、晃君は死にかけているのだよ？」

「っ………！！！」

リズとデビルが話しているけれど、僕は上手く聞こえない。炎が収まって、僕は片膝を付いて胸を躍動させる。

「おや、流石に1500程度のダメージじゃその程度かい？」

晃LP8000↓6500.

「は……は」

「息絶え絶え、と言った様子だね。さて、ボクはターンエンドだ。」

君の番だよ」

「エンド、フェイズ時に……破壊された、【ドル・ドラ】が……攻守を下げて、復活する！」

守備表示で【ドル・ドラ】が蘇生され、場のモンスターカードゾーンが1つ埋まる。

「ぼ、くのターン……ドロー。スタンバイフェイズに、黄金櫃に納めていた【未来融合―フューチャー・フュージョン】が手札に加わる」

落ち着け、もう大丈夫、熱くない。火傷もしてない、大丈夫。

僕は自分にそう言い聞かせて、小さく深呼吸した。ひんやりとした空気が、体内を巡って熱を冷ましてくれる。

手札は、7枚。

僕はダークホルスの存在から余り魔法を使いたくは無かったけれど、今加えたばかりのカードを手札から抜き取った。

「僕は【未来融合―フューチャー・フュージョン】を発動する！
ファイブゴッドドラゴン
対象は【F・G・D】！！」

良く考えたら、このデッキ……未来融合で墓地を肥やせる点は桜と同じだ。

タッグデュエルトーナメントの際、桜と組んだりすると強くなるかもしれない。

勿論……このデュエルに勝って、大会に参加する未来の事だ。その為にも、

「負けないっ！ 僕はデッキから【カイザー・グライダー】、【ハウンド・ドラゴン】2枚、【ドラグニティーフアックス】、【ドラグニティーアキュリス】を墓地へ送る！」

多分コレで、デビルにはどんなデッキかバレてしまっただろう。尤も、そんなこと気にしてたらデュエルなんて出来たものじゃないけれど。

「この時、ダークホルスの効果が発動するよ。相手が魔法を発動したら、その効果解決後に発動。墓地よりLV4の闇属性モンスターを特殊召喚出来る。ボクは墓地より【終末の騎士】を守備表示で蘇生し、効果を発動」

再び甦る騎士。剣で自分を守りながら、墓地を肥やす。

「デッキから落とすのは、2枚目の【ダーク・ホルス・ドラゴン】だよ」

「……………」

既にデビルの墓地に闇属性のモンスターは大量にある。余りモンスターゾーンを空けたくないな……【ダーク・クリエーター】が来たら溜まったものじゃない。

……対抗策を持ったままプレイするしかない、かな？

「僕は【サイバー・ダーク・エッジ】を通常召喚！」

機械の闇属性モンスター、サイバーダークシリーズ。DTに出て来たドラグニティーよりも前に出てきていた。アニメでは確か、裏サイバーとして使われていたはず。

「エッジの効果を発動！ 召喚成功時、墓地に存在するLV3以下のドラゴン族モンスターを装備魔法としてエッジに装備する事が出来る！ 僕が装備するのは……【ドラグニティーアキュリス】！」

エッジに取り込まれるアキュリス。アキュリスの攻撃力、1000分攻撃力が上がってエッジは1800になった。

「しかしそれでは、ボクのダークホルスは倒せないよ？」

「勿論。だから僕は、魔法カード【拘束解放波^{こうそくかいほうは}】を発動！ 自分フィールドにある装備魔法を破壊し、相手フィールド上にあるセットされた魔法、罠カードを全て破壊する！ アキュリスを破壊して、1枚の伏せカードを破壊する！」

破壊したカードは、【聖なるバリアーミラーフォース】。

「そして、破壊されたアキュリスの効果が発動する！ このカードが装備カードとなつているときに墓地へ送られたら、フィールド上のカードを一枚破壊する！ ダークホルスを破壊！」

「くう……」

最初、出て来たばかりの時よりも裁定は変わってしまったけれど、サイバーダークには戦闘破壊されるときに装備されたモンスターを身代わりに出来る効果を持っている。

能動的にアキュリスの破壊効果を発動出来るから、相性はかなり良いんだ。

と、リズのデッキを評価している場合じゃないよね。

エッジの攻撃力は800。【終末の騎士】の守備力は1200だから、残念ながら倒せない。【ドル・ドラ】も1000に下がって

るし。

「バトルフェイズ！」

「……？ その機械じゃ、騎士は倒せないよ？」

「分かってる。けど、エッジはダメージ計算時に攻撃力が半分になる代わりに、相手プレイヤーに直接攻撃出来るんだ！ エッジでダイレクトアタック！」

「くっ」

デビルLP8000↓7600.

僕の手札は4枚。一方で、デビルの手札は1枚だ。フィールドと手札は僕が優勢。問題は、相手がダークデッキだという事。墓地の肥えた今、油断は出来ない。

「メイン2。カードを1枚伏せて、ターン終了するよ」

「まさか、簡単にダークホルスが破壊されるなんてね……まだちゃんと見ていない他人のデッキだというのに、流石だよ………晃君。ボクのターン、ドロロー！」

ダークデッキVSサイバーダーク。ある意味ロマンに溢れた対戦カードだけれど、その実、このデュエルの行く先には“死”が待っている。

どうしてデビルたちは、僕の命を狙っているんだろう。

エンジェル——天使。

デビル——悪魔。

この呼び名に、何か関係があるのだろうか？

「さて、それじゃあボクは魔法カード、【闇の誘惑】を発動。カードを2枚ドロローして……うん、【キラー・トマト】を除外。そして【終末の騎士】を生け贄に、【ダーク・パーシアス】を生け贄召喚！」

闇の天使、パーシアス……ダーク化した騎士のような天使は、色の無い瞳で僕を見つめている。

「【ダーク・パーシアス】は、墓地の闇属性モンスターの数攻撃力が100ポイント上がる。今の枚数は、11体」

「攻撃力は……3000！」

「バトルフェイズ。【ダーク・パーシアス】で、【サイバー・ダーク・エッジ】を攻撃！」

風圧と衝撃。機械の竜が破壊され、ダメージがライフを減らす。

晃LP6500↓4300.

「この時、【ダーク・パーシアス】の効果を発動。モンスターを戦闘破壊したから……そうだね、1体の【ダーク・ホルス・ドラゴン】を除外して、1枚ドロローする」

【ダーク・パーシアス】ATK3000↓2900.

これで、デビルの手札は2枚になった。

「ボクはカードを1枚伏せて、ターン終了かね」

「エンドフェイズ時、【サイクロン】を発動！ その伏せカードを破壊する！」

破壊したのは、【閻次元の解放】……除外された閻属性モンスターを蘇生するカードだ。危なかった。

「僕のターン、ドロー！」

1ターン目。

ファイブゴッドが出てくる未来まで、後1ターン。

「く……僕はモンスターをセット。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「……………ボクのターンに入る前に……話をしようか、晃君。尤も——」

デビルは腕を下ろし、柔和な笑みを浮かべて視線を隣で縛られたままのリズに向ける。

「話の内容は君の事と……リズIIフォールン・サレイル。貴方の事についてだけだね」

第一章 第十七話 劣勢のデュエル（後書き）

デュエルって難しいですね……（汗）

私よりちゃんとデュエルを書いてる人を、とても尊敬します！

第一章 第十八話 デビルの所業と晃の微笑み

「話……?」

僕は目を細めてデビルを見つめる。さっきの炎の熱が残っているみたいに身体が熱い。

暫くの沈黙が続いていると、リズを縛っていた縄が勝手に解かれた。

「少し、離れてくれないかい? 君としても、ボクの傍に居たく無いだろう?」

「……………」

リズは何も言わずにその場を離れた。未だにデビルに対して警戒を解かずに、睨み続けている。

後々デュエルを再開した時にも支障の無い程度に距離を保って、リズは立ち止まった。

「ふむ……そうだね。まずは、長い話になるだろうからリズ君。君の事から話そうか」

「リズの事?」

「そう……リズの母親はね、」

——夫……リズで言う父に当たる存在に、殺されたのだよ。

静かに、単調に。デビルはそう告げて、クスツと笑った。

「な……」

「き、貴様……! どうしてそれを知っているっ!」

リズが激昂する。

母親が……父親に、殺された？ そんな、まさか……。

「知っているさ。リズ君。君の父親に混沌のデュエルとしての力を与えたのは……いや、この言い方は少し分かり難いかな。つまり――」

一瞬、ダークホルスの熱が蘇って、僕は呻き声と共に片膝を付いた。

「デュエルで人を殺す力を与えたのは、このボクだからさ」

「――な……、に………?」

デビルのその表情は、本当に楽しそうで。趣味を楽しんでいる子供のように無邪気に見えて、僕は少し鳥肌が立った。

「少しの間の暇潰しだったのさ。人間にこの力を与えたらどうするか、試したかった。予想外だったね、あれは……まさか、自分の妻を実験台として使うとは………」

「き、さま………！ 貴様が、壊したのか！ あの“日々”を、破壊したのか……ッ！！」

迫る。腕を振り上げて、デビルを殴ろうと走り寄り、

次の瞬間、リズは後方に吹き飛んだ。

デビルは何もしていない。ただ風に押し戻されるかのように、勢い良く吹き飛ばされてしまう。

「リズッ！」

「やれやれ、これだから遠ざけたというのに……人間というものは、愚かだね」

「お前……ッ！」

リズを、良くも……！

そんな僕の睨みも、デビルは面白そうに頬を吊り上げて笑った。

「君のせいでもあるんだよ、晃君？」

「は………？」

「お兄ちゃんっ！」

桜の声だ。後ろを振り返ると、桜、ローラ、フィーの3人が走って来ていた。

「皆……」

「……あの人………もしかして」

デビルの存在を一度見たことのあるフィーは、微かに眼を見開いて呟く。

「ううん。別人だよ。似てるけどね」

「……そう」

「それより皆」

僕はリズの方を向きながら、

「あの人の傍に居てあげて。あの人がリズだよ」

「まだ状況は掴めませんが……分かりました」

真っ先に頷いたのはローラ。ローラを先頭に桜、フィーがリズの元へ向かう。

リズは頭を打ったのか、側頭部を押さえながら立ち上がっていた。倒れそうになって、ローラと桜に支えられる。

「おやおや、君の友達かい？　女の子ばかりで………モテモテだね、晃君？」

「……………」

「茶化すな、という顔をしてるね。それじゃ話を戻そうか」

肩を竦めて、デビルは僕を指差す。

「君は選ばれた。この世界でたった2人しか居ない存在の一角としてね」

「選ばれた……？」

「そう。詳しい話を話すつもりも無いし、時間も無いけれど………：君は選ばれたのだよ？　救世主か破壊者か——勇者か魔王かの違いはあれど、ね」

2人、か……。

「けれど、こちらに來たのが少し遅かったんだ。ボクは選別者じゃ無いからね。本当ならば、双方とももっと早く決めて欲しかったのだけど………如何せん、遅すぎたんだよ」

そんなこと、知らない。

僕はまだ……何も、知らない。

「その間、ボクたちは暇だったのさ。その退屈凌ぎに利用したのが、リズの父親だった、と言う事さ」

「そんな……そんな理由で、母さんは……ッ！」

今出来るリズの精一杯な睨みが、デビルを貫く。けれどデビルは飄々とした表情でそれを受け流すと、左腕に備え付けたディスクを構えて、右手をデッキトップに乗せる。

そして……カードを、引く。

「さて、話は終わり。君にとって今、はっきりと分かっている事は1つ。ボクは、」

僕の手札は3枚。デビルはこのドローフエイズで2枚に。

フィールドには、伏せモンスター1体と攻守の下がった【ドル・ドラ】。相手の場には攻撃力2900の【ダーク・パーシアス】と対象の無くなったリビングデッド。

「――君を殺す為に居るといふ事、かな。ボクのターン！」

墓地の闇の枚数は10枚。墓地の枚数は十分だ。

「むう、仕方ないね……ボクは【霊滅術師カイクウ】を召喚し、バトルフェイズ！ まずは【ダーク・パーシアス】で【ドル・ドラ】を攻撃しよう」

「く……」

「そして、【ダーク・ボルテニス】を除外して1枚ドロ―」

【ダーク・パーシアス】 ATK2900↓2800.

「カイクウで裏モンスターを攻撃」

「……モンスターは【ブラック・ボンバー】だよ」

前のターン、出さなかった理由としては、エクストラデッキに有用なシンクロモンスターが居なかった。

L V 4のサイバーダークモンスターを出せるチューナーだったけど、今出しても無駄……。

黒薔薇で場をリセットしても、次のターン【ダーク・クリエイト】とかを出されたら終わりだった。

「では、ターンを終了しよう」

「僕のターン、ドロロー!! スタンバイフェイズ……未来融合によって、【F・G・D】が降臨するッ!!」

舞い降りる、五つの首を持った龍。5000の攻撃力を持つ、最強の龍………!

「ほお……」

ドロローしたカード……あのカードは、来ない。

相手にとってアドバンテージを与えてしまうカードかもしれないけれど……発動してみるかな。

「リバースカード、オープン! 速攻魔法、【手札断殺】! お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地の送り、その後2枚ドロローする!」
「ボクは2枚しか無いから選べないね……」

やる価値は、ある……と思いたい。

お互いに2枚墓地に送り、ドロローする。

【ダーク・パーシアス】ATK2800↓2900.

どうやら1枚は閻属性モンスターだったらしい。
僕の引いたカードは――。

「……来なかった、か。僕は【ダーク・バースト】を発動！ 墓地にある【サイバー・ダーク・キール】を手札に戻す！」

「【手札断殺】で墓地に送ったかな？」

ご名答。

フィールドに居るファイブゴッドが今か今かとデビルを見下ろしている。

「そして、キールを召喚！ 効果により、墓地のLV3以下のドラゴン族……【ハウンド・ドラゴン】を装備！」

【サイバー・ダーク・キール】ATK800↓2500.

「バトル！ まずは【サイバー・ダーク・キール】で【霊滅術師カイウ】を攻撃するっ！」

「か、は……！」

ダメージが、デビルに痛みを与える。鈍痛にデビルの表情が曇った。

デビルLP8000↓7300.

「キールの効果発動！ このカードがモンスターを戦闘破壊に成功したとき、相手プレイヤーに300ポイントのダメージを与える！」
「く、う……キツイね、やはり」

デビルLP7300↓7000.

【ダーク・パーシアス】ATK2900↓3000。

「次！ 【F・G・D】で、【ダーク・パーシアス】を攻撃！」

「づ、あぁっ！！」

最強の龍には成す術も無く、黒き騎士は敗北を記す。

デビルLP7000↓5000.

「まだだ……！ 手札から速攻魔法、【ドラゴニック・フィットアウト】！ 装備扱いされているドラゴン族モンスターを表側攻撃表示で特殊召喚する！ 【ハウンド・ドラゴン】を特殊召喚！」

僕の知らないカード……このカードの効果により、攻撃力1700の通常モンスターが姿を現す。

「バトルフェイズ続行！ 【ハウンド・ドラゴン】でデビルにダイレクトアタック！」

「ぐ、あぁあぁあぁ！！」

デビルLP5000↓3300.

「僕はカードを2枚伏せて、ターン終了」

これで、僕の手札は0枚……。このまま押し切れれば良いんだけど。

「ふふふ……流石だよ、晃君。そろそろ、大詰めかな？ ボクのターン、ドロー」

まるでダメージが無かったかのように手札を吟味している。
考えているのか、それとも……………。

「行こうか。ボクは今引いたカード……【ブラック・ホール】を發動する」

「ッ……………！」

「フィールド上のモンスターを、全て破壊する……………っ！」

【F・G・D】も、【サイバー・ダーク・キール】も、【ハウンド・ドラゴン】も黒穴に吸い込まれて破壊される。

まさかこんな場面でそのカードを引かれるなんて……………！

「そして手札より、【ダーク・クリエイター】を攻撃表示で特殊召喚する」

「……………！」

【手札断殺】で引かれた……………！

「何も無いようだね？ 【ダーク・クリエイター】の効果を発動。

【堕天使ゼラート】を除外し、墓地の【ダーク・ホルス・ドラゴン】を特殊召喚する！」

「残念！ リバーズカード、【激流葬】……！！ フィールド上のモンスターは全破壊だ！」

「く……………」

お互いの【ブラック・ホール】と【激流葬】により、最終的なモンスターはいなくなる。

「では……………ボクの最終手段を使おう」

「え……?」

「手札がこのカード1枚の時、墓地の闇属性モンスターを全てデッキの戻して特殊召喚することが出来る、ボクのエースモンスター……」

【ネクロ・ガードナー】、【ゾンビ・キャリア】などを巻き込んで、フィールドに黒き旋風が巻き起こる。

BFとは……違うんだろう。多分、それ以上に禍々しく……暗い。空に、暗雲が立ち込める――。

「しんえんりゅう【深淵龍】ドラゴニック・ワイバーン」……入場なさい」

黒き、翼。

黒き、体。

紅き、瞳。

白き、牙。

白き、爪。

「この子はね……特殊召喚する際、デッキの戻した枚数分によって攻撃力と守備力が定められる。枚数は13枚……よって攻撃力は、」

――――
【深淵龍―ドラゴニック・ワイバーン】ATK?↓3900。

「バトル……君はこの攻撃に耐えられるかい? 深淵龍よ、彼の者を燃やし尽くしなさい」

――ガアアアアアアアアアア――!!

「晃っ!」

真っ先に聞こえる、リズの叫び声。続いて桜たちが悲痛に声を荒げる。

大丈夫。僕は負けないよ……………。

そう伝える前に僕は静かに微笑んで。

邪悪な炎が、僕を覆う――。

第一章〜第十八話 デビルの所業と晃の微笑み（後書き）

もうすぐ第一章も終わります。

もしも何かご要望、使って欲しいオリカ案などございましたらどうぞおっしゃってください！

出来る限り、使用させて頂きますm（ ）m

第一章 第十九話 涙。晃の戦う理由。

空は暗雲。今にも豪雨が降り注ぎそうな、不気味な天気。
桜は涙を、ローラは膝を付き、フィーは静かに唇を噛んだ。

リズはただ、自分の無力さを恨んだ。

父を狂わせた原因、デビル。それが目の前にいるのに、戦っているのは少し前に出会ったばかりの少年である。それも、年下の。手に握り拳を作って、そこから血が滴った。その血は指を伝い、静かに地面へ零れ落ちる。

（私は……………）

ソリッドビジョンとは思えない炎の熱と煙。異常なほどの熱さに、ソリッドビジョンなどという事など頭には無くなっていた。

事実、先程晃が受けたダメージは彼を苦しめていた。

（私は、無力だ…………）

嘆き、苦しみ、ただ恨む。

デビルと、自分をただ、恨み憎む。

（晃…………）

それと同時に浮かぶ疑問は、根を張り心を支配する。

（何故、私の為に…………私なんかの為に、戦う？ 苦しむ？ 何故だ…………？）

分からない、判らない……晃の事が、全く解らない。

デビルの話だと、命を賭けたデュエルだという。それは父が母を殺した方法と同じなんだろう。

だからこそ……デビルとは、自分が戦うべきなんじゃないか、と心底思う。

「どうして――――」

「涙って、悲しいよね」

「!？」

凄まじい煙が晴れていく。今にも倒れそうで、焦点もあっていない瞳でリズたちを見つめている晃。

驚いたように、デビルが晃を見つめていた。

「なんで人って、泣くんだろう？」

――昔の、桜の涙が眼に浮かぶ。

「僕には、その理由が全然分からなくてさ」

――ローラの、一筋の雫が眼に浮かぶ。

「悲しい時の涙って、無くなれば良い、なんて……」

――フィジーの、辛かった泣き顔が眼に浮かぶ。

「変、なのかな……僕って」

——リズの、悔しげに流れる一滴が、頬を伝い地面へと落ちて行った。

「けど、変なら変らしく、それを貫こうと思うんだ。それが自己満足だろうと、エゴだろうと………」

少しずつ、晃の瞳に光が灯っていく。真っ直ぐにデビルを見つめ、勝ちを信じる横顔にリズは暫し見惚れる。

「僕は皆を………リズ。君を、」

ディスクを、構えた。自分の勝利を……リズの魂^{デッキ}を信じて、晃は戦う。

「救うよ」



「まさか、まだ立っていられるとは………ボクでも気を失いそうなもののなのに」

「さっき、君が言ってたよ？　僕は、他人の為に戦う方が強くなるんだ」

「……………そう、だったね。言っておくけれど、深淵龍はカードの効果では破壊されない。そして、このカードが相手にダイレクトア

タックを決めたら、相手フィールド上のカードと手札を全て墓地へ送る。さあ、君のターンだ」

晃LP4300↓400.

……文字通り、僕の場合はがら空きだ。手札は無かったけど、まだ勝てる可能性は残っている！

「僕のターン………ドロー!!」

チャンスは、ある！

「魔法カード、【貪欲な壺】！墓地にいる、【仮面竜】、【ドル・ドラ】、【ハウンド・ドラゴン】を2枚、【ブラック・ボンバー】をデッキに戻して――」

……引ける？

引かなきゃいけないカードは、1枚………けれど、デッキに眠っている枚数も1枚だ。

このデッキ、まだ改良出来るなあ、なんて自分を落ち着かせる。

大丈夫。ローラの時も引けたじゃないか。フィーの時も、勝てたじゃないか。

「2枚、ドロー！」

――僕には、チートのようなドロー力があるみたいだね。

「行くよっ！僕は魔法カード、【サイバー・ダーク・インパクト】を発動！」

見せてあげるよ。このデッキの、リズの切り札を―――。

「墓地に眠る、【サイバー・ダーク・ホーン】、【サイバー・ダーク・エッジ】、【サイバー・ダーク・キール】をデッキに戻し、エクストラデッキから現れる……………【がいこくりゅう鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン】――！」

デビルが使うデッキとは違う、ダーク。

黒き鎧のようなものを纏った機械竜が、このデュエルに終わりを告げる。

「このカードの攻撃力は、自分の墓地のモンスターの数×100ポイント上昇する！ 墓地に居るのは【F・G・D】、【カイザー・グライダー】、【ドラグニティーフアランクス】、【ドラグニティーアキュリス】の4体！」

【鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン】 ATK1000↓1400.

「そして、サイバー・ダーク・ドラゴンの特殊召喚に成功した時、墓地のドラゴンを装備できる……………！ 僕が装備するのは、最強の龍……………【F・G・D】だ――！」

そして装備したモンスター分、攻撃力が上がる……………！

【鎧黒竜―サイバー・ダーク・ドラゴン】 ATK1400↓6400↓6300.

「攻撃力……………6300……………！」

「バトル……！ 【鎧黒竜ーサイバー・ダーク・ドラゴン】で、
深淵龍ードラゴニック・ワイバーン】を攻撃！」

デビルのライフは、3300.

鎧黒竜と深淵龍の攻撃力差は、2400.

けど。

「これで、終わらせる！ ダメージステップ、速攻魔法【リミッタ
ー解除】……！」

「な、に……！？」

【鎧黒竜ーサイバー・ダーク・ドラゴン】 ATK6300→12
600.

「サイバーガイル……！」

「ぐ……ああアアアああアアアああアアアああアアア……！」

そして。

闇が、デビルを包み込んだ。

◇
◇
◇

宿屋にて……僕は、疲労困憊の身体で頭を下げていた。

「困るねえ、こんなに女性を連れ込んだりして……………ここはそういう場所じゃないんだけど」

「いや、その、スミマセン……………」

「人数変更も辛いよ？」 後残ってるのは大人数専用の場所が1部屋だけなんだよねえ」

「そこを何とか出来ませんかね？」

「…………仕方ないね。なら3人部屋からその大人数部屋に行きな。けれど、イケナイ事はしちゃいけないよ？」

「しませんよ」

桜、ローラ、フィー、そしてリズの4人を予約した宿屋に連れて行くと、店主だろう女性にジトーーーーと睨まれた。

まあ、当然だろう。

元々3人部屋として予約したのにリズを含めて1人増えている上に、全員女性である。

僕は1人部屋を予約していたけれど…………誤解されても仕方ない。

……………多分。ただ単に面白がられている可能性もあるけど。

4つのベッドが置かれている大部屋に移動すると、リズをベッドに横たわらせる。頭を打って、安静にした方が良さという考えからだ。

「大丈夫？」

「…………大丈夫だ。私より、君の方が大丈夫なのか？」
「僕？」

気が付くと、リズを含め全員が僕の方を見ていた。心配そうに眉を潜めている辺り、皆同じ気持ちなんだろう。

「僕は……ちょっと疲れた、かな」

「痛みとかは大丈夫ですか？」

「あ、うん。それは大丈夫」

もう痛みは無いし、熱くも無い。その旨を伝えたと、皆安心したように息を吐いた。

「僕は自分の部屋に戻って寝るよ。明日、また来るから」

「……ごめん、アツキー」

「……フィー？」

僕が部屋を出て行こうと立ち上がると、フィーが小さく呟いた。

「お兄ちゃんばかり、こんな戦いさせてゴメンね」

フィーの言葉を代弁するかのように桜が俯く。

ローラも思っていることなのか、表情は重い。

「……………」

僕は無言で扉の前まで移動して、出て行く直前に一言。

「皆は、こんな戦い……しちゃ駄目だからね」

ばたん、と。

扉が閉まる音を最後に、僕は自分の部屋へ向かった。



『皆さん、心配なのですね』

「うん……………」

僕はベッドに腰掛けながら頷いた。ファラは微かに微笑みながら、僕の様子を眺めている。

『私も心配です。けれど、ご主人様の事ですし、まだ続けてしまう気が致します』

「ごめん」

『いいえ。それよりも、最近私たちの出番が無い気がしてお寂しく御座います』

「あはは……………ごめん」

最近、ローラやフィー、そしてリズのデッキを使っただけだ。流石に悪い気がする。

僕が申し訳無さそうに頭を下げると、ファラは小さな溜め息を零した。

『尤も、私たちはご主人様の一番近くで居る事さえ出来れば文句は無いのですけれど』

「ファラ……………」

と、その時だった。
扉が3回、ノックされる。

「どうぞ」

「失礼する」

入って来たのはリズだった。

「どうしたの？」

「いや、その……っ」と

まだ頭を打ったときの衝撃があるのか、リズの身体がふらつく。
躓^{つまず}いて、僕は支えようと手を伸ばした。

「っっ」

「うわあ！」

思ったよりも勢いが良くて、僕とリズはベッドにダイブ。
僕の身体にリズが乗る状態になって、

「……！」

「っ！」

ユグルに来て4回目の、キス。

いや、今回は事故だったのだけど。

慌てて身体を離れた僕とリズだけど、お互い顔が赤い。

というか、

（え、何コレ、地球じゃこんなアクシデント無かったよ？ たまに

桜が無理矢理迫ってきたくらいだけど、今まで防いでたし、え、ユグルってそんな世界？ ユグルってそんな世界っ!？)

いや、そんなカバな。じゃない、そんなウマとシカな。違う違う、そんな馬鹿な。

「……ありがとう、な」

「……………ふえ？」

ああ、変な事考えてたから気の抜けた返事をしてしまった。

「私の代わりに戦って……アイツを倒してくれて、ありがとう……」
「そんな……」

どちらにせよ、負けたら僕も死んじゃってたし。結果的にはリズの代わりに戦った、という事になったのかもしれないけど、結局僕の為に戦っていたようなものだし。

僕がそう言おうとすると、リズはその前に口を開いた。

「それと……タッグデュエルトーナメント、私を誘おうとしてくれたらしいではないか」

「ああ……聞いたんだ？」

「……………優しいな、お前は」

そんなんじゃない。優しさなんて、所詮自己満足なんだ。特に僕のなんて、“優しさ”を騙ったエゴでしかない。

「もし……もし晃が良ければ、だが」
「え？」

振り返ると、いつの間にかリズは立ち上がって僕を見下ろしてた。初めて会った時はポニーテールだったのに、今は髪を下ろしている。だからか、少し雰囲気が違う気がして、ドキッとした。

「私も旅に同行させてくれないか？」

「え？」

「か、勘違いするな。私はただ、この国に居るのが疲れただけだ。アンティ事件の犯人にされかけ一々デュエルを吹っかけて来る……元々、タッグデュエルトーナメントが終わったら出て行くつもりだったんだ」

……顔を紅くして言われても説得力が無い、というか。

桜と言い、ローラと言い、フィーと言い……どうして僕なんだろう。

もし僕が女の子だったら、洗司郎みたいな人を好きになるのに――

と、そういえば……こんな事を言ったら高校の漫画研究会の女性たちが騒いだのはどうしてなんだろう？

永遠の謎、かな。閑話休題。

「……僕は良いよ。皆は？」

「晃が良ければ別に良いと」

「ははは……」

予想通り。

「さて……そろそろ戻る」

「うん。リズもあの部屋で休んで良いからね」

「何から何まで……本当に世話を掛けるな」

気にしない気にしない。

僕がそう言っていると、リズはいつか恩は返す、と言って部屋を出た。

別に良いのに。僕が勝手にしてる事なのになあ……。

窓のところまで移動して、カーテンを開き外を眺める。

外は雨が降り注いでいる。先程の暗雲がこの雨の前兆だった事を物語っていた。

「凄い雨………ふわゝあ、少し寝よう」

カーテンを閉める。

外の豪雨と雷は、まるでこれからの僕たちの未来を予告しているかのように壮大な音を立てて居た。

第一章↳第十九話 涙。晃の戦う理由。(後書き)

デュエル、最後がなんか無理矢理ですね(笑)

私としては、サイバー・ダークに貪欲は入らないと思うんですけど
……スイマセンm()m

というか、ドローがかなりチート臭いwwww

第一章 最終話 ある場所 ある想い

そこにあるのは、大きな城だった。

灰色という変わった外壁を模したその城は、毅然として聳え建っている。

そんな、ある一室。

「お元気そうですよ、ご主人様」

嬉しそうに呟く【華散り人形 ファラ】の声。優しげな雰囲気、声色に合わさって紡がれる。

「けどよオ……オレたちや、主人を守ることままならねエゼ？」

力不足だ、と声のトーンが下がる。【抹殺人形 ライア】は、くそつ、と拳を机に叩き付けた。

「わたしが思うに……マスターは望んでいないと思われますわ」

【奏する人形 ソウカ】が、ハーブを寂しげに奏ながら言う。その音色は悲しく、部屋に響いた。

「……………」

こく、と頷くメイド服を身に纏う【愛玩人形 アリス】。その表情はやるせなさに満ちている。

『テト達にデキル事は、晃ちゃんの傍に居るコト！ それを望んで

るとおもうヨ?』

画用紙に文字を書いた【実験人形 テト】が無邪気に笑いながら文字を見せる。

そのテトの言葉に、その場に居た精霊全てが優しく頷いた。

クーたちを含めた全ての“人形”はただ、あるたった1人の人物を想い、望みを叶えようと。

心は1つに……ただ。

“諏訪晃”を、ただ――――。

第一章、最終話 ある場所、ある想い（後書き）

短くなりましたね。

これで第一章は終わりです。

以外と短くなりました……。。

番外編……というよりオマケ？〜主要人物紹介〜

作為者「さて、第一章が終わりました」

晃「ねえ、まだ“作為者”のままだよ？ 何企んでるの、ねえ？」

作為者「さて、どうでしたでしょうか。20話で終わらせる為にドンドン無理矢理感が溢れて行きましたが、なんとか納められました！」

晃「最後のフアラたちの会話……数合わせじゃ無いっけ？」

執行人「書き書き」

晃「何プロットに書いてるのっ！？ というか、“作為者”から“執行人”に変わってるのは何故！？」

作者「さて……今回は簡単な主要人物の自己紹介を。尚、今回のゲストは紹介される人物が来ますよ。晃は強制だけど」

晃「……まあ、予想は付いてたよ？ うん」

作者「じゃあ早速。まずは『紫苑の槍』様の小説、【遊戯王 俺達が歩いていく道】の主人公、榊洗司郎君の親友、諏訪晃から」

晃「その脇役みたいな紹介止めてっ！？」

すわアキラ
諏訪晃。年齢は16歳。性別は男。
使用デッキ・人形デッキ

【遊戯王 僕らの進んで行く道】主人公。

地球に居た際は眼鏡を掛けていたが、ユグルの磁場の変化か視力は直っている。

生粋の女顔で、女性に間違えられる事も多々。背も低く、声も高い為尚更である。

誰に対しても優しく、洗司郎曰く「甘い」。いつか誰かに騙されなにかいつも心配されていた。

喧嘩は弱く、洗司郎の後ろでどちらかという影の薄い存在。だが頭脳はずば抜けて秀でており、洗司郎とのタッグ（遊戯王以外でも）は色んな意味で最強だった。

人形やぬいぐるみが好きで、部屋には幾つもの人形が飾られている。そのせいか元々か、たまに女性のような振る舞いをする事もあるが、完全に無意識である。

他人の感情にはとにかく鋭く、恋愛感情を含めてすぐに察してしまう。その為、晃は鈍感ではない。

実は見た目や喋り方と反してドSで、自分に向けられた恋愛感情を利用してからかう事も。最低野郎である。最低サイテー。

だが、他人の為なら身体を張る度胸もある。ちなみに巻き込まれキヤラではなく、どちらかと言えば巻き込みキヤラ（特に洗司郎）に当たる。

晃の過去や秘密には、色々有りそうだが……………？

晃「ねエ、途中のサイテーって何さ」

作者「いや、そこら辺は私と同じにしたんだよ。なんか面白そうだったから」

晃「サイテー」

作者「……………」

桜「お兄ちゃん。それより早くわたしの紹介しよっ？」

晃「あ、桜。そうだね」

作者「置いてかないでよっ！」

すわサクラ
諏訪桜。年齢は14歳。性別は女。

使用デッキ…竜魔人キング・ドラグーン

ヒロイン1。多分。妹だけど気にしない。

小さい頃からずっと晃にべったりで、依存している節もある。作者の好きなヤンデレこうh（ry

親は仕事ばかりで家に居る事は少なかった為、物心付く頃からの生活は晃に支えられていた。小学生の時までは晃が少し居なくなるだけで泣き喚くほど。

晃の事となると暴走し、洸司郎でさえも抑えるのは難しい。

晃以外の事はどうでも良い、と考えているタイプで同じく小さい頃に知り合った洸司郎も完全無視である。

晃の事がとにかく好きで、色んな形でアプローチを掛けるが悉く失敗。
こたえなし

ローラ、フィー、リズの事は友達として仲良く接しているが、同時にライバルとして内心炎が灯っていたりする。

自分が貧乳^{ひんぬー}であることにコンプレックスを抱いている。同じ仲間であるフィーとは妙な連帯感が生まれたり生まれなかったり。

晃「……僕の事ばかりだよ？」

桜「さっすが！ わたしとお兄ちゃんはどこでも一緒だねっ？」

作者「というか、桜を紹介しようとしたらそれ以外書く事がなくなっちゃって……………」

晃「それより、作者ってヤンデレ好きだったの？」

作者「うん！ だって、ヤンデレって一途ってことだよっ？ その

人の事しか見えてないって事なんだよっ!？」

桜「初恋の人がヤンデレだったんだよね？」

作者「なんで知ってる」

晃「しかもその人が、作者にとっての初めての恋人、と」

作者「消去^{デリート}オ!!!」

桜「きゃあっ!」

晃「あ、桜っ!」

ローラ「あれ……さ、桜様と入れ替わりですか？」

作者「次へレッツゴー」

晃「無茶苦茶だ………」

ローラ||レイフェル・メイサ。年齢は15歳。性別は女。
使用デッキ…氷結界

ヒロイン2。

レグラス村にて、魔王ディアボロス……というよりも魔将王ディアブルムの生け贄として生まれ育てられた少女。
金髪碧眼で、セミロング。実は作者の一番好きなキャラ。だから作

者の一番好きなシリーズを使わせたり……。

誰に対しても敬語で、人の名前には“様”を付けて呼ぶ。

また、基本的に服装は巫女服。旅の途中はローブを羽織っている為見えないが、その下には赤と白を基調とした巫女服を身に着けている。

ちなみに作者は巫女萌えであ r (r y

晃を除き、ヒロイン勢の中では一番状況把握が早い。頭も良く、難しい話をする際は他の人を取り残して晃と2人だけの世界に突入してしまう事もしばしば。

晃と旅をする理由は、恩返しの方法を探す為………という名目を置きながらも（事実だが）、実際は自分が晃と共に居たいからである。

着痩せするタイプで、実は結構な隠れ巨乳。

ローラ「さ、最後の台詞は隠してくださいっ！」

作者「ごめん、無理」

晃「というより、作者ってローラが一番好きなんだね」

作者「敬語キャラが元々好きなんだよねえ。さらに巫女で、氷結界使ったり……そして巨乳だよ？」

ローラ「さ、最後のはいりませんっ!」

作者「桜やファイが聞いたら激怒する言葉を……あ、ちなみに晃は私と同じ好みだから」

晃「え?」

ローラ「そ、そうなんですか? えと、それなら、そのー……………」

作者「ラブコメってる時間は無いので消去!^{デリート}」

晃「あ、ちょっ」

ファイジー「……我、参上」

晃「……そんなキャラじゃないよね?」

作者「というか、後2人あるのか……………いつもよりも文字数が増えたらどうしよう」

ファイジー「オールド・ランナ。年齢は18歳。性別は女。
使用デッキ…スクラップ」

ヒロイン3。

この小説のロリ担当。桜も居るけど、そこは気にしない。
サーヴァイルで奴隷として生きていたファイジーに出会った。

年齢はヒロイン勢の中で一番年上だが、外見は一番年下。中学生、場合によっては小学生にも見える外見。そのおかげで処女を守れたというのは彼女談。いつも無表情で言葉数も少ないが、その代わりに周りの事を良く見ている人物。

ある意味桜以上の積極性を持っている為、要注意人物である。

実は男性恐怖症で、晃以外の男性と上手く接する事が出来ない。

リイナという妹が居るが、まだ出会えていない。

フィジー「……短い」

作者「ごめん、あんまり書く事無くて……その分本編では晃とラブコメさせるから」

フィジー「許す」

晃「即答っ!?!? あ、その後桜たちにぼろくそ言われるルートだよ、ね、それ?」

作者「刺されるかもね」

晃「それ、前にプロットに書いてたこと……! まさか、狙ったっ!?!」

ファイジー「偶然……」

晃「あ、さいですか」

作者「さてと、そろそろ良い？」

ファイジー「（コク）」

作者「デリート消去」

リズ「今回は静かだったようだな」

晃「うん。フィーって一番大人しいし」

作者「さて、長くなると困るしとっとと行こうか」

リズ「フォルン・サレイル。年齢は17歳。性別は女。
使用デッキ…サイバー・ダーク

ヒロイン4。

ウェーリアで出会った孤独そうな女性。デュエルしていたところに
出くわした。

男勝りな性格で、喋り方では男か女か分かり辛い。釣り目も相まっ
てか、恐そうな雰囲気漂う女性。

ヒロイン勢の中では一番消極的で、ツンデレ気質。ツンデレというより、素直になれないだけでツンデレとは似て非なるもの。小さい頃を除き、晃がまともに喋った初めての人物。

ヒロインの中では一番の巨乳。本人はそれを嫌っていて、時折桜たちを羨ましく思うがそれを言うとは喧嘩になる為口を噤んでいる。

ある意味で一番弱い心を持っているが、必死に隠そうとして強気になってしまう。ただ、晃にはお見通しな様子。

暗いところが苦手で、特に1人だけになってしまうと泣き出してしまう位。

ちなみに、晃よりも背の高い身長がコンプレックスとなっている。

リズ「……私はツンデレなのか？」

晃「さ、さあ……？」

作者「もう気付いている人も多いと思うよ？」

リズ「……それより、私は弱い心など持っていないっ！」

作者「それは作中で解き明かしてあげるよ。ふふふ………」

晃「……それって結構なネタバレなんじゃ？」

作者「さて、ラストに向けて君には消えて貰うっ！」

晃「その言い方は悪役っぽいつてっ!？」

作者「消去!」
デリート

晃「……消えた」

作者「ちなみに、誰にも話していない裏設定を教えてあげるよ、晃君」

晃「え? えと、そこはかとなく不安なんだけど」

作者「ヒロインは皆Mだ!」

晃「しょうもなっ!」

作者「……………」

晃「あ、ゴメン、つい……………」

作者「まあ、それは置いといて、と」

プロットを取り出して眺めながら、

作者「……この後どうしよう?」

晃「え、考えてないの?」

作者「コロッセウム、ということは分かってるんだけどね? 出る

のは晃以外だからさ……晃はどうしようかな、と」

晃「うーん……というかネタバレの上に何で僕に相談してるのさ」

作者「……それもそうだね。これからは読者に訊くよ」

晃「それは一番駄目だからッ！」

作者「ケチだなあ……」

晃「君は小説を書いちゃいけない人種な気がしてならないよ………」

作者「まあ、良いか。そろそろ終わりにしよう」

晃「うん」

作者&晃「「これから、宜しくお願いしますっ！」」

晃「ちょ、同じオチ!？」

ちゃんちゃん（2回目）。

番外編……というよりオマケ？）主要人物紹介（後書き）

次回から第二章になっています。

第二章からは更新が気分になっちゃいますがご了承ください。

それでも一週間に一度は必ず更新します！

第二章 第一話 ペンダントと皆の優しさ

数日が経った。

疲労も吹き飛び、怪我も完治。リズ含めた4人の女性たちが仲良くなって行った……そんなある日。

「開会式か」

「お兄ちゃん、本当に出ないの？」

「うん。ゴメンね」

「少し残念ですが……仕方ないですね」

「むう……」

タッグデュエルトーナメントに出場するペアも決まり、僕たちはコロッセウムの会場に来ていた。

僕はこの大会、観客という訳だけど、今日は優勝商品の紹介と対戦プレートの発表だけだから僕も8つあるデュエル場の1つに降りてきていた。

「そろそろ始まるかな？」

『皆さん、良く集まってくださいました』

タイミング良く、会場にある男性の声が響く。巨大なモニターに映ったのは、白髪の老人。長い白髪と髭で顔は見えない。

マイクスタンドに取り付けられたマイクに顔を寄せ、低くゆっくりとした声で喋る。

『今回集まって頂いたのは121ペア……いつもよりも人数が少な

いのは、例のアンティ事件があったからですが、先日解決致しました。心配はいりません』

これは多分、彼の嘘なんだろう。あのデビルは闇に包まれて、姿を消してしまった。

けれど、実質解決したものだし良いと思う。

未だにリズは犯人として見てくる人も多いけれど、直に無くなっ
ていくだろう。

『長ったらしい話を話されても、眠くなってしまうだけです。早速、優勝商品を見て頂きましょう』

モニターが消える。そして、老人に代わって新たに映し出されたのは――――。

「あ、れ……………」

――安物っぽい、だけど綺麗に輝く蒼い水晶が嵌め込まれたペンダント。

「お、お兄ちゃん。あれって……………」

なんで、“アレ”がここに？

「…………父が持っていたペンダントとは違ったな」

「あ、そうなんですか？」

「…………アッキー？」

3人が、何かを話しているけれど…………今の僕には殆ど聞こえなかった。

ただ眼に写るのは、あのペンダントのみ。

“アレ”は……世界に1つしか無いペンダント……！

僕は一度深呼吸して、ふるふると首を振った。

（何考えてるんだ……似てるだけだよ。似てる、だけ………）

『これはレプリカです。このペンダントに付けられた水晶は、ユグルではとても珍しい材質で造られています』

おお、とざわめきが起こる。

ふう……少し、落ち着いてきた。

しかし……これはタッグデュエルトーナメントだ。それなのに、どうして賞品は1つだけなんだろう？

『それでは、対戦表をお見せ致しましょう』

ペンダントの映像が代わり、4つのトーナメント表が映し出される。それぞれAブロック、Bブロック、Cブロック、Dブロックと上に書かれていた。

『まずはそれぞれ、自分のブロックで優勝を目指して頂きます。そして各ブロックの優勝者同士でまたトーナメントを行います。最後に残ったペアにはその2人でデュエルをして頂き、勝った者が優勝賞品を手にする事が出来るのです』

成る程、だから賞品は1つだけ、ということなんだ。

『このトーナメント表は暫く映したままにしておきますので、気になったらいつでも見に来てください。本格的な開催は明後日からに

なります』

気合いを込めている人が多く見える。桜たちも緊張してるのか、言葉数は少ない。

……開催はまだなのに、気が早いなあ、皆。

『それでは、少し早いですが……これで開会式を終わります』

◇
◇
◇

「お兄ちゃん、アレって……」

「似てるだけだよ、きつと。それより残念だったね……リズ」

「……確かに残念ではあったが、それ程気にはしていない」

その表情は確かにそこまで残念そうではない。

僕たち5人は、コロッセウム会場を出て、宿屋へ向かおうと歩を進めていた。

その途中——確か、タッグデュエルトーナメント出場登録場。

「ええっ！　良いじゃんかよ、俺も出たいんだってっ！」

大声が響いて、僕はふと視線を向けた。

そこに居たのは困ったように頬を掻いてる受付の人と、握り拳を作って受付の男性に詰め寄っている1人の少年。

同じ年くらいだろうか？

真っ赤の髪をした少年は、諦めずに言葉を紡いだ。

「出場受付は開催までは続けるって話だろ！」

「ですから、これはタッグデュエルのトーナメントなので、1人では登録出来ないんですよ」

「オレ1人で良いからさっ！」

……頑張れ。応援してるから。

なんて心の中だけで呟いて、僕はそのまま通り過ぎようと――。

「なあなあ、お前等開会式に居たよなっ？」

「うわっ!？」

い、いつの間に……!

確かにそこまで離れては居ないけど、どうやったら一瞬でここに
来れるんだろう……。

「こ、この人は誰なんですか？」

「さあ……わたしやお兄ちゃんは知らないよ」

「お前等の中で、余ってる人とかいねえかっ？」

「……アッキーなら」

あ、フィー余計な事を。指差さないで。嫌な予感が……。

「よおしっ! アンタ、ちょっと来てくれっ！」

着てくれ? うん、分かったよ、何を着れば……。

ゴメン、分かった。冗談なんて言ってる場合じゃないよね。だから引っ張らないでお願いだから。

「なあなあ、2人だったら良いんだろ？　オレはコイツと出る！」

「いや、僕出るとは言ってるな——」

「では、こちらにお名前を」

……無視ですか、そうですか。僕の味方は居ないんだね。

「良しッとお前の名前は？」

「…………自分で書きますよ、書けば良いんでしょ書けば！」

「…………何怒ってんだよ？」

君のせいだからね！

用紙に諏訪晃、と地味に多い画数を書き終えた僕は、小さく溜め息。

「それでは登録しておきますので、2時間ほどすればトーナメント表に書き足されていると思います」

「よっしゃー！　サンキューな…………えー、なんて読むんだ？」

元気だなあ。その元気を分けて欲しい。

「僕は諏訪晃。こっちの4人が、」

「おに…………この人の「妹ね」…………妹の諏訪桜だよ」

「私はローラと申します」

「…………フイー」

「リズだ」

1人1人自己紹介をして（1人余計な事を言おうとしたけど）、少年は1人ずつ反芻する。よし、憶えた！　と言った彼は、指で自分を指しながらニカッと笑った。

「オレは城遊大和^{きゆうやまと}！ 宜しく頼むぜ、相棒っ！」

そう言っ、少年――城遊君は肩をバシッて叩いてくる。痛い…。

「いや、パートナーが見つからなくて困ってただよなあ。良かったぜ」

「……ほぼ無理矢理だった気がするのだが」

リズ、もう良いよ。諦めたから。

僕や桜たちが宿屋に向けて歩き出すと、城遊君も僕の隣をキープして歩いてくる。

「なんで大会に出たかったの？」

「なんでって言われてもな……デュエルが好きだからに決まっているだろ？」

桜の質問にも、笑顔で答える城遊君。確かに、大会に出る理由なんてそれくらいだろうけど。ペンダントが目的な人なんて数少ないだろう。……うん、そう思いたいだけだけど。

「けれど、これで晁様も仲間外れにならないので良かったです」

「はは……僕は出る気、無かったんだけど」

「けどお兄ちゃん」

桜は僕の耳元に口を寄せて、僕にしか聞こえない声で言う。

「もしあのペンダントが………だったら」

「……………」

けれど、それだとこっちにある理由が分からないよ。その確認の為に手を持っておく必要があるかもしれないけど。

「……アツキー？」

「え？」

「表情……………曇った」

……フィー、結構人の事見てるなあ。

大丈夫、と無理矢理感のある笑顔を作って、会話に戻った。

少しして、宿屋に着いた僕たちはまず4人部屋である桜たちが寝泊りしている部屋に入った。途中、店主さんがからかって来たけど適当に流してきた。

「よし、晃！ 今から作戦会議と行こうぜ！」

「良いけど……それなら、僕が使ってる部屋に行こうよ」

「おう、良いぜ！」

……………元気だなあ（2回目）。

城遊君が先に部屋から出たのを見て、僕は桜たちに一言断ってから部屋を出た。



あのペンダントを見た時……わたしは驚きと少しの嫉妬が生まれていた。

アレは、間違いない。

お兄ちゃんの――――。

「どうしましたか？」

「え？」

気が付くと、ローラにフィーちゃん、リズさんがわたしの事を見ていた。無言で、且つ深刻そうな表情をしてたから心配かけちゃったかな。

「ううん、大丈夫だよ！」

「……………顔色悪い」

「そう？ わたしは元気だけどな」

「何かあるなら、話した方が楽になれるぞ」

……………。

皆、良い人だな。昔のあの人たちとは違う……。

この人たちなら話して良い、かな？ 異世界人だとか、そういうのは言えないけど。

「……実は、タッグデュエルトーナメントの優勝賞品になってるペンダントなんだけどね」

「ペンダント？」

「うん。アレ、もしかしたらお兄ちゃんにとって大事な物かもしれないんだ」

本当は違うかもしれないけど、もし……もしもわたしが思う物だ

ったら、お兄ちゃんがまた持たなきゃいけないんだ。

なんでユグルにあるのかは分からないけど。

お兄ちゃんにとって、何よりも大切な想い出のペンダント――
|。

「そうか……」

「どうやら私たちも、勝たないといけない理由が出来ちゃいました
ね」

「え？」

そう言って、ローラはにっこりと笑う。

「もしも晃様の大切な物なら、優勝しなければなりませんよ」

「まあ、私は晃とデュエルしてみたかったしな」

「……………優勝……………ペンダント渡して、高感度アップ」

にやり、とフィーちゃんが口元を上げる。

なっ……………フィーちゃん、あくどい！

「わっ、わたしがお兄ちゃんに渡してあげるんだもんっ！」

皆、優しくて好きだけど……………お兄ちゃんは渡さないんだから
ね！

第二章↳第一話 ペンダントと皆の優しさ（後書き）

開会式という言葉に少し違和感があった人！

そうですその通りです、私が間違えてました。

まだ大会始まらないなら、開会式じゃなくね？ と。

しかし、ここは地球じゃないし良いか！（↑ヲイ）

第二章、開幕です（＾Ｏ＾）／

第二章 第二話 トーナメント前日

トーナメントを翌日に控えた僕は、ウェーリアの国立図書館へと足を運んでいた。

本日、城遊君は用事でどこかへ行ってしまったているらしく、僕も宿屋に桜たちを置いての外出だ。

……まあ、タッグデュエルの作戦会議とやらで僕は締め出されて、部屋で無意味に過ごすよりは……と図書館へ向かって居る訳だけど。ああ、なんて疎外感。

「つと、ここかな」

『サーヴァイルよりも、少し大きいのですね』

もう少しで見過ごしてしまうところだった。

ファラの言うとおり、そこに建つ図書館はサーヴァイルにあった物よりも大きく、情報が期待出来た。

図書館の中へ進み、様々な本、及び本棚が並ぶ大きな部屋。僕は取り敢えず全ての本棚にあるプレートを見て廻った。

『それらしいものは御座いませんね……』

「うん……。ファラたちは、エンジェルとか……。デビルとかの事は知らないんだよね？」

『申し訳有りません……』

「そっか……」

まあ、何か知ってるなら話してくれる、よね。

僕が俯くのと同時に、ファラは顔を曇らせて視線を逸らした事には気付かないまま、僕は本を眺める。

そんな時、1つの記録が眼に浮かぶ。

題名は、『異世界漫遊記録く選ばれた僕らく』。

「……………」

僕はそれを手に取り、ぱらぱらとめくる。

主人公は1人の男性。20代前半の男性で、大人になっても遊戯王を止めずに居た青年らしい。

彼は若き妻と共に遊戯王を続け、ある日……妙な人間に導かれるまま異世界——ユグルへやって来たという設定。

『…………ご主人様と同じ、ですね』

「うん………」

年代や妻が居たという違いはともかく、妙な人に導かれるまま異世界へ、というのは僕にピッタシだ。僕の場合、無理矢理感がタツプリだったけど。

「……………」

——君は選ばれた。この世界でたった2人しか居ない存在の一角としてね。

——双方とももっと早く決めて欲しかったのだけど……………。

「成る程、ね」

けど、だとしたら……しかもそれだと、桜は本当に無関係だ。僕が巻き込んだ事になっちゃう。

僕の、せいで……。――。

「……………」

『ご主人様？』

「……今、この世界には僕と桜以外にもう1人、異世界から来た人が居るはずだよ。その人も多分エデラウンに向かうだろうし……………
…その人を探そう、うん」

多分、その人は……………。

ねえ、真名。

（僕は、どうしたら良いかな？）

◇
◇
◇

図書館を出た僕が向かった場所は、タッグデュエルトーナメントの会場だった。

昨日、開会式と呼べないような“もどき”をした場所。僕はトー

ナメント表を眺めながら、静かに眼を細めた。

新たに僕と城遊君の名前も追加され、僕たちはAブロックの……それもシードだった人との初戦に変更されていた。

桜&リズチームは、Dブロック。ローラ&フィーチームはCブロック。どちらにせよ、初戦じゃないから僕と試合時間は被っていない。

『ご主人様』

「ん……どうしたの？」

『……もしもあのペンダントが、ご主人様の想い出の品だったとしたならば、どうしますか？』

もしもアレが、僕の思う物だったなら……。

「そんなの決まってるよ。僕が取り返す。どんな事をしても……絶対に」

誰か見知らぬ人の手に渡るのは嫌でしょ、真名？

僕は心の中でそう問い掛けて、自嘲する。

——まだかなり引き摺ってるなあ、僕も。

「おや……？」

内心で肩を竦めていた僕は、背後で聞こえた声に反応して振り返った。

そこに居たのは、昨日、モニターに映っていた主催者だろう老人

だった。実際に見ると、髭がかなり濃く感じる。

「君は昨日、途中で参加登録をした子ですか……」

「知っているんですか」

「勿論。儂……いや、わたくしはこれでも主催者。参加する人くらいは憶えておかないと」

「気楽に喋って良いですよ。僕もその方が接しやすいです」

「なら、君もそうしてくれるかね。儂もその方が良い」

2人して、少し笑う。思ったよりも厳格とした雰囲気は無く、それこそ普通の友達みたいな話し易さがこの人にはあった。

「お主……」

「え？」

老人は見定めるように僕の瞳を見つめる。

沈黙が、少し痛い。

「お主、何を抱えておる？」

「へ……？」

「お主の眼は優しく、無垢で、真っ直ぐに輝いておる……しかし裏では、様々な闇が巣食っておるのでは無いか？」

無いか、と訊かれても僕には分からない。

「1人の少女を守れなかった罪悪感……1人の少年に感じる劣等感……妹を危険な事に巻き込んだ卑下……そして何より、自分を想ってくれる少女たちを守らなきゃ、という責務感」

「なっ……」

「ふおっふお、この年まで生きたら人の心の奥を詠よむなんぞ、朝飯

前じゃよ」

ごく、と唾を呑み込む。

この人は……………」。

「……………ほお、気にしているのはペンダントか」
「っ！」

「あのペンダントはのう。少し前に、エデラウンで拾ったんじゃよ」

エデラウン……………ユグルの中央国家で、僕が行こうとしている国。

「儂がある用でエデラウンに向かった際、その途中での」
「……………そう、なんですか」

「落ちてる物を優勝賞品にするのは気が引けたのじゃが……………随分と珍しかったのでな」

落ちてたペンダント……………まだ、僕が思うペンダントかは分からない。
い。

「そうじゃ、そういえば……………あのペンダント、宝石部分の裏に“M・A.”と彫られておったの」
「え……………！」

「——しかし、渡す事は出来ぬぞ？ 渡してやりたいのは山々じゃが、これでも主催者……………優勝賞品を変えるなんぞ、信用問題になるじゃろう」

けど……………裏に、“M・A.” って……………！ それは、僕が知ってるペンダントの目印だ——。

「欲しければ、勝ちなされ。力でペンダントを取って見なされ。お

主は、決闘者じやろう？
デュエリスト

「————失礼します」

僕には負けちゃいけない理由が出来てしまった。

違う物と考えるよりも……それが『真名の物』の可能性も高い。

ここは異世界、僕や桜……そしてもう1人の選ばれし人が来れる場所。

あのペンダントがあっても、おかしくは——無い。

「クク……」

絶対に……勝たないと……………！

「諏訪晃君……君はこれで、成長出来るかい？ 完璧な私の計画を、

狂わせないでくれよ……？」

後ろで、老人が喋っていたのを、僕は聞いていなかった。

◇ ◇ ◇

「お兄ちゃん！ どうしよう、どうしよう！？」

「わっ！ ど、どうしたの桜？」

宿屋に戻って、僕は一先ず桜たちの居る4人部屋に来ていた。入ってすぐ、桜たちが不安そうな顔をして迫ってくる。いや、不

安そうなのは桜だけでローラは困ったように頬を掻き、フィーは無表情で、リズは不敵な笑みを浮かべている。

「わたしたちの対戦相手、優勝候補なんだってっ!」

「……優勝候補?」

「……はい。私とフィー様のペアと桜様とリズ様のペアのお相手……どうやらどちらも優勝候補のようなのです」

……それは、ある意味凄いね。

「相手の4人……確か、前回のシングルデュエルトーナメントでも出場していてな。その時は1人の少年が撃退して行ったらしいが、かなりの強さだったと聞いている」

「見に行ったの、リズ?」

「いや……人が話しているのを、小耳に挟んだだけだ。顔も名前も知らない。特徴もな」

……けどまあ、ご愁傷様だね。僕もそんな経験を何回もした事あるから（僕も優勝候補として嫌がられたけど）、気持ちは分かる。尤も、ローラとフィーはそんなの気にしないしリズは上等、と言った様子。不安に駆られているのは桜だけ、か。

「大丈夫だよ。自分を信じて」

「良おし、元気出たっ!」

「早くないですか!?」

「勝ったら頭撫でてあげるよ?」

「かかってこーいっ!」

「あぁっ、桜様落ち着いてください!」

さて、ローラを苦勞人にしたところで僕の煽りは終わり。ジトー、

とフィーとリズに見られている気がするけど気にしない。

「……ところで」

今まで喋らなかったフィーが、僕の前まで来て見上げる。

「……今まで……どこに居たの」

ピタ、と桜が止まる。やりきった……と言った感じでローラはベツドに腰を下ろすと、僕のほうに視線を向けた。

「え？」

「………少し、元気無い」

あれ、バレてる。

元気が無いというよりは、ペンダントに関して心を落ち着かせようとしていただけなんだけど、まさか気付かれるとは思わなかったなあ。

「んー、ちょっと疲れたかな。ずっと歩いてたし……」

「………」

「大丈夫だよ」

そう言っつて、僕はフィーの頭を撫でる。丁度撫でやすいところにあって、フィーは一瞬気持ち良さに目を細めた。

けど、桜たちが反応するよりもっと早く、フィーは手を払い除けて僕をまた見つめ……いや、睨んだ。

「わたし、これでも18歳……貴方より年上。…………本当の事を教えて」

少しの沈黙が場を支配する。
僕とフィーの視線が絡み合う。

ふう、敵わない、かな。

「……トーナメントの優勝賞品のペンダントさ………僕の知り合いが持っていた物だったんだ」

「え………!？」

「その目印もあったみたいだし………多分、間違いない」

——アレは、真名の物だ。

「お兄ちゃん、それって………どういうこと？」

「分からない……。けど、僕は勝たなきゃいけなくなった。城遊君の力を借りて、僕は絶対に………勝ち進まなきゃ」

「ふ………気負いすぎではないか、晃？」

「え？」

リズが肩を竦めながら、不敵な笑みを浮かべたまま腕を組む。ローラもベッドから立ち上がり、桜もにこっと笑顔を浮かべた。

「私たちも手伝いますよ、晃様」

「ちょーっとヤダだけど………お兄ちゃんの為に、頑張るよっ!」

「………任せて、アッキー」

「相手が優勝候補だろうと、晃の為に戦う。私たち4人にとってこれ以上と無い理由だろう？」

皆………。

「うん……………皆、」

僕はただ、一言。

今の気持ちを表す言葉を、精一杯に言う。

「ありがとう」

第二章〜第二話 トーナメント前日（後書き）

トーナメント前の間話。

晃が何かに気付いたようです。

第三章のあらすじは出来てるのに、第二章はあまり考えて無かった……。

これが行き当たりばったりか。頑張ろう（汗）

第二章 第三話 タッグデュエルトーナメント、開幕

『それでは、一度タッグデュエルについてご説明をさせていただきます』

再びモニターに映った老人が、ごほん、と咳払いをして言った。

そういえば、タッグデュエルはどんな形式なんだろう。デュエルデイスクを使うらしいから、ゲームみたいな墓地共有はちょっと難しいだろうし。

『LPは2人で8000です。墓地やフィールドは別々で、味方の場にあるカードはその持ち主しか使う事は出来ません。また、どちらかのプレイヤーにモンスターが存在する場合、基本的に場の空いたプレイヤーに直接攻撃を仕掛けることが出来ませんので、あしからず』

ふむふむ、と隣で城遊君が頷いている。前、冴司郎とやったタッグデュエルと同じみたいだね。

『それでは、開会式は先日やったので、早速開催致しましょう』

……あれはやっぱり開会式だったんだ。

『トーナメント表を見て、1回戦目、2回戦目の人は位置についてください』

モニターがトーナメント表に変わる。どうやら追加の参加者は僕と城遊君だけのようだ。

会場にあるデュエル場は8箇所。1ブロックにつき2箇所を使っ
て行くらしく、僕と城遊君は第一デュエル場へ向かった。その後ろ

には、桜たちも着いてきている。

「あれ、お前等、何で一緒に来るんだ？」

「私たちの対戦はまだのようなので、晃様の応援に。あつ、勿論城遊様も応援致しますよ？」

「……訂正不要」

「フィー……………お前」

リズが何故かフィーを横目で見ながら溜め息を零しているけど、フィーが何か言ったのだろうか？ 僕には聞こえなかったから分からない。

会場に着いた僕と城遊君は、桜たちと一言二言交わして上場する。そこにはディスクをした2人の男性が居て、真ん中には審判だろう男性が眼鏡のズレを直していた。

「集まったな？ 早く準備をしろ」

審判が大きな態度で僕たちに言う。

言うとおりにデッキをディスクに取り付け、展開させる。一定の距離で城遊君と離れて、僕たちは対戦相手だろう金髪と赤髪の男性2人組を見た。

「はあ、あ、こんな事するんなら女ナンパしてる方がマシだぜ」

「けど、優勝したら女にモテんぜ？」

「そりゃそうだろうけどよ？」

随分とチャライ人たちだなあ。ああ言う人は少し苦手だ。

「おつ、あの子達可愛くね？」

「ん？ おおっ！」

2人が見てるのは桜たち4人。男性2人は桜たちを見つけると、一気に視線を伸ばして髪をセットし始めた。そして、桜たちにウイंकをした。

「キモイ、ウザイ、死ね」

「フィー様、それは少し言い過ぎでは……？」

「フィーちゃん、ナイス！」

「私はああ言う輩が嫌いだな。フィーの言葉に同意する」

……………なんだかなあ。

一気に振られた男性2人は、顔を真っ赤にして僕と城遊君を睨む。
鬱憤うつぶんを晴らそうって言うんだろうか。

どちらにせよ、

「あっははははっ！ ひ、くく………！ 駄目だ、腹いてエ………！」

城遊君は笑い過ぎだと思ふよ？

『それでは準備も整ったようじゃし、初めましようかね。今日1日で各ブロックの優勝者を決め、明日には決勝トーナメントを始めるつもりですから、張り切って戦ってください。では、初め！』

老人が一気に締め括って、デュエルが開始される。

僕たちもディスクを構えて、いつもの言葉を言った。

「」「デュエル！」「」

4人なのに良くハモれるね？

「オレ様のターンから行くぜ、ドロォっ！　行くぜえ、オレ様は《ジェネティック・ワーウルフ》を召喚！」

攻撃力は2000。通常モンスターの下級アタッカーでは最高クラスを叩き出しているモンスターだ。

獣か、ビーストか……？

「そして、《デーモンの斧》、《魔導師の力》2枚、《団結の力》、《ビッグバン・シュート》を装備するぜっ！」

「……………わぁ」

《ジェネティック・ワーウルフ》ATK2000↓9200。

「おお、すげえ！」

「……確かに凄いね。初ターンにやることじゃないけど」

破壊耐性を持たせるカードを使うならともかく……いや、もしかするともう1人の赤髪の男性がモンスターを守る……例えばカウンターデッキとかなのかもしれない。

流石に何の算段も無く、こんな事はしない……はず。

「オレ様はターンエンドだぜっ！」

「よおし、オレのターンだ、ドロォっ！」

さて、城遊君のデッキはなんだろう。

「オレは魔法カード、《騎士没落》を発動！　手札を1枚捨てて、デッキに眠る2枚の“騎士”^{ナイト}を墓地へ送る！　効果により、《白騎士》^{ホワイ}と《赤騎士》^{レッドナイト}を墓地へ！」

騎士——僕の知らないカード群が、墓地へ送られる。

「そして、《^{ブラックナイト}黒騎士》を通常召喚！　そして、《黒騎士》の効果が発動！　1ターンに1度、墓地にある騎士を2枚デッキに戻す事で、相手フィールド上に表側で存在するモンスターを1体、ゲームから除外するっ！」

「なっ、何イ！？」

「オレは墓地にある《赤騎士》と《^{ブルーナイト}青騎士》をデッキに戻し、《ジェネティック・ワーウルフ》を除外するぜっ！」

《青騎士》は、手札コストだろう。黒き騎士……見た目だけなら《終末の騎士》に似てる……が剣を振るうと、ワーウルフの目の前に異空間が現れ、装備カードもろとも飲み込んでいく。

勿論、装備カードは墓地だけど。

うっしゃ！　と城遊君は握り拳を作って、逆に悔しそうに金髪の男性は握り拳を作った。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「おいおい、何やってンだよ……俺のターンだぜ、ドロー！」

赤髪の男性がドロウする。

「ちっ、手札ワリイな……俺ア魔法カード、《地割れ》を発動するぜ」

「あっ、オレの《黒騎士》が！」

「カードを2枚伏せて、ターン終了だ」

「待った！　お前のターンのエンドフェイズ時、リバーズカードオープン！　罠カード、《騎士の怨念》！　墓地に存在する騎士の数だけ、効果が変わるカードだ！」

墓地にある騎士は2体、確か《黒騎士》と《白騎士》だったはず。

「今は2枚以下！ それにより、フィールド上の魔法、罠カードを2枚まで破壊できる！ その伏せカードを破壊するぜ！」

「ちいっ！」

破壊カードは《天罰》と《マジック・ジャマー》。どうやら金髪の人が高攻撃力で、赤髪の人がパームでモンスターを守る作戦だったらしい。

「ありがとう、城遊君！」

「おう！ あ、オレの事は大和で良いぜ」

「分かった。じゃあ僕のターン、ドロっ！」

これは……良い手札。ライフは共通で8000。
もしかすると……………？

「——良しっ！ 僕は永続魔法、《ドルコンヴァート》を発動！」
「ドル？ 聞いた事ないぜ？」

……僕も騎士なんて、《終末の騎士》や《アルカナ・ナイト・ジヨーカー》とかしか知らないよ。後者はカタカナだけど。

僕の背後に、工場が現れる。ご丁寧に、普段よりも少し小さく現れていた。

「それじゃ、2枚目の《ドルコンヴァート》を発動！」

「わあ、お兄ちゃん……それは鬼畜だよ」

ほっという。

「僕は《第六人形 ツキ》を召喚！ このカードが召喚に成功した時、デッキから守備力500以下の人形を特殊召喚出来る！ おいで、《第四人形 セイ》！ そしてこのカードが人形モンスターの効果により特殊召喚に成功した時、手札の人形を特殊召喚出来る！ 続いて、《第二人形 カイ》！」

一気に並ぶ人形たち。僕のデッキを始めて見るローラとリズが、感嘆の声を上げていた。

「LV3ツキとLV3カイをLV1、セイにチューニング！」

そういえば、ユグルに来てから君のシンクロ召喚は初めてだったね、なんて思いながら僕は頭に響く声に身を委ねる。

「我の中に我、真実の我を探し当てよ！ 殻に籠りて、チャンスを伺わん！ シンクロ召喚、裂き咲け……《分裂人形 マトリョーシカ ペドラ》！」

現れる人形は、背の小さな女の子。見た目は普通な女の子なのに、あの子の身体の中にはもっと小さなペドラがいるとは……余り考えたく無いかもしれない。

しかし、ペドラを見て一つ思う。

………人形シリーズって、美少女ばかりだなあ。

「宜しく、ペドラ」

『っーん』

「ぺ、ペドラ？」

『あたいたちにも、ちゃんと出番出してよねー。待ちくたびれたんだけどー?』

「う……ご、ゴメン」

『……仕方ないなー。このデュエルで1ターンキル出来たら許してあげよーかなー』

……………頑張ろう。

「この瞬間、人形モンスターが墓地に送られた事により、その数だけ《ドールコンヴァート》に人形カウンターが乗る！」

《ドールコンヴァート》人形カウンター0↓3.

《ドールコンヴァート》人形カウンター0↓3.

「そして、ペドラがシンクロ召喚に成功した事により、効果を発動！ デッキからドールと名の付いた魔法、罠カードを手札に加える！ 《ドールサイクル》を手札に加え、発動！ 墓地にあるツキ、カイ、セイをデッキに戻し、」

ディスクが勝手にデッキをシャッフルしてくれる。

「2枚ドローっ！ カードは《第一人形 クー》と《第七人形 コウ》！ ドローしたカードが2枚とも人形モンスターだった場合、お互い確認してさらに1枚ドローする！」

手札は5枚。狙うはペドラが言ったように、1ターンキルだ！

「魔法カード、《ドールインヴァイト》！ クーをコストに、デッ

キからLV2以下の人形……《第三人形 チー》を守備表示で特殊召喚！」

「すっげー！」

城遊君……もとい、大和君が目を輝かせている。

《ドールコンヴァート》人形カウンター3↓4.

《ドールコンヴァート》人形カウンター3↓4.

「チーの効果を発動！ 墓地のクーを除外し、同名カードを特殊召喚する！ おいで、クー！」

再び、モンスターが並ぶ。その間に挟まれたペドラは、うんうんと満足気に頷いていた。

「1つの《ドールコンヴァート》に乗っている人形カウンターを2つ取り除き、チーのLVを2つ上げる！ LV4のクーにLV4になったチーをチューニング！」

《ドールコンヴァート》人形カウンター4↓2.

レベルは、8……！

「命を伝えるは神秘なる水滴！ 雫が流るるは花の涙！ シンクロ召喚、咲き乱れよ——《華散り人形 ファラ》！！」

フィールドに降り立つファラ。隣のペドラと目を合わせた後、僕を一瞥してくす、と笑った。

《ドールコンヴァート》人形カウンター2↓4.

《ドールコンヴァート》人形カウンター4↓6.

会場に響く歓声。対戦中のはずである人たちも、僕たちに注目していた。いや、たちというよりは、僕かな。

「《ドールコンヴァート》に乗っている人形カウンターの数だけ、僕のフィールドに居る人形たちは攻撃力が200ポイント上がるよ！」

「な……！」

《分裂人形 ペドラ》1100↓3100.

《華散り人形 ファラ》3000↓5000.

「さらに、ペドラの効果を発動！ フィールド上に存在するモンスターを選択し、1ターンに1度、その選択したモンスターの攻撃力、守備力を入れ替える！ ペドラの守備力は2700だ！」

《分裂人形 ペドラ》1100↓2700↓4700.

相手の場にモンスターどころか、カードは無い。赤髪の手札にフェーダーとかが無ければ――。

「僕からバトルは出来るんだよね。バトルフェイズ！ ペドラで相手プレイヤーにダイレクトアタック！」

金髪、赤髪LP8000↓3300.

「続いて、ファラでトドメだ！ 百花繚乱っ！」

「なんだよ、これえええええっ！」

「くっそおおおおお！」

金髪、赤髪LP3300↓0.

何とかペドラに許して貰いながら、僕は第一回戦を順調に勝ち進んだ。

第二章〜第三話 タッグデュエルトーナメント、開幕（後書き）

印象深く、同時に手早く終わらせる為、1ターンキルさせて頂きました。

良いその他大勢^{モブ}キャラでした、あの二人WWW

第二章 第四話 ローラの戦い

会場では、既に次の人たちがデュエルを始めていた。

僕と大和君は桜たちが居る場所へ戻って、試合時間までの合間を休んでいる。

「人形シリーズ……やっぱり、聞いた事が無いですね」

「うむ……しかし、晃は強かったのだな。私の目に狂いは無かったという事か」

そういえば、最初リズは僕の事を誘っていたっけ。

なんて思い出して、その後桜たちにリズの事を言った時の苦労も一緒に脳裏を過ぎって、僕は一気にブルー。

……………忘れよう。

「お兄ちゃん、最強だもんねっ！」

「……………流石。ぱちぱち」

「ははは……照れるね」

ぱちぱち、と無表情で拍手されるのも少し恐いけど、純粹に嬉しくもある。自然と顔も赤くなっていった。

「けど、冴司郎には負けちゃうよ」

「あれ、冴司郎とは五分五分じゃないっけ？」

「ううん、どうだっただろう？　ちゃんと数えた事無いし……………」

一応世界大会では引き分けで終わったけど。けれど、どちらかと言えば僕が押されていた事は確かだ。

「つーかさ、“こうしろー”って誰なんだ？」

「あ、それは私も思ってたました」

大和君の言葉にローラも頷く。

そういえばちゃんと説明、というか紹介はした事無かったつけ。

「榊洸司郎。僕の唯一無二の親友で、ライバル……かな。どうやら桜にデュエルモンスターズを教えたのも洸司郎らしいんだ」

「そそ。洸司郎も強いよー？ お兄ちゃんほどじゃないけどね」

あはは、と空笑い。

「そんなに強いんなら、デュエルしてみてーな」

「確かに……しかし、晁と同等、もしくはそれ以上に強いのなら噂くらいは届きそうなものだがな」

「あゝ、えと……僕や洸司郎が居た村って小さくてさ。地図にも載ってないし、それでじゃないかな？」

疑わしげに見つめられてるけど……流石に異世界から来ました！
なんて言ってもイタイ目で見られるだろうし、時が来るまでは黙
ってた方が良さだろう。

桜にも、その旨は伝えてある。

「……まあ、良いか」

「………つんつん」

「え、どうしたの？」

フィーが、僕の腕を突付いた。

「わたしとローラ……………呼ばれた。出番」

「……………どうして僕に言うの？」

「頭撫でて」

はい？

頭に疑問符が5つくらい出てきたけど、言われるがままに頭を撫でる。気持ち良さそうに目を細めたフィーは、騒ぎ始めた桜に不敵な笑みを零す。

「……………アッキーエナジー充填完了」

「……………」

……………フィーって口数は少ないけど、かなり印象深いよね。一言一言が心に残るというか、キャラが濃いいというか。

暫く僕たちの出番も無いようだし、桜たちのデュエルももう少し先みたいだ。

そう確認した僕たちは、ローラとフィーの後ろを着いていくようにデュエル場へ向かった。



審判だろう女性と対戦相手の男性2人。デュエル場に着いた私たちは、間を開いてディスクを展開しました。

相手は優勝候補として名高い、登録名『リツキ律稀』という人と『シヨウタ翔太』という人です。

「翔太。おれ、遊んで良い？」

「えっ……」

「がんばっ！」

けっ、と悪態を付く翔太様。遊ぶ、と言った律稀様ですが、油断は禁物です。

「では、始めてください」

「「デュエル（です）」」

デュエル、と言ったのは私とフィー様だけで、お2人は言いませんでした。

「私のターンです、ドロー！ ……私は《氷結界の紋章》を発動します！ 効果により、デッキから《氷結界の軍師》を手札に加え、召喚しますっ！」

フィールドに現れたのは、深い青をした服を身に纏ったおじい様です。

「そして、軍師の効果を発動します！ 手札の《氷結界の守護陣》を墓地に送り、1枚ドローします！ カードを1枚伏せて、ターンを終了します」

これで、私の手札は4枚。中々の始まり方が出来たと思います。

「おれのターン、ドロー。モンスターをセット、カードを3枚伏せてエンド」

「……………ドロー」

フィー様が静かにドローします。律稀様の伏せカードは3枚もあるので、迂闊な行動は避けたいところですが……………。

「……………《スクラップ・シャーク》を召喚。カードを1枚伏せ……………エンド」

何らかの魔法、罠、モンスター効果が発動すると自壊してしまうシャークです。《スクラップ・シャーク》は、睨むように律稀様と翔太様を睨んでいます。

……………少し、恐いですね。

「ドロー」

少しの間。

「《カード・ガンナー》を召喚、効果。デッキから3枚墓地へ送る」

落ちたカードはこちらには見えませんが、少し離れているとは言え隣に居る律稀様には見えたのか、ぷつ、と噴出しています。

……………一体何が落ちたのでしょうか？

「……………この時、シャークは自壊。このカードが自壊した時、デッキからスクラップモンスターを墓地へ……………《スクラップ・ビースト》」

「バトルフェイズ入りしたい」

「リバース罠、《リミット・リバース》を発動します！ 墓地に居る《氷結界の守護陣》を特殊召喚します！ このカードは他に氷結界モンスターが表側表示で存在する限り、このカードの守備力以上

の攻撃力を持つ相手モンスターは攻撃宣言を行う事が出来ません!」

《氷結界の守護陣》 ATK200 DEF1600.

今は《カード・ガンナー》も自身の効果により、攻撃力は1900へと上昇しています。

「メイン2、カードを1枚セットしてエンド」

「私のターンです、ドロー!」

手札は5枚。

「私はLV4、軍師にLV3守護陣をチューニングします!」

封印されし第2の龍、来て下さい。

「神槍の如き氷の龍よ、凍て付く息吹で世界を蹂躪し、破壊の渦を巻き起こせ! シンクロ召喚、凍り付け《氷結界の龍 グングニール》!」

——成る程……今回は彼、では無いのだな。

「えっ……」

今の声……もしかして、グングニール、ですか?

そんな問いに答える代わりに、グングニールは咆哮する。やる気は十分、と言った様子です。

「グングニールの効果を発動します! 手札を2枚捨てて、律稀様の魔法、罠カードを2枚破壊します!」

「あ、モンスターじゃないんだ」

え、駄目……でした？

ぼそつと呟く晃様の声に、少し冷や汗が湧きます。

「破壊された《荒野の大竜巻》の効果！ セットされたこのカードが破壊されたら表側カードを破壊。グングニール死ね！」

「あぁっ」

「律稀、酷いね」

もう片方は《禁じられた聖槍》でした。

「……大丈夫、ローラ？」

「だ、大丈夫です……多分」

手札を2枚消費したというのに、グングニールは破壊されちゃいました。これは少し、キツイですね。

「私は《スクリーチ》を召喚し、バトルフェイズへ移行します！ さっきの仕返し……律稀様のモンスターに攻撃です！」

「あ、カーガンじゃないんだ」

え……また、駄目でしたか？

「ハウリング・インセクト《共鳴虫》の効果。デッキから《アルティメット・インセクトLV3》を特殊召喚！」

「LVモンスター！？」

「……タッグデュエルには不向き」

フィー様の呟いた言葉に律稀様が何か嘆いています。自覚してい

るのでしょうか。

「私はこのままターンを終了します」

「おれのターン、ドロー！ スタンバイ、LV3の効果により生け贄にして《アルティメット・インセクト LV5》を特殊召喚！」

アルティメット・インセクト……確か、攻撃力を下げる効果を持ったモンスター群だったはずです。

LV5の減少数値は確か……500.

「《大樹海》を発動して、バトルフェイズ。《アルティメット・インセクト LV5》で《スクリーチ》を攻撃！」

「っ……」

《アルティメット・インセクト LV5》ATK2300.
《スクリーチ》ATK1500↓1000.

ローラ&ファイールP8000↓6700.

「《スクリーチ》の効果が発動します！ このカードが戦闘破壊され墓地へ送られた時、デッキから水属性モンスターを2体、墓地へ落とします！ 効果により、《氷結界の破術師》と《氷結界の御庭番》を墓地へ！」

「モンスターを伏せて、エンド」

「……わたしのターン、ドロー」

私たちの場に、モンスターは居なくなっていました。有るとすれば、ファイ様の場にある伏せカードが1枚と私の場にある対象の無い《リミット・リバーズ》くらいでしょうか。

「……モンスターをセット。カードを伏せ……終了」

うう……序盤は私のせいで劣勢での開始です。

晃様の為に勝とう、と活き込んだ私ですが……いきなり足を引っ張ってしまい、意気消沈です。

でも……。

「……………」

！
晃様の見ている手前、格好悪いところは……見せられませんよね

第二章〜第四話 ローラの戦い（後書き）

律稀と翔太のデッキは、リアル友達の物です。

ちゃんと名前は改名してますが、7月7日現在のデッキ内容にしたつもりです。

本当は性格……口調も似た感じにしようと四苦八苦してましたが……。

はい、途中から諦めました（汗）

そういうのは“紫苑の槍”様に任せましょう！（ヲイ）

第二章 第五話 フィジールの戦い

……残念ながら、わたしの手札はそれ程良くは無い……。

………良く考えると、わたしとローラはデュエルに慣れていない……はず。

聴いた話によると、ローラは生け贄として育てられ……わたしは奴隷だった。

桜のように誰かに教えられた事も無く……リズのように成長しようとは思わなかった………。もしかすると、アッキーの方がわたしのスクラップやローラの氷結界を上手く回せる可能性もあるけど。

——アレ、もしかしたらお兄ちゃんにとって大事な物かもしれないんだ。

桜の言った言葉に……重みがあった。わたしやローラが想像するよりも大切なペンダント、なのかもしれない。

………負けれない。それは、ローラもわたしも同じ気持ち。

「オレのターン、ドロー。カーガン効果で3枚落とす」

……墓地肥やしをするショウタ。未だに何のデッキかは判らない。

「………よし。フィールド魔法、《ギアタウン歯車街》を発動」

歯車で出来た街が形成される。確かあのカードは——。

アンティーク・ギア
古代の機械……。

「で、フィールド魔法を新たにセット。《歯車街》が破壊されて、効果でデッキから《古代機械巨竜》アンティーク・ギア・ガジェルドラゴンを特殊召喚」

「っ……………」

攻撃力は、伝承にある白き龍と同じ3000……スクラップとの相性も良いと、サーヴァイルに居た時の知り合いが教えてくれた。

「《ジャンク・シンクロン》を召喚し、効果で墓地にある《ボルト・ヘッジ・ホッグ》を特殊召喚。LV8でシンクロ」

《ジャンク・シンクロン》と《ボルト・ヘッジ・ホッグ》、そして《カード・ガンナー》が星となってモンスターを生み出す。

モンスターは――。

「《スクラップ・ドラゴン》！」

「……………！」

……………まさか……わたしが出す前に出されるとは思わなかった。
……むう。

「スクドラ効果で、セットされたフィールド魔法と……モンスターを破壊」

「……………」

破壊されたわたしのモンスターは、《スクラップ・ゴブリン》。

「じゃあ、破壊された《歯車街》の効果を発動。デッキから2枚目の《古代機械巨竜》を特殊召喚！」

「……待った甲斐有り……リバースカード……《激流葬》」
「っ！」

流される3匹の機械の竜。その中の1匹は屑鉄の集められた竜だけだ。……ついでに虫も。

「スクドラが破壊されて、効果発動！ 墓地にある《スクラップ・リサイクラー》を守備表示で特殊し、効果。デッキから機械族モンスターを墓地に落とす……《ボルト・ヘッジ・ホッグ》を墓地へ」

……そういえば……あのネズミ、機械だった……。

「ターンエンド」

「ありがとうございます、フィー様！ 私のターン、ドロー！」

……ローラの手札はわたしと同じ、3枚。わたしの中には伏せカードが1枚……ローラの場合は対象の無いリミリバ。

相手の場合はショウタ、リツキ共に伏せカードが1枚。リツキの方にはさらに《大樹海》もある。

「賭けますっ！ 私は《強欲なウツボ》を発動！ 手札にある《フィッシュ・ボグ・ガンナー》と《氷結界の術者》をデッキに戻して、3枚ドローします」

大きな手札交換……。

ローラは手札を確認すると、大きく深呼吸した。

「《融けた邂逅》^{かいこう}を発動します！ 墓地に居る、《氷結界の軍師》のLVを1つ下げ表側守備表示で特殊召喚！」

《浮上》に似たカード……カード名が限定されたり、元々がLV1のモンスター……例えばブリズドなどが出せなくなった制約はあれど、モンスターを並べたい“氷結界”には嬉しいカード……。

「軍師の効果を発動し、《氷結界の術者》を墓地に落として、1枚ドローします。魔法カード、《浮上》を発動！ 《氷結界の守護陣》を守護表示で特殊召喚！ そして、LV3となった軍師にLV3の守護陣をチューニング！」

……………ローラばかりシンクロして、ズルイ……。

「瞬く氷河に眠りし気高き虎王よ、轟き吼えて降霜を纏え！ シンクロ召喚……来て下さい、《氷結界の虎王 ドウローレン》！！」

こう、と……空気が冷たくなる。

“氷結界”において、3匹の龍とは異質を期した氷結界の王……どこことなく凜と立ったドウローレンの姿は、正しく王のようだった。

「ドウローレンの効果を発動します！ 表になっているカード、《リミット・リバーズ》を手札に戻して、攻撃力を500ポイント上げます！」

《氷結界の虎王 ドウローレン》ATK2000↓2500.

「バトル！ ドウローレンで、プレイヤーにダイレクトアタック！」
「……貫う」

律稀&mp;翔太LP8000↓5500.

「メインフェイズ2に移行します。カードを2枚伏せて、ターンを

終了します」

「おれのターン、ドロー！……墓地にある《アルティメット・インセクト LV3》を除外して、《ジャイアントワーム》を特殊召喚！で、《プチ・トマボー》を通常召喚！」

……………《プチ・トマボー》？

「LV6でシンクロ。闇チューナーに昆虫族だから……《地底のアラクネー》をシンクロ召喚！効果で、ドゥローレンを吸収！」
「あっ！」

アラクネー
蜘蛛の放たれる糸に絡み取られ、虎王が吸収される……。

「バトルフェイズ、アラクネーでダイレクト！」
「きゃあっ！」

ローラ&mp;、フィジーLP6700↓4300。

「ターンエンド」
「……ドロー」

手札は4枚……………。やっと引けた。

「《スクラップ・キマイラ》を召喚……効果で《スクラップ・ビースト》特殊……LV4とLV4でシンクロ」

キマイラとビーストがチューニングされる。

「眠れる魂が動き出す……犠牲を糧にただ、破滅を願う……。鉄屑の演舞を眺め、傍観するが良い……躍動せよ、《スクラップ・ドラ

ゴン》……………!」

ゴメンね、アッキー……………台詞……………借りた。
ローラもしていたし……………良いよね?

「スクドラ効果を発動……………わたしのセットカードとショウタの伏せカードを破壊」

「罨発動、《リミット・リバーズ》! 《カード・ガンナー》を蘇生! 破壊された事により、1枚ドローする!」

「そう……………わたしの罨は《荒野の大竜巻》。このカードがセットで破壊されたら、表側カードを破壊できる……………対象は《地底のアラクネー》」

アラクネーが破壊されて、吸収されていたドウローレンがローラの墓地へ戻る。

アラクネーは戦闘破壊での身代わりしか対応していないのは……………助かった。

「バトル……………スクドラでダイレクト」

「っ……………」

律稀& a m p; 翔太LP5500↓2700.

後スクドラ1体分で終わり……………。

「……………ターン終了」

「ドロー! ……モンスターと伏せカードをセットして終了」

「私のターンですね。ドローします! 私は《氷結界の紋章》を発動します! 《氷結界の武士^{もののふ}》を持ってきて、召喚! バトルフェイズに移行します!」

相変わらず……ローラの手札は0枚。けれど、1枚の伏せカードはリミリバ。相手が攻撃しようとしても、守護陣を出してロックは出来る。

「武士で、裏モンスターを攻撃します！」

「モンスターは《巨大ネズミ》！ 効果によって、《マインフィールド》をリクルートする！」

「……私はこのままターンを終了します」

モンスターはリクルーターだった……それに、《マインフィールド》はフィールドから墓地へ送られたときに墓地のフィールド魔法を1枚、回収する効果を持つ………。

迂闊にスクドラで破壊は出来ない……。

「おれのターン……ドロー！ 墓地の《共鳴虫》と《ジャイアントワーム》を除外して、《デビル・ドージャー》を特殊召喚！」

……！

攻撃力はスクドラと同じ2800。戦闘ダメージを与えたらデッキトップを墓地へ落とす効果を持つ、昆虫族モンスター。

「……《アーマード・ビー》を召喚！ 効果で、《スクラップ・ドラゴン》の攻撃力を半分にする！」

《スクラップ・ドラゴン》ATK2800↓1400。

「バトル！」

「待ってください！ リバースカード、《リミット・リバーズ》！ 守護陣を蘇生して……」

「チェーンして、速攻魔法！^{サイクロン} リミリバを破壊する！」

そのまま、スクドラは蜂に倒されてしまう……。

「っ……スクドラが相手によって破壊された事により、墓地のスクラップを1体蘇生させる……《スクラップ・ゴブリン》を守備表示」

ローラ&p;、フイジーLP4300↓4100.

「続いて、《デビル・ドーズー》で《氷結界の武士》を攻撃する！」

ローラ&p;、フイジーLP4100↓3100.

ローラは静かにデッキトップを墓地へ……。その時、苦い顔をしたのが見えた。

「ターンエンド」

「わたし……ドロー」

……………。

「《スクラップ・ゴブリン》リリース……《スクラップ・ゴーレム》通常召喚……」

「リバーズ、《サンダー・ブレイク》！ 手札の《始皇帝の陵墓》をコストに《スクラップ・ゴーレム》を破壊！」

「っ……カードを1枚伏せて、エンド」

……強い。

わたしたちがやろうとしている事が、悉く切り返しをされて居る……………。

「ドロー……………《テラ・フォーミング》。3枚目の《齒車街》を手札に加えて、発動！ バトルフェイズ、《マインフィールド》でダイレクトアタック！」

「ヤバイ……………ですね」

ローラ&ファイジールLP3100↓1600.

「ターンエンド」

「…………私のターン…………ドロー、します」

ローラが引いたカードを見て、静かに沈黙。

どうやら……………わたしたちの、負け。

アッキーが、何かを呟く声が聞こえた――。

◇
◇
◇

「お疲れ様……………」

ローラの顔を見て、僕は小さく声を零した。良いデュエルだったよ、本当に。

ローラは小さく俯いて、ターンの終了を宣言した。

「おれのターン、ドロー！」

律稀君が声高らかにドロースる。よし、やるか！ と律稀君は何かを生き込んでいる。

フィーのフィールドにカードは無く、ローラの場には伏せカードが1枚。そのカードは恐らく、2枚目の《強欲なウツボ》。

見えたカードは魔法カードだったし、僕はブラフという言葉を覚えてまだ間も無く……そしてローラのデッキで腐り易いカードと言えはウツボか《サルベージ》だ。

けれど、《サルベージ》で回収して壁にするくらいなら出来る。とすれば。

あのカードが《強欲なウツボ》である可能性は、高い。

「《デビル・ドローザー》と《アーマード・ビー》を生け贄にして、《地縛神Uru》を召喚！」

——地縛神。

まさか……ユグルでは普通に普及してとは思わなかったね。

何故かは分からないけれど、ユグルで普及していないモンスターは有名な通常モンスターたち……ブルーアイズ、レッドアイズ、ネオス……そしてブラマジの4種類だった。

ブラマジが無いからか、《熟練の黒魔術師》や《黒魔術のカーテン》は勿論、《ブラック・マジシャン・ガール》も無いのは驚いた。

……閑話休題だね。

「バトル！ 《地縛神Uru》でダイレクトアタック！」

ローラ&、フィジーLP1600↓0.

最後は地縛神の強烈な攻撃によって、ローラとファイアの第二回戦は終わりを告げた。

第二章 第五話 フィジールの戦い（後書き）

デュエルって面倒だなあ（ヲイ）

デュエル無しのイベントを起こしたい……………むう。

取り敢えず、律稀の最後のプレイングは無理矢理だ……………しかし、気にしない（笑）

第二章／第六話 リズの戦い（前書き）

今回の対戦相手も、現実の友達を持つデツキを拝借致しました。

第二章 第六話 リズの戦い

「残念だったね」

「うう、すみません……」

「……むう」

一回戦敗退。モニターでは、律稀君と翔太君のペアが赤い線で上へ登っていた。

「2人の分も、わたしが頑張るよっ！」

「私も、負ける気はしない。特に私と桜のデッキは相性が良いからな」

そう言って、リズは不適に笑う。多分、もう少してリズたちの出番だね……僕と大和君は最初に戦って、今Aブロックはどこまで進んでるんだろう。

出来れば桜たちの一回戦の応援はしたいところだから、もうちょっと長引いてくれると嬉しいなあ、なんて。

僕たちは桜たちが戦うデュエル場の近くまで移動して、時間まで待つ。

「リズさんっ。お兄ちゃんが1ターンキルだったんだし、わたしたちも狙おうね！」

「……難しいな。私は堅実にやらせて貰いたいが……」

「いつもの調子でやった方が良いと思いますよ？ 私みたいにプレイミスはしないように……」

自分で言っちょんぼりするローラ。自分より背の低いフィーに頭を撫でもらう姿は少し不思議な光景だ。年齢ではフィーの方が

年上なんだけど。

そういえば……。

桜が14歳、ローラが15歳。僕が16でリズが17、フィーは18歳……綺麗に揃ったね。

……なんてどうでも良い事を考えてしまおうだろう、僕は。

「……？　なんでお兄ちゃん、自分の頭叩いてるの？」

「……自己嫌悪というか、しゅくぜつ肅正というか……ううん、ナンデモナイよ？」

ちなみに、さっきから大和君が空気なのは眼をキラキラさせて周りのデュエルを眺めているからだ。両手が震えているのは、デュエルしたくてうずうずしてるからだろうか。

……ホント、遊戯王GXの主人公に似てるよね。

「桜様たちの対戦相手は………ジュンヤ淳也様とコウスケ康介様みたいですな」
「そうだな。こういう相手なのか、楽しみだ」

確かに……優勝候補になるくらいだし、相当なんだろう。

『Aブロック……城遊大和様と諏訪晃様。時間ですので、第二デュエル場まで来て下さい』

呼び出し。女性の透き通った声が会場に響いた。

「あれ……もう出番？」

「……………早い」

「うー。お兄ちゃんがわたしの応援してくれないなんて……………やる気半減」

そう言われたら行き難いよ……仕方ない。

「なるべく早めに終わらせるよ。そうだね……勝ったら頭撫でてあげるから」

「リズさん、マケナイヨ〜ニネ？　ネ？」

「う、うむ……善処する」

桜……少し怖いよ。

そんな桜とリズに頑張っただけ、と言を残して僕はその場を後にした。

ちなみに……大和君は既にデュエル場でうずうずしながら待っていた、というのは余談。



……しかし、先程の桜は怖かったな。晃と桜は兄妹だと聞いているが、どうやらかなりのブラコン、というものらしい。

尤も、私もその気持ちはかなり分かるが。

まず、優しい。誰かの為に戦い、傷付く事なんて本当はとても難しい事だろう。

そして、強い。デュエル云々も……心も。

あんな晃だからこそ、皆それぞれ好いているんだろう。桜は勿論、ローラやフィー……そして、私も。

彼と一緒にならば、妙な安心感を持てるのも私だけでは無いはず。

その彼が、とても大事にしていたというペンダント。それがどんな代物か、どんな思い入れがあるかは分からない。

けれど。

けれども、そんな事知らずとも想い人の為に戦えるのなら、これ程喜ばしい事ではないだろう。

例え優勝候補だろうと、勝とう、と私は思う。

「それではデュエル、初めて下さい」

「「デュエル！」」

先攻は私、か。対戦相手である淳也殿と康介殿を一瞥し、カードをドロローする。

「私は《闇の誘惑》を発動！ カードを2枚ドロローし……《ブラック・ボンバー》を除外する！ フィールド魔法、《竜の渓谷》！ 手札の《ハウンド・ドラゴン》をコストに、デッキから《ドラグニティーアキュリス》を墓地へ！」

良し……序盤からキーカードを墓地に落とす事が出来た。

「《サイバー・ダーク・ホーン》を召喚！ このカードの召喚に成功した時、墓地より《ドラグニティーアキュリス》を装備する！」

《サイバー・ダーク・ホーン》 ATK800↓1800.

「カードを1枚伏せて、ターンを終了する」

手札は3枚。次のターンは淳也殿か。一体どんなデッキを使うか、些か楽しみだ。

「ドロー、つと。……《テラ・フォーミング》。デッキから《虹の古代都市ーレインボー・ルイン》を手札に持ってきて、発動！さらに、《宝玉の樹》を発動！」

「っ……宝玉獣、か」

溪谷が虹の架かる美しい都市へと変貌する。その姿に暫し見惚れてしまうが、淳也殿はプレイングを続けた。

「《宝玉獣 サファイア・ペガサス》を召喚！ 効果発動——」

「ルインの効果、1つ目は確か破壊耐性だったな……召喚成功時、リバーカードオープン！ 《ダブル・サイクロン》！ 私の場にある《ドラグニティ・アキュリス》とレインボー・ルインを破壊する！」

「なん……だと」

……？ その驚き方、面白いな。

「さらに、アキュリスの効果だ！ 装備魔法のこのカードが墓地へ行ったことにより、フィールド上のカードを1枚……サファイア・ペガサスを破壊する！」

「破壊された事により、サファイア・ペガサスを魔法・罠ゾーンへ……それと、サファイア・ペガサスの効果は発動する！ デッキから《宝玉獣 ルビー・カーバンクル》を永続魔法扱いとして魔法・罠ゾーンに置く」

《サイバー・ダーク・ホーン》 ATK1800↓800.

何とかルインの破壊には成功した、か。ルビーとサファイアだと思われる宝石が、淳也殿の場に現れる。

「2体、宝玉獣が魔法・罠ゾーンに置かれたから《宝玉の樹》にジエムカウンターが乗る。そして《宝玉の樹》を発動！ このカードを墓地に送り、ジエムカウンターの数だけデッキから宝玉獣を魔法・罠ゾーンへ置く……《宝玉獣 トパーズ・タイガー》と《宝玉獣 アンバー・マンモス》を選択！」

「ち……」

破壊対象を間違えた、か？ しかし、ルインは宝玉獣の中核。残しておくとならば、損になってしまう。

しかし……既に淳也殿の魔法・罠ゾーンにある宝玉獣の数は4体。序盤の流れは持ってかれたか？

「魔法カード、《宝玉の導き》を発動！ 永続魔法扱いの宝玉獣が2体以上居る時、デッキから宝玉獣1体を特殊召喚する！ 《宝玉獣 エメラルド・タートル》を守備表示！」

「か、壁まで出されちゃったね……」

もしもあのデッキに宝玉の龍が入っている場合、既に5種類。そして、手札は2枚……これは、早めに決着を付けないといけない、か？

「ターン終了」

「わたしのターン、ドロっ！」

手札を見て、桜はむう、と唸る。それ程手札は良くないか？

……中々大変なデュエルになりそうだな、コレは。

「……あんまりやりたくないなあ……けど、やるしか無いよね。お兄ちゃんの為に！」

……………声高らかに宣言しなくても良いと思うぞ？

「《おろかな埋葬》！ デッキから、《神竜 ラグナロク》を墓地へ送るよ！ それで《思い出のブランコ》！ ラグナロクをこのターンのエンドフェイズまで蘇生して、手札から《融合呪印生物一闇》を召喚！」

《思い出のブランコ》……そういえば、何らかの思い入れがあると言っていたのを思い出す。絶対に抜きたくないカードだと、デッキ構築の際呟いていたが……？

いや、今はそんな事を言っている場合では無いな。

「《融合呪印生物一闇》の効果を発動！ ラグナロクとこのカードをリリースして、おいで！ 《竜魔人 キングドラグーン》！！」

このデュエル初めての高レベルモンスター。桜のデッキの主役ご登場だ。

ソリッド・ビジョンでは初めて見るが……流石魔人と呼ばれるだけの事はある。凄い迫力だ。

「キングドラグーンの効果を発動！ 手札から、《ガード・オブ・フレムベル》を守備表示で特殊召喚！」

《ガード・オブ・フレムベル》、か……LV1のチューナーモンスター。守備力も2000あり、場持ちが良い。

手札に上級ドラゴンが居なかったか……桜が余りやりたくない、

と言った理由はそこか。

手札も2枚になった。どうやらやる事も無くなったようだし、後は康介殿か。

「わたしはエンドだよっ！」

「ドロー。《光の援軍》発動。3枚落として……ライコウを手札に」「ら、ライトロード、かな？　うわぁ……」

桜が嫌そうな顔で肩を落とす。何か思い出でもあるのか、やる気が幾分か削がれているような気がする。

ライトロードなど、結構な人数が使っているような物だがな。

「ソラエク発動。ジェインコストに2枚ドローして2枚落とす。モンスターと伏せカードを1枚セットしてターン終了」

しかし、モンスターを略称してばかりだな、康介殿は。ディスクを使っているから、それだけでは正式名称が分からない場合も多いというのに。

しかし、ライトロードは有名なカード群。分からない人も少ないか。

さて、ここからが本番だな。

桜の場にはキング・ドラグーンと守備力の高いモンスターが居るにしても、淳也殿のフィールドにも守備力2000の宝玉獣。

さらには永続魔法扱いの宝玉獣が4体。康介殿のあの伏せモンスターは恐らくライコウだろう。墓地もある程度肥えてしまっている。

少し遠いが、別のデュエル場で戦っている晃を盗み見る。相手ターンのプレイ中のように、真剣な面持ちでその様子を眺めていた。

——良し。桜ではないが………晃の為に、頑張るとしよう。

◇
◇
◇

「——よっしゃー！ 2回戦突破だぜ！」

大和君の直接攻撃によって、デュエルは勝利に終わる。

……相手のデッキは面白い事に、《自爆スイッチ》を成功させる為だけのデッキだった。《ギフトカード》でこちらのライフが3000ポイント回復したり、《成金ゴブリン》をされたり……《光の護封壁》されたり。

幸いだったのは、彼らがその《自爆スイッチ》を引く事が出来なかった事かな。

「お疲れ様、大和君」

「おう！ お前はあいつ等の応援行くのか？」

デュエルが終わって、僕はと大和君に近付いた。嬉しそうにへへ、と笑う姿は無邪気な子供のようだった。

「勿論。まだ終わってないみたいだし」

「そっか。んじゃ俺は、どこか違うところ見てくるぜ！ また後で会おうな！」

「うん、分かった。それじゃあ後でね」

大和君と別れて、僕はローラとフィーが応援している場所へ向か

う。

1人の少年……確か康介君が《ソーラー・エクスチェンジ》を發動していたのが少し聞こえてきたから多分、康介君のデッキはライトロードだと思う。

フィールドを見ると、淳也君のデッキは宝玉獣か。相性はなんとも言えないけれど、桜とリズの顔を見るとそれ程良くは無い状況みたいだね。

「ただいま」

「……おかえり」

「あ、晃様。もう終わったのですか？」

「うん。相手が勝手に自滅してくれたから」

護封壁で。

それはともかく、珍しく桜は僕の事に気付いていないみたい。

なんて、思ったんだけど。

「くんくん……お兄ちゃんの匂い！？ あ、お兄ちゃん！！」

「匂いで分かるんですかっ!？」

「……………僕、そんなに臭いかな」

自分で自分を嗅いでみるけど、全然分からない。

……………少しショック。

「……お兄ちゃん？ ねー、なんで落ち込んでるのーっ？」

「……まさか、晃……負けてしまったのか？」

あ、誤解されてる。

気を取り直そうかな……うん。宿に戻ったら真っ先にシャワー浴

びようかなあ、なんて多分すぐに忘れるだろう事を考えながら咳払いをして、大きく息を吸う。

「僕は勝ったよ！ 頑張って、桜！ リズ！！」

「……！ ああ、もちろ——」

「元氣一億倍だよ、お兄ちゃんっ！」

……リズ。大丈夫、リズの気持ちもちちゃんと届いたよ？

「あれ……どうしてでしょう。今のリズ様に親近感が湧きます」

「……仲間………不憫という意味で」

「あ、泣けちゃいます……納得ですけど」

………なんか、個性豊かなメンバーだなあ、なんて。

もしかして僕、一番影薄いかも。

そんな事に少しばかりしよんぼりとしながら、デュエルは再開された。

第二章 第六話 リズの戦い（後書き）

まず、1つ。

淳也（仮名）様の宝玉獣デッキですが、本来は《宝玉の樹》も入っておりませんし、そもそも虹龍型ではありません。

しかし、そこは私の希望で変えさせて頂きました。

まあ、虹龍型にするということは本人にも言っているのですが、《宝玉の樹》に関しては完全に私の独断です。

本当に申し訳御座いません（汗）

第二章 第七話 桜の戦い

お兄ちゃんが応援に来てくれて、心臓の鼓動が激しくなっている。テンションが上がっているのは自分でも良く分かって、小さく深呼吸した。

お兄ちゃんが見てると、いつもコレだ。心臓の音が煩くて、緊張して、嫌われたくないから頭の中で勝手に言葉を選んじゃって……なのに、どこまでも好かれないから積極的に甘える。

少しでも会話したくて、構って欲しくて……なるべく天真爛漫に動く。全部……お兄ちゃんの為。

兄妹なのに………イケナイ気持ち、なのかな？

昔からお兄ちゃんが好きで、大好きで……お兄ちゃんの為に最初は全く興味も無かった遊戯王を初めて、ユグルまで来て……。

お兄ちゃん。わたしね、凄く聞きたい事が多いんだよ？

お兄ちゃん、今好きな人居る？ 真名ちゃんの事は振り切れた？ 将来の夢、わたしや洗司郎にも言ってくれないけど、どうして？ なんで皆に優しいの？ 振ってきた相手にも優しくして、期待を持たせちゃうのはどうして？ もしかして、無意識なの？

——わたしがユグルに着いて来て、迷惑じゃなかった……かな？

けれど、それを訊く勇氣は無くて。勢いに任せたキスも、同じベツドの上で眠る夜よりも……それは難しいんだ。

お兄ちゃん。

お兄ちゃん。

いつか……聴いてみたいな。お兄ちゃんの、気持ち。

「私のターンだ、ドロー！」

リズさんの手札は4枚。フィールドには装備モンスターの居なくなった《サイバー・ダーク・ホーン》が1体のみ。

《ダブル・サイクロン》と《ドラグニティーアキュリス》のコンボで2枚破壊できたのは良かったけれど、正直不利。

「私は《調和の宝札》を発動する！ 《ドラグニティーファランクス》を墓地に送り、2枚ドロー！ ……………よし」

康介さんの伏せモンスターを一瞥して、コクとリズさんは頷く。

「私は《サイバー・ダーク・ロッド》を召喚する！」

「「ロッド……？」」

お兄ちゃんとわたしの声が重なる。

ロッド……地球には無かったカードだね。裏サイバーシリーズはホーン、エッジ、キール。そして融合モンスターのドラゴンを含めて4種類だけだったし。

L Vは4で、攻撃力も他と同じ800。

「ロッドの召喚に成功した時、効果により墓地より《ハウンド・ドラゴン》を装備する！」

《サイバー・ダーク・ロッド》ATK800↓2500。

「さあ、バトルフェイズだ！ 《サイバー・ダーク・ロッド》で康

介殿の伏せモンスターに攻撃！」

「モンスターはライコウ！ 破壊対象は――」

「残念だが、ロッドが戦闘破壊したモンスターの効果は無効化される。ライコウの戦闘破壊はもう確定している為、破壊する事も墓地を肥やす事も出来ない。残念だったな」

つまり、サイバー・ダーク版のハ・デスって事かな。日本と違って優秀なサイバー・ダークが出て来てるな。

ライコウは効果が無効化され、静かに墓地へ落ちていく。

「私はこのままターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

淳也さんの手札は3枚。宝玉獣って、実は氾濫軸しか知らないんだよね……レインボー・ドラゴンの方が格好良いけど、やっぱり強さを求めちゃうのかな？

わたしのこのデッキも、元々はブルーアイズが入ってた。けど、この世界には無いらしいからそれを抜いたんだけど……むう、なんか悔しい。

……実はこのデッキ、お兄ちゃんやリズさんにも言ってない特別なカードが入ってるんだ。勿論、本当なら入らないカード。

けどね？

「ロマンって大切だよねっ！」

「ど、どうした桜……？」

「へ？ あ、ううん、なんでもないよ？」

あうう、恥ずかしい……。

つい叫んじゃった。お兄ちゃん、変な子って思っただけかな？

「《宝玉獣 アメジスト・キャット》を召喚！ バトル！ アメジスト・キャットは攻撃力を半分にして直接攻撃出来る！ ダイレクトアタック！」

「くっ……」

桜&リズLP8000↓7400.

……なんか、アメジスト・キャットがわたしを避けてリズさんの方へ一直線して行ったのは気のせいかな？

「それじゃ、エンドで」

「わたしのターン、ドロー！」

手札は3枚、か。

「《スタンピング・クラッシュ》！ 淳也さんのルビーを破壊して、500ポイントのダメージ！」

「あっ！」

キングドラグーンが尾を払うと、永続魔法になっていたルビーが破壊される。その破片は飛び散り、淳也さんを襲った。

……なんか、痛そう。

淳也&康介LP8000↓7500.

「キングドラグーンの効果を発動するよ！ 手札から《サファイア・ドラゴン》を特殊召喚！ さらに《仮面竜》を召喚！ 《サファイア・ドラゴン》と《仮面竜》に《ガード・オブ・フレムベル》をチェーンニング！」

えと、台詞台詞……うう、お兄ちゃんたちみたいに来ないよお。

「うう……そうだ！ えと、集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！ ……だったかな？」

「合ってるよ、桜！ ……アニメの台詞だけだね」

「じゃあ、シンクロ召喚！ 飛翔して、《スターダスト・ドラゴン》！」

ユグルにはちゃんとスターダストやブラックローズとかがあって良かった。

「バトルフェイズ、行くよ！ 《竜魔人 キングドラグーン》でエメラルド・タートルに攻撃！」

亀さんは永続魔法にならず、そのまま墓地へ行った。

「続いて、スターダストでアメジスト・キャットに攻撃！ えと……し、シューティング・ソニック！」

「さ、桜様ってあのモンスター、凄いい好きなんですネ」

「……そうだったのかな……洗司郎なら知ってそうだけど」

淳也&康介LP7500↓6200.

「わたしはエンドね」

「じゃあ、ドローつと。ジェイン召喚して1伏せ、エンド。2枚落とす」

……早いなあ。なんて感想は駄目かな？

その上手札は4枚もあるんだよね……むう、厄介。

「私のターン、ドロースる！　ここは……攻めあるのみ、だな！
私は《サイバー・ダーク・エッジ》を召喚し、墓地の《ドラグニ
イーファランクス》を装備！　そして、ファランクス自身の効果に
より、装備カードとなっているこのカードは自分の場に特殊召喚す
る事が出来る！」

モンスターが並ぶ。相手は宝玉獣とライトロード、どちらも1タ
ーンキルが可能なデッキだから、早々に決着を付けようとしてるん
だと思う。

「LV4のエッジにLV2のファランクスをチューニングする！
敵の源を削る葬送の竜よ、奔れ！　シンクロ召喚、《C・ドラゴン
》！」

シンクロ素材に指定の無いLV6のドラゴン。結構汎用性が高い
ドラゴンだけど、ライトロード相手に戦闘ダメージは与えたくない
よね。

……けど、確かにもう結構な墓地肥やしはされてる。それならダ
メージを与えよう、という感じかな？

「バトル！　《サイバー・ダーク・ロッド》で《ライトロード・パ
ラディン　ジェイン》にこうげー！」

「あ、じゃあ《オネスト》で」
「……………え？」

《ライトロード・パラディン　ジェイン》1800↓4300.

桜&mp;リズLP7400↓5600.

「うわぁ……凄いいっさり」

「く……わたしはバトルフェイズを終了。カードを1枚伏せて、ターンを終了する」

「俺のターンドロロー！ ……………良しっ！」

……嫌な予感がするなあ。この感じ……確か、洸司郎に――。

「魔法カード、《宝玉の氾濫》！」

――1ターンキルされちゃった時みたいなの、嫌な予感？

「あ、氾濫は破壊じゃなくて墓地に送るだからスタダの効果は打てないよ」

「あれ、そうだったっけ！？」

破壊だと思ってたよ。

わたしががっくり、と肩を落としている間にキングドラグーン、スターダスト、リズさんの場に居る《C・ドラゴン》が墓地に送られる。ついでに康介さんのジェインと伏せカード、《王宮のお触れ》も墓地へ。

「相手のカードを3枚墓地に送ったから、墓地からサファイア・ペガサス、トパーズ・タイガー、アンバー・マンモスを特殊召喚！ サファイア・ペガサスが特殊召喚に成功した時、デッキから《宝玉獣 コバルト・イーグル》を永続魔法扱いとして魔法・罨ゾーンに置く」

……うひゃー。

わたしやリズさんのデッキに、ゴーズとかトラゴは入ってない。勿論フェーダーとかも入ってないし……。

「……負けちゃったなー……………」

小さく呟いて、はぁ、と溜め息を零した。

「フィールド、墓地に7種類の宝玉獣が居るから、俺は《究極宝玉神 レインボー・ドラゴン》を特殊召喚っ！」

「えっ!？」

虹色の龍……………凄い。ソリッドビジョンじゃこんなに格好良いんだ。

スターダストとかとは比類しない美しさと優美さに、暫し見惚れる。

「か、格好良いー…………お兄ちゃん、凄いよっ!」

「うん、見てるよ。凄いね」

負けちゃったのは残念だったけど、最後にこんな綺麗なもの見られたなら良い、かな。

…………けど。

「バトルフェイズ!」

お兄ちゃん、ごめんね。

◇ ◇ ◇

「お疲れ様」

「うう〜……」

「すまない、晃……予想以上に強かった、のでな」

ううん、と僕は首を横に振る。

「デュエルは楽しむものだよ？ 誰かの為とかって思うより、自分の為にデュエルしなきゃ。ね？」

「……………ふ、お前には一番言われたくない言葉だな」

そうかな？

……………まあ、確かにユグルに来てから楽しむだけのデュエルなんて数少ないかも。ローラの時もフィーの時も、そしてリズの時も……………そういえば命懸けだったつけ。

「桜様？ どうしたのですか、そんな悔しそうに……………やっぱり、負けたのが……………」

「勝ったらお兄ちゃんに頭撫でもらう予定だったのに……………」

「……………やっぱり」

フィーは予想通り、と言った風に頷く。僕もそんな事だろうなあ、なんて苦笑した。

僕は涙眼で頬を膨らませている桜の頭に手を乗せて、優しく撫でてやる。驚いたように桜が動いて、ツインテールが揺れた。

「お兄ちゃん……………」

「良く頑張ったね。お疲れ様でした、桜」

「……………あ、えと……………うん」

こんな大人しい桜も珍しい。いつも元気なのに……恥ずかしがってるのかな？ そうだとしたら可愛い。

それはともかくとして、残念ながら桜、リズ、ローラ、フィーの4人は全員脱落か。

「私達の方まで、頑張ってくださいね、晃様！」

「……………応援してる」

「お兄ちゃんには桜が着いてるから心配ないよっ！」

「応援しているぞ。必ず勝って、あのペンダントを取って来い」

「……うん。皆の方まで、頑張るよ」

——ペンダント、か。

そういえば結局、あのペンダントはなんでここにあるんだろう？

僕は空を見上げながら、思う。

（真名……君が、持ってきたの？）

第二章〈第七話 桜の戦い（後書き）

はい、これで桜たちは全員敗北という事になりました。

現実友達である淳也（仮）様は桜ファンなので、例え小説内でも嫌われたくない！ と仰っていたから虹龍を登場。格好良い人、という印象を植え付けた……という設定にしておいてください（笑）

第二章 第八話 過去—マフラーと雪とペンダント—

——その日は、有宮真名ありみやマナの誕生日まで後1週間を残した寒い日だった。

「もうすぐ誕生日だね、真名」

2人きりの味気ない部屋で、僕は白いベッドに腰掛けながら微笑む。

黒く艶のある髪の毛はセミロング。髪ペンで前髪を流した真名が恥ずかしそうに顔を赤らめて俯く相変わらぬ姿に、僕は愛しさを感ずる。

「何か欲しい物ある？」

「そ、そんな……私は、その……この前の晃君の時に良いのあげられなかったし……」

「そう？ コレ、凄く嬉しいよ」

手編みで編まれたマフラーを持ち上げながら言う。正直、お金で買う物よりも手編みの方が僕は嬉しいんだけど……。

けど真名にとっては、それ以外に何も出来ないって思ってるらしくて落ち込んでしまっている。

「それどころかさ……僕は手編みとか、手作りの物は出来ないから……」

「わ、私はっ！ ……………あ、えと、あ、晃君が傍に居てくれれば……………あうう」

「真名……」

言ってる途中から恥ずかしくなったのか、顔を真っ赤にしてまた俯く。

……可愛い。

僕はほぼ無意識に、真名を抱き締めた。

「えっ……!？」

「僕は真名が好きだよ。だから、僕も真名と同じ気持ち。ずっと一緒に居たい」

「……………」

「だから、ね」

——この場所は、病院。県で一番大きな総合病院の個室にて、真名は昔から過ごしているらしい。

僕が真名と出会ったのは、数ヶ月前。僕は洸司郎を巻き込んで（不本意だったけど）不良同士の喧嘩に首を突っ込んだんだ。

僕が油断して怪我をして、病院へ。その時、洸司郎は居なかった。父親との約束があったらしくて、僕が無理矢理そっちを優先させたんだ。

真名は、僕と出会うまで……独りだったみたい。

僕が始めての友達で、初恋の人で、恋人で……大事な人だって、言ってくれた。

「真名……そんな正体不明の病気なんかで、死んだら……駄目だよ」



「うーん……何が良いかなあ」

「まだ悩んでんのか？」

誕生日を明後日に控えた今日。授業の合間に、僕は机の上でだらっとながら悩む。

前の席にいる洗司郎が苦笑しながら振り向いてくる。

く……そのイケメンの顔と背の高さは僕の敵だ。ジーツ。

「な、なんだよその目？」

「洗司郎がバフォメットに襲われる想像を」

「恐ろしいわっ！ なんっー事想像してんだよっ！？」

ちなみにバフォメットというのは、洗司郎がメインで使うデッキのフェイバリットカード。ヤギの魔物だから、結構怖い外見をする。

「まあ、それは9割冗談として」

「1割は本気なんだな？」

「真名って何をあげたら喜ぶんだろうな」

真名の好きな色は青。好きな食べ物はリンゴ、動物は猫。

……猫のぬいぐるみ、じゃ駄目、だよな。きつと。

「……行きたくないけど、行ってみようかな」

僕はそう呟いた時、次の授業を担当する教師が教室に入ってきた。

——時は早々に流れ、放課後になった。

今日は寄るところがある、と洗司郎に断って走る。途中鉢合わせした桜は洗司郎に押し付け……………任せ……………頼んで、僕はいつもの帰宅路から外れた路地を走った。

人通りの無い薄暗い場所。太陽の光は周りの建物で遮られ、影のせいか妙な肌寒さを感じる。

そんな路地にある、不気味な雰囲気漂う店。洗司郎も桜も知らない、僕が昔迷い込んだ時に見付けたお店。

「お邪魔しまー……………す」

家でもないのにそう言ってしまう僕は、小心者なのだろうか。

「ん……………おお、久し振りになるかい、諏訪の御仁^{ごじん}」

諏訪の御仁、と僕を妙な呼び方で呼ぶお爺さん。縮んでいるのか、背は僕の半分くらい。伸びた髭が顔を隠している。

「どうした、こんな辺鄙^{へんび}な場所に？」

自分のお店を辺鄙な場所って……………やっぱり相変わらず変な人だ。そんな感想を抱いて、僕は元々の目的を思い出して辺りにあるアクセサリーや不気味な代物を見渡しながら口を開く。

「誕生日プレゼントを探しに来たんです。ここなら良い物が有りそうだったのさ」

「ほおほお。それは友達かい、家族かい？」

「……………恋人、です」

……恥ずかしいな。

僕は真名が好きだと断言出来るし、本人には何回もその気持ちを伝えている。けど、改めて恋人、と告げるのは少しの気恥ずかしさが僕を襲う。

「ふむ……諏訪の御仁にも恋人が出来ちまったかい。あれま」

「え？」

「何でも無いさね。じゃあ………こんなのはどうかね？」

持ち出されたのは、一匹の猫が立っているぬいぐるみ。ただ可愛らしくは無く、右手に包丁、左手には小さな人間の人形を持って笑みを零している。

……口の端には、赤い液体が滴っている。

「……………他に有りません？」

「この魅力が分からないとは、諏訪の御仁も堕ちたのかね」

「いや、昔も分からなかったと思いますよ？」

むむ、と眉を潜める店主。

様々に並ぶアクセサリー。薄暗くて見えにくいから、顔を寄せながら中を見て廻る。

「なら、これはどうかね？」

「え？」

そう言っ僕に差し出してきたのは、ペンダントだった。

中央には蒼い水晶が嵌め込まれた、丸い先端を持ったペンダント。淡く輝くその姿に、僕は少しの間見入る。

店主から受け取り、水晶の裏を見る。そこにはプレートのような

ものが付いていた。

「その裏には少しだが文字を彫れる。もし望むなら、文字も彫ってやるが？」

「良いんですか？」

「なあに、諏訪の御仁の恋人へと贈る大事な物ならば、安くしておこう」

ペンダントを店主に渡す。

「なんて彫るんじゃ？」

「あ、と……“M・A”で」

「はいよ」

有宮真名。そのイニシャルでM，A。そういえばこのペンダントの値段聞いてないけど……。

既に彫り始めてくれている姿を見ると、訊くに聞けない。

後で良いか、と僕は彫り終わるまでの間店を廻る。糸に括られたマリオネットで遊んだり、卵型のマトリョーシカで楽しんだりしながら時間を潰していると、店主に声を掛けられた。

「終わったぞ。これで良いかね？」

ペンダントを受け取って、裏を見える。そこにはまるでプロがやったみたいに綺麗に彫られたM，Aの文字が。

「ありがとうございますっ！ あのお値段は……？」

「おお、そうだったそうだった。忘れていた」

……忘れてたって。

「そうじゃな……1000円で良い」

「え、そんな安くて良いんですか？　というか、今決めた……？」
「儂は気分で値段を決める。今日は気分が良いからのう」

けけけ、と怖い笑みを浮かべる店主。少し頬が吊ってしまったけど、無理矢理直して笑顔を浮かべた。

ついでにその後、店主さんの優しさで包装までして貰ったのだった。



誕生日当日になった。

病院の屋上に2人で上った僕たちは、外で降る真っ白な雪を見て吐息を漏らす。

「……綺麗、だね……」

「……うん」

まだ殆ど積もっていない雪。幻想的なその空間は、何故か足を踏み入れるのを躊躇ってしまう。

「どうする？　真名、病人だし……」

「……行きたい……。雪の冷たさとか……その、感じたい、から」
「……そっか」

車椅子を引いて、屋上に足を踏み入れる。たまに雪で滑りそうになるのを堪えながら、手摺りの近くまで移動する。

雪降る町。そこには僕が通う高校や僕と桜の家も見えた。少し視線を巡らせば、離れた場所にある洗司郎の家とカードショップ・フロストも確認出来た。

……あそこがいつも僕と洗司郎が待ち合わせしているところだ、なんて不思議な感覚に襲われる。

「寒くない？」

「……す、少し寒い………けど」

眼を細めながら町を眺める真名。一度も町に下りた事が無いという真名は今、どんな気分なんだろう。

ずっと自由だった僕に、その気持ちは分からない。

だからせめて、今の真名が少しでも幸せだと感じられたらな、と思う。

僕は手に持ったバッグから包装された袋を取り出して、真名の横にしゃがむ。首を傾げて真名が視線を僕に向けた。

「メリークリスマスと誕生日おめでとう、真名。これがプレゼントだよ」

「え……い、良いの？」

「勿論」

包装された袋を何ともいえない表情で見つめる真名。

「あ……開けて、良い……かな？」

「うん」

ゆっくりとした動作で袋を開ける。

ペンダントを手に取った真名は、小さな声で綺麗、と呟いた。

「裏を見てごらん」

裏返して、掘られた文字を読む。小さな声で彫られた文字を呟いて、真名は笑った。

「晃、君……！」

「気に入ってくれた？」

「うん、うん……！ このM・Aって、真名と晃君、だよね」

……へ？

「……あ、違った……かな？」

「う、ううん！ そうだよ？ うん。」

……まあ、いっか。

真名がペンダントを首に掛けようと悪戦苦闘していたので、僕はそのペンダントを借りて首に付けてあげる。

首から垂れ下がった蒼い水晶を眺め、また綺麗、と零した。

「ありがとう、晃君……」

「どう致しまして。それでさ、真名」

「え……？」

真名の眼を見て、僕は“もう1つのプレゼント”を口にする。

「それはクリスマスプレゼント。誕生日プレゼントが全然思い浮かばなくてさ」

「そ、そんな！ 別に……その、この前も言ったけど………」

「僕がしたいんだ。けど、さっき思い付いた」

病院へ向かう途中、思い付いたんだ。

「真名、何か願い事ある？」

「ふえ……？」

「僕が出来る事なら、叶えてあげるよ」

金銭面もまだ多少は余裕あるし。これがプレゼントって呼べるかは分からないけど、これで真名が喜ぶならしてあげたい。

どんな事でも。

「じゃ、じゃあ………えと、その」

顔を真っ赤にして俯く真名。視線をあちこちに巡らせて、言葉を探している。

「私と………き………キス、してくださいっ！」

「え……？」

「………あう」

あ、可愛い。

じゃなくて。

今、キス………って言った？ 流石にそれは予想外。僕的にはデート、とかまでが予想範囲だったのに。

「………良いの？」

「………」

コク、と小さく頷く。真名の頭に乗った雪を払って、そのまま僕は真名の肩に手を乗せた。

真名は未だに顔が真っ赤だけど、静かに瞼を下ろして待っている。

僕も自然と顔が熱くなるのを感じて、心臓の鼓動が痛い。

「晃……君」

呟く声はまるで誘惑のように響く。

少しずつ顔を寄せる。

そして――。

僕と真名のファーストキスが、交わされた。

「……はうう」

「え、真名っ!？」

まさかの気絶……それも予想外だよ。

僕が真名を支えて。真名は幸せそうな顔で気絶している。

――僕の手編みのマフラーと真名の蒼いペンダントが、重なった。

第二章└第八話 過去ニマフラーと雪とペンダント一(後書き)

真名可愛い(＜―＞)

私の好きなローラを抜いて一番好きで(r y

第二章 第九話 精霊たちの想い

——まさか、早々に負けてくれるとはな。

諏訪晃の仲間……諏訪桜にローラ・レイフェル・メイサ、フィジー・オールド・ランナ……リズ・フォルン・サレイル、だったか。俺が大会参加不能にしてやろうかと思ってたのに……まさか、何も知らない一般人にやられるとはな。

しかし、好都合か。

俺が手を下す必要も無くなったということ。彼女らは幸運か。もしも俺がやっていたら、良くて身体は利かなくなり悪くて死亡していたのだから。

どちらにせよ、これで良い。

天使側の都合も、悪魔側の都合も知らない。俺は俺がやりたいようにやる。

尤も、悪魔側の男など興味は無い。俺が興味を持ったのは天使側の主人公、^{ヒーロー}諏訪晃のみ。

さて。

お前は俺を退屈させないでくれるか、人形遣い——？



「楽勝だったな、晃！」

「楽勝なんて言ったら悪いよ。Aブロックの決勝戦は結構苦戦したよ？」

「そりゃ、フルバーンだったし仕方ないだろ？　ま、それでも勝てる俺らは最強ペアだなっ！」

ははは、と空笑い。

時は既に夜。タッグデュエルトーナメント予選も終わり、僕と大和君は宿屋まで戻っていた。とは言っても、大和君はもうすぐ帰るみたいだけど。

「んじゃ、また明日な！」

「うん。バイバイ」

少しして、大和君が部屋を出て行く。

今頃桜たちは、お互いにアドバイスし合いながらデッキ改造をしているだろう。そのような事をさっき話していたのを小耳に挟んだ。余り邪魔はしたくないよね。

『もうお休みになるのですか？』

「……なんでだろう。あんまり眠くないんだよね」

ファラの質問に、僕は首を傾げながら答える。

デュエルを何回もやったけど、そんなに疲れてない。僕はデッキの入ったケースをテーブルの上に置いたまま大きく伸びをした。

「……少し、散歩でもしようかな」

『また夜にお出かけなさるのですね』

「う……」

……確かに。

まあ、それも僕の個性って事で。そう自分に言い訳して、フアラと共に部屋を出て鍵を閉めた。

ローブも羽織ってないしデッキも持ってないけど……良いよね。制服のYシャツの裾をズボンから抜きながら、僕は宿屋を出て街を歩いた。

「思ったより寒くはないね」

『はい』

人通りは多くない。けれど、時折柄の悪そうな男性や露出度の高い女性が多い。特に後者からは、たまに話し掛けられたりもした。女性のお誘いからは丁重にお断りしながら、僕は街の外れまで辿り着く。

人はさらに少なく、建物も殆ど無いからか空が視線を覆った。

「……今日は半月、か」

半分に欠けた月が僕らを見守ってくれている。雲1つ無い空にはその半月と共に数多い星が世界を照らしてくれていた。

優しく、淡い光。満月ほど眩くもなく、新月のように薄暗くも無い。それこそ儂い光とも呼べるような光輝。

「……………」

『気にしているのですか?』

「え？」

ファラの声に振り返ると、そこには大勢の人形が僕を見つめていた。

ファラ、ペドラ、ソウカ、ライア、テト、アリス。
クー、カイ、チー、セイ、ヨウ、ツキ、コウ。

僕はそんな人形の精霊たちに囲まれて居る。

「……そう、だね。凶星だったし」

——1人の少女を守れなかった罪悪感……1人の少年に感じる劣等感……妹を危険な事に巻き込んだ卑下……そして何より、自分を想ってくれる少女たちを守らなきゃ、という責務感。

あはは、と乾いた笑みが零れる。

「僕は真名を守れなかった。僕は洸司郎みたいに強くない。僕のせいで桜を巻き込んだじゃった。それに……皆、僕を想ってくれてる。皆女の子なんだよ？ 男の僕が守ってあげなきゃ」

守ってあげなきゃ、いけないんだ。

僕が、絶対に。

「今度こそ……。真名みたいな思いは……したくない」

『……………優しすぎるのです、ご主人様は』

「……え？」

何故か辛そうに眼を伏せているファラ。ペドラは諦めたように溜め息を零し、ソウカは眼を細めて僕を見つめている。

一方でライアは機嫌悪そうに僕を睨んでいるし、テトは画用紙とペンを胸に抱え、アリスは僕と眼が合うとさっと逸らしてしまった。

『……正直な事を言わせて頂きます。その際、私たちを嫌って頂いても構いません』

「そんな……」

『ただ、1つだけ。ご主人様を想う全ての人形たちは皆、同じ思いです』

ファラが、僕の眼を真っ直ぐに見つめる。

『正直なところ、私たちは桜さんたちがどうなろうと興味は御座いません』

「えっ？」

『私たちはご主人様。貴方さえ居て下されば何も要りはしません。地球も、ユグルも、精霊界も……ご主人様の為とあれば即座に切り捨てるでしょう』

流れ星が、流れた。それを視界の淵で捉えても、僕はそれに反応する事が出来なかった。

ただ、ファラの美しい瞳から視線を外せない。

『真名さん、洗司郎さん、桜さん、ローラさんにフィジーさん、リズさん……ご主人様のご両親は勿論、その他これから先関わっていくでしょう存在も、私たちにとっては不必要で御座います』

その眼には、決意が。

『例えば……ご主人様と私たち精霊の誰かが天秤に掛けられたとしましょう。当然の如く、何の躊躇いも無く……私たちはご主人様を助け、その精霊を見殺しに致します』

その瞳には、悲壮と悲愴が。

『恋、などちっぽけな想いでは御座いません。愛、などと曖昧な想いなどでは御座いません』

その双眸には……僕が。

『これは………ただの、狂気です——マイ・マスター晃様』

そう言ってファラは跪き、僕の手の甲にキスを下ろした。



安らかな風が吹く。その風は静かに僕の風を撫で過ぎ、ウェーリアの外へ飛散した。

「ありがと、皆。そんなに想われてるのに、皆を嫌いになれないよ」

『ご主人様……』

確かに、それは狂気かもしれない。けど、僕はその気持ちが少し分かる気がした。

真名を失う、となった時。僕は同じような事を考えたんだから。

「けど……僕はやっぱり、罪悪感や劣等感、責務感は拭えない。フアラたちが僕の悩む姿を見たくないって言われても、完全には消せないよ」

『……そうですか』

「だからさ……」

僕が言うのも少し嫌だけどなあ。

「僕は皆を守る。洗司郎の隣に居られるように頑張る。無事に……帰ってみせる。フアラたちには……さ、そんな僕を隣で支えて欲しいんだ」

『支える、ですか？』

「うん。ずっと僕の傍で………ね？」

にっこりと笑ってフアラたちを見渡すと、皆きよとした表情から笑顔に変わっていく。

『ご主人様のお望みとあれば』

ありがとう、と僕が告げようと口を開く。

『ご、ご主人様っ!？』

あ、れ……視界が、暗い―――？

◇
◇
◇

『大丈夫ですか、ご主人様？』

「うん……なんとか」

そういえば精霊って、僕とかに触れるんだっけ？

つい流しちゃったけど、僕の手の中にあきしたときも感覚があったし……アニメでもそんな描写があったような……ここはうろ覚えだけど。

ただ、僕をここまで運んでくれたってことはそうなんだろう。

『どうやらただの過労のようだぜ。ったく、人騒がせなマスターだ』

「あはは……ごめん」

ライアが溜め息交じりに言ってくる。けど、さっきまで心配で部屋をうろろうとしていたのは知ってるよ？

『確かに……今思うとユグルに来てから余り休んでおりませんもの。』

倒れるのも当然ですわ』

『最初は妹と会ってー、翌日には旅してー……魔王の息子とやらとデュエルしちゃったりしてー？』

『フィーちゃんを助ける為にデュエルして、リズちゃんの為にもデュエル！』

ソウカ、ペドラ、テトの順番でユグルの思い出を出を辿ってくれる。

テトは画用紙を僕に見せてきた。

僕のベッドの横で泣きそうな顔でこくこくと何回も頷いているのはアリスだ。

『少しは身体を休めないと、桜さんたちを守るどころの話では御座いませんよ？』

「……だね。実感したよ」

はあ、と溜め息を零す。

『もう今日は絶対安静ですね』

本当はまだ眠くないんだけど、流石に倒れた身体で散歩、だとかは言えない。本音を言ってしまうえばもっと半月を見ていたいんだけど……ファラたちの眼が寝てください、と言っている。

……僕を本当に想ってくれているからこそその気持ちだから、僕には何も言えない。

そもそも、倒れてすぐに我侭言っても仕方ない、か。

「……もう寝るよ。何かあったら起こしてね？」

『分かりました。ごゆっくりお休みください。アリス、お休みのキ

スは我慢してください』

『……チッ』

眼閉じたから分からないけど………今の舌打ち、もしかしてアリス？ 初めての台詞が舌打ちって……。

そんな事を思いながら、僕は静かに意識を落としていった――。

第二章〈第九話 精霊たちの想い（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございます！

ここで1つ報告です。

これからも数多くの番外編を私はしていくと思うのですが、基本的には三種類で行こうと思っています。

- 1、ヒロイン毎の話。
- 2、リアル友達などのデッキを使用、及び登場させてのデュエル。
- 3、前の登場人物紹介などのように、ゲストを呼んでの雑談。

勿論、他にも何か案がありましたらそちらにする事も多いと思いますが（汗）

……さて、話を変えますが、読者様にアンケートをしたいと思います。

番外編にて、ヒロイン毎の話は誰が良いか、こういう話が見たい！

というのがあればどしどし意見を下さい！

なるべく、それを反映させたいと思っています！！

番外編 晃の忘れたい過去……？（前書き）

皆さんのおかげで、PV20000を迎えました。

それを祝って、番外編です！

番外編 晃の忘れたい過去……？

高校1年生の秋。紅葉が舞い、夏のように暑くもなく冬のように寒くもない中途半端な季節がやって来た。

僕……諏訪晃の誕生日ももう少しだけど、その前に僕や洸司郎が通う高校では毎年恒例の行事が始まる。

そう。文化祭だ。

「ではこのクラスでは、コスプレ喫茶をやる事になりました」

……誰だろう。コスプレ喫茶なんて案を出したのは。

僕はと言えばお化け屋敷に一票を投じたというのに、かなりの差を開いてコスプレ喫茶に決定。うんうん、と満足そうに頷いているのはクラスメイトの松山君^{まつやま}。

………彼か。そういえば彼はアニメとか漫画とか大好きな人だっけ。

「なあなあ、1つ良いか？」

「はい、松山君。なんでしょう」

松山君は片手を上げる。柔和な笑みを崩さずに委員長は指名すると、立ち上がって腕を組む。

「そのコスプレ喫茶なんだけどさ。勿論、女装とか有りだよな？」
「……………したいんですか？」

きもい、と口々に言われてしまう松山君。即座に否定して、松山君は――。

……なんで僕を指差すの？

「ほら、アイツの女装姿見たいだろ？」

「見たいです」

「即答ッ！？ 皆もあゝ、って頷かないでっ！ そして先生、貴方ばそつと良いかも、とか呟いたでしょうっ！？」

少し席の離れている洗司郎が、ドンマイ、と言った眼差しで見てる。止めて、虚しくなるから。

僕が抗議すると、松山君はチツチツチツ、と立てた人差し指を揺らしながら口を鳴らす。

「お前のその顔なら、男のコスプレよりも女装の方が似合うぜ？」

今のご時世、女装とかの需要も上がってるし、何よりお前なら下手な女よりも可愛くなる！ 保障するぜ！」

「保障されても困るって！ 僕は絶対したくないよ！」

「多数決すりゃ良いんじゃないかね？」

「洗司郎まで敵に廻ったっ！？」

そんな……僕の味方が居なくなっただっ！？

ぱんぱん、と手を叩いてざわめきを抑える委員長。流石、と言っている暇も余裕もあるはずは無く、僕は座って頭を抱えた。

「多数決で決めましょう。諏訪君の女装を認める人は手を挙げてください」

「最早僕固定ですか……」

……うわぁ、手しか見えないや。

文化祭の日は休もう。うん、そうしよう。

再び満足気に頷く松山君なんて無視して、僕はそう決意した。



「どのコスプレさせる？」

「うーん……諏訪君って何でも似合いそうなんだよねえ」

「じゃあここはシンプルにメイド服とかっ!？」

「あ、勿論ミニスカね」

……勝手に話が進んで行く。しかも僕抜きで。どうせ僕は休むんだし関係ないけどねっ、なんて考えていたら、まさか予行練習があるとは……。

……僕のドジ。

文化祭でコスプレ喫茶をやる、と決めて数週間。もう文化祭への準備も進んでおり、校内も賑やかになっていた。

「メイド服なら確か、演劇部にあったわよね? ちょっと借りてくる!」

「頼んだっ!」

敬礼しながら見送る女子。いや、最早女史……かな?

椅子に座って、静かに処刑が執行されるのを待つ僕、諏訪晃。一体どこから集めたのか、数々の化粧品やウィッグ（カツラの事らしい。さっき聞いた）が並んでいる。

諦めた方が……良いのか。僕に、そんな趣味は無い……っ!

「さ、借りて来たわよ。諏訪君、これ着て。それとも着させて欲しい?」

「……………自分で着ます、着ますよ、着れば良いんでしょ?」

「あ、下着は敢えての黒にしといたから」

「一体誰のっ!?!」

真名、ゴメンね……………僕は……………っ!
ぐすん。

すーすーする下半身には太ももまであるハイソックス? があって、半袖だけど肘上まで白くて長い手袋。頭にはカチューシャ。白と黒を基調としたミニスカタイプのメイド服は……………思った以上に、恥ずかしいです。

「ま……………」

「負けた……………」

「まだ化粧してないよねっ!?!」

手と膝を付いた女子たち。まんま“orz”の格好をされても困るんだけど……………。

そんな僕の苦笑いも束の間、即効で立ち上がった女子たちはメイド服姿の僕を羽交い絞めにすると椅子に無理矢理座らせて、にやにやしながら化粧品を手を取った。

……………怖い。

「ねえ、まずは眼鏡をコンタクトにしたら?」

「えー、けど眼鏡って萌え要素じゃない?」

「だからこそギャップ萌えさっ! まずはクラスの男子を前屈み

にするのが目標！」

いやいやいやいやいやいや。

ツツコミどころ満載の会話をありがとうございます畜生。

さて……それから。面倒だから僕は記憶するのを破棄していた。
大まかに思い出すとすれば……眼鏡をコンタクトにして（思ったよりも快適だったのは内緒）、全体的に化粧して、女子たちは再び
“orz” となったくらい。

「ウィッグだけど……ううん、諏訪君……もとい、あきらちゃんの
雰囲気からこういうふわふわした髪型が似合うと思うんだよね」
「お、流石将来の美容師っ！ 良いねえ」

そう言って被せられたのは、所々微かにウェーブの掛かったウィッグ。後ろ髪は背中に垂れる程で、正直少しむず痒い。

立って立って、と言われて僕は立ち上がり、女子たちに向き直る。

……恥ずい……っ！

「ぶはっ」

「里香ちゃんっ！？ 里香ちゃんが出血多量で倒れましたーっ！」

「むう、これは一大事……良し、あきらちゃん。その姿で教室に戻
ってください。無論1人で」

「え……」

「里香の事は任せたまえ。うむ、では達者でな！」

「大袈裟じゃないっ！？ ねえ、そんな大人数で行くようなものっ
！？ ただの鼻血だよね！？ いやいや、その前になんて鼻血っ！
？」

あ……………無視？

僕の抗議なんて無視。さっさと化粧室……………もとい、今はまだ使われていない教室を出て行く女子たち。

……………こんな姿で……………しかも1人で教室へって。ちょっとした苛めだよね？

「……………はあ」

行くしかない……………のかなあ。

残念ながら廊下の人通りは多い。文化祭の準備中なんだから当たり前なんだろうけど、今の僕には陵辱以外のなにものでもない。
むう。

……………良しっ。

「いざ……………出陣」

小声で呟いて、僕は教室を出た。

洗司郎たちが準備しているだろう教室へ向かう。なるべく下を向いて。

「……………あんな子居たっけか？」

「どっかのクラスの助っ人か？　まさかなあ……………」

「けど、スゲエ可愛いんだけど……………やべ、ちょっとトイレ」

「あ、俺も」

「カワユスなあ……………ハアハア」

突っ込まない。突っ込まないよ、僕は。3番目くらいから言いたい事があるけど言わない。けれど、心の中で言う。

トイレで何する気っ！？　前屈みになって……………うわ、男子トイレ

レ渋滞っ！　そして最後の人、カメラ構えるなあっ！

「やっと……着いた……！」

感涙。途中話し掛けられることは無かったから良かった。皆トイレ行ってくれたんだもん。いや、約一名写真撮ってたけどさ。

教室の扉を開いて、中に入る。

しいん……、と静寂がクラスを包んだ。

「あ、と……見慣れない顔だけど、君は？」

流石洸司郎。今は居ないにしろ、洸司郎には最愛の恋人が居た……いや、居るんだ。流石の他の男子みたいなことはならなかったみたい。

けど……洸司郎でさえ、僕だって分からないの？

自分の顔……というか全体の姿を見ていないから、全然実感が湧かないんだよねえ。

「……僕だよ、洸司郎」

「え……あ、晃！？」

驚きすぎ。なんて僕は半眼で文句を言おうとしたけれど、

『えええええええーっ！？』

……洸司郎含めたクラスメイトの野太い叫び声で喋る事は許されなかった。

……そんなに変わったかな？

身体の前に垂れている髪を弄りながら、ううん、と口を尖らせた。悪い事じゃないんだろうケド……複雑だ。

「ま、マジで晃……なのか？」

「洗司郎まで……ぐすん」

「うああ、なんつー罪悪感……！ 悪かった、晃！」

てへっ。

ぺろ、と舌を出した。僕だって分からなかった罰だよ、洗司郎。真摯に謝ってくる洗司郎にくす、と笑ってから僕は教室内をうろついた。メニュー表を作っている最中のグループに辿り着くと、そこに書かれた文字を眺めた。

「へー。結構本格的だね」

「だろ？ 俺がコック勤めるんだから、本当のカフェみたいにしたいんだよ」

「そっか。洗司郎は料理上手いし、きっと成功するよ」

昔から父親と2人暮らしをしていた洗司郎は、自分で家事をする事が多かった。

「本当は僕も厨房に行きたかったけどね」

「ああ。お菓子作りなら、俺よりお前の方が上手いしな」

「あくまで趣味の範疇だけど……まあ、松山君はそれを許してくれないだろうね」

ちなみに、今松山君を含めた約4名はトイレへ。はてさて、僕のミニスカートがイケないんだろうか？

うーん、とスカートを持って揺らす。少しひんやりとした風が下半身に入って、すぐに止めた。

「お前……それ、止めた方が良いぞ？」

「え？ それって？」

「……いや、無自覚なら仕方ないな、うん」

……？

僕が首を傾げて、また数人教室を出て行く。もうコレは凶器だね、うん。なんて自分の事を過大評価しながら、僕は洸司郎と共に教室の隅へ移動した。

時折洸司郎に看板などの配置を聞きに来るのは、やっぱりリーダーシップがあるからだろう。僕なら絶対こうは行かない。

「なんかよお」

僕と洸司郎が教室の様子を眺めていると、短髪を立てたクラスメイトの真島君がニヤニヤ笑いながら近寄ってきた。

僕と洸司郎を交互に見やりながら、真島君はうん、と頷く。

「お前等、スゲェお似合いだわ」

「え？」

「は？」

「まさに美男美女だな。メイド服ってのが違和感あるけどよ、正直恋人同士にしか見えないぜ？」

僕と洸司郎が眼を合わせる。確かに洸司郎は美少年だけど、僕はどうかろう？ 僕が美女ならば、やっぱり女子たちの腕が良いんだろうな。

所詮、僕は少し童顔なだけの普通の男。決して僕の顔が良い訳じゃないだろうし。

「そうかな？」

「おお、間違いないな」

……まあ、褒め言葉として受け取っておこうかな。

「ありがとう、真島君」

「うっ……！」

……？ どうしたんだろう。突然真島君の顔が赤くなって、眼を背けてしまった。

「お前の笑顔、反則……じゅ、準備があるからじゃあな！」
「あ……」

真島君、何かを呟いた後すぐ行ってしまったけど、何を言ったんだろう？

洸司郎は聞こえたのか訊いて見ると、無自覚って怖いな、と言われてしまった。

ん……？



「あはは、ご冗談を」

「生憎、冗談じゃないわよ？ あきらちゃんの制服は里香が家まで送って行ったから」

つまり……………？

「アンタはそのままの格好で帰ってね」
「そんなッ!？」

嘘だぁ…………アハハ…………。

「ドンマイだな、晃」

「うう…………こうしろお…………」

「ぐはっ。お前…………涙目は止めろ……………」

まさか、初めから狙っていた!？
恨みを込めるような眼差しを向けると、目の前に居る策士…………も
とい女子は口元を緩めて言った。

「計画通り…………!」

……………帰ろう。突っ込む気も失せるよ、うん。

鞆を手にとって、僕は肩を落としながら教室を出た。追い掛けて
来た洸司郎は僕と肩を並べて来た。

「なんつーか…………あゝ、似合ってるぞ?」

「今頃言う言葉じゃないよ…………うう、不登校になりそう」

靴を履き替えて、校舎内を出る。夏が過ぎたばかりの秋とは言
え、日の暮れた時間帯の風は寒い。ただでさえミニスカートは履き
慣れてないんだから、寒いのは当然だった。

…………まあ、女装自体は桜やお母さんにやらされてたから良いんだ
けど。いや本当は良く無いんだけど。

校門を抜け、帰宅路を進む。

「……桜に見られないようにしなきゃ」

「だな。見られたら一貫の終わりだぜ？」

「……無理だろうなあ」

桜、すぐ僕を見つけちゃうし……。見つかったら最後、それこそ貞操の危機だ。勿論僕の。

夜、布団に入って来ようとするのはいつもの事だから良いんだけど……昔は一緒にお風呂入ろうとしたりもしたっけ。

「そういえば、さ……洸司郎」

「なんだ？」

「……………有魅さんの言った言葉の意味、分かった？」

「……………」

きはユウシ
木場有魅。洸司郎の初恋の人で、且つ恋人。

僕や桜は勿論、真名も知り合いだ。リアルファイトで洸司郎と対等に戦える相手を、僕は有魅さん以外知らない。

「さあ、な。俺にはまだ分からねえ」

「……………そっか」

僕は……なんとなく分かる。有魅さんが洸司郎に言った言葉の意味も……有魅さんの想いも。桜はその言葉は知らないけど、きっと分かるんじゃないだろうか。

少なくとも……僕は分かる。多分真名も――。

「だからよ」

洸司郎はニツ、と笑った。

「いつかアイツに直接訊きに行くつもりだぜ。俺が納得出来ると思
ってんのかよ」

「ふふ……それこそ洸司郎だね。応援するよ」

「おう！」

頑張ってね。僕と真名が結ばなかった分、洸司郎と有魅さんには
幸せになって欲しいから。

空には、少し早い星が輝いていた。

余談。

結局桜に見つかった僕は、その日貞操の危機に瀕した挙句、文化
祭は強制参加。

そしてその文化祭では、3桁に及ぶお誘いと2桁に及ぶ本気の告白
をされてしまうのだった。

その上、僕のメイド服姿の写真がかなりの値段で売買される事にな
ったという。

……………ぐすん。

番外編 晃の忘れたい過去……？（後書き）

いつもより……長い、だと！？

番外編の方が長くなったのは予想外です。

書いてる最中、段々面白くなっていきまして……あれ、これって何の二次創作？ ああ、オリジナルの学園物か！ ってちゃうわ！
と1人ノリツツコミをする羽目に（汗）

第二章 第十話 悲劇を呼ぶ物語の主人公

——夢。絶対に起こる事の無い、幻想の………夢。

真名が僕の隣で恥ずかしそうに俯いていて。

洗司郎が恋人である木場有魅さんきはユウミと並んで苦笑していたり。

桜は僕と真名の間に入ろうと暴れてて。

ローラがその桜を止めながらも、時折羨ましそうに真名とフィーを見つめる。

フィーはちゃっかり僕の背中に乗って、ニヤリと笑っていた。

リズはそれに加わろうとはせず、壁に背を預けてふ、と肩を竦めている。

命懸けという言葉なんてイラナイ、平和な日々。楽しくて、幸せで……これがずっと続けば良い、って思う優しい時間。

僕の背後には、僕以外は見えていないけれどファラたちが優しく見守ってくれている。

僕は————。



『ご主人様っ！』

僕の幻想に制止を掛けるような慌てた声。寝惚け眼で身体を起こすと、ファラが血相を抱えて迫って来ていた。

「……………どうしたの？」

『桜さんたちが部屋におりません！』

「えっ？」

桜たちが、居ない？ 近くのテーブルにある時計を見てみると、まだ朝の7時。大会開始は9時からだから、先に会場へ向かった、という事も無いだろう。

「……………いつぐらいから？」

『さあ……………今、念の為と桜さんたちの部屋へ様子を見に行ったら、誰もおりませんでした』

……………冷静に。冷静に。

まず桜たちが宿屋を出る理由を考えるんだ。

4人同時だから、トイレは無い。朝風呂？

『……………ご主人様』

「え？」

『昨日、私が言った言葉は覚えておりますか』

そりゃ、覚えてるけど……………何で突然？

『……いいえ、何でも御座いません。ご主人様のことですし、どちらにせよすぐに探しに行くのは分かっておりますので——部屋にこんな紙が御座いました』

そう言つて、フアラに一枚の紙を渡される。

その紙は赤い……まるで血で書いたかのような文字が綴られていた。

——少女たちは預かつておくわ。三回目の混沌デュエルの開始よ。昼までに裏決闘場まで来るように……。来なかった場合、彼女たちの身の保障は出来ないから、そのつもりで。

その手紙の端には、紅いキスマークがあった。

「っ……………!!」

反射的に立ち上がって、Yシャツ姿のままディスクを装着してデュエルクをセットする。エクストラデュエルクの入ったケースをベルトに掛けて大きく深呼吸した。

また、命懸けのデュエルだ。

今度は……4人が人質になった。

「……行かなきゃ」

『お供致します』

外は、少し肌寒かった。



裏決闘場。

町外れにある妖しげな雑貨屋の地下にある――らしい。

「ここ……か」

「ああ、多分な。どうする？ 俺も行くか？」

途中、偶然出会った大和君に案内されて着いた雑貨屋キラードール。見るからに怪しげで、朝だというのに少し薄暗く感じた。

「ううん、大丈夫。大和君はトーナメントに向かって。参加出来るかは分からないけど……行かないよりマシだと思うから」

「そうだな。分かったぜ」

大和君は一気に手を振り上げると、バンッ、と僕の背中と叩く。

……痛い。

「お前は皆を助けたら、絶対に戻って来いよな！」

「――うん」

ありがとう、大和君。

そう僕は告げて、雑貨屋キラードールの中に入って行った。

中もやはり薄暗く、数本ある蠟燭の火だけが灯りとなって照らしていた。

「店主は……居ないみたいだね」

『ご主人様。あの棚の裏から風が流れ込んで来ます』

「本当っ?」

数々の人形が並べられた棚。幾つか魅力的な人形もあったけど……
……僕はそれを無視して棚に手を掛ける。
軽い。

見た目よりも重さは無く、簡単に横へ移動させる事が出来た。

「階段だ……」

蝋燭の火で道が照らされた階段。僕は小さく深呼吸して足を踏み入れた。

タン、タン……と僕の足音が響く。いつの間にかファラの姿も消えていた。

かれこれ10分くらいだろうか? それとも20分か……どれくらいの時間降りていたか分からなくなって来た頃。
階段が終わりを告げ、そこにあった扉を開いた。

「あら……以外とお早いお着きのようね」

中は明るかった。上を見ると、そこには始めて見るシャンデリアが眩い光を放っていた。

「——お兄ちゃん!」

「桜! 皆ッ!」

大きな部屋の壁に4人、並んで縛られていた。口枷は無く、腕以外は縛られていないから苦しくは無いだろうけど、身動きは出来なさそうだ。

取り敢えず、怪我とかは無さそうで良かった。

「あん、お姉さんを見視するの？ 寂しいわ」
「っ……」

部屋の奥。胸元、お腹、そして脚……無駄に露出度の高い服装を纏った女性が、腕を組みながら立っていた。

その左腕には始めて見るタイプのデュエルディスクがあり、既にデッキがセットされている。

「ふふふ……可愛いぼうや。勝ったら殺さずに、お姉さんのペットにしちゃおうかしら」

そう言って顔を紅くした女性は、右手の人差し指をペロ、と舐める。

「……貴方は？」

「お姉さんの事、知りたいの？ アタシはメフィリアンノ。元々は天使側に居ただけけど、悪魔側に堕ちたのよ？」

天使から悪魔に堕ちた？ ということは……堕天使、だろうか。
女性——メフィリアンノはくす、と笑みを零した。

「ふうん……貴方が悲劇を呼ぶ主人公なのね」

「悲劇を呼ぶ？」

「そう。アタシたち悪魔側では有名よ？」

僕を舐め回すような視線を送った後、メフィリアンノは縛られて居る桜たちを順番に見やる。

「まず、貴方が選ばれてユグルに来たせいで妹を巻き込んで」

「っ……」

「次、貴方が偶然立ち寄ったレグラス村では派手に首を突っ込んで……結局、3人とも大怪我を背負わせた」

悲劇を呼ぶ………彼女がそう言った意味を、僕は理解した。
そうだ。

確かに、僕が―――。

「違います！」

「ローラ……」

「確かに、大怪我はしました……けれど、晁様が来て下さらなかった、今頃私は魔王の慰み者になっていたはずです！」

「それに、わたしも自分の意思でお兄ちゃんを追いかけたんだよ！
余計な事言わないでよ！」

桜とローラの抗議を受けても、メフィリアンノの笑みは崩れない。
それどころかうふふ、とさらに深めた。

「本当にそうかしら？ 妹に関しては、もう彼女は父親や母親と出会えない。ぼうやがユグルに来たせいよ？ それに、もしかしたらそこのお嬢さん、魔王に勝っていた可能性もあったわ。大怪我もしなくて済んだかも知れない」

一歩。

メフィリアンノは僕に近付く。

「その小さな子も、さっきからお姉さんを熱い視線で睨んでる彼女も……全部、貴方が原因よね」

それは一瞬だった。僕が瞬きをした瞬間、メフィリアンノは僕の目の前まで移動していた。

メフィリアンノの右手が、僕の顎を掴んで持ち上げる。僕よりも背の高い彼女は、静かに自分の舌を舐めた。

「ぼうやが居なければ、何も変わらなかった。ぼうやはイレギュラーよ。この世界に居てはイケナイの……前世から、それは気付いていたはずでは無くて？」

「ぜん……せ？」

「ふふふ……憶えていないのね。まあ良いわ」

僕の片目をペロっと舐めて、また一瞬で元の位置まで移動する。そしてメフィリアンノは、ゆっくりとウインクをしてからディスクを展開した。

「ぼうやが勝てば皆を解放してあげるわ。その代わり……ぼうやが負ければ、女の子たちは死亡。ぼうやはアタシの玩具にしてあげる。熱い夜をプレゼントしてあげるわ」

「要らないよ……僕は、皆を守るんだ！」

——絶対に……僕が、守らなきゃ。

「うふ……やっぱり、可愛い♪」

「「デュエル！」」

第二章〈第十話 悲劇を呼ぶ物語の主人公（後書き）

今回は少し短めでしたね。

今回、桜たちを誘拐した彼女の言い分は自分でもうん？ と感じます、ハイ。

ですので、少しずつ変えていく可能性もあるのでご了承くださいます（汗）

第二章 第十一話 墮天使の決意

——舌を舐めて、僕の身体を隅々まで観察するように見つめてくる。その視線に少し鳥肌が立って、僕はそれを振り払うかのようにデッキへと手を伸ばした。

「僕の先攻、ドロー！」

相手は何のデッキか分からない。今までの“デビル”と同じように闇属性中心だろうか？ それとも天使から悪魔に堕ちたらしいから、墮天使デッキ？

光属性悪魔族と言えば、魔轟神というカテゴリもある。

ここは——。

「動く！僕は手札から《第六人形 ツキ》を通常召喚！このカードが召喚に成功した時、デッキから守備力500以下の人形……《第四人形 セイ》を特殊召喚する！」

微かに、メフィリアンノの眼が悲しげに細められるのを感じた。けれど僕はその視線を無視して、プレイを続ける。

「セイが人形モンスターの効果によって特殊召喚に成功したら、手札から人形モンスターを特殊召喚する事が出来る！おいで、《第二人形 カイ》！」

モンスターが3体並ぶ。LV3が2体、LV1が1体だ。
人形たちが星に変換され、別の人形へと改造される。
チューニング

「LV3のカイとLV3のツキにLV1のセイをチューニング！」

我の中に我、真実の我を探し当てよ！ 殻に籠もりてチャンスを伺わん！ シンクロ召喚……裂き咲け、《分裂人形 ペドラ》！」

『誘われ飛び出てれっつらごー。あたいにお任せー！』

何故か天高く手を翳しながら、ペドラが現れる。やる気満々に立ってるところ悪いけど、守備表示だよ？

「ペドラがシンクロ召喚に成功した時、デッキからドールと名の付いた魔法、または罫カードを手札に！ 僕は《ドールブロークン》を手札に加えて、カードを1枚セット！ ターンエンド！」

手札は4枚。ペドラの守備力は2700あるし、初ターンとしては上々だ。

メフィリアンノはふふ、と笑みを零してからディスクのデッキに手を掛ける。そしてゆっくりとした速度でカードを引いた。

「お姉さんのターンよ。ふふ、アタシはフィールド魔法《玩具のお城》を発動するわね」

「玩具……？」

薄暗かった地下室が、色鮮やかなブロックで出来た玩具の城に早変わりした。様々な色のブロックで構成された城を眺めていると、眼が痛くなってくる。

一体どんなカードだろう。少なくとも、地球には無かったカードだ。

「そんなに怯えなくて良いのよ？ 大丈夫、お姉さんはぼうやを傷付けたりしないわ」

「……………」

「あら、随分と警戒されてるのね。少し悲しいわ」

そう言って肩を竦めたメフィリアンノは、気を取り直したように手札のカードを手取る。

「永続魔法、《玩具精製》^{がんぐせいせい}を発動するわね」

1つの壺だった。以外と大きな年代物っぽい壺はここからじゃ中が見えない。

「《玩具精製》の効果で、デッキから《オモチャの兵隊》^{おもちゃ}を玩具カウンスターとしてお城にお供えするわ。このカードでカウンスターになったカードは墓地でも除外でもなくて、基本的にはどんなカードでも再利用は不可能なのよ？ 勿論——」

壺の中に一枚のカードが吸い込まれるように消えていく。そしてブロックのお城にある壁に1つの写真が静かに現れた。そこに写された姿は、オモチャの身体にオモチャの剣を持った……そう、見たとおり《オモチャの兵隊》だった。

「——例外はあるのだけど。アタシは《オモチャの番犬》を手札から墓地に捨てる事で効果を発動。デッキにある“オモチャ”と名の付いたモンスターを玩具カウンスターとしてお城にお供えするの。カード名は……そうね、《オモチャの勇者》かしら」

兵隊よりも勇敢に立っているオモチャが写真として取り付けられる。未だにどんなデッキか、予想は出来ても事実は分からない。

けれど間違いなく、《玩具のお城》が軸だろう。

「うふふ………」

「……？」

「残念だわ、ぼうや。お姉さんの手札が良すぎるばかりに……」

え……？

ぽつりと呟いたその言葉は、僕の耳には届かなかった。

「アタシは魔法カード、《オモチャの司令塔》を通常召喚するわ。そしてこのカードが召喚に成功した時、このカードとデッキにあるオモチャと名の付いたモンスターをカウンターとしてお城に献上するわ」

司令塔が何かを叫ぶと、そのカードが光の粒子となり消えていく。メフィリアンノのデッキから一枚のカードが消えて、お城の写真となったのは司令塔とオモチャで出来た女の子……フリフリのドレスを身に纏ったその姿は、正に“お姫様”だった。

（あれ……あの女の子、どこかで………？）

「さあ、行くわよ？ アタシはフィールドにある《玩具のお城》を墓地に送る事で手札より《オモチャの魔王》を特殊召喚するわ！」

「っ……！」

オモチャで出来ているからか、そこまで威圧感はない。まるで龍の姿を模したプラモデルみたいな魔王は、オモチャとは思えない唸り声を上げて僕を見下している。

「うふ♪ さらに墓地へ送られた《玩具のお城》の効果が発動されるわよ。このカードが“オモチャ”と名の付いたカードで墓地へ送られたら、人形カウンターになっていたモンスターを可能な限り特殊召喚するの」

「なっ……!?!?」

人形カウンターは確か……兵隊に司令塔、勇者にお姫様!

「集合! 《オモチャの勇者》、《オモチャの姫君》、《オモチャの司令塔》、《オモチャの兵隊》!」

流石に、というか。

……なんと言うか。

モンスターが5体並ぶと、僕は圧巻の一言しか言えないのだった。しかも中には司令塔、つまり知将も居て兵隊が剣を構え、姫君がキツと僕を睨んでいる。

先頭に立っているのは、勇者と魔王。本当なら対立しているはずの勇者と魔王が、肩を並べて(身長差はあれど)僕を敵視していた。

『あらー。大丈夫ー?』

「……どうだろう、ね」

ペドラの間延びした喋り方に、僕は少しリラックスした。小さく深呼吸して、ディスクをちゃんと構えなおした。

そして、メフィリアンノがバトルフェイズへの移行を宣言する――。

「そろそろ、良いのではないか?」

「「っ!?!」」

後ろから声がした。慌てて振り向くと、そこに居たのはローブを深く被って顔が見えない人だった。

声からして、多分男性だろう。

背は洗司郎と同じくらいだから、結構高い。

どうやら驚いたのは僕だけじゃなかったらしく、メフィリアンノも息を呑んでいた。

「……あら、ハグレ者が何の用かしら？」

「それは貴様も同じだろう？」

知り合い……？

ペドラと僕は顔を見合わせて、首を傾げた。

「悪いが、こんな茶番は早々に終わらせて貰いたい」

「茶番……？」

「これから良いところなのに……邪魔するなんて、なんて空気が読めないのかしら」

ヤダね、とメフィリアンノは呟く。

そんな呟きに男はふん、と鼻を鳴らす。メフィリアンノは少し不服そうに口元を尖らせると、肩を竦めながらディスクを納めた。

オモチャの壺が消えて、勇者や魔王一行も消滅していく。同時にペドラたちも姿を消した。

「どう、いう……？」

「それはあの女から聞くんだな」

そう言って、男はシャンデリアの灯りで照らされた部屋を出て行く。最後まで彼の顔は見えなかった。

未だに頭が混乱したまま、メフィリアンノへ振り返る——と、そこで僕はあることに気付く。

「あれ……桜、ローラ！？ 皆が……！」

皆の姿が無かった。捕らえられていた筈の桜たちの姿は勿論、拘束具として機能していた縄も無い。

「あれは幻影よ」

「げん、えい？」

「そう。アタシが創り出した幻。今頃彼女たちはトーナメント会場でぼうやが来ないのを不思議そうにしてるんじゃない？ 町中を探し回っているかもしれないわ」

幻影……安心したのと同時に、疑問が湧いてくる。
どうしてそんなことを……………？

「……お姉さんはね。ぼうやに会いたかったのよ」

「僕に…………？」

「そ。安心して。ぼうやは勿論、彼女たちにも危害を加えるつもりはないから」

そう言って、にっこりと笑った。

その笑顔に、嘘は付いていない……そんな気がして、僕は一気に警戒心が解れるのを感じた。

「さっき、アタシは言ったわよね？ 天使側に居たけれど、悪魔側に堕ちたって」

こく、と頷く。

「アレ、事実だけ少し違うの」

事実だけ違う…………？

僕はうゝん、と眉を潜めているとメフィリアンノは一步步僕に近付きながら口を開いた。

「確かにお姉さんは天使から悪魔へと堕ちたわ。けれどそれは、ぼうやが悪魔側だと思ったから」

「……けど、違っていた？」

「そう。調べたらどっちも地球の人間だって言うんだから。全く、イヤになっちゃうわ」

メフィリアンノが僕の前まで来た。

……天使だとか悪魔だとしても、メフィリアンノは見る限り女性で間違いない。それなのに僕より背が高いのか……………。

「あら、どうしたの？ 膝を付いてがつくりしちゃって」

「……………ううん、何でも」

無い……と言う事にしておこう良いよ僕はこのままでずっと低身長童顔少年として生きていくんだ洗司郎なんて巨人になっちゃえ。

「ま、それはともかく……アタシはぼうやを殺す気がこれっぽっちも無いから、そこからも逃げて来たのよ」

「ふうん……じゃあ、その……………敵、じゃないんだよね？」

「お姉さんはぼうやの味方よ？ 信じなさいな」

そう言って、頭を撫でられる。少しくすぐったい気がしたけど、何故か悪い気はしない。

……お母さん、みたいだな。見た目は凄く若いけど。20代くらいだろうか？

「……妹ちゃんたちをこれ以上心配させちゃ駄目ね。また会いまし

よう？」

「……うん。またね、メフィリアンノ」

「————ええ」

姿を消したメフィリアンノを見届けて、僕は部屋を出てまた長い階段を上っていく。

そういえば、と。

僕は数段飛ばしで階段を駆けながら思う。

………なんで僕、あんな簡単にメフィリアンノを信じられたんだろう……？

その疑問は階段を上り切って、雑貨屋キラードールに戻った時には綺麗さっぱり忘れてしまっていた。

——時間は、まだ9時前……！



「見つけたぞ、メフィリアンノ……！」

「はっけくん、堕天使になった子♪」

太陽の光さえ届かない樹海の奥。逃げるように走っていた女性、メフィリアンノは巨大な樹の前で立ち止まった。

それに合わせたように顔を出す男性2人。1人は体長2Mは超え

ているだろうガタイの良い男性で、もう片方はかなり背の低い男の子だった。人懐っこそうな笑顔でメフィリアンノを“威圧”している。

「あら、お姉さんもモテモテね。悪魔に天使……種族問わずかしら？」

くす、と笑いながら振り向く。メフィリアンノの左腕に付けられたデュエルディスクは既に開かれ、デッキがセットされていた。

「モテる女は辛いわね♪」

口調とは裏腹に、メフィリアンノの頬からは汗が一滴垂れてしまふ。

「……調子に乗るなよ、メフィリアンノ……！」

悪魔の男性が睨み、黒いディスクを展開させる。

「裏切り者には制裁を、が天界の掟なんだよね」

天使の男性が笑い、白いディスクを展開させる。

「……ぼうやを殺そうとする悪魔に、ぼうやを危険に晒した天使ね」

堕天使の女性の表情が消える。

「ぼうやは――アキラは、アタシが守る。それが神だろうと魔神だろうと……妹ちゃんやアキラの親友さんだろうと関係無いわ」

ライフポイントがディスクに映り、3人の変則デュエルが始まる
うとしている。

「命の恩人を守る為なら、アタシも命を賭けるわ———！」

デュエル、と。

深い樹海に、響く。

第二章〈第十一話 墮天使の決意（後書き）

更新が少し遅れてすみマセンでした。

実は……昨日まで短いスランプに陥ってました。

書こう、あれ書けない……よし、明日から本気出そう。

その無限ループが続いて、駄目だこりゃ、という事に（汗）

ですので気分転換にオリジナルの小説を書いたら（しかも投稿してる）、よし！ となりました（ヤレヤレ）

そんなお粗末な廃棄人形の小説ですが、感想、評価等宜しくお願いいたします！

第二章 第十二話 涙雨（前書き）

今回はいつもより短めです。

第二章 第十二話 涙雨

僕がまず向かったのは、トーナメント会場だった。

まだギリギリ9時前だし、会場には多分大和君も居るはず。

そう思っ僕は会場に辿り着くと、それらしい人は居ないか辺りを見渡す。

「えと……」

大和君の髪は赤い。桜は茶髪のツインテで、ローラは金髪碧眼の長髪、しかも巫女服着用。フィーは藍色の髪でリズは紫色をした髪にポニテ……………。

……居ない。

かなり目立ちそうなものだけど、残念ながら見渡す限りそれらしい人は居ない。赤い髪とか金髪とかはいっぱい居るんだけどなあ……。

「……やっぱり、僕を探しに行ってるのかな」

『どうします?』

ファラの問いに、僕はうん、と首を捻る。

ここで待ってても良いんだけど……………。

『——これで、決勝トーナメント開会式を終了します。決勝トーナメント出場者は、指定されたデュエル場へと向かってください』

「げっ」

もう時間か……液晶を見ると、そこには既に対戦表が映し出されていた。どうやら僕と大和君は第一デュエル場らしい。

僕は取り敢えずと、デュエル場に居る審判の元へ走る。

「あの……」

「ん、どうした？」

「その……もう1人のメンバーが用事で、居ないんですけど……その場合はどうしたら良いですか？」

僕の質問に審判さんは視線を逸らしながら、言い辛そうに口を開く。

「……残念だが、その場合は棄権と見なす」

「そんな……」

……僕が悪いとは言え、そんなのはイヤだ。

「5分だ」

「え？」

「開始から5分待って来なかった場合、棄権と見なして相手の不戦勝とする」

同時に、決勝トーナメント開始の声が会場に響いた。



『デュエル!』

デュエルが開始される声がデュエル場に響く。僕はそれを聴きながら淡く微笑んだ。

黒い暗雲が空を覆い、徐々に会場に取り付けていただろう天井がカバーとしてトーナメント会場を後の雨から保護する為に動く。

ライトが会場を照らし、僕はそれが眩しくて眼を細めた。

「――お兄ちゃんっ！」

桜の声がして、僕はそちらに振り返った。

桜を含めた皆が息を切らして僕を見つめていて――その後ろには一緒に走ってきただろう大和君が肩を上下に揺らしていた。

「皆……ゴメンね、心配かけて」

「それは良いんですけど……その、」

「不戦敗、だって。自業自得だよね」

会場にある時計に目配せする。時刻は9時から2時間過ぎた。もう決勝戦が始まっている。

どちらも僕の知らない2人組。優勝候補だった律稀君たち4人は、彼等に負けてしまった。手札事故を起こしていたみたいだ。

僕はそれを2階の観客席から眺めていた。

「……どこに居た？」

「……ちよっと用事があった」

メフィリアンノの事は言わない。僕は見た事もないモンスターが並ぶフィールドを見ながら答えた。

「大和君、ゴメンね。負けちゃったよ」

「いや、俺は良いけどさ。心配したぜ？」

「うん……ごめん」

僕はそう言って、ゆっくりと立ち上がる。

ううん、と大きく伸びをして、立ち眩みが治まるのを静かに待った。

「さて、戻ろうか？ 雨が降りそうだし、早めに帰ろうよ」

「お兄ちゃん……………」

桜の後ろでは、無表情でフィーが僕を見つめている。僕はその視線から逃げるように、足早でトーナメント会場を後にした。

◇ ◇ ◇

雨が降り始めたのは、僕たちが宿屋に辿り着いてすぐだった。

大和君は早々に帰っていった、僕は1人、部屋のベッドで身体を休めながら天井を見つめていた。

『ご主人様……』

「ん、どうしたの？」

ファラが何故か辛そうに表情を歪めながら僕を見ている。

上半身を起こしてファラに向き直ると、僕は未だに何も言わないファラに首を傾げる。

「ファラ？」

『ご主人様は、何も言わないのですね』

ファラが辛そうな表情から悲しさと悔しさを混ぜたような複雑な表情に変わる。その瞳の奥に感じる、どこまでも僕を想ってくれている感情を感じて……少し嬉しい、と思うのは僕の心が不安定だからだろうか。

『ペンダントを手にする事が出来なくて……悲しいという事も。悔しいという事も。5分という猶予が過ぎた後——混沌デュエルをした、という事も』

「……………」

1時間、僕は街を探し廻った。そして出会ったのは、僕を殺そうとするデビルだった。

桜たちを閉じ込めている、という嘘に振り回された僕は混沌デュエルを始めて、辛くも勝利。痛みが癒えるまで、丁度近くにあったトーナメント会場の観客席で休んでいた。

混沌デュエルは40分近く続き……移動時間含めて、僕は10分くらい休んだところで桜たちが来たというわけだ。

「あはは、あれは痛かったなー。服とか汚れなくて良かったよ」

『ご主人様が負けければ、桜様たちにも危害を加える……そう言っておりましたね、彼』

うん、と頷く。

『っ……ご主人様は、どうしてそう1人で抱え込もうとするのです

かつ!?!?』

初めて、だった。

ファラは初めて僕を怒鳴って、唇を噛んだ。辛さと、悲しさと、悔しさ……その意味が分かって、僕は薄く微笑む。

『……すみません』

「ありがとう、ファラ。僕は――」

コンコン、と扉がノックされる。反射的にはい、と声を掛けるとわたし、と小さな声が扉越しに聞こえてきた。

この声は……フィーかな?

ファラにはごめん、と謝ってフィーを中に招き入れる。フィーは相変わらずの無表情で僕を真っ直ぐに見据えていた。

「どうしたの?」

「……………なにかあった?」

「へ?」

何か…………?

「別に何も無いよ。ペンダントを取り戻せなくてちよつと残念、っただけかな」

「…………嘘」

嘘、と僕の言葉を否定してフィーは一步、僕に近付く。

「…………泣きたいの…………我慢してる」

「っ」

——凶星だった。

フィーは僕の目の前まで歩いてくると、僕を突き飛ばす。

ベッドに押し倒されるかたちで倒れる僕に、フィーが跨る。見事にマウントポジションを取られた僕は、暫し呆氣に取られる。

「アッキー……どうして……わたしたちに弱さ、見せてくれないの………?」

——ご主人様は、何も言わないのですね。

——ご主人様は、どうしてそう1人で抱え込もうとするのですかっ!?

先程言われたファラの言葉が脳裏に浮かぶ。刹那に感じた鋭い頭痛に、眉を歪める。

「アッキー……」

フィーの声が、心地良く^{じだ}耳朶を叩く。

「わたしたちは、アッキーの味方……だよ」
「っ……!」

僕はフィーを柔らかいベッドに突き飛ばして、走って部屋を出た。突き飛ばした事による罪悪感が胸を過ぎるけれど、僕は振り返らずに部屋を出て、そして宿屋も出て外に飛び出した。

外は豪雨だった。

風も強くて、雨粒が走る僕を襲う。冷たい雫が僕のYシャツやズ

ボンを湿らせて……気持ち悪い。

「はあ……はあ………っ！」

地面に躓いて僕は壮大に転ぶ。手とおでこに鈍痛が走った。血も出ているんじゃないだろうか？

はは、今日が雨で良かった。

雨が、僕の涙を隠してくれる。

「くっ……真名あ……！」

ゴメンね、ゴメンね。

真名のペンダント……………取り返せなかった……………！

「うあああああああつ!!!」

僕の叫び声は涙雨に掻き消され。

空は、晴れなかつた。

第二章〈第十二話 涙雨（後書き）〉

書き終えて、私は思う。

『シリアスって……書きやすいねっ!』

コメディ？ 何それ、私に出来るの？

コメディ、若しくはラブ要素多めが好みだった場合、「紫苑の槍」
様の方が良いと思われます（汗）

第二章 第十三話 新たな幕。アキラの独り走り

あれから2日が経った。

僕はというと、なんとか落ち着きも取り戻して桜たちに心配をさせない程には戻れたと思う。まあ、皆の内心は分からないんだけど……。

「さてっ、皆。準備は良い？」

朝。一昨日の雨も忘れ去られたかのような晴天が、ウェーリアを出る僕たちを祝福しているみたいだった。

各々の荷物を持った桜たちが、一斉に頷く。色とりどりのローブを羽織っているのを見ると、どこかの戦隊物を思い出すのは僕だけじゃない……はず。

「目的地はエデラウンだよ。行こうか」

そして――。

電車には桜、ローラ、フィー、リズの4人だけを乗せて。

扉は閉まった。



そこは、暗かった。

太陽の光を遮っているのは建物か、それとも樹なのか。若しくは本当に夜なのかも分からない場所で、猫がなー、と鳴いた。

「く……ふ」

激痛に蝕まれる身体を無理矢理にも動かして、墮天使メフィリアンは立ち上がった。

豊満な胸まで垂れてきたボサボサの髪が鬱陶しく感じるも、それを払い除ける体力も残っていない。

「はぁ、はぁ……激しいわね、もう」

暗闇が晴れる。メフィリアンが居たのは暗い路地だったようで、幾重にもある建物が陽光を届かせなかったらしい。

たどたどしい歩み。結構な距離を歩いただろうか？

路地を抜け、街を抜け………後ろを振り向いても何も見えなかった。

「ちょっと……ここで休憩でもしようかしら」

周りに何も無いからか、人通りの無い駅。メフィリアンはその場に腰を下ろすと、焦点の合わない瞳を静かに閉じた。

丁度電車が来たのか、停車する音が聞こえる。あくまでここは中途駅。駅員さえ居ないくらいだし、誰も降りることは無いだろう――そう思っていると、話し声が聞こえてきた。

女性の声だ。

「お兄ちゃん、やっぱりまだペンダントの事気にしてたってことかな？」

「……そうかも知れないな。あいつにとって、大事な物なのだろう？」

聞いた事のある声に、メフィリアンノは微かに眼を開けた。

「……………アッキーの……………大事な、物」

「そういえば聞いた事ありませんでしたけど……………あのペンダントって晁様にとって、どういう物なのですか？」

ふふ、と自然に笑ってしまう。

なんて運命だろう。

こんな辺鄙な場所で、“彼女たち”に出会ってしまうなんて……………。

「それは……………えと、」

桜が言おうか迷っているのが聞こえる。

鉛のように重い身体を無理矢理にも立たせ、壁を伝いながら桜たちが居るだろう場所へ向かう。微かに眼を開けているとは言え、視界は薄暗い。

——流石に、天使と悪魔を交えたバトルロワイヤルは無茶だったかしら？

今更考えても仕方が無いというのに、そんなことを思ってしまう。

「あら、知らないのね……………」

ぱつ、と桜たちが振り返る。苦痛を訴える身体に鞭打って、メフィリアンノはくすりと笑みを零しながら喋る。

幸い、眼が見えるところに外傷は無い。

「貴方は……？」

「お姉さんは……そうねえ。ぼうや……じゃないわ。アキラと夜、一緒に寝た事がある女の子、かしら」

『えっ……！？』

メフィリアンノの言葉に、同時に言葉を発する桜たち。

嫉妬が知らずの内に湧き上がる彼女たちを見てメフィリアンノは可愛い、と笑みを深めた。

「……知らない、とはどういう意味」

その中で、フィジーだけは真っ直ぐにメフィリアンノを見据えて質問した。その瞳は睨みにも似ていて、妙な威圧感がメフィリアンノに向けられる。

リズムも腕を組み、ローラはぱんぱん、と自分の顔を叩いて無理矢理落着かせた。

走ってでも晃に真相を聞きに行くつもりだったのか、桜はフィジーに首根っこを掴まれたままうきゃー、と叫んでいる。

「まあ、桜ちゃんは知ってるみたいだけど……？」

「え？」

「………どうして名前を知っている？」

自分の名前が呼ばれ、桜がなんとか落ち着きを取り戻す。

「それより、アキラはどうしたの？ いつも一緒だったはずなのに」

「……………」

「……ま、そう簡単に話してはくれないわよね」

出会ったばかりの女性を警戒するのは当然である。

「あのペンダントの事、何か知ってるんですか？」

「ん〜？ ま、一応知ってるわね」

そう口を濁したメフィリアンノ。少しの間を置いて、メフィリアンノは小さく肩を竦めた。

「知りたいならアキラに直接聞きなさい。本人から聞いたほうが、みんなも気持ちが良いでしょう？」

その言葉にローラたちの口が閉じる。確かに他人から聞くよりは本人から話された方が良いに決まっている。

ペンダントの件はそこで終わったと感じ取ったメフィリアンノは、右手を上げて桜を指差す。

「諏訪桜ちゃん」

ローラへ。

「ローラ||レイフェル・メイサちゃん」

フィジーへ。

「フィジー||オールド・ランナちゃん」

そして、リズへ。

「リズ||フォルン・サレイルちゃん」

順番に指差し終えたメフィリアンノは、静かに立ち上がってそのまま右手を腰に持っていた。

ただ一言、目の前の少女たちに言う為に。

「強くなりなさい」

「つよ、く……?」

「そう。せめて、アキラの隣に居られるくらいには、ね」

前に垂れてきた髪を払う。

「それは、どういう意味なの?」

「タッグデュエルトーナメントの時……アキラが遅れた理由はね、貴方たちが攫われたと騙されてデュエルしていたからなのよ」

——まあ……それをしたのはアタシだけど。

そう心中で呟いて、メフィリアンノは話を続ける。

「そのデュエルはまだ良かったわ。命を賭けてた訳でも無かったし……問題は、その後」

静かに。単調に。ただ、真実を彼女たちに告げられる。

「アキラは貴方たちを探しに走り回った。その時出会った男と、アキラはデュエルしたのよ。負けたらアキラだけじゃなく——貴方たちも殺す、という条件下で」

「えっ……!?!」

(また………)

フィジーは内心唇を噛む。

ということは、トーナメント会場で出会った時には既に満身創痍だったはずだ。ペンドントを取り返せなかった精神的ショックと肉体にダメージを負う混沌デュエル。

それを……彼は、話してくれていない。

「……………やっぱり……アッキー、1人で全部背負っちゃうの……
……？」

小さな呟きは、桜たちに沈黙を呼ぶ。

少しの間が5人を包んで、新たに来た電車が一度止まり、誰も出て来ずに次の駅へ向けて出発していった。

「正直に言うわよ？ 貴方たちは今、アキラの弱点でしか無いわ」

「弱点……」

余りにも、その言葉が的を射ていて。

——強くなりなさい。

先程言われたメフィリアンノの言葉が、胸を抉るように深く突き刺さっていた。

◇ ◇ ◇

『良かったのですか？』

桜たちを乗せた電車が走り去ってすぐ、ファラが首を傾げて問い掛けてくる。

電車が完全に見えなくなるまで見送った後、僕は駅から出てコク、と首肯した。

「僕の傍に居ると、皆危険な目に遭っちゃうし……それなら1人の方が良いよ」

『……そうですか』

僕のせいで、桜たちが傷付いたり……最悪の場合、殺されちゃうかもしれないなんて……僕は耐えられない。

——移動しよう。

まず向かう場所はトーナメント会場、かな。もう大会が終了して2日が経ってるけど、普段あの場所はフリーデュエルスペースとして解放されているはずだ。

「しかし……熱いなあ」

燦々（さんさん）と照り付けて来る太陽を恨めしく思いながら、僕は右手で顔を仰ぐ。所詮は気休めにしかない程度の風が吹かれて、前髪が揺れた。

仰ぐのを止めたら、さらに熱く感じるのは僕の気のせいだろうか。そういえば地球に居た頃もそうだったっけ。

なんてことを考えながら僕は会場に辿り着くと、僕は滴ってきた汗をローブで拭ってから中へ入った。

……ローブなんて羽織ってるから熱いんだ。けど、僕は“用事”が済んだらすぐこの街を出るしなあ……………。

我慢、我慢、と。

『ご主人様。あの方たち……』

「へ？」

ファラが指差していた方を向くと、そこに居たのはフリーデュエルスペースでタッグデュエルをしていた4人だった。

虹の古代都市で佇む齒車で出来た竜。その向こう側には樹海が広がり、それを守るように一体の天使が立ち塞がっていた。
ケルビム

「あの人たち……確か、桜たちと戦った………」

宝玉獣使いの淳也君、古代の機械使いの翔太君……アルティメット・インセクトと自縛神を扱う律稀君、ライトロードを使役する康介君、か。

『どうします？』

「他に知ってる人も居ないし……あの人たちに聞こうか」

——それから数分。

最終的に、場のカードが《裁きの竜（ジャッジメント・ドラゴン）》によって全破壊され、デュエルは決着した。

「ジャグン消えれば良いと思う」

「んだとうっ!？」

あゝあ、味方にも言われてる。

僕も一時期そう口走っていた側だから……気持ちには分からないでもない。

ちなみにジャグンとは、《裁きの竜》の略称である。

「ん……？」

僕に真っ先に気付いてくれたのは淳也君だった。僕は片手を上げながら近付く。

「誰……？」

「あ、お前……確か、4人の女の子に囲まれてた奴だなっ？」

……それは、そうだけどさ。端から聞くと凄い誤解を生みそうだから止めて欲しいな、康介君。

僕が苦笑いをする、翔太君がきよとした表情で僕を凝視する。

「何か用？」

「あ、うん。ちょっと訊きたいことがあってさ」

少し恐縮したように頭を掻く。僕の次の言葉を待っていてくれるのか、誰も何も言わない。

「この前のタッグデュエルトーナメントの優勝者って、誰なのかな？」

「優勝者？」

律稀君が首を傾げる。僕がうん、と頷くと同時に康介君が首を傾げる。

淳也君が辺りを見渡す。“優勝者”を探してくれているのかな？
と……………そこで、翔太君が見つけたのか会場の2階を指差した。

「あいつじゃない？」

「ああ、アイツだ。間違いないな」

指差す先——そこに居たのは……………つまらなそうに1階のデュエル
スペースを睥む、1人の男性だった。周りに人は居ない。

「あの人……………か」

呟いて、僕はまた彼等に向き直る。

「ありがとう！　また機会があったら会おうね！　バイバイ！」

そう言って、僕は走る。途中、康介君が声を掛けてきた。

「お前！　名前はっ？」

僕は顔だけ少し振り返って、走ったまま叫ぶ。

「僕は諏訪晃だよ！　じゃあねっ！」

向かう場所は、2階。

ただペンダントの事だけを考えながら、僕は階段を上った。

第二章 第十三話 新たな幕。アキラの独り走り（後書き）

さて……晃が桜たちと別れました、ハイ。

この展開に賛否両論はあるでしょうけど、個人的に私はこういう展開が好きなのです！（爆）

ただ……晃がどう動くかは決めてあるんですけど、桜たちをどうするか決めて無いんですよえ……（そればっか）。

第二章 第十四話 弱点と再会

「……さて。貴方たちはどうするのかしら？」

ウェーリアとエデラウンの中途駅。メフィリアンノは痺れるほどに痛む身体を無視しながら彼女たちに問い掛ける。

その質問に、答えられる者は居なかった。

——自分たちは、弱点。

そう言われ、且つ納得している。そう簡単に晃の元へ戻る事なんて出来ない。戻ったとして、また彼を苦しめるような事があったならば……耐えられない。

返事が出来ずに少しの間が開く。

（……彼女たち“も”、本当にアキラの事を想っているのね………
…）

本気で想っているからこそ、即答出来ない。彼の傍に居たいのに、身を引くことしか出来ない。

そう感じ取れたメフィリアンノは、内心くすりと微笑んだ。

「強く、なりたいのなら……アタシに考えがあるわよ？」

ニヤリと口元を歪めながら言うメフィリアンノ。

——彼女たちもまた、静かに動き出し始めていた。

◇ ◇ ◇

日差しが会場を包む。

僕は会場の2階に居る男性に近付いた。デュエルディスクはしておらず、少し小さめの丸眼鏡が鼻にちょこんと掛かっている。

「あのう……」

僕が声を掛けると、その男性は視線だけを僕に向けた。

「……誰だい、君は？」

「僕は諏訪晃。貴方がタッグデュエルトーナメントの優勝者……ですか？」

そう問い掛ける。その人はふん、とつまらなそうに鼻を鳴らすと静かに立ち上がり、両手をポケットに仕舞いこんだ。

「まあ、確かにボクが優勝したよ……憎たらしい事にね」

「え？」

「優勝者が聞いて呆れるね。得体も知れない男に敗れるなんて」

……………。

男性はちっ、と舌打ちしてその場を立ち去ろうとする。僕ははっとなって男性の前に立ちはだかった。

「あの、優勝賞品のペンダントのことで話したいことが……」

「……それもソイツに取られたよ」

「え……………」

取られた？

「あの……今、どこに居るか分かりますか？」

「知るわけ無いだろう？ ……ローブを羽織っていたし、もう別のところに行ったんじゃないか？」

……旅人、か。

どうしようか、と俯く僕を一瞥して男性はその場を去っていく。

『どう致しますか？』

「そう、だね……まずはそこら辺を見て廻ろう。桜たちが戻ってくるかもしれないから、長居は出来ないけど」

僕から離れたのに、見つかってしまったら意味が無い。

僕は1階に降りて、トーナメント会場を出る。適当に辺りを見渡しながら道を進んだ。

（ローブ……羽織ってる人、居ないなあ）

溜め息を零したくなる心境。

それにしても、と僕は思う。

「カードショップ、多いなあ……」

『流石、デュエルモンスターズを中心にした世界ですね』

うん、と頷く。

残念ながら僕が使う人形シリーズは無い為、そのサポートカード

もゼロ。勿論間接的な恩恵を受ける事が出来るカードはある。

例えば、人形シリーズは全部魔法使いだ。これだけでも結構な数のカードがある。

この前カードショップを見た限り……僕が欲しいカードもあった。ただ残念ながら買えるほどお金を持ってない。

「殆ど、フィーが持つてる鞆の中に入れたからね………」

『……？ 何か仰いましたか？』

「へっ？ う、ううん！ なんでもないよ？」

ふう……こんな事ファラたちに聞かれたら、何を言われるか分かったものじゃない。説教とかされそうで怖い。

……これから、少し食費とか抑えないとね………。

——約2時間くらい、だろうか。

ファラと談笑しながら見て廻った時間は以外と長く、気が付いたときにはそれくらいの時間が経とうとしていた。

桜たちのことだし、もうこの辺りの戻ってきてるかもしれない。

『どうしますか？』

「……エデラウンへ向かおう」

元々、僕の目的地もエデラウンだったし……。

そう思い立った僕は、ウェーリアを出る為に潜る門へと移動する。相変わらず大きな門には圧巻の一言で、僕は一瞬惚けてしまった。

『電車で向かわないのですか?』

「あ、えと……ほら、歩いていけば途中で会えるかもしれないですよ?」

節約、とは言わない。言えない。

門番の人と一言二言話して、門を出た。町の中以上に暑い熱風が僕を襲って、汗が背中を伝って少し気持ち悪い。頭に日射が当たらないようフードを被る。

「……暑い」

『当たり前です』

……キツイね、ファラ。

目の前に続く地平線を見据えながら、僕は袖で汗を拭ったのだった。

◇
◇
◇

「……………ん?」

うつすらと眼を開けると、そこには眩しく輝く照明。咄嗟に両手で顔を覆って、上半身を起こした。きよろきよろ、と辺りを見渡す。

僕が居る場所はベッドの上。見慣れない天井に、質素な壁紙。テ

レビやゲーム、パソコンもある上に遊戯王関係のポスターがびっしりと貼り付けられていた。

「ここは……？」

『大和様のお部屋です』

「大和君……え、なんで？」

城遊大和君。

タッグデュエルトーナメントで僕のパートナーとなって戦ってくれた子だけど、なんで僕が大和君の部屋に……？

僕は確か、ウェーリアを出てエデラウンへ向かったはず。僕が覚えてるのは、ファラにちよっつとキツイお言葉を貰った時までだ。

「……もしかして………」

『はい。あまりの暑さに倒れてしまいました』

……さいですか。

しかし、確かにこの温度でローブを頭まで羽織ってたら凄い事になるよね。その上、実はユグルに来てまだ一週間程度しか経ってないんだ。

いやはや、色んなことあったなあ………なんて、感傷に浸ってる場合じゃない。

『倒れてしまったご主人様を、偶然通りかかった大和様が助けてくださったのです。口惜しい事に……私共は、今のご主人様に触れる事は出来ませんから』

「ファラ……」

悔しげに視線を逸らすファラ。気付くと、ファラの手は握り拳で閉ざされていて、僕には何も言えなかった。

静かな沈黙。はっ、と何かに気付いたファラはすう……、と身体が透けていく。

そしてがちゃ、と部屋の扉が開いた。

「お、眼覚めたのか？」

「あ、大和君……」

部屋に入って来たのは大和君だった。その手には水とタオルがあった。

大和君は水の入ったカゴを近くの机に置くと、僕の近くまで寄って来る。

「ありがとう、大和君。僕を助けてくれたんだよね？」

「んー、まあな。もう大丈夫なのか？」

「うん。心配かけてごめんね」

僕はベッドから降りて立ち上がる。その時、ふらっと身体が揺れた。

倒れる……！

咄嗟に眼を閉じる。けれど、それ以上身体が落ちる感覚は襲ってこなかった。

「まったく、大丈夫か？」

「……大和君」

どうやら大和君が支えてくれたみたい。僕は、大和君に支えられる

ままベッドに横になると、布団を掛けてくれる。

……優しいんだなあ……。

なんとなく。そう、なんとなくだけど洸司郎と大和君が重なって見えて、僕はすぐさま視線を逸らした。

「ありがとう」

「良いつて。一日だけでも、一緒に戦った仲だろ？」

「はは……そうだね」

そう、一日だけだったんだ。ペンダントを賭けた戦いなんてしなかったんだ……。

布団に隠れて唇を噛む。

「お前って旅人だったんだなー」

大和君は近くの椅子に掛けられた僕のローブを見ながら言う。
そういえば僕が居たのはウェーリアの外。大和君はどうして……

……。

「大和君も旅人だったの？」

「ん？ いや、俺はギルドの依頼である遺跡の調査をな」

「ギルド……遺跡？」

デュエリストハンターズギルド……か。確かウェーリアにもその支部があるんだっけ。

それにしても、遺跡か。地球じゃ聞き慣れない言葉だね。

「ああ。お前はギルドに登録してないのか？」

「うん。ほら、旅人だからね」

「……それもそうか」

なんとか納得してくれたのか、大和君は立ち上がって伸びをした。

「……ねえ、その遺跡ってどこら辺にあるの？」

「ん？ 確か……ここから南東、だったかな。なんでだ？」

「……僕も一緒に着いて行こうかなって思ってたさ」

遺跡とは、過去の人類の生活……若しくは歴史上の出来事を記す場所の事だ。もしかしたら、今僕の身に起こっている状況の事も書いている可能性もある。

……罠とかあるのかな？

「俺は良いけどさ……お前、あの女の子たちは良いのか？」

「桜たちのこと？ ……うん、大丈夫。桜たちは先に行って貰ってるからさ」

「ふうん。ま、良いけどさ」

……今頃。

桜たちは、どうしてるんだろうなあ……。

僕は上半身を起こしながら、そんなことを思った。

第二章 第十四話 弱点と再会（後書き）

サブタイトルって難しいですね（笑）

いつも悩ませます W W W

第二章 第十五話 親友……遺跡

——強くなりたい。心の底から、強くそう思った。

足手纏いにはなりたくなくて。せめて、彼の弱点と言われない程度には強くなりたい。

そう思っている桜たちに気付いた墮天使メフィリアンノは、最早身体の痛みなんて忘れてしまっていた。

「——考え？」

メフィリアンノの言葉に、桜が首を傾げる。

ええ、と頷く姿に僅かな期待が胸を過ぎる。未だにメフィリアンノが言った、アキラと夜、一緒に寝た事がある女の子……という言葉葉を忘れたわけじゃない。

が、それよりも弱点、と言われた“事実”の方がインパクトの大きさでは勝っていた。

「貴方たちを精霊界へと飛ばすのよ」

「精霊界だと？」

「精霊界には、まだカード化していない子も沢山居るの。言うならアキラが使ってる人形達も、ユグルじゃまだカード化していないでしょう？」

そう言われて、桜は確かに、と頷くがローラたちは今の発言に疑問を持った。

「“ユグル”じゃ……とはどういう意味なのですか？ 確かに見様が使っているカードは知らないものばかりですけど、その言い方じ

や……」

「まるでアキラがこの世界の人間じゃないみたい？」

ローラたちの気持ちを汲み取って、メフィリアンノは訊く。首肯する彼女達に桜は向き直って、頬を掻いた。

「あの……ね、本当は黙ってたんだけど……お兄ちゃんとわたし、異世界から来たんだ」

「……………異世界…………？」

「うん。日本……じゃなくてっ！　えと、地球っていうところなんだけど、色々あってユグルに……」

「……信じられない、と言いたいかな……」

人を傷付けるデュエル、命を狙われている晃。それを見ている彼女等からすれば、信じるしかなかった。

信じる、と三者三様に答えてくれた事に桜はお礼を言って、メフィリアンノはふふ、と笑みを浮かべた。

「良い友達を持ったわね、桜ちゃん？」

「……………」

「話を続けるわね」

そう言って、メフィリアンノは腕を組んだ。腕に乗っかる形で豊かな胸が強調される。

「貴方達が使っているシリーズにも、まだ出て来ていないモンスターたちがいっぱい居るのよ。確か……キングドラグーンに氷結界、スクラップにサイバー・ダークだったかしら？」

タッグデュエルトーナメントの一日目を見ていたメフィリアンノ

は、記憶を思い起こしながら喋る。

「貴方達は精霊界に行けば強くなれるわ。確実にね」

——悩む必要なんて無い。

顔を見合わせて桜たちが頷き合うと、メフィリアンノへと一斉に向き直った。その眼には決意と覚悟が見え隠れしていて、メフィリアンノはまたにっこりと笑った。

「お姉さんが精霊界へと連れてってあげるわ。期限は1日……いいえ、時間軸が違うから精霊界で言う1ヶ月よ。良いわね？」

長く居続ければ、その分見と会う事が出来ないという事。

それも我慢出来ないのか、桜を筆頭に首を縦に振った。尤も、リズだけは静かにああ、と頷いただけだ。

メフィリアンノが桜たちに手を翳す。身体に光が灯り、足から光の粒子になって少しずつ消えていった。

「あの……」

ローラがメフィリアンノを見つめながら訊く。

「……………貴方は、何者……………なんですか？」

「そうね…………」

一瞬悩むような仕草をして、メフィリアンノは微笑んだ。

「貴方達と同じ。アキラの傍に居たい存在……………かしら」

4人が消える。

駅に、再び電車が到着した。

◇
◇
◇

（頑張りなさいね）

電車に乗り込んだメフィリアンノ。座席に座り、足を組んで瞳を
瞼の裏に隠した。

向かう先は——諏訪晃の元。

向かい合う座席に誰かが座る気配がして、メフィリアンノは静かに
眼を開けた。そこに居たのはローブを深く被った女性で、顔は全
く見えない。足を組んで見えた白い肌が性別を確認できた材料であ
る。

「あら、貴方……もしかして、あのハグレ者のお仲間かしら？」

「そういうコト。メフィリアンノ、アンタへの伝言が1つだけ」

「何かしら？」

足を組み直す。挑発的に笑みを零すメフィリアンノに害した様子は
無く、その女性は淡々と言葉を続ける。

「“諏訪晃はウェーリアから南東に位置する遺跡へと向かう”……
それだけよ」

「……………どうしてそんな事をアタシに教えてくれるのかしら？」

「さあ、ね。あの方の考える事なんてあたいに分かるはず無いから」

そ、と小さく言葉を紡いで、メフィリアンノは眼を閉じた。向かう先は決まった。目指すは南東にある遺跡だ。

罨なら罨で良い。元々そんな事で嘘を付くような者じゃないと知っている。

「ねえ……貴方はなんでアイツの下で動いているの？」

「……別に。気紛れじゃない？」

そう言っ、その女性は立ち上がった。

電車の音が響いている。

女性は別の場所へ移動しようとメフィリアンノに背を向けた。

「――元氣そうで何よりだわ、メフィリアンノ」

「貴方もね」

計っていたのか、タイミング良くウェーリアの一步手前の駅に到着する。女性は電車から降りて、静かに歩き出した。

人込みを避けて、その弾みでフードが外れる。ショートカットの髪をした綺麗な女性が、目尻に涙を浮かべていた。

立ち止まり、空を見上げる。丁度発車を告げる音が鳴り響いた。

――電車が、次の駅へと前進する。

「“なんでアイツの下で動いているの”、か」

ふふ、と晒わらってしまう。

そんなの……答えは1つしか無いではないか。

「親友^{アンタ}を探していたから……………あの方に近付くのが一番だったのよ…………馬鹿」



黒衣を纏った魔導師が杖を構え、青い眼をした龍が相対するように眼光を飛ばす。その下では屈強そうな戦士が光のようなものを纏って手を翳し、その向こう側で赤い眼の龍は唸っているように見えた。

1人の魔導師、2匹のドラゴン、1人の戦士。
彼等は、中央にある印に向けて敵意を示している――。

(これは…………)

印。それは地球でも見た事がある、陰陽道のそれだった。
湾曲した黒と白が溶け合う事は無く、けれど黒い場所には小さな白い点。白い場所には小さな黒い点がそれぞれ、“光の中にも闇、闇の中にも光”があることを示していた。

「これは…………一体？」

「さあな。んなことよりほら、早く行こうぜ？」

「あ、うん…………」

大和君に急かされる形で、僕は遺跡の中を進んだ。
通路を照らす灯火は、僕たちが入ってからかれこれ1時間くらい経つけれど決して揺らぐ事は無い。別に僕たちが点けた訳じゃなく、入った時には既に小さな火が遺跡内を照らしていた。

先程の壁画があった場所を離れ、奥へと進む通路に入る。
ひゅう、と少し寒い風が吹いて来て、僕は少し身震いした。

——さっきの壁画……。

大和君から数歩遅れるかたちで歩を進めながら、僕は思考する。

（アニメで似たようなのを見た事がある……あれは最初のデュエル
モンスターズの時……けど、それよりは2匹多い）

嫌な汗が頬を伝う。ローブの裾で静かに拭うと、辺りを見渡した。
大和君と僕の距離は約……3歩分。通路は今のところ、一本道。
なんでか分からないけど、今まで毟みたいなのは無かった。

だからか、大和君は気楽だ。警戒心の欠片も無い。

（……あの壁画は、《ブラック・マジシャン》に《青眼の白龍》、
《真紅眼の黒竜》……《E・HERO ネオス》だろうか。けど、
なんで———？）

「なあ、なんか物音しないか？」

「え？」

言われて、僕は耳を済ませる。

ゴロ、ゴッ……と、小さくも激しい岩の削る音が遺跡内に轟いて
いる。音の向かう先は………。

後ろ？

「なっ……！」

「い、岩が転がって来たーっ!？」

ななな、何この漫画みたいな罨!?

大和君と並んで逃げて、逃げて、逃げる。思考する時間なんてあるはずも無く、一目散に足を動かした。

「ぼ、僕っ……体力無いんだからーッ!」

……大声を出してるだけ余裕だろうか。なんて雑念も振り払って、僕は疾走した。

後ろを振り向けない。

音が近付いてくる。

息が荒くなった。

今にも転びそうだ。

「晃、あそこに扉があるぞっ!」

「へっ? と、とび……らっ?」

な、なんで……っ!

なんて考えている暇は無い、このままじゃ潰されて終わりだ。

僕と大和君は、身体ごと扉に突進した。勢い良く扉が開き、僕と大和君が転がり込む。と同時に、巨大な岩がごろごろと転がっていった。

「はぁ、はぁ……!」

「あ、危ないところだったな……大丈夫か?」

「う、うん……なんとか」

今まで罨なんて無かったのに、なんで……僕は大きく深呼吸して、息を整えてから立ち上がった。

大和君は既に立ち上がって、火で灯られている部屋を見渡している。

「ここも、壁画しか無いみたいだぜ」

そこに描かれていたのは、さっきとは違う絵だ。

白く塗り潰された翼を持った性別の分からない人が静かに佇む、向かい合って黒い翼を持った存在が腕を組んでいるようだった。

遺跡にある壁画にしてはかなり新しい感じがする。

大和君はバッグに入れてあったカメラが数枚壁画を撮った後、警戒しながら部屋の外に出た。

「ほら、次行こうぜ、晃！」

「……うん」

僕は壁画を一瞥して、部屋を出る。

もう岩とかは……ないよね。

静かになっている遺跡内。僕は安堵の息を漏らしながら、少し着崩れてしまったローブを羽織り直した。

暫く歩いて、僕も疲労で汗を拭う回数が増えてきた。大和君は元々体力は多い方なのか、結構平気そうだ。

……余計洗司郎に似てるな、と思った。

「お……分かれ道だぜ」

右と左。さっきの岩がどこに行ったのか疑問に思うくらい、綺麗に分かれ道となっていた。

「どうする？ 俺達も別れるか、順番に行くか」

「……分かれてみよう？　その方が手っ取り早いし」

僕から遺跡に行きたい、と言ったけれど……思ったよりも体力の消耗が激しい。なるべく早く終わらせたい僕は、そう提案した。

大和君はそうだな、と頷いてくれた。

「んじゃ、俺は左に行くぜ。晃は右を頼んだ！」

「うん、分かった」

じゃあな、と手を振りながら大和君が左の道に向かう。僕は
大和君に聞こえない程度の声で気をつけて、と呟いてから右の道に足を
進めた。

ひゆう、と。

僕はまた、身震いをした。

第二章〈第十五話 親友……遺跡（後書き）

……正直に言います。

実は……この辺りはプロット、全く考えておりません（爆）

執筆しながら展開を考えているので、色々疑問が残るかもしれません
んが、どうかご容赦ください……………（汗）

第二章 第十六話 スクラップVSスクラップ

——世界が光から闇に堕ちるのは、唐突だった。

両親は借金を作り、その形として自分の娘を明け渡した。それからだった。

貧しくも、家族4人で暮らしていた日々（ひかり）が唐突に終わりを告げ、新たな日々（やみ）が始まった。

フィジー＝オールド・ランナはサーヴァイル。妹のリイナ＝オールド・ランナはウェーリアで。引き離された姉妹は、もう2度と会うことは無いと——そう思っていた。

それが嫌で。諦めたくなくて。姉、フィジーは自分の買い主から逃げた。少しでもお金を集めて、ウェーリアへ行って……妹、リイナと再会したかったから。

奴隷だという事には気付いていただろうに、何も干渉せずに働かせてくれたピケル・クラン食堂の方々にはいつかお礼をしなきゃな、と思う。

——そこで出会ったのが、諏訪晃だった。

一目見て思ったのは、女の子みたいだ、という感想。両親に女の子2人を連れて、彼は食堂に入ってきた。

きっと彼も……奴隷である自分を見て、心中で蔑んでいるんだろう、と自嘲した。

『僕はその奴隷制度に、賛成してる訳じゃ無いから……止めない訳

にはいかない』

そう、はつきりと発言した人は初めてだった。

そして、彼は涙を受け止めてくれた。自分の命も省みず^{かえり}に、痛みを負うデュエルをしてくれた。

——奴隷である自分を、抱き締めてくれたのが、凄く嬉しくて。世界にまた、光が灯ったような気がした。

足手纏いは嫌だ。ならば、答えは1つ……………！

「……………」

目の前にある使い古された道具達が積み重なる光景を眺め、フィジーは眼を細めた。ガラクタの間を風が吹き抜けていく。

太陽は無いのに、辺りは明るい。上を見上げると、空とは違う空虚が漂っていた。

精霊界の一角——スクラップシリーズが集う場所。

『アンタかい。儂を呼んだのは？』

その姿は、大きく。その姿は、酷く雄雄しく。フィジーは珍しく驚きに満ちた表情で目の前に存在するドラゴンを見据えた。

フィジーが知っている、スクラップシリーズにいるどのモンスターとも違う外見。

ガラクタで出来た脚で地面に立つと、まるで大きな地震のような地鳴りが響く。

「……………貴方は」

『儂はこの場所で長をしている者だが。儂を必要とする者の声が聞こえたが、アンタかい？』

声がどんなものかは分からない。が、もしもこの長によって“新たな力”が貰えるのならば。

フィジーは巨大なそのドラゴンの眼を真っ直ぐに見つめ、こくりと頷いた。見極めるようにドラゴンがフィジーを見下ろし続けている。

奔る沈黙。

冷えた風がまた吹き、フィジーの髪を揺らす。それでも、フィジーの決意に秘めた瞳はドラゴンから放される事は無い。

「……………わたしは、」

静寂を突き破るように、フィジーが口を開く。

「……………強くなりたい……………自分の為に」

『自分の為、と？』

「そう」

首肯して、左腕のデュエルディスクに取り付けられた自分のデッキを見つめた。

このスクラップデッキは、自分の分身だと思った。元々はガラクタという存在だった道具達が、一致団結してモンスターとなったのだ。

それは、執念に見えた。

ならば、自分もその執念を貰おうと。貰って、いつか絶対にリィナと再会してやろうと。

——胸くらい、いつでも貸すよ？

嬉しくて。同時に、辛くて。

その底知らぬ優しさに触れたせいで、執念が堕ちてくような感じが襲うんだ。

……けど。

彼と触れ合って、変わっていったんだ。

（執念は……決意に）

変わっていく。

「わたしが……彼の傍に居たいから……なんでも話してくれる、仲間になりたいから……わたしは自分の為にも、強くなりたい……」

『……ほお？』

なんとなくだが、そのドラゴンが笑みを浮かべたような気がした。

『……良いだろう。ならば、デュエルで儂に勝って見せよ！』

「……望むところ」

ディスクを構え、淡く光る。

ドラゴンはディスクは無かったが、目の前に大きなカードが5枚並んだ。あれが手札なのだろうか。

「……アツキー………」

ターンランプは、フィジーのディスクが照らした。

「待ってて」

デュエルが、始まる――。



「わたし……ドロー」

相手は、スクラップの長……多分、デッキもスクラップだと思う……。

手札を確認して、わたしは一先ずの戦術を頭に浮かべる。

「……《スクラップ・エリア》を発動……デッキからスクラップ・チユーナー、《スクラップ・ビースト》を手札に……そして、召喚」

屑鉄の獣が唸りながら場に現れる。相手は長とは言え、今はデュエル中。何も気兼ねは無いらしい……。

「カードを1枚伏せ………終了」

『儂の番か。引くぞ』

間が空く。6枚になったカードから1枚が表になって、モンスターカードゾーンにまで風を切る音と共に移動した。

『《スクラップ・バード》を召喚するか』

「……バード……？」

聞いた事が無い……。屑鉄で出来た鳥が厭な金属音を立てながら羽を飛ばたかせるのを見て、わたしは眉を顰めた。

わたしの様子を見て、長はおお、と声を上げた。

『そういえば、まだ一部の世界では上陸しておらんんだか。こやつは召喚に成功した時、デッキからスクラップモンスターを落とせるのだよ。儂は効果により、《スクラップ・ゾンビ》を墓地へ』

むう……また知らないカード……。

これは、少しばかり……不利かもしれない。

勿論、負ける気はない……わたしは油断をせずに身構えた。

その時、長が眼を細めたのを……わたしは知らない。

『残念ながら、バードじゃビーストには勝てぬ。儂はカードを1枚伏せて、ターンエンドだの』

「エンドフェイズ時……リバースオープン、《スクラップ・スコール》。対象はビースト」

デッキからカードが抜き出され、そのカードを墓地へ送る。

「デッキより《スクラップ・キマイラ》を墓地……その後、1枚ドロ………ビースト破壊。効果によってキマイラを回収する……」

『スクラップの効果により破壊されたら、墓地からスクラップモンスターを回収……か。儂が言うのもなんだが、厄介だの』

「……………わたしのターン、ドロ」

わたしの手札は6枚になった……そして長は、4枚………わたしの手札は良い。

このまま、押し切る……………！

「《スクラップ・キマイラ》を召喚……………効果で《スクラップ・ビースト》を特殊……」

『やはり来たかい……リバー^{トラップ}ス罠、《ゴッドバード^{トラップ}アタック》。バードをリリースし、キマイラとビーストを破壊するかの』

「っ……………！」

……成る程、《スクラップ・バード》は鳥獣族だから、ゴッドバードの餌に出来るんだ……………。

わたしが知るスクラップの鳥獣はまだサーチャーのみ。これは……少し、辛い。

「…………カードセット…………エンド」

『儂のターンじゃな、ドロフェイズ』

手札が5枚に増える。

『ふむ……僕は《スクラップ・キマイラ》を召喚する。このカードによって、チューナーである《スクラップ・バード》を特殊召喚』

むう……あの屑鳥、厄介……。

攻撃力は低いみたいだけど……レベルは？。キマイラと合わせてまだ？だから、まだ――。

『そして、墓地の《スクラップ・ゾンビ》の効果が発動される。自分がスクラップモンスターを特殊召喚に成功させた時、墓地のこのカードを守備表示で特殊召喚する』

「……！」

数少ない道具が集まって出来たモンスター。しかし、その身体からは黒い液体がぽたぽたと滴っている。

……少し、気味が悪い……。

『行くぞ……？　僕はLV4、《スクラップ・キマイラ》にLV2《スクラップ・ゾンビ》をチューニングする』

キマイラとゾンビが星となり、1つの塊へと変化する。

『さあ、来ると良い……我が僕^{しもべ}、《スクラップ・プリースト》！』

屑鉄で出来た人間……。今にも崩れそうな道具で出来た“その人”は、風穴の空いた右目をわたしに向けている……。

『さあ、見せて貰おう。アンタの決意を……！　まず、スクラップ

モンスターが特殊召喚された為に、墓地の《スクラップ・ゾンビ》を特殊召喚する！』

……………バードと言い、あのゾンビと言い…………強い。……………こういうカードをわたしも持っていたら……………なんて思うのは駄目だろうか。わたしは小さく深呼吸して、長のプレイを見据える。

『そしてプリーストの効果を発動する。自分フィールド上に存在するスクラップモンスターを破壊し、デッキからスクラップモンスターを墓地へ送る。儂が落とすのは《スクラップ・サーチャー》じゃ』

プリーストによって、バードが破壊される。

キマイラによって特殊召喚されたという事……………それはバードがチユナーという事……………そしてスクラップチユナーはスクラップによって破壊された場合、墓地のモンスターを回収できる………………そしてサーチャーはスクラップが破壊されたら特殊召喚される……………。

『全て分かっておるようだな？ では、バードの効果によってキマイラを回収、そしてサーチャーを場に出すぞ』

このターンが始まって……………長が使った手札はキマイラの1枚のみ。そして……………ゾンビはチユナー、ということはプリーストとシンクロし、ドラゴンを作った後にまたゾンビが蘇生されるコトもある……………。

ふふ……………精霊界って、こんなに進んでたんだ……………。

『では、プリーストとゾンビでシンクロをし、《スクラップ・ドラゴン》をシンクロ召喚しておこう』

「っ……！」

——冷や汗が頬を伝った。

『効果で、再びゾンビが蘇生。《スクラップ・ドラゴン》の効果を発動する！ こちらの場は《スクラップ・ゾンビ》を、そちらはその伏せカードを対象にする』

「く……《幻獣の角》が………」

『では、バトルフェイズ。《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！』

フィジールLP8000↓5200.

大幅にライフポイントが削られる……そのまま、長はターン終了を宣言した。

わたしの手札は4枚……ドローフェイズで5枚になる………。

相手の場にはドラゴン、サチャー。正直、全てのアドバンテージは長の方が上手。

手札は所詮、1枚差………それでも。それでもやっぱり。

わたしはアッキーがしてくれたように……デッキを、信じる——。

「わたしのターン、ドロー……！」

第二章〜第十六話 スクラップVSスクラップ（後書き）

いや〜……書いてて思いました。ゾンビ強いですねW W

もう少し調整しておけば……いやしかし、私はこのまま行こう！
爆）

感想、評価等お待ちしております！

第二章 第十七話 これも1つの幕閉じ

『こやつ……』

内心、スクラップの長は驚きに満ちていた。

目の前に居る背の小さき女人。口数の少ない彼女から聴かされた決意は、未だ年端も行かぬ少女とは思えないほどに真っ直ぐだった。真っ直ぐで、歪んでいない。あるのは、ただ純粹に“誰かの為に強くなりたいという決心”。

驚きと同時に、妙な好奇心が胸中を支配した。

——彼女をここまで夢中にさせたのは、一体どんな存在なのだろうか……？

「わたしのターン………ドロー……」

フィジーの手札は5枚。フィールドのカードは何も無い。

手札を今一度確認し、戦略を練る。長のカードの殆どは知らないカードばかりで、逆にこちらのカードは知り尽くされている。

有利か不利かで表される“アドバンテージ”という言葉。その範疇にある情報アドバンテージは相手が上手だ。

なら……遠慮する必要は無い——。

「伏せは無い……なら……わたしは……《サイバー・ドラゴン》を攻撃表示で特殊召喚……」

相手の場にモンスターが存在し、自分の場にモンスターが居ない場合特殊召喚する事の出来るモンスター。

「……《スクラップ・ビースト》……召喚」

2枚目のビースト。

《スクラップ・ドラゴン》など、一部を除いてスクラップのシンクロモンスターは相手によって破壊された場合墓地のスクラップモンスターを蘇生させる効果を持つ。

ならば、狙うは除外、若しくはバウンスである。

「LV5《サイバー・ドラゴン》にLV4《スクラップ・ビースト》をチューニング……………」

レベルは、？。

「募る鉄屑が双龍となりて復活せん……。その身に宿る2つの魂よ、荒神こうじんの如くその場を荒らせ……………！シンクロ召喚……………轟け、《スクラップ・ツイン・ドラゴン》……………！！」

長がほう、と声を上げるのが聞こえた。

「……カードを1枚伏せ……………スクラップ・ツインの効果発動……………わたしの場の伏せカードと……………《スクラップ・ドラゴン》……………《スクラップ・ゾンビ》……………」

『……儂に邪魔は出来ぬな』

ゾンビが手札に、ドラゴンはエクストラデッキに戻っていく。
これで、長の場合はサーチャー一体のみとなった。

「まだ……………！破壊したのは《荒野の大竜巻》……………このカードがセ

ット状態で破壊されたら、表側のカードを1枚破壊する……………サ
ーチャーを破壊……………！」

これで、長の場合はがら空きである。

「バトル……《スクラップ・ツイン・ドラゴン》でダイレクトアタ
ック……………！」

《スクラップ・ツイン・ドラゴン》ATK3000.

長LP8000↓5000.

「……ターンエンド」

『では、儂のターンか。ドロー』

ドローフェイズ。長の手札は6枚だ。

しかし、その中の一枚はゾンビだから、実質5枚に等しい。

『《スクラップ・キマイラ》を通常召喚する。効果により、《スク
ラップ・バード》を特殊召喚』

2枚目のキマイラを召喚し、再び場に2体のスクラップモンスター
が並ぶ。

『そして、儂の場にスクラップが居る為、《スクラップ・オルトロ
ス》を特殊召喚しよう』

「……………」

フィジーが眼を細める。

晃がフィジーのデッキを使った際もオルトロスが使われたカードだ。スクラップモンスターが自分の場に存在する時特殊召喚可能で、その効果で特殊召喚された場合、自分フィールド上のスクラップモンスターを破壊するカード。

『オルトロスの効果により、《スクラップ・バード》を破壊する……。知っているな？ スクラップのチューナーは、スクラップと名の付いたカードで破壊されたら墓地のスクラップモンスターを回収できる事を……儂は先程使った《スクラップ・キマイラ》を回収する』

「……むう」

そして――オルトロス自身も、チューナーである。

『墓地に存在する《スクラップ・サーチャー》の効果により、儂の場に守備表示で特殊するか』

強い、と純粹に思った。

手札1枚で戦況を逆転できるのはスクラップの利点だが、同時に長は次ターンの準備もしたのだ。

このターン、長が切り返して次のターンにフィジーがまた逆転しても、その後でまた場は荒らされるだろう。

『驚いておるな？　そこまで想定外だったか、儂の……いや、精霊界の力は？』

「……………」

『その者が教えてくれたぞ——フィジー・オールド・ランナ。ア
ンタの想い人とは、諏訪晃という名なのだな』

「っ……！」

長がフィジーの場で佇む《スクラップ・ツイン・ドラゴン》に視線を送りながら声に出す。

『諏訪晃……クク、どこかで聞いたことがある名と思ったら……あの人形どもが大事にしておる存在の事か』

「人形……？」

晃が使っている人形シリーズの事だろうか、とフィジーは首を傾げた。

長はいや、と呟きを無かった事にして話を続ける。

『1つ、良い事を教えてやろう』

一際、長の声が低くなる。重く圧し掛かる静かな声は、屑鉄の山を覆うように拡がっていく。

『諏訪晃が相手にしている者どもは……儂でも敵わないぞ？』

「……え……？」

『下っ端ならばともかく。上位に位置する奴らならば、相手に出来る存在など嘗ての偉人くらいだ。古代エジプトの王か、^{フアラオ}その依代か……正義の闇の波動を受けた英雄を使役する者か………』

それが一体誰を指すのか、フィジーには分からなかった。
長は懐かしげに目を細めながら口々に呟くと、ふん、と自嘲する
かのように笑った。

『諏訪晃が戦う相手は、精霊界の長たちよりも強大だ。儂に勝てぬ
ようならば、強くなったとは言えぬぞ——LV4《スクラップ・キ
マイラ》にLV4《スクラップ・オルトロス》をチューニング!』

キマイラとオルトロスが星となり、竜へと昇華する。

『砕くが良い、《スクラップ・ドラゴン》……!』

スクラップ・ツインよりも一回り身体が小さな竜が対峙する。

『《スクラップ・ドラゴン》の効果を発動する。儂のサーチャーと
そちらに居るスクラップ・ツインを破壊する!』

「つ……《スクラップ・ツイン・ドラゴン》が相手によって破壊さ
れた時……墓地のスクラップモンスターを蘇生させる………《ス
クラップ・ビースト》………!」

『所詮はその場凌ぎだな。バトル! 《スクラップ・ドラゴン》で
ビーストを攻撃!』

守備表示だったビーストは、何の抵抗も無く粉々となる。

『儂はこれで終了としよう。さあ、アンタのターンだ』

「……………ドロー」

手札は4枚。場にカードは無い。

相手の場にはスクドラが1体のみ。長の墓地にはサーチャー、バード、手札に回収したのとは別のキマイラとオルトロス。

(まだ……一度も出した事は無い……使い難いスクラップだけど……)

初めての出番を与えよう。

(おいで……原子力の屑鉄竜――)

「わたしは《ワン・フォー・ワン》発動……《召喚僧サモンプリースト》をコスト……《レベル・ステイラー》特殊……そして《簡易融合》……わたしはライフを1000払う……」

フィジーLP5200↓4200.

「LV5以下の融合モンスター……《メカ・ザウルス》を特殊召喚……」

機械で出来た恐竜が、雄叫びを上げて現れる。攻撃も出来なく、エンドフェイズに破壊されるというのにやる気十分だ。

尤も、今回はシンクロとして早々にご退場だが。

「……《レベル・ステイラー》をリリース……《スクラップ・ソルジャー》をアドバンス召喚」

LV5のチューナーモンスター、《スクラップ・ソルジャー》が召喚される。

「《スクラップ・ソルジャー》のレベルを1つ下げ……ステイラーを特殊」

通称星喰い蟲が小さな動きで現れる。

気のせいかな、《スクラップ・ソルジャー》が小さくなったように感じる。

「LV1《レベル・ステイラー》とLV5《メカ・ザウルス》にLV4となった《スクラップ・ソルジャー》をチューニング」

星は、？。

屑鉄の間を縫って、風が吹く。その風は短めの髪を撫で、同時に荒々しげな声を届けてくれた。

フィジーが持っている中で、最高レベルのシンクロモンスター……。――。

「原初へと帰す竜の魂よ……。その身に創傷宿りて、汝に絶望の驕り声を震わせん……シンクロ召喚……理平せよ、《アトミック・スクラップ・ドラゴン》………!!！」

待ち侘びた外。待ち侘びたフィールド。

咆哮が、天を突く――――。



震動が地を通った。かよ

揺れた地面によるめいて、諏訪桜は近くの岩に捕まった。

「な……なんだったんだろう……地震かな？」

精霊界にも地震ってあるんだあ、なんてことを考えながら桜は岩で出来た道を進む。通い慣れたかのようにひよいひよいと進んで行く桜に、疲れは無い。

やがて山の麓にまで到達すると、ううん、と大きく伸びをした。

「やっと着いた……まったく、遠いよ、もう」

『文句を言うでない。強くなりたいのだろうか？』

頭に声が響く。桜はディスクに嵌められたデッキを見つめると、うん、と静かに頷いた。

顔を上げる。

神々しく輝く身体、長く伸びた銀の髭。紅の瞳……左右の手には紅い水晶と青い水晶。

——皇神竜を名に冠したドラゴン、ラグナレクが真っ直ぐ、桜を見続けていた。

「わたしが強くなれさえすれば、お兄ちゃんは傷付かないで済むんだよね？」

『……どうだろうな。あ奴の性格からして、関係無く1人で突っ走りそうなものだが』

だが、とラグナレクは続ける。

『諏訪桜は、守られる存在ではなく……晃を支える存在となるだろう』

「守られるんじゃないくて、支える……か」

兄が、好きで。大好きで。

交際とか、結婚とか……公おおやけにした行事は出来ないかもしれない。

本当は血が繋がっていない、とか……そんな淡い希望を持っていたも仕方が無いって悟ったのは、晃や洸司郎が中学2年生……桜がまだ小学生の時だった。

最愛の兄は、泣いていて。心配させまいと、笑顔だった。

そんな時……どうして、わたしはお兄ちゃんの隣に居られないんだろう、と思った。

幼い自分は何も出来なくて。一番辛いはずの兄は必死に学校へ行って、帰ってきて、料理を作って……優しくしてくれた。

休みの日は“有宮真名”の家族、親戚の元へ走り回っているのを知っている。

そんな事をして貰える彼女の存在に嫉妬する幼い自分が嫌いで……大嫌いで。兄に冷たくしてしまう自分が、さらに嫌いだった。

それなのにご飯を作ってくれたり、勉強を教えてくれたり……酷い事を言った自分に優しくしてくれた兄、諏訪晃は……どこまでも自分を守ってくれていたんだな、と後になって気付く。

「ねえ」

『……?』

だから、今度は。

守る、とまで大袈裟には言えないけれど……………。

「わたしは、お兄ちゃんが大好きなんだよ！」

せめて、隣で支えられる存在に。

「だから、宜しくねっ！」

——それが、答え。

第二章〜第十七話 これも1つの幕閉じ（後書き）

デュエルを書く時、地の分が少なくなるのはどうにかしたいなあ…。

感想や評価を貰えるとても執筆意欲が増します（笑）

ですので、どうぞ皆様宜しくお願いしますっ！

第二章 第十八話 謎の女性とリズの嘘

「……そうか」

沈んだ声。沈んだ心。

悔しさの滲む胸中を抑える事が出来ずに、強く唇を噛んだ。それに伴って血が滴るも、気にした様子は無い。

目の前で身体を光らせるモンスターに頭を下げると、その場から逃げ出すように走り出した。

「私は………っ」

嗚咽の混じった声に、また心が傷付くのを感じた。

「私は………っ！」

先程言われた言葉が脳内を過ぎて行く。

——裏に住む彼等は、君を認めていない。

——君は元々、復讐しか考えていなかっただろうからね。

——……今のままでは、これ以上強くなる事など出来ないよ。絶
対に。

石に躓いて、盛大に転んだ。ドラマだところで豪雨なのだろうな、と自嘲してみる。尤も、精霊界に雨があるかは知らないけれど。
涙が地面を濡らす。同時に、どこからか盛大な咆哮が精霊世界を揺らがせた。

「晃……………」

すまない、と。

小さな声が、リズⅡフォルン・サレイルの口から紡がれた。

◇
◇
◇

「な……………んですか、これは」

目の前の惨状に、ローラⅡレイフル・メイサは声を奮わせた。木々は折れ、葉は朽ち果てている。元々は穏やかだっただろう“里”は、ボロボロに荒れてしまっていた。

と——人影が見えて、ローラは走った。

「……………あ……………」

青い髪をした少女。服が所々破れているその少女は見た事がある。

「ま、舞姫……………？」

《氷結界の舞姫》が、傷付いた身体で立ち上がろうとしていた。

『あ、貴方は……………？ 人間、なのですか？』

咄嗟にローラは舞姫を支えると、不思議そうに舞姫が首を傾げた。

人間が精霊界に居るのが不思議なのだろう。

半分に折れてしまった木に舞姫を支えてもらいながら座らせると、ローラは自分が着ているローブを破って傷に覆わせる。

「私は……その、強くなりたくて、ユグル……人間界からここに来たんです。けれど、これは一体……？」

『……敵……では無いようですね』

「え？」

いいえ、と首を振って舞姫は辺りを見渡す。

荒れ果てた里の惨状を眺め、悔しそうに唇を噛む。

『突然でした。唐突に現れた人間が、私たちに襲い掛かってきたんです』

「人間、ですか……？」

『ええ。巫女装束を身に纏った、一見普通の女性でした』

「み……巫女装束、ですか？」

今はローブで隠されているが、ローラも巫女装束を身に纏っている。そして、ユグルでは巫女装束を着る習慣があるのはローラの出身村、レグラスのみである。

そして——そのレグラス村でさえ、巫女装束を着るのは魔王に捧げられる生け贄のみだ。

（まさか……いいえ、私以外の巫女様は皆ディアボロス……もとい、

ディアブルムの供物となった筈です。ならば、一体……？

『……どうかしましたか？』

「えっ？ い、いいえ、何でも！」

応急処置とは言え、手当てをもらった舞姫はありがたいございます、と控えめに頭を下げて立ち上がろうと足に力を込める。

だが、怪我が災いしてか膝を付いてしまう。
咄嗟にローラが支える。

『行かなければ……』

「行くって……その身体でどこへ!？」

『結界の中へ……!』

舞姫の視線の先。そこには地下へと続く階段が静かに佇んでいた。そういえば、晃に聞いたことがある。確か、タッグデュエルトーナメントが始まるよりも前のこと――。

――氷結界ってさ、確か氷結界の龍を封印し、守護する一族らしいんだよ。氷の結界って意味だね――

その知識は聞いた事が無かったローラは、実際半信半疑だったのだが……今、それが現実になろうとしている。

「結界って……あの地下ですか？」

『もう、結界は壊されていますけれど……あの地下の奥に、古の龍

が眠っているのです……』

その時だった。

ずん、と……地面が揺れると同時に、身が震える程の咆哮がどこからか戦慄した。

「なっ……？」

『……貴方以外に人間が精霊界へ来ているらしいですね。今のはスクラップの方々が居る方角です』

——ということは、今のはフィー様に関係があるのでしょいか。

そんな事を疑問に思っていると、舞姫の身が凍り付いた。息を殺している。

「あの、一体どうし——」

「まったく、今の地震は何よ……もう少しで階段から転げ落ちちゃうところだったじゃない」

声は、結界の方から。

視線を向けると、そこに居たのはローラが着ているものと似た巫女装束に身を褰やっした女性。ローラと同じ金髪、同じ碧眼。顔立ちもどこと無く似ている。

勿論……ローラに姉や妹は居ない。母親は10年前、ディアブルムとの儀式の際の“賭け”に敗北した。

「舞姫様。少し、この場で待っていて下さい……」

『え、あの……?』

大丈夫です、と慣れないウインクをしてローラは立ち上がる。どちらにせよ、鈍痛が襲って舞姫は自由に動く事は出来ないだろう。小さく深呼吸して、女性に近づく。ローラに気付いたらしいその女性は、驚いたように眼を見開いた。

「アンタ……」

「貴方は誰ですか。いいえ、それよりも……この場所に何の目的があるのです」

疑問符の無い問い。くす、と笑みを浮かべた女性は腕を組んで、髪の毛を耳に掛けた。

「アタシはレイラよ。目的は……そうね、一言で言えば」

——強くなる為に。

そう告げて、女性……レイラは自分の腰に手を添えた。まるで挑発でもするかのような仕草に、ローラは目を細めた。

「その為に……こんな事を?」

「ええ。アタシには必要な事だったのよ。分かってくれない?」

「分かる訳がありませんっ!」

ローラの大声に、レイラは寂しげにそう、と口を噤む。一文字にいちもんじ閉じられた口を見て、ローラはディスクを構えた。

「何、アタシとデュエルしようっての?」

「私が勝ったら、皆に謝ってもらいます。そして、償ってもらいますから」

「あら……随分と甘ちゃんに育ったのね。けど、まだ“その時”じゃないわ」

その時……？

レイラがディスクを構えたかと思うと、1枚のカードを魔法、罠ゾーンへと差し込む。そしてディスクから霧が立ち込めてきた。ソリッドビジョン——そうは分かっても、目の前は何も見えなくなってしまった。

「魔法カード、《霧雨》きりさめ……まあ、ローラは知らないと思うけど？
じゃあね、また会いましょう」

「まっ……待ってください！ レイ——」

霧が晴れる。レイラが居たはずの場所には、誰も居なかった。残ったのは、荒らされた里と壊された結界……傷だらけの舞姫。そして、ローラの心中に残した疑問。

「あの人……どうして、私の名前を……？」

ここでまた、1つの物語が幕を上げる。



一步……一步……何も、やる気が起きない。

特にぼーっと歩いていると、大きな山の目の前に到着していた。

かれこれ数日が経ったというのに、その実感は湧かない。実際、ユグルではまだ数時間程度しか経っていないだろう。

復讐を決意した当初の方がまだ輝いていたな、と自嘲の笑みを浮かべる。

「……熱い、な」

——ユグルに戻ったら……どうする。

そんな自問が出て、答えられずに時は進む。無情なほどに過ぎていく時間は、もう戻ってはくれない。

リズⅡフォルン・サレイルは、腰に取り付けていたデッキケースからカードの束を手にとると、手に持ってくる。

《鎧黒竜—サイバー・ダーク・ドラゴン》が、今はとても………
…憎い。

「……私が晃を傷付ける……弱点……か」

確かに、晃と出会うまでは父親への復讐の事しか考えていなかった。

父親が、母親を殺した。それは確かで、揺ぎ無い事実。けれど、そのキツカケを与えたのは晃がデュエルした——デビルである。

正直、復讐の意義も無い。今あるとすれば、晃の傍に居るのみ…
…しかし、そんな事をしていれば晃が苦しんでしまう。

「……………」

生暖かい風が、ツインテールを解いて流麗に下ろされている髪を揺らした。

どこまで行っても弱い自分に苛立ちながらも、リズは歩いた。どこへ行こうか、何をしようか……などという思考は欠落し、リズはただ真っ直ぐに進むだけだ。

山があれば登るし、川があれば突っ切る。途中、モンスターたちが住む場所を通ろうが完全無視だった。

「……ん？」

——山麓。
さんろく

リズは視界の端が動いたような気がして、そちらを向いた。大きな岩で隠れているのか、そこに何かあるのかは分からない。しかし、何やら音が聞こえてきた。

音……声だろうか？

聞き覚えのあるような声に、リズは気が付けば歩を進めていた。

声が、明瞭めいりょうとなっていく。

「うう……わたしの負けだよお」

頬を膨らませる姿が眼に浮かぶ。たった数日振りだというのに、まるで長い期間を経て再会したような錯覚がリズを襲った。

少女——諏訪桜。その目の前には、見上げるほどに大きい龍と対話をしていた。

『む……』

岩に隠れて様子を伺っていると、その龍が怪訝そうにこちらを向いた。桜が首を傾げながらそちに視線を寄越すと、リズは隠れている意味も無いか、と顔を出した。

「あ、リズさん！」

桜がリズへと近寄っていく。汗を拭いながらも笑顔で走って来る桜の姿に、リズは苦しげに視線を逸らした。

「どうしたの、こんなところで？」

『……こんなところで悪かったな』

「そういうじゃないよ、もうっ！」

龍に怒鳴りながら、桜は首を傾げながら問う。
言葉に詰まって、リズは咄嗟に――。

「み、皆の様子を見にな。鍛錬の為、精霊界を廻れと言われたんだ」
――嘘を付く。

「へえ。じゃあ、ローラやフィーちゃんのところにはもう行ったの？」

「……いや、桜が一番最初だな」
「そっか」

笑顔の桜に、リズは後退りをしそうになる。今すぐにも背中を向けて逃げ出したい。そんな衝動が、リズを襲う。

『……少し休憩にするか。その女性も、旅で疲れているだろう。暫くサクラと共に身体を休めておくが良い』

龍は静かにそう告げると、すう……と透けていき、やがて消え去

った。

桜は龍からリズに視線を戻すと、にっこりと笑った。

「座ろうか、リズさん？」

その声が、何故か優しく聞こえて。

リズは、何も言わずに頷いた。

第二章〜第十八話 謎の女性とリズの嘘（後書き）

……思ったより、精霊界での話は長そうです（汗）

当初の（脳内での）予定では、既に視点が晁に戻っているはずですが、ハイ。

……どうしてこうなった。

そんな私ですが、感想、評価等宜しくお願い致します！

第二章 第十九話 告白とヴォルヴァの契約

虚ろな空。その空を見上げていると、ここは精霊世界なのだな、と自覚出来る。けれど、必要以上に現実味のある熱気と正反対の肌寒さが共存していて、私はローブを羽織りなおした。

そういえば、と私はふと思い出す。

旅に出る前……必要な物を買に行った時、この深い緑色をしたローブを選んでくれたのは晃だった。

両親以外、私が誰かと買い物したのは初めてだった。柄に合わず緊張したのを覚えている。

いつも晃にべつたりの桜……様々な物を珍しそうに眼を光らせているローラ……寡黙で小さいが、実は私よりも年上だというフィー……そして、一步引いて私たちを見守っていた晃。

この“輪”の中に、私は入るだろうか……そんな恐怖に似た不安。そんな不安は、徒労に終わった。

私は、友が出来たと思った。現在進行形の初恋も経験中——世界は、色が付いた。

そんな、夢。

どこまでも続くような精霊界の地平線を眺めながら、私は瞼を閉じた。世界は暗闇に満ちて、酷く………怖い。

「ねえ、リズさん」

「っ……」

桜の声にはっとなると、また地平線が視界に写る。隣に座る桜を

見てみると、手には1枚のカードが握られている。

そのカードを見ながら、桜は小さく笑う。淡い思い出を噛み締めるような、薄い笑み。

「わたしね……お兄ちゃんがデュエルするところ、ユグルに来て初めて見たんだ」

「……そう、なのか？」

「うん。お兄ちゃんはお兄ちゃん、ユグルに来て初めてわたしが遊戯王をしてるって知ったんだよ？」

桜の手に持つカードは、《思い出のブランコ》。それを一度抱き締めると、桜はデッキケースに仕舞い込む。

「それまでは洸司郎に教えて貰ってたの。お兄ちゃんにだけは内緒でね」

「洸司郎……確か、晃の親友だという？」

うん、と頷く。

「だから、わたしはお兄ちゃんのデュエルを見た事が無かった。洸司郎に聞くばかりで、早く驚かせたいなあ、なんて……」

桜は自分の膝を抱く。いつもとは違い、少し弱々しげなその姿に、私は驚きを隠せない。

「洸司郎から聞いたことあるんだ。お兄ちゃんは《スターダスト・ドラゴン》が好きなんだ、って。なんでだろうね、お兄ちゃんが好きなカードはわたしの好きなカードでもあるんだよ」

「……………」

「……わたしはね、」

膝を解き、私に詰め寄って来る。にっこりと笑って、桜は――。

「お兄ちゃんが世界の全てだよ?」

――自分に正直に、気持ちを吐き出した。

「お兄ちゃんには隠してるけど……私、凄く汚い女の子なの」

少しの間。空を見上げながら、桜は目を細めた。

「お兄ちゃんが居れば何もいらなない。世界も、カードも、友達も、両親も、食べ物や飲み物……お金………なんにも要らないんだ!」

えへへ、と桜ははにかむ。

私のような、軽い恋心じゃない。ただ裏サイバーの長に会えないと言われて、すぐに意気消沈してしまうような、小さな想いじゃない。

桜は、無垢で。

桜は、純粹で。

素直に、晃を想っている――――。

「リズさん」

「……?」

「デュエルしない?」

桜はディスクにデッキをセットしながら、唐突に私を誘う。

「……別に構わないが……」

私はまだ、自分を許せないでいる。こんな状態でデュエルするなど、相手に失礼ではないだろうか……？

「強くなったわたしを見て、腰を抜かしてねっ！」

桜が岩から降りたのを見て、私もディスクにデッキをセットする。岩から降り、桜と距離を取ってデュエルの準備をした。

ディスクがオートシャッフル機能を展開させる。ライフポイントが表示され、デッキの上から5枚が少し抜き出された。引いて、確認。ターンランプは光らなかった。

「行くよー！ デュエル！」

「……デュエル」

私の小さな呟きと共に、デュエルが開始される――。



『すみません、復興作業を手伝って貰って……』

「そんな、私が勝手にしてただけですから」

舞姫様にお礼を言われて、恐縮してしまいます。私としては、困っている人（精霊ですけど）を助けるのは当然なので手伝っている

だけです……。』

あれから数日。私は《氷結界の舞姫》様や《氷結界の武士》様と共に、《氷結界の軍師》様の指示に従って復興作業を行っていました。

あのレイラ様という女性、思ったよりもこの里で暴れたようで元に戻すのは大変です。

『……………』

「……………？　どうかしましたか？」

舞姫様との休憩中。私は隣に座る舞姫様が俯いているのに気付いて、声を掛けます。はとなった舞姫様は、えへへ、と苦笑いをしました。

……………やっぱり、元気が無いみたいです。どうしたのでしょうか？

『……………その、ですね。こんな時に、守り神様がいらっしゃれば……………と思いますして』

「守り神、ですか？」

はい、と舞姫様は頷きます。

『恐らくローラさんも知っているのでしょうけれど、氷結界とは氷の結界の意。古来、封印した龍を守護する役目を持っておりました』

……………本当は晃様に教えて貰って初めて知ったのですけど。取り敢えず伏せておきます。

『その昔……………氷結界の龍が暴れた時の事です。封印を決意した私た

ちですが、その圧倒的な力の前に成す術も無く倒されていきました』

「……………」

『そんな中、私たち氷結界の守り神とされるヴォルヴァ様が、その身を挺して龍たちを封印してくださったのです』

ヴォルヴァー―そう告げた舞姫様は、顔に笑みを浮かべて話します。

尊敬、憧れ……そんな感情が行き乱れているのが良く分かります。

『……しかし今や、ワームや魔轟神たちの侵攻の際に封印を解いてしまい、ヴォルヴァ様の所業も無駄になってしまいました……そんな矢先、こんな始末です』

軍師様が指示を飛ばしながら、ガンターラ様やグルナード様を筆頭に復興作業が続けている様子を眺めます。

破術師様のような小さな子も、守護陣様のような小動物でさえも一生懸命働いて、氷結界の里を復興させようと動いています。

『……いいえ、凹んでいる場合では御座いませぬね。私も働いてきます！ ローラさんはもう少し休んでいてくださいねっ』

「あ……………」

私が声を掛ける暇も無く、舞姫様は走り去ってしまいます。

巫女装束の捲くついていた袖を直して、その場に横たわります。脱いだローブは私が寝泊りさせて頂いている部屋に立て掛けたままです。

顔に掛かった金髪を退けて、私は一息吐きます。

「……晃様………」

今頃、何をしているんでしょう……？

何とも無しに思い出してしまう晃様の顔に、頬が紅潮してしまうのが分かります。振り払うように起き上がり、ぱんぱん、と頬を叩きます。

私も、手伝わないと……！

——……で……。

「え？」

声……？

——わたくしの元へ……。

おいでください、と。まるで私の頭に直接語り掛けるかのように声が聞こえました。

近くには誰もおらず、私はその場で首を傾げました。疲れているのでしょうか……？

——さあ……。

「っ……これは………？」

頭に広がる道標。それは結界の中を示しています。

生唾を呑み込んで、歩を進めます。階段を降り、垂れる冷や汗を拭きました。

それは数分か数時間か。身も心も凍らせるような寒さは、私の時間間隔を狂わす。

辿り着いた場所は、遺跡のようなものがありました。水で出来た祭壇、複数の壁画は……龍や虎、でしょうか？ 鳥や亀のような姿をしているものも御座いました。

祭壇へと登る。滑ってしまわないように気を付けながら、私は歩きます。

そして……祭壇の中心へと辿り着いた私は、思わずはっと息を呑みました。

透き通るような、蒼い髪。空色の瞳は心まで見透かされているようで、綺麗と同時に……とても、怖く感じました。

今まで見てきた誰よりも美しく。今まで見てきた誰よりも怖い。けれど、その身体は半透明で、精霊だろう証拠に空中で浮き上がりながら私を見下ろしていました。

「あ、なた……は？」

——初めまして、になりますね。わたくしはヴォルヴァ……その昔、氷結界の一族を納めていた存在です。

……！

ヴォルヴァって、確か先程舞姫様が話してくれた守り神の名前……！

——貴方に、力を貸して欲しいのです。

「力……？」

——ええ。先日、この場所を襲ったレイラ……彼女を食い止めて欲しいのです。

そう言って、ヴォルヴァ様は目を細めました。その瞳には悔しさが滲み出ている、私は一瞬思考が止まります。

——勝手なのは承知の上ですが……ユグルを含め、私たちは世界に直接干渉する事が出来ません。その為、人間との“契約”が必要なのです。

契約……確か、桜様は既に契約をしていると話していました。少し半信半疑だったのですが、どうやら事実のようです。

「……彼女の目的は分かりますか？」

——いいえ。それを知り、且つ害を成す目的ならば根源を絶って欲しいのです。貴方とわたくしが契約を交わして。

そう静かに告げて、ヴォルヴァ様はゆっくりと頭を下げます。

「あ、頭を上げてくださいっ！ ど、どうして私なんですか……私なんて、今まで生け贄として育てられた存在ですし……」

——わたくしの直感、でしょうか。

頭を上げて、ヴォルヴァ様は口元を緩めてそう言います。

悪戯っぽく笑みを浮かべるヴォルヴァ様に、私は直感、と反芻します。

——精霊界では有名な諏訪晃様のお仲間。それならば、と……理由など、その程度です。

……晃様って、有名なんですネ。

なんで有名なのか気になるんですけど、今は二の次です。……とても、とくっても気になりますけど。

——残念ながら、わたくしは封印されている身。舞姫たちと対話する事はおろか、見る事さえ叶いません。しかし、契約を交わせば話は別……それ程、人間との契約とは強固で強いものなのです。

……私と契約さえすれば、舞姫様たちと対話する事も出来ると言う事でしうか。

確かに、話すことさえ出来れば指揮も取れますね。

「……私で、良いんでしょうか？」

——わたくしでは、駄目でしょうか？

……。

ふふ、とヴォルヴァ様と同時に笑みを浮かべます。ヴォルヴァ様は私の目の前まで降りてくると、握手を求めるかのように右手を差し伸べてきました。

——宜しくお願いいたします、ローラ・レイフェル・メイサ様。

「はい。こちらこそ、ヴォルヴァ様」

私は、その手を握り返して——。

第二章／第十九話 告白とヴォルヴァの契約（後書き）

尚、この小説内で使用したDTなどの設定は、私が勝手に想像、捏造、妄想したものも含まれますのであしからず。

また、契約とはデュエル以外にも方法はあるんですよ！ と伝えたかったですよ、ハイ。

感想、評価などお待ちしております＜＜

第二章 第二十話 デュエルの楽しさ（前書き）

今回はいつもより長く、5000文字以上になってしまいました（汗）

第二章 第二十話 デュエルの楽しさ

「わたしの先攻だね、ドロロー！」

元気良く桜は引いて、6枚の手札を確認する。

リズも手札の良し悪しを確認しながら、静かに思考する。

（確か、桜のデッキはキングドラグーンを軸にしたパワータイプのデッキ。初ターンの動きとしては《仮面竜》のセット……しかし、）
精霊界に来て数日。自分と違って強くなろうと奮闘していた桜だ、
とその考えを^{ふっしょく}払拭する。

「わたしは《調和の宝札》を発動！ 手札の《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》を捨てて2枚ドロロー！」

「……………セイヴァー・ドラゴン？」

セイヴァー・ドラゴンと言えば、有名であるが見かける事は少ないカードだ。ルール効果により、《セイヴァー・スター・ドラゴン》か《セイヴァー・デモン・ドラゴン》にしか使えないチューナーモンスターである。

リズの眼が丸くなってしまいうのも頷ける。

一方の桜は、ふふん、と（小さな）胸を張りながら感想を待っている。

「……………何故、セイヴァー…………？」

「このデッキはね、お兄ちゃんに喜んで貰う為に、とことんスターダストを使うデッキにしたんだよっ！」

「……………強くなつてはいない気がするが」

「……………《神竜 ラグナロク》召喚！」
「桜っ!？」

リズの言葉はスルー。一際大きく声を上げて、桜はラグナロクを通常召喚した。

……否定しないところを見ると、それで強くなっているかは自分でも疑問を持っているらしい。しかし、それでも使うところが桜らしいというか……。

リズは苦笑して、桜のプレイを見つめる。

「カードを1枚伏せて、ターン終了っ！」

「では私のターン、ドロー！」

引いたカードを見て、静かに戦略を練る。

正直……手札はそれ程良くない。

「……………私はモンスターをセット。カードを1枚伏せ、ターンを終了する」

「それじゃあわたしのターンだね、ドローするよ」

手札は5枚。

「よし、このデッキの戦術Bをするよ！」

「……Aはどうした……………」

「Aはキングドラグリーンだもん。わたしは《デルタフライ》を召喚！」

出て来たのは、LV3のドラゴン族チューナー。このカード以外のモンスターのLVを1つ上げることが出来る為、実質LV4チューナーとして働くモンスターだ。

戦術Bを使用したということは、恐らくキングドラグーンを出せる手札じゃなかったということだろうか。

「《デルタフライ》の効果で、ラグナロクのLVをアップ！ LV5になったラグナロクに、LV3の《デルタフライ》をチューニング！」

LVは？。

桜は片手を上げて、元気に台詞を叫ぶ。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！ シンクロ召喚、自重……じゃなかった、飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》！」

星屑を名に頂く龍が、この場に舞い降りる。複数枚の綺麗な羽がひらひらと揺れ落ち、暫くして消えていった。

「相変わらず……憎たらしいほどに、綺麗だな……」

リズの眩きは、桜には聞こえなかった。

「バトル！ スタチャッ………うう、舌噛んじゃった」

「だ、大丈夫か……？」

「痛い……けど、続ける！ スタ……ドラゴンで裏守備にアタック

！ この時、永続罠《竜の逆鱗》を発動するね！ ……いたい」

また噛むのが怖かったのか、スタダという言葉は使わずに攻撃宣言をする。目尻に浮かんだ涙を拭う姿に、リズは自分の調子が狂うような気がした。

「……モンスターは《ドラグニティーフアランクス》だ」

《スターダスト・ドラゴン》ATK2500.

《ドラグニティーフアランクス》DEF1100.

成す術も無くファランクスが破壊される。と同時に、《竜の逆鱗》はドラゴン族モンスターに貫通を付与する効果の為、リズのライフが削られる。

リズLP8000↓6600.

「それじゃ、わたしはターンを終了するね」

「私のターン、ドロー!」

5枚に戻った手札は、相変わらず潤っていない。

「……わたしはモンスターを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「わたしの突進はまだまだ終わらないよー! ドローっ!」

ふんふん、と5枚の手札を眺める。

リズはその姿を見つめ……視線を逸らしてしまった。

とても、見ていられなかった。今の自分と正反対のその姿に、リズの心は土砂降りの雨が降っているかのように沈んでいく。

「よしっ、やるしか無いよねっ!」

そう活き込んだ桜は、まずは、と手札の1枚を手取る。

「わたしは手札から、《バース・スター・ドラゴン》を守備表示で特殊召喚! このカードは自分フィールド上にLV1かLV8以上

のドラゴン族モンスターが存在する時に手札から特殊召喚出来るんだよ！」

知らないカードだ、トリズは場に現れたドラゴンを見つめる。

《スターダスト・ドラゴン》をそのまま小さくしたようなドラゴンは、その愛らしい外見でぐるぐる飛び回っている。

「さらに、手札から《ガード・オブ・フレムベル》を通常召喚！

《バース・スター・ドラゴン》と、LV1同士でシンクロ召喚！」

えーと、と首を傾げる。桜は頭の中で必死に言葉を思い出しながら口に出していった。

「集いし願いが……新たな速度の……ちへい？　へ誘う……だったかな？　ともかく、光さす道となれ！　希望の力、シンクロチューナー《フォーミュラ・シンクロン》！」

まるでレーシングカーのような外見。そこに手足を生やせた外見のモンスターは、何故か攻撃表示で登場する。

「《フォーミュラ・シンクロン》の効果で1枚ドロ！　そして、《スターダスト・ドラゴン》と《フォーミュラ・シンクロン》でアクセルシンクロおー！」

「な……」

《フォーミュラ・シンクロン》のタイヤが火花を散らす。スタダは空へと飛翔し、星となる。

LVは……？。

「この台詞は覚えてるよ！　集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を

開く。光さす道となれ！ アクセルシンクロ！ 生来せよ、《シューティング・スター・ドラゴン》っ！！」

《スターダスト・ドラゴン》よりも大きく、そして輝きを放っているドラゴン。自信満々に胸を張っている桜は、既に舌を噛んだ時の痛みを忘れていたみたいだった。

「《シューティング・スター・ドラゴン》の効果を発動！ デッキから5枚めくって、その中にあるチューナーの数だけ攻撃出来る！ 狙え五連打！ オープン！」

- 1枚目、《融合呪印生物一闇》。
- 2枚目、《思い出のブランコ》。
- 3枚目、《仮面竜》。
- 4枚目、《ワン・フォー・ワン》。
- 5枚目、《仮面竜》。

チューナー、無し。

「ターンエンドっ！」
「桜っ!？」

残念ながら、シューティングはめくったカードの中にチューナーが居ない場合、攻撃は不可能である。

心なしか、《シューティング・スター・ドラゴン》もしょんぼりしているように見えて、少し可哀相だ。

苦笑しながら、リズはデッキに手を伸ばす。引く直前、リズの手は動きを止めてしまう。

「ねえ、リズさん」

「っ……………なんだ？」

桜はにっこりと笑う。屈託の無い笑みは、一点の曇りも無いように見えた。

「デュエルって楽しいね！」

リズの目が見開く。最近……………それこそ、母親が父親に殺され、復讐を誓った時から考えた事も無い言葉だった。

そういえば、と記憶が甦る。

遊戯王デュエルモンスターズ。それを教えてくれたのは、紛れも無く両親だった。幼い自分はいつもそれが楽しくて、満点の笑顔で笑っていたんだ――。

「……………だ……………」

「え？」

「何故、桜はそんな楽しそうにデュエルが出来るッ！ 強くならなければ……………強くならなきゃ、苦しむのは晁なんだぞ！ 私たちのせいで晁が傷付くなんて……………私は……………」

「わたしもイヤだよ」

はっとなつて、リズは桜を見つめる。

当たり前だ。

まだ出会って間もない自分より、妹としてずっと過ごしてきた桜の方が我慢出来るはず無いんだ。

そんな事も考えられずに叫んでしまった自分に恥じると同時に、桜がなんて言うのか気になって、リズは口を噤んだ。

「けど、前、お兄ちゃんが言った言葉……………憶えてる？ ほら、お兄ちゃんとリズさんが出会って間もない頃に言った言葉」

——皆は、こんな戦い……しちゃ駄目だからね。

桜が言うと、そこに晃の声が重なって聴こえた。

「お兄ちゃんはきっと、望んでないと思うんだ。わたしたちが無理するの。ほら、お兄ちゃんって他人の為に命を張れるから、特にね」

確かに、と納得する。

あの時の晃の台詞は、色んな意味を持っているのではないだろうか。

傷付かないで、無理しないで、僕が守るから——。

「お兄ちゃんが一番望んでるのは、わたしたちが笑顔で居ること！
その為にはまず、楽しそうにデュエルしなきゃね！　そう気付いたんだよ！　……………さっき」

小さく呟いた言葉は幸いなことにリズには聞こえなかったらしい。

「……そうか……そうだな。桜の言う通りかもしれない」

「そ！　確かにお兄ちゃんが痛い思いするのは嫌だし、悔しいけど……………」

「晃が少しでも安心して、心地良く過ごせるように……か。人一倍晃を想っている桜だからこそ、気付けたのかもしれない」

ポケットから髪の色と同じ紫色の髪留めのゴムを取り出す。

「ならば、私も……」

無造作に下ろされている長い髪をかき上げ、ゴムで縛る。

「久し振りに楽しく、デュエルをしよう……!!」

数日振りのポニーテール。

何故か、懐かしい感じがした。

ポニーテールも、デュエルをすることも。昔の楽しい日々の記憶が甦って、リズは静かに笑った。

「私のターン、ドローっ!」

手札は5枚。自分の場には伏せモンスターと伏せカードが1枚ずつ。

楽しく行こう。

やる事を決めたリズは、手札の1枚を抜き取り、勢い良くディスプレイに置いた。

「私は《サイバー・ダーク・エッジ》を通常召喚! このカードが召喚に成功した為、墓地の《ドラグニティーフランクス》を装備する! ファランクスの効果により装備を解除して特殊召喚! そして、《デルタフライ》を反転召喚するっ!」

「え、《デルタフライ》?」

「サイバー・ダークにも相性は良いからな。チューナーでLV3、そして攻撃力は1500……適任だろう? 私はこのまま、《デルタフライ》の効果を発動! エッジのLVを4から5へと上昇させる!」

エッジと《デルタフライ》が星となり、空を舞う。

機械とドラゴンが交わり、闇を生み出す――。

「LV5となったエッジに、LV3の《デルタフライ》をチューニング！ 最果ての闇を纏えし竜の子よ、この場に終焉を告げ、漆黒の翼を羽ばたけ……！ シンクロ召喚、舞え闇よ……《ダークエンド・ドラゴン》！」

エッジは闇属性モンスター。闇を纏って現れた《ダークエンド・ドラゴン》に、桜の表情が攣る。

「ダークエンドの効果を発動！ 攻守を500下げ、《シューティング・スター・ドラゴン》を墓地へ送る！」

「破壊じゃないから、シューティングじゃ無効に出来ないいゝ」

結局活躍もせずにシューティングが墓地へ送られる。可哀相に、とも思うが……同時に仕方が無い、とも思ってしまう。

《ダークエンド・ドラゴン》 ATK2600↓2100. DEF2100↓1600.

これで、桜の場合は表側表示の《竜の逆鱗》のみになった。

「私はカードを1枚伏せて、《ダークエンド・ドラゴン》にLV2の《ドラグニティーファランクス》をチューニング！」

「え……ま、まさか!？」

LVは、シューティングと同じく?。

ドラゴン族チューナーとドラゴン族モンスターでないとシンクロ召喚出来ないモンスター。

「我が魂を糧に、業火の炎を燃やせ！ 三つ首の竜よ、今ここに爆ぜろ！ シンクロ召喚、怒濤の烈火……《トライデント・ドラギオン》！」

「き、来たー！」

三つ首の竜は、その身に炎を纏わせながら現れる。その炎は自分の場のカードを巻き込み、我が身を解き放つ。

「《トライデント・ドラギオン》がシンクロ召喚に成功した時、自分の場のカードを2枚まで破壊する事が出来る！ そしてその枚数分攻撃回数が増える……！ 私は伏せカード2枚を破壊する！」

伏せカードとなっていた《魔のデッキ破壊ウイルス》と《ダブル・サイクロン》が破壊され、《トライデント・ドラギオン》は完全に覚醒した。

炎がフィールドを荒らす。ソリッドビジョンだからか、熱さは無いがその迫力は凄まじい。

「……攻撃出来なかったわたしへの当て付けなのかな、それはあゝ？」

「いや、そのつもりは無いぞ、うん。では、バトルフェイズ！」

《トライデント・ドラギオン》が臨戦態勢を取った。

「リズさん！」

「ん……？」

「デュエル、楽しい？」

「——ああ、楽しい！」

桜LP8000↓5000↓2000↓0.

《トライデント・ドラギオン》の3回攻撃が、その炎と共にデュエルの終了を告げた――。

◇
◇
◇

「行っちゃうんだ？」

「ああ。私も、やるべき事が見つかったからな……また会おう、桜」
「うん」

今度は、晁の傍で。

そう告げて、リズはポニーテールを揺らしながら静かにその場を後にした。

第二章 第二十話 デュエルの楽しさ（後書き）

《バース・スター・ドラゴン》は、リアル友達の斎藤淳也様（仮名）から案を頂きました。ありがとうございます。

今回の悩みは、どうやってデュエルを終わらせようかと……そして書きながら思ったのです。

「シューティング……複数攻撃……ドラゴン？ 成る程、トライデント！ あれ、どうやって？」

なんとか出す事が出来て良かったです、ハイ！

それと、やはり私は執筆しながら先を考えるらしく……楽しいデュエル、というテーマは書きながら思いついたのです（笑）

いつもの如く、感想、評価などお待ちしております！

第二章 第二十一話 謎の男の正体

薄暗い通路の中を、堕天使メフィリアンノは静かに歩いていた。壁に取り付けられた優しい灯りを追うように真っ直ぐ歩く。途中にある扉や通路も無視して、ただ一直線に進んだ。

途中、畏だろろう巨大な岩玉が転がってきた時も。混沌デュエルの応用で破壊し、何も無かったかのように歩いていた。

——「諏訪晃はウェーリアから南東に位置する遺跡へと向かう」……それだよ。

先程言われた言葉が脳裏で反芻される。
ウェーリアから南東に位置する遺跡はこの場所のみだ。

「……………」

暫く進むと、あったのは分かれ道だ。右と左に分かれている。

（アキラは……………）

どっちに行ったのだろう。

右、左。視線を巡らせて、勘で左に足を向け……………。
とん、と。近くで足音が響いた。

「…………やはり来たか」

「あら。どうして貴方がこんな所にいるのかしら、ハグレ者さん？」

ローブを深く被った男が灯火に照らされる。相変わらず陰になつて顔は見えず、メフィリアンノは内心舌打ちする。

「諏訪晃ならば右に行ったぞ」

「……この遺跡の事もそうだけど、なんでそんな事を教えてくれるのかしら？」

「ふん……決まっているだろう？ 諏訪晃にはもっと力を付けて欲しいからだ」

沈黙。

訝しげに目を細めるメフィリアンノに、男はやれやれ、と言った様子で肩を竦めた。

「諏訪晃は、他人の為に戦い、強くなれる貴重な存在だ。諏訪晃あの特別な魂に惹かれ、俺は前からずっと観察していた」

「前からって……まさか、地球に居た時から？」

「ふ……さあな」

否定はしない。

2人の声だけが遺跡内に響き、炎がはためく。

「俺は思ったんだ。メフィリアンノ、貴様も諏訪晃の力と成り得るんじゃないかとな」

「あら、どんな根拠で？ アタシなんてただのハグレ者。天使でも悪魔でもない――」

「先程、貴様が自分で言っただろう？ “まさか、地球に居た時から”……とな」

メフィリアンノの眼が見開かれる。頭に浮かんだ考えに、メフィリアンノはゆっくりと眼を細めた。

「アンタ……」

「知っているぞ？ 貴様が諏訪晃を大事にしている理由も……………」

一度言葉を止めて、男は壁に背を預けた。

「だからこそ、諏訪晃も貴様の言葉をすぐに信じた。普通は信じないだろう……敵だった奴が“彼女たちに危害を加えるつもりが無い”、などと言っても」

何故すぐにメフィリアンノを信じる事が出来たのだろう、と晃自身も疑問に思っていた。それを知ってか知らずか、男はふ、と鼻で笑った。

「さあ、話は終わりだ。そろそろ行った方が良くはないのか？
俺は——」

男が光の粒子となって消えていく。メフィリアンノは再び眼を開いて、分かれ道の右の道を走った。

「——幻影、なのだから」



薄暗い道。さっきから変わらぬ道は、淡い灯火で揺ら揺らと照らしている。

かれこれ数時間だろうか。時間間隔も狂ってきて、もしかするとまだ10分程度しか歩いていないかもしれないし、実は数日なのかもしれない。

少なくとも、今の僕にそれを知る術は無い^{すべ}。

『――ご主人様』

「え?」

僕、諏訪晃が遺跡内を真っ直ぐに進んでいると、突然ファラが神妙な様子で声を上げた。

「どうしたの?」

宙を浮きながら、ファラは真っ直ぐに正面の道を見つめている。僕は首を傾げながらその方向に視線を向ける。少し離れているけれど、松明の火が途切れているのが見えた。

部屋、だろうか? やつとか、と安堵する思いとファラの真剣な面持ちに疑問と不安が募った。

『……………奥に誰か居ます』

「えっ?」

こんなところに…………?

大和君の話だと、まだこの遺跡は余り有名じゃないらしい。だからこそ、デュエリストハンターズギルドは何人にも調査しているらしい。

ただ、今の時期は大和君にしか調査は頼んでいないらしいから……ギルドの者、では無いと思う。

『お気を付けください……少し、嫌な感じが致します』

「……………」

ファラの言葉に、固唾を呑む。小さく深呼吸して、先程よりもゆっくりとした速度で通路を歩いた。

数分。

部屋に入った僕は、今までと様子の違う部屋を見渡した。

壁画とか、そういうものは一切無い。あるとすれば部屋の奥に燃え盛っている巨大な炎。僕の身体以上……それこそ2、3倍の大きさで揺れている炎は、少し離れた僕にも熱を持たせている。

額を伝う汗をローブで拭う。

炎の前。ウェーリアでメフィリアンノと出会った時に現れた、ローブを深く被った男が静かに佇んでいた。

(……ファラが言ってたのは、彼のことだったんだ……)

ふ、と笑う声が聞こえた。

普通ならば聞こえないだろう距離なのに、彼の声は部屋を反響して、鮮明に僕の耳朵を叩く。

「2人だけで出会うのは初めてだな、諏訪晃……いや、人形どもが常に貴様の傍に居るから、2人だけでは無いのか？」

「っ……！」

な、なんでこの人……ファラたちの事を……!?

なんでかは知らないけど、ファラたちは他人に見えないはず。精霊界ならともかく、地球やユグルじゃ例え精霊同士でも存在を認識出来ない、と言っていたのを思い出す。

勿論、今僕がここに居るのはユグルの遺跡内。見えるはずは無い――。

「安心しろ。人形どもは見えていない。ただ、その存在を知っているだけだ。その人形どもが、どれ程貴様に対して過保護なのかもな」
成る程、そういうことか。
確かにあの人は真っ直ぐに僕を見つめてきている。残念ながら遠い距離だし、顔は見えない。

「……………諏訪晃」

静かな声。

「俺は貴様に興味がある」

「興味……………」

男の首肯。

「貴様は知らないだろうし、教える気も無いが…………特別な“魂”を持って生まれてきている。人間であり、人間とは思えないほどの特異な魂がな」

「魂……………」

——君は選ばれたのだよ？ 救世主か破壊者か——勇者か魔王かの違いはあれど、ね。

いつだったか言われた言葉が脳裏を掠める。

選ばれる、という言葉。選ぶ理由があったのか、それとも適当に選別されたのか。エンジェル…………天使側が僕だとして、もう1人は悪魔側のはず。

そして、僕の考えが当たっているのなら…………悪魔側はあの人だ。

「……選ばれた理由って、その魂が原因？」

「ああ。悪魔側の奴も、貴様の近くに居たからこそ感化されたようなものだ。尤も、ソイツも熱い魂を元から持っていたから、どちらにせよ選ばれていた可能性も有ったが」

……そっか。

前、メフィリアンノに言われた言葉が反芻される。

——貴方が悲劇を呼ぶ主人公なのね。

——全部、貴方が原因よね。

——ぼうやはイレギュラーよ。この世界に居てはイケナイの……。

「天使？ 悪魔？ 全く、俺の興味を、好奇心を、この欲求を刺激するには足り得ないな！ 俺が望むのは強者との命を賭けた決闘！ その対象になったのは、貴様なのだよ、諏訪晃ッ！」

大声を上げて、男は口元を歪めた。

その勢いに負けて、ローブのフードが滑り落ちる。赤い髪、赤い瞳。まだ年端も行かないような少年の顔立ち。

一瞬、心臓が止まったような気がした。

どこことなく、遊戯王GXの主人公に似ていて。

どこことなく、親友の榊洗司郎に似ていて。

タッグデュエルトーナメントで、僕の隣で一緒に戦って。

心臓が止まったような、錯覚。

「な、なんで……!？」

「……………」

「——大和君ッ……………!!」

城遊大和君の後ろで、炎が揺らめく。

◇
◇
◇

心臓の鼓動。休む事無く躍動するその胸に、僕は妙な息苦しさを感じた。汗は頬を伝い、そのまま地へ落ちる。拭うほどの余裕も無くて、今度は鼻筋を通っていた。

汗のしょっぱい味が口内に広がる。さっきまで見ていたはずの大和君の笑みは屈託が無く、洗司郎の面影を持った優しい笑顔だったはずなのに。

今はこんなにも、笑みが怖い——。

「——晃とどうやって関わろうか迷ったんだよね。でさ、お前タツグデュエルトーナメント出ないって分かったから、丁度良いつてコトで誘ったんだよ!」

さっきまでと同じ笑み。口調。

けど、違う。

違うんだ。

「やっぱ、お前って強いんだな。俺の眼に狂いは無かったって事だぜっ!」

“アレ”は、僕の知ってる大和君じゃない……………。

「なあ、デュエルしようぜ、晃。俺って、まだお前とデュエルしたこと無かっただろ？」

大和君の表情が、笑顔から無表情へと変わる。その変わりようはまるで別人で、僕はやっぱり勘違いだったんだ、という淡い希望が浮かぶ。

けれど、彼の赤い髪と瞳が、現実だと眼を覚まさせる。

「始めよう、諏訪晃。俺の渴きを、潤してくれっ！」

大和君が、ディスクを展開する。それに反応するかのように、僕のディスクが光を発する。

……………。

どうすれば良い？　僕は、どうすれば良い？

友達と…………命を賭けた、デュエル？　なんで、なんでそんな事……………？

『ご主人様』

優しい声色は、僕の心を温かく包み込む。

『私どもと共に——』

観客は部屋を覆う炎。舞台は遺跡の奥。
共に戦う仲間は、大事な人形……………。

デッキケースからデッキを取り出し、ディスクにセットする。オートカット機能が作動され、紫色のスリーブに包まれたデッキは満

遍なくシャッフルされた。

大和君が手札を5枚引くのと同時に、僕も5枚引く。まだ内容は見ない。

LPケージに8000の数字。ターンランプは僕のディスクから。優しく、ファラが僕の肩を叩き、消える。

巨大な炎が、風に吹かれて自制を崩す。

「……ユグルに来てからは、僕にとって初めてだよ。桜たちの為じゃなく……自分の為だけのデュエルはさ」

僕の呟きは、大和君には聞こえない。

「「デュエル……ッ！」」

第二章〜第二十一話 謎の男の正体（後書き）

ふう、なんとか書けた……プロット無しは辛いですね（苦笑）

謎の男の正体。コレについては、大和君を出した当初から決めていました。彼に期待していた方、すみません（汗）

それにしても……「デュエル！」で終わるページが多いなあ……。

感想、評価など宜しくお願い致します！

第二章 第二十二話 人形VS騎士

「僕の先攻、ドロー！」

大和君のデッキは騎士^{ナイト}。以前使っていた《黒騎士》が相手の表側モンスターを1体除外だったし、帝シリーズに近いのかもしれない。ライトロードと同じく、墓地が増えると不利になっていく。けど――。

(……それなりに良い手札だけど……)

初ターンで動く必要は無い、か。

「僕はモンスターをセットして、ターンを終了する」
「それでは俺のターン開始時、ドローフェイズ。そのままメインフェイズへと移行」

大和君の顔なのに、口調が違うだけで物凄く違和感が募る。少しの間。大和君は手札を吟味し、成る程、と呟いた。

「《騎士没落》発動。手札コスト1枚を引き換えに、デッキから2枚、騎士モンスターを墓地へ……《青騎士》と《緑騎士^{グリーンナイト}》。そして、《無双する尖兵》を召喚する」
「《無双する尖兵》……？」

疑問符を頭に乗つける。両手に剣^{ツルギ}を持った剣士は、その剣を地面に突き立てて腕を組む。

「このカードが召喚に成功した時、墓地に存在する騎士と同じ数だ

けデッキから戦士族モンスターを墓地へ送れる墓地の騎士の数は先程の手札コストを入れて3枚、よって《黒騎士》2枚と《白騎士》を墓地へ」

……早い。もう墓地に存在する騎士の数は6枚になった。本当にライトロードを彷彿させる。

「……バトルフェイズへ移行。《無双する尖兵》で裏側モンスターを攻撃！」

「モンスターは《第一人形 ファーストドール クー》！ 守備力は1900だ！」

《無双する尖兵》 ATK1500.

《第一人形 クー》 DEF1900.

城遊大和LP8000↓7600.

「ふ……俺はこのままターンを終了させてもらおう」

「僕のターン、ドロっ！」

大和君の手札は3枚……僕は6枚。

……時間を費やすと不利、か……。

「僕はクーをリリースして、《第五人形 ファイフドール ヨウ》をアドバンス召喚！ このカードが召喚に成功した時、デッキから攻撃力0の人形モンスターを特殊召喚出来る！ 来て、《第七人形 セブンスドール コウ！》」

太陽と虹が揃う。

雨が止み、雲が晴れ……世界に光が差し込む時間。やがてその光は闇へと転化し、点々とした別の光が僕らを見守ってくれる……。――

「LV1のコウにLV5のヨウをチューニング！」

星の数は、6つ。

「祖が奏でるは鎮魂歌の終焉！ 戦局は今、幕を閉じる！ シンクロ召喚……謡え、ブロードール《奏する人形 ソウカ》！」

『先陣を切らせて頂きますわ』

くす、と笑みを零しながらソウカがその美しい声を上げる。精霊の姿はこれで見えるだろうけど、例えデュエル中であっても声は僕以外に聞こえないらしい。

……閑話休題。今はそんな事を考えている暇は無い、よね、うん。

「シンクロ素材に使用したコウの効果を発動！ このカードが人形モンスターのシンクロ素材に使用され墓地へ送られた時、手札コスト1枚を引き換えに特殊召喚出来る！ 帰っておいで、コウ！」

相変わらず、コウは僕の方を向いたまま。無表情に、静かに見つめてくる。

「バトル！ ソウカで《無双する尖兵》に攻撃！ 狂歌宴きょうかえんっ！！」

『さあ、お狂いになって……？ わたくしの歌声は、晃様以外を終焉へと導きますわ』

そして、綺麗な歌声がフィールドを包み込む。僕としてはその神秘的な歌声をずっと聴いていた気分にもなるんだけど、大和君や《無双する尖兵》は苦痛で耳を塞いでしまっている。

……………ソウカが言った事って、本当だったんだ。

《奏する人形 ソウカ》ATK2300.

《無双する尖兵》ATK1500.

「くうっ……！」

城遊大和LP7600↓6800.

「ソウカが戦闘ダメージを与えた時、効果を発動！ デッキから……《ドールサンクチュアリ》を手札に加える！」

——そのまま、メインフェイズ2へと移行する。

「《ドールサンクチュアリ》を発動！ 墓地に存在する人形モンスター……《第五人形 ヨウ》をデッキに戻す。この効果でデッキに戻したモンスターのLV未満の人形モンスターをデッキよりサーチする！ 僕は《第六人形 ツキ》を手札に！ さらに、《ドールサンクチュアリ》の効果で1枚ドロー！」

手札は6枚へ。

「……カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「ふ……では俺のターン！ ドローッ！」

さあ、どうくる……？

大和君が、高笑いを始めた。

◇ ◇ ◇

「な、え……？」

「面白い……面白いな、諏訪晃！ 俺がここまで高揚するのも久しぶりだ……ッ！」

大和君の口元が歪む。本当に愉しそうで、それでいて。

——寂しそう………？

「この時をずっと待っていた！ 地球で、貴様をずっと観察していた時から……いや、もしかするとそれよりも前から……！！！」

僕には、分からない。

デュエルは……遊戯王は、面白い。それは僕も良く知ってる。けれど。

命を賭けたデュエルの、どこが楽しいの………？

「さあ、やろうか……… “諏訪の御仁”？」

「っ………！！」

そ、その呼び方……ッ！？

「俺は《黄騎士》イエローナイトを通常召喚する！ そして、効果を発動する！ 1ターンに1度、墓地の騎士2体、《黒騎士》と《青騎士》をデッキに戻し………その人形を、破壊する！」

「っ………」

破壊……！

黄色い鎧を身に包んだ騎士が、2体の騎士の魂を剣に宿し、振るう。その剣の波動はソウカへと辿り着き――。

「……あ………」

その身体を、両断する。

「そ、ソウカっ！」

《あ……晃、様》

そして、ソウカは粉々に消え去ってしまう。

ドクン、ドクン、ドクン……。

脈動する心臓は、いつもよりも一際高く鳴っている。体内を巡る血の流れが早いのか、僕の身体はとても熱く、異様な温度を感じた。いつもと、違う。

今まで、デビルとやってきた混沌デュエルとは違う……全く別の感覚。

「バトルフェイズ！ 《黄騎士》でその人形を攻撃する！」

黄色い騎士が、守備表示で居たコウを破壊する。

ドクン……。

再び、心臓が暴れる。

「こ……コウが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、デッキから人形チューナーを持ってこれる……《サードドール第三人形 チー》をサーチ」

「では、俺はカードを1枚伏せてターンを終了する！」

……………落ち着こう。落ち着いて、僕……。

僕の手札は7枚。大和君の手札は2枚……大丈夫、有利なんだから。

「僕のターン……ドロー！」

これで8枚。

良し……。

「僕は《第六人形 ツキ》を通常召喚！ このカードが召喚に成功した時、デッキから守備力500以下の人形モンスターを特殊召喚出来る。《フォースドール第四人形 セイ》！」

月から、星が。

「セイが人形モンスターの効果により特殊召喚に成功した時、手札の人形を特殊召喚出来る……おいで、《第三人形 チー》！」

また、大和君の表情が笑みで歪む。

「《第三人形 チー》の効果を発動！ 墓地に存在する《第七人形 コウ》を除外し、デッキから同名カード……コウを特殊召喚！
さらに、魔法カード《リターンドル》！」

愉しそうに僕を見つめる大和君を一瞥して、僕は深呼吸した。

「《リターンドール》は、デッキトップのカードをコストで2枚墓地に送る事で発動！ デッキからチューナー以外で守備力1500以下のモンスターを特殊召喚する！ 特殊召喚、《セカンドール第二人形 カイ》！」

僕のフィールドに、モンスターが5体並んだ。

海、月、星、地、そして虹。

「行くよ……大和君」

「来い……諏訪晃」

部屋を照らす灯火の1つが、消える。



「っ……」

『どうした……？』

カードが落ちた。デュエルディスクのオートシャッフル機能を使っている、故障などしていない限りはカードが落ちるはずは無いというのに……。

まるで拒絶されるかのように1枚のカードが弾け、地面へと転がった。

……嫌な予感が胸中を支配する。それが杞憂ならば良いけど、と内心で強く願う。

『桜……?』

ラグナレクが、怪訝そうに桜を呼んだ。桜は裏向きに落ちたカードを拾って、それがなんなのかを確認した。そして、息を呑んだ。

「おにい、ちゃん……?」

《思い出のブランコ》。

遊戯王は関係無いけれども……兄との、絆――――。

「ねえ、ラグナレクっ!」

『む……?』

「あの、人間って精霊と契約を交わせばいつでも世界を行き来できるんだよねっ!？」

『あ、ああ。ある程度の自由は利くが………』

桜は《思い出のブランコ》をデッキ内に優しく仕舞いこむと、大きく深呼吸した。

「よしっ! と活き込んで、頬をぽんぽんと叩く。」

「……本当は、今すぐにも行きたいけど………」

向かう先は、ローラたちのところ。

そう決めた桜は、ラグナレクと共に精霊界を歩く……………。

第二章、第二十二話 人形VS騎士（後書き）

デュエルは、一番良いところで切りました（笑）
これが焦らしプレイ（爆）

第二章、第二幕も終盤。

……………感想、とても欲しいので募集しています、ハイ。

第二章 第二十三話 煩い鼓動

「えっ……これ、晃君の部屋にあったの………?」

真名の病室の中。真っ白なドレスを身に纏った、可愛らしい女の子の人形を手に持った真名は頭にクエスチョンマークをつけながら首を傾げた。

その姿に見惚れて、声が出せなくなってしまう前に僕は視線を逸らす。多分、今の僕は顔が赤いんだろうな……。

「う、うん。結構前からあったんだけど……真名に似合いそうだったからあげるよ」

「あ……ありがとう、晃君………!」

嬉しそうに人形を抱き締める真名。その顔は凄く輝いていて、僕も自然と顔が綻んだ。

「け……けど、どうして急に………?」

「う……えと、お恥ずかしい話なんだけど……この前、ゴミ捨て場に捨てられてた人形を拾ったんだ。それを持ち帰ったら………その」

真名は恐縮そうに声を上げた。

「……も、もしかして………その、置き場所が………?」

「う……」

気付かれた。

全く持ってその通り。既に僕の部屋は他の人形で一杯。名残惜し

いとも思いながら、真名に合いそうな人形を探した、という訳だ。
僕が少し恥ずかしそうに頷くと、真名は少しの間きよんとすると、すぐにくすつと笑みを浮かべた。

「ありがとう、晃君……………大事にするね」

そういうと真名は人形の向きを僕に直すと、後ろから抱き締めるように持った。

気に入ってくれたようで何よりだ。

「……………ね、ねえ、晃君……………」

「え？」

「その、晃君が拾った人形なんだけど……………どんな感じ、かな？」

どんな感じ……………ねえ。

「ちょっと埃まみれで可哀相だったかな……………白と黒の翼があって、髪の毛は紫だったかなあ……………多分、」

僕は頭に思い浮かんできた言葉を口に出した。

「モチーフは“墮天使”、だと思うよ」



海と月。星に地……………そして虹。

モンスターが並んでいる場を見渡して、僕は一度大きく深呼吸した。

落ち着いて。大丈夫。焦るな、焦るな、焦るな……！

「……何を焦っている、諏訪晃」

「えっ……！？」

「……………予感、か？ 嫌な予感が脳裏を過ぎって、思考を鈍らせているか？」

違う……僕は、焦ってなんか……っ！

「……………凶星か」

「っ……違うッ！ いつもの僕だ！ 大和君に、何が分かるっ！？」

「分からないな。お前の本心なんて、俺に分かるはずが無い」

落ち着け……いつも通りにやれば良いんだ……。

大丈夫——冨司郎よりも、強くは無いさ……………ッ！！

「LV1のコウにLV2のチーをチューニング！ 見つめ、愛せ、我が御心。一途な心が辛辣な裁きを下す！ 愛し狂え……《愛玩人形^{ドールペ} アリス》！」

アリスが、無表情で召喚される。僕に一礼して、睨むように大和君へと向き直った。

「アリスの効果発動！ シンクロ召喚成功時、アリス以外の人形モンスター以下まで魔法、罠カードを破壊できる！ チェーン発動、コウ！ 手札を1枚捨てて、帰還して、《第七人形 コウ》！」
「そして、俺の伏せは破壊、か……………ふ」

小さく含み笑いを浮かべて、伏せカードは破壊される。残念ながら僕の知らないカードだ。

「《ドールコンヴァート》があれば……なら。僕はさらに、LV3、《第二人形 カイ》とLV1、《第七人形 コウ》にLV3、《愛玩人形 アリス》をチューニングする！」

LVは？だ！

「我の中に我、真実の我を探し当てよ！ 殻に籠りてチャンスを伺え！ 裂き咲け——《分裂人形^{マトリョーシカ} ペドラ》！」

『アイツ、あたいキラライ……てなわけでー、やっつけてあげるね☆』

ウインク。可愛いけど、台詞はちょっと怖いよ、ペドラ？

「ペドラの効果を発動！ ペドラがシンクロ召喚に成功した時、デッキからドールと名の付いた魔法、罫カードを手札に加える！僕は《ドールコンヴァート》を手札に！ そのまま発動する！」

手札は5枚……。

僕の間にはペドラ、セイ、ツキの3体。

「次……っ！ LV3のツキにLV1のセイでシンクロ……！ 夢綴るは未来の変化！ 望む軌跡の先に映るは汝の献身……！ 夢よ、叶え！ 《実験人形^{モルモット} テト》……！！」

『テトも頑張ルかう、貴方モ一騎当千だヨ！』

画用紙を僕に見せてきてくれるテト。少し癒されたよ。ありがとう。

《ドールコンヴァート》人形カウンター0↓2.

「テトの効果を発動するよ！ 1ターンに1度、テト以下のレベルを持つ人形モンスターを手札から特殊召喚出来る！ 僕は《第四人形 セイ》を特殊召喚……！」

テト、ゴメンね。出たばかりなのに……そう思いながらテトに視線を送ると、僕の気持ちを汲み取ったのかテトは気にしないデ、と書かれた画用紙を僕に見せてきた。

——ありがとう。ごめんね。

「LV4のテトにLV1のセイをチューニング……！ 散れ、刺し、斬るが良い。守る為に殺める制裁を！ シンクロ召喚！ 惨殺せよ
イレイドドール
《抹殺人形 ライア》……！」

《ドールコンヴァート》人形カウンター2↓4.

『うしっ、行くぜ、マスター！』

「うん。一緒に行こう——僕はペドラの効果を発動して、ペドラの攻守を入れ替える！」

バトルフェイズ前。一度大きく深呼吸して、僕は気持ちを落ち着かせた。

「バトル！ ライアで、《黄騎士》に攻撃っ！」

「――良いだろう」

《抹殺人形 ライア》 ATK 2450↓3250.

《黄騎士》 ATK 1700.

城遊大和 LP 6800↓5250.

「この時、ライアの効果を発動！ 相手モンスターを戦闘によって破壊し墓地へ送った時、デッキからドールと名の付いた魔法、罠カードを手札に加える事が出来る！ 僕は《ドールサイクル》を手札に！」

手札は4枚から5枚に。残念ながらモンスターカードは手札に無
いから、次のターン、大和君に切り替えされたら辛い……。

「ペドラでダイレクトアタック！」

《分裂人形 ペドラ》 ATK 1100↓2700↓3500.

大和君は微笑みながら、その攻撃を受ける。

城遊大和 LP 5050↓1550.

「ふ……流石だな、諏訪晃」

「……………メイン2。《ドールサイクル》発動！ 墓地のチー、カイ、セイをデッキに戻して2枚ドロ―！ ……僕はエンドだよ」
「随分と長かったな……だが、」

――もうすぐ終わる。

そんな一言を告げて、大和君は口元を歪め……晒った。



「俺のターン、ドロ―」

大和君の手札は3枚。一方、僕の手札は6枚……手札の枚数もフイールドも、僕の方が有利だ。

なのに……なんだろう、この不安は。

この……異様な感覚は……？

「……人が人を守るということは、限界がある」

え……？

「どこまでも自分を犠牲にし、守るべき者の為に身を投げ出す。綺麗だな……綺麗で綺麗で……反吐が出る」

心底嫌そうな顔で、大和君は吐き捨てた。

その表情には何かを思い出しているかのように思えて、僕は息を呑む。

「君を守る、ずっと一緒……そんな詭弁きべんを並べて、最後にはハッピーエンド。そんなものが現実であるはずが無いだろう？」

「……何が言いたいのか？」

「――貴様に、人を守る覚悟があるのか……俺が、見極めてやる」

そう言って、大和君は手札の1枚を掴んだ。

「自分フィールド上にモンスターが存在せず、相手フィールド上にモンスターが存在する場合このカードは特殊召喚することが出来る！
来い、《旋律の放浪者》！」

手には琴が。顔に傷を付けた優男風の男性が、穏やかな雰囲気を持って場に現れる。

「《旋律の放浪者》の効果を発動する。このカードが特殊召喚した時、自分フィールド上に他のカードが無かった場合、相手フィールド上のカードを1枚破壊する。俺が破壊するのはその永続魔法だ」
「っ……！」

《ドールコンヴァート》が破壊され、ライアやペドラの攻撃力が下がる。

《抹殺人形 ライア》 ATK 3250 ↓ 2450.
《分裂人形 ペドラ》 ATK 3500 ↓ 2700.

「墓地に騎士と名の付いたモンスターが3種類居る場合、このカードは特殊召喚する事が出来る。現れろ、《疾走の風来坊》！」

今度は、屈強な戦士。背中には斧が背負っており、力強い印象を受ける。

「行くぞ……LV5の《旋律の放浪者》と《疾走の風来坊》をオーバーレイ！ 2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！ エクシーズ召喚！ 現れろ……《裏切られた救世主^{メシア}》！」

眼は血走り。整っていただろう顔立ちも、生気がなくなっていた。髪が無造作に伸ばされ、所々が飛び跳ねている。

無意識に、唾を飲み込んだ。

正直……怖い。僕は額に垂れてきた汗を拭った。

「《裏切られた救世主》の効果を発動する。エクシーズ素材を1つ取り除き、このカードの元々の攻撃力より、元々の攻撃力が下のモンスターを1体、墓地へ送る……堕ちろ、分裂人形^{マトリョーシカ}」

『ううつ……』

《裏切られた救世主》の攻撃力は2500。ペドラの元々の攻撃力は1100だから、足りない……！

「ペドラっ！」

ペドラの身体が地面へと沈んでいく。まるで底無し沼のように落ちて、堕ちて、オチテ……。

ペドラが本当に苦しそうに表情を歪め、呻いた。

「ぺど……ら………」

そして、ペドラが消える。

さっきから、心臓の鼓動が煩い。

「バトル——救世主で、抹殺^{イレイズドール}人形を攻撃する」

「っ……ライアッ！」

《裏切られた救世主》が手に持っていたボロボロに朽ち果てた剣

が、ライアの胸を突き刺す。

串刺し……粉々になって、ライアが消えて行く。

——どくんっ……。

何故だろう。

とても……息が、苦しい。

諏訪晃LP8000↓7950.

「カードを1枚セット。さあ……諏訪晃。貴様のターンだ」

フィールドはがら空き。だけど、大和君の手札は0で、僕は6枚……大丈夫。勝てるさ。

デッキトップに手を置き、眼を閉じる。

「僕の、ター——」

「そのデュエル……止めなさい、アキラ」

背後から、堕天使メフィリアンノの声がした。

第二章 第二十三話 煩い鼓動（後書き）

晃のターンが長い……………（苦笑）

それはともかく、これから更新が1週間に1度だけになりそうです。
理由としては、ちょっと……キツイ……………（笑）

書き溜めしている訳でもないのに、ちよつと辛いですよね……
違う小説の方も進めたいですし。

ですので、恐らく次からは毎週土曜日の午後14時になりそうです。
こちらの我侭ですみません……………><

第二章 第二十四話 大事な人

静かな、声。

良く響く、声。

メフィリアンノは、いつの間にか僕の後ろまで歩いてきていた。

「えっ……？」

僕の方には見向きもせず、メフィリアンノは大和君を睨む。その眼光は鋭く、僕が睨まれているわけでもないというのに背筋が凍った。

もし、僕に向けられていたら……と思うと、ぞつとする。

けれど大和君はそれを気にした様子も無く、つまらなそうに鼻を鳴らした。

「お早い到着だな、メフィリアンノ」

「ええ、おかげさまで。アキラ、このデュエルは止めなさい」

メフィリアンノは大和君を睨んだまま、静かに忠告する。

「彼の最大の目的は、強い者と戦う事。その為に、アキラ……貴方を壊そうとしているのよ」

「壊す……？」

ええ、と頷く。

どういう意味だろう。僕はその意味が良く分からずに、考えを巡らす。

「気付かなかったのかしら？ 彼は仮にも、アタシたちと“同じ”なのよ」

「同じ……………あ！」

——俺が望むのは強者との命を賭けた決闘！

命を賭けた決闘。そして、メフィリアンノたちと同じということは、彼もエンジェルやデビルと同系統の存在。

そう考えると……………命を賭けた決闘とは、混沌デュエルの事だ。それは小さなライフの変化でも、モンスターの攻撃が現実になる。

僕が受けたダメージは50だとしても、ちくりとした痛みも無いのはおかしい。大和君も、大幅にライフを削られているのに苦しんでいる様子は無かったし、今も飄々としている。

「……………けど、」

どうして……………？

僕の疑問に答えるように、メフィリアンノは眼を細めた。

「ハグレ者さん……………どうして、そんな“見た事もないような”デッキで戦ってるのかしら？」

「え……………」

見た事もない……………？

僕が大和君に視線を送ると、小さく肩を竦めた。

「騎士シリーズ……………それは、ユグルや地球とは違う別の世界でOC G化されたカード群だ。俺はそれを拝借しているに過ぎない」

「そう……………彼の本当のデッキは別にあるわ。あの……………凶悪なデ

ツキがね……………ッ！」

眼を細め、ギリツ、と歯を噛む。そのデツキを見た事があるのか……デュエルした事があるのか、メフィリアンノは酷く悔しそうだ。

「あれ……けど、僕を壊そうとしてるって……？」

「……………」

「今のデュエルは混沌デュエルではない。それは分かるな、諏訪晃？」

こく、と頷く。

「そう、混沌デュエルではない……だが、似たようなものだ。何故なら、ダメージを受けるのは君じゃない。モンスター……否、人形たちなのだから」

「……………え？」

今までで一番の躍動。口の中から出て来てしまうかのような大きな音は耳鳴りとなって、僕の心を侵食する。

暗い感情が、拡がっていく。

まるで、巨大な湖に1滴の雫を垂らしたみたいだ。小さな波紋は少しずつ拡がって行き、やがて全体へと喰らっていつてしまう。

「戦闘破壊され……効果破壊され……墓地……いや、墓場へ堕とされ……………」

人形たちの……僕のパートナーたちの苦しげな表情が眼に浮かぶ。

「守れなかったのは、諏訪晃……貴様が弱いから、だろう？」

「アンタ……ッ！」

————…。

「僕のターン、ドロー」

「アキラ!？」

手札、7枚。フィールドは……無し。

「《ドールサンクチュアリ》……墓地の《第一人形 クー》をデッキに戻す。そのレベル未満のモンスター……《第六人形 ツキ》をサーチし、通常召喚。効果を発動……デッキから守備力500以下の人形モンスター、《第三人形 チー》を特殊召喚」

————…。

「《第三人形 チー》の効果を発動。墓地のツキを除外し、デッキより3枚目のツキを特殊召喚。LV3のツキ2体にLV2のチーをチューニング……」

「アキラ………」

————…僕は、

「命を^{みこと}伝う……神秘なる水滴。雫が流るるは……花の、涙。シンクロ召喚……咲き乱れよ、《華^{フルーム}散り人形 ファラ》………」

……………弱い。

『ご主人様の傍に居たい……それを、貴方は邪魔をしました。絶対

に許せない事象です。しかし、何より……………」

ファラは僕を一瞥する。

『城遊大和。貴方はご主人様を傷付け、心を抉りましたね。それは、万死に値します』

贖罪^{しよぐみ}を致しましょう。

静かにそう告げて、ファラの周りに白い華が舞う。

同時に……ファラの言葉を聞いて、僕の眼からは涙が流れていた。止め処なく溢れる涙は頬を伝い、地へと落ちる。

「魔法カード……《ドールレイジ》……！ このカードはバトルフェイズの直前にしか発動出来ない。フィールド上に存在する人形モンスター1体を選択。そして、墓地の人形モンスターを任意の枚数除外する。選択したモンスターはエンドフェイズまで、除外したモンスターの数×300ポイント攻撃力が上がる……………僕が除外するのは、墓地に存在する人形たち全てだ……………！」

その数、シンクロモンスター含めて10体……。攻撃力上昇数は、3000だ……………！」

「バトルフェイズ……ファラ。《裏切られた救世主》に、贖罪を……………ッ！」

—————百花繚乱—————。



白い華。舞う風。滴る涙。

何故か……僕の目の前に、地球に居た頃の映像が流れ始めていた。

洸司郎と遊び。桜と戯れ。いつも帰ってくるのが遅かった両親が帰宅すると、数少ない会話を交わす。

僕が中学1年生、桜が小学5年生の時に起こった事件の事。

そういえば……僕が遊戯王を始めたきっかけは、洸司郎だったわけ。洸司郎が遊戯王を始めて、僕は趣味で集めていた人形モンスターたちを使ってデッキを組んだんだ。

元々、僕は遊戯王をやるつもりは無かったんだけど……何故か、人形シリーズだけは集めなきゃ、って思ったんだ。

初めてのデュエルは見事に敗北。そのまま洸司郎と試行錯誤し、初めての大会。

僕は1回戦負け、洸司郎は2回勝ったけどその後ボロ負けだったのを思い出す。

家じゃいつもデッキ案を練っていて、何度知恵熱を起こしたか……。それでも、カードの中に居るファラたちに元気付けられている気がしてた。

ずっと一緒。

洸司郎や他の友達……もしかすると、両親や桜よりもずっと隣に居た存在。

僕の、大切なパートナー………………。――。

「終わりだな、諏訪晃」

大和君が告げた言葉にはっとして、僕は思考を中断した。

ファラの白い華は吹雪のように舞い、僕の涙を乗せて《裏切られた救世主》……そして大和君へと向かっていく。

そして、

「買発動……」

伏せカードが、開かれる。

「《Chaos Exclusion》……唯一、このデッキの中に組み込んだ俺が使う本当のカードだ」

カオス、エクスクリュージョン……？

名前は勿論。テキストも英語で書かれている。英語は読めるんだけど、残念ながら遠い距離だと読む事は適わない。

しかし……カオスとは混沌、無秩序という意味がある。そしてエクスクリュージョンは……除外――。

「このカードは、墓地に存在する全てのモンスターを除外して発動する。相手フィールド上のカードを2枚まで……ゲームから除外する」

「――え……………？」

一歩。

「その人形とも……お別れだ、諏訪晃」

二歩。

「ファラっ……!？」

黒い空間がファラの前に出現して、その身体を呑み込んでいく。
僕は自然と足が前へ前へと進んで行く。僕の身体はデュエル中にも関わらず、フィールドを土足で踏み込んでいく。

『ご主人様……!』

手を伸ばす。ファラも精一杯に僕へと手を伸ばしてくれる。

もう少しで……!

ファラの手を掴める――そう思って安心したのも束の間。ソリッドビジョンであるファラの手は綺麗にすり抜けてしまう。
暗い空間はファラをすっぽりと呑み込んで……消えた。

「ファラ……」

膝を付く。

「安心しろ。別に、そのカードが使えなくなる訳ではない。ただ、もう精霊として会話することは出来なくなるだけだ」

地球の時と、なんら変わりはないだろう？

そう聞こえたけれど、今の僕にその言葉の意味を理解する事は出来ない。ただ頭がぼーっとして、焦点が合っていない。

生きている心地がしない……とは、こういう事を言うのだろうか。自分の身体が自由に動かなくて、息をしている感覚も無い。涙が出ることも無い。

ただ、呆然とするだけ。

「さあ、壊れる。狂え。そして恨め、憎め。そうすれば、諏訪晃……貴様はさらに強くなれる。その時こそ、俺の本当のデッキを——」
「アキラっ！」

ダレカが僕を呼ぶ。そのダレカは僕を揺さぶって、何度も何度もアキラ、アキラと叫んだ。

「ふ……まあ、良い。メフィリアンノ。貴様はどうする……？ 諏訪晃の為に、我が身を捧げるか……？」

ダレカが男性を睨む。すう……、と男性が消えて行くのを見た女性性は、再びアキラと声を張り上げた。

“僕”……って、ダレ？ アキラ？ 違う、“私”は……“俺”？

「もう………ヤダ」

「アキラ……？」

クライ……ツメタイ……ツライ……もう、

「キエタイ………」

「っ……！」

その時。

抱き締められたかのような温もりが、身体を包んだ。凄く暖かくて、包まれて……凍り付いた何かが溶かされていくような不思議な感覚。

「め……ふいり……あん、の？」

「貴方はアキラよ。他の誰でもない、アタシの……アタシたちの大事な人。だから……消えたいなんて言わないで」

そうだ……“僕”は晃。諏訪晃だ。諏訪昌騎すわしヨウキと諏訪春美すわハルミの息子だ……！

「……アキラはウェーリアの宿に戻って休んで。大丈夫……彼女たちの事はアタシが何とかしてみせる」

「メフィリアンノ……なんで、そこまで……？」

抱擁が解かれ、至近距離で見つめ合う。メフィリアンノは優しく微笑むと、額と額をくっ付けた。

「アタシは、堕天使だもの」

気付くと、メフィリアンノの背中には白と黒の翼が対となって広がっていた……。

第二章 第二十四話 大事な人（後書き）

ふう、今回は難産だった……。

どうやって晃を壊れているかのように描写しよう、と何度か試行錯誤（笑）

ご感想、ご評価、どうぞ宜しくお願い致します！

番外編 出会い。似た者同士（前書き）

番外編になりますけれど、本編にも関係が出てくる大事な話になります。

今回は『紫苑の槍』様にもちゃんと相談しましたよ（笑）

番外編 出会い。似た者同士

その日は、少し肌寒さが身に凍^しみる日だった。まだ冬という季節じゃないというのに、時折吐く息が白くなって視界に映し出されていた。

太陽は雲に隠蔽され、日の光が落ちない。秋の終わりも近付いてきたと感じさせる本日。

とうとう、僕や洗司郎が通う高校では文化祭という厄日が始まった。

「この後、一緒に廻らない……？」

「あの、すみません……そういうのは………」

「そう言わずに、ね？ 一緒にさ」

……はあ。

表には出さずに、僕は溜め息を零す。高校1年の文化祭、僕は松山君の提案（ある種の謀略）によって女装させられ、コスプレ喫茶の店員を任されていた。

ちなみに。

このナンパも、既に二桁を迎えようとしていた。

なんとかナンパ男から逃げ出せた僕は、次の人のオーダーを取りに行く。思ったよりも繁盛してしまっているのは、やっぱり洗司郎を筆頭に料理が美味しいからだろう。

……早く休憩時間にならないかな。

そう願いながら、僕はまたナンパを退けるのだった。



「……やつと終わった……」

あくまで、喫茶店の手伝いは終わった、という意味で。

地獄はまだまだ終わらないらしい。何故なら、また手伝いをしに来るんだから……という理由で僕は着替えさせて貰っていないんだ。うう……下がすーすーするう……。

「取り敢えず……桜は今日も学校だし、来る心配は無いけど……この視線はどうしよう」

視線、視線、死線。

……やっぱりどこか変なのかなあ……そう思いながら、僕はスカートを押さえてお尻の方に視線を移す。

……残念ながら、僕には分からない。

後で洗司郎に見て貰おうかな？ 今日はまだ1、2回しか会っていないしなあ。

「ん、君……」

「え？」

僕と同じくらい……ううん、僕以上に視線を集めている綺麗な人。下半身にまで到達しそうな長い髪は銀色で、全てを射抜くような紅い瞳は真っ直ぐに僕を見つめていた。

見た事も無いようなワンピース型の服。文化祭という行事だからと、自分で作って来たのだろうか？

「私と同じタイプの子みたいだね」

「え、と……？ 僕のこと、ですよ？」

「ええ。少し話さない？ 興味が出来たから」

ふふ、と淫靡いんぴに笑って彼女は僕の手を握る。その突然の行動に少しドキッとしながら、僕は導かれるままに廊下を進んだ。

……視線がさらに強くなった気がする。

高校3年生のある喫茶店の中に入ると、適当な場所に座り込む。

彼女はコーヒー、僕はリングジュースを頼む。

運ばれてきて、僕と彼女是一緒にお礼を言う。運んできてくれた男性の先輩は、顔を紅くして足早にその場を去った。

「私は朝霧朔夜あさぎりサクヤ。君は……」

「あ、僕は諏訪晃です。こ、こんな格好してますけど本当は男ですからねっ！？」

「「「えっ」」」

………今、驚いて声を上げたのは何人居ただろう。少しショック。

そんな僕の言葉に、彼女……朝霧さんはやっぱり、と微笑む。

「私も男だよ。君と同じ」

「「「えっ！」」」

………今、驚いて声を上げたのは何人居ただろう。ちなみに、今の驚愕の声には僕も含まれている。

どう見ても綺麗な女性。長い睫毛に艶めく唇。薄化粧なのか分からないけど、それが凄く映えていて美しい。

「え……本当、なんですか？」

「信じられない？」

こくこく、と頷く。

……後ろで僕と一緒に頷いたのは誰。

「なら、確かめてみる？ そうだね……校舎裏、辺りで」

「いつ、いえ、結構です！」

「ふふ、残念だよ」

つ、掴めない……今まで出会った人たちの中でもかなりタイプが違うから、全く掴めない……。

「私の事は朔夜、で良いよ。君の事も名前で呼ばせて貰うから」

「あ、うん……」

リンゴジュースを一口。思ったよりも香ばしいリンゴの風味が口内に広がって、自然を頬が緩んだ。

「……………やっぱり」

「え？」

「……………うん。少し、ね」

眼を細めて僕を凝視する朔夜ちゃん……じゃない、朔夜君……うう、違和感………えと、朔夜さん？

……全部違和感だらけで、なんて呼べば良いんだろう。

……心の中だけは、朔夜って呼ばせて貰おう。

「……………君と私は似てるね」

「……似てる？」

「うん、似てる。それこそ、色々なところが……性格や口調もどことなく似てるし、どこか歪いびつなところとか……後、女装してるのところとかね？」

「へっ？ いや、女装は違うよっ！？ 僕が好きでやってる訳じゃなくて……」

「そうなの？」

「そう！ 文化祭の出し物で、ちょっと……」

あはは、と空笑いした。

「けど、後々好きになっちゃうかもよ？ 私も元々、友達………う」

「ど、どうしたの？」

言葉の途中で、朔夜は身震いしていた。その姿が、桜に追われて
いる僕に少し似ていて……朔夜の言う事もなんとなく納得してしま
った自分が居る。

「その、少し寒気が……私の場所は分からないはずなのに……流石
………」

「へ？」

「う、ううん。なんでもない、よ？」

……似てる。凄く似てる。泣けるほどに僕の姿が鏡のように映っ
て見えるよ………。

「……友達……じゃなくて、恋人……そう、最愛の恋人に女装させ
られてから癖になっちゃって」

「そ、そうなんだ……」

……朔夜も、苦勞してるんだね。

なんとなく意気投合して、僕と朔夜は何も語らずに握手した。端から見れば凄くシュールな光景だっただろう。

手を離れた僕と朔夜は、同時にコップへと手を伸ばす。同時に飲み物を口に含んで、同時にコップから口を離れた。

「それに………私と君の魂も、少し似てるよ」

「え？ 何か言った？」

「ええ。本当に晃ちゃんは可愛いなって」

「そつ、そんな事無いよ！ 君も凄く綺麗で……」

「ふふ。ありがとう」

そんな感じで、僕と朔夜は出会い、会話を弾ませたのだった。



文化祭終了の放送が響く。僕は仕事と女装の終わりに安堵の溜め息を零すと、喫茶店でずっと僕を見守ってくれて居た朔夜が近付いてくる。

……見守ってくれてたのは嬉しいのに、実は朔夜が居たせいで……もとい、居たおかげでさらにお客さんが増えたのは………忘れるよう。

「お疲れ様」

「うん……」

ただ、この後は片付けがあるんだよね。多分、洗司郎たちも既に片付けを始めていると思う。

僕も早く向かわないと。

そんな僕の気持ちはちゃんと気付いていたのか、頑張ってたね、と朔夜は笑った。

「ありがと。頑張るよ」

「ふふ……君とはまた会いそうだね」

右手を差し出してくる。握手、という意味だろうか。

僕はそれに応えようと、にっこりと微笑む。まるで女神のような、美しく綺麗な笑み。

「……やっぱり君の事、アキちゃんって呼ばせて貰うね」

「あ、アキちゃんっ？」

「私の事もサクちゃん、って呼んで良いよ。昔の友達は、そう呼んでくれたから」

そう言って、再三微笑むと僕に背を向ける。けれど教室の扉の前で一度振り返ると、片手を胸に置きながら祈るように言った。

「君と、人形たちに幸あれ………ばいばい、アキちゃん」

「あ……ば、ばいばい……さ、サクちゃんっ！」

少し恥ずかしかったけど、そう呼んだ。なんとなく………本当になんとかんだけど、また会う気がしたから。

そして………大事な存在になる………そんな気がしたから。

僕にとっての洗司郎のような。桜のような。両親のような。友達のよう………。

大事な人になる。そんな気がしたから。

「……………さて、僕も片付け手伝わないとっ」

ばいばい、サクちゃん——。

番外編 出会い。似た者同士（後書き）

誕生日おめでとうございます！

はい、本日は私、廃棄人形の18歳の誕生日になります！！

その為、それを記念しての番外編です。まあ、少し短いんですけど……2，3時間での完成としては良いかな、と（苦笑）

感想、評価など、首をスパイラルさせてお待ちしておりますっ（笑）

第二章 第二十五話 サクちゃんとペンダント

太陽の日の光は、薄暗い暗雲に阻まれていた。僕はそれを見上げながら、雨が降って欲しい、なんて考えていた。

ウェーリアの入り口。巨大な門に視線を移して、僕は唇を噛んだ。

何してるんだろう、僕は……。

何とかして見せるから、というメフィリアンノの言葉に甘えて。傷付けないように、と桜たちを遠ざけたのに……結局、ファラたちが苦しい思いをしちゃった。

「空回り、してるなあ……」

門から離れて、僕は近くの樹に凭れ掛かりながら腰を下ろした。

「……………」

——僕は、誰も守れないのかな……………。

そういえば……地球に居た時も。誰かを助けようと最初に動いたのは僕だったのに、結局冴司郎に任せちゃって……怪我をするのは冴司郎ばかり。

もし、もしも。

真名と出会っていたのが冴司郎だったら……………どうにかしてくれていたんじゃないだろうか。

僕なんかが、誰かの傍に居るなんて……………。

「――？ 君は……………」

どこかで聞いたような声。僕はその方向に視線を向けると、綺麗な人が立っていた。

銀色の長い髪、鋭くも優しい雰囲気を持った紅い瞳。僕よりも濃い紫色のローブを羽織っている彼女は――。

「え…………サク、ちゃん？」

「…………久し振り。1年振りくらい…………かな？」

高校一年生の時の文化祭で出会った子だった。

あさぎりサクヤ

朝霧朔夜。女の子の格好をしているけれど、本当は男の子らしい。実は今も半信半疑だったりするんだけど…………。

「ど、どうしてここに……………」

「私も色々あったんだよ。尤も、私はアキちゃんがこの世界に居たのは知ってたけど」

僕の隣に、サクちゃんは座る。1年振りに会ったけれど、サクちゃんは何も変わっていない。ううん、前よりも綺麗になってるくらいだ。

それにしても…………“色々”あった、か。僕もそうだなあ…………まだユグルに来て1ヶ月も経っていないなんて信じられないよ。

「もう出発したと思ってたのに…………どうしてこんな所に？」

「……………ちょっと、ね」

サクちゃんの質問に、僕は曖昧に答える。精霊だとか、エンジェルやデビルとか…………そんな事を言っても、信じて貰えないだろうし。僕の答えに、サクちゃんはそっか、と呟く。

暫しの沈黙。

少しすると、サクちゃんはすっと懷からある1つの物を取り出す。

——蒼い水晶の、ペンダント——

「っ……………！ コレ……………！！！」

「タッグデュエルトーナメント……………その優勝者さんからね。盗るのは凄く罪悪感が生まれたけど……………アキちゃんの大切な物だって分かったから」

結構前から、君の事を見てたんだよ？

そう言って、サクちゃんは僕にペンダントを渡してくれる。水晶の裏にはM・Aと彫られていて、やっぱり真名のだ、と再認識出来た。

真名の、宝物。

僕が真名にあげた、繋がり。

「っ……………」

「……………泣いて良いよ。私が、傍に居てあげる」

「ふ……………く……………真名……………フアラ……………皆……………ッ！」

僕は、サクちゃんに抱き締められながら。

泣いた。



数分……。ずっと泣き続けた僕は、涙を拭いながら起き上がる。
サクちゃんのローブは僕の涙でずぶ濡れになってしまった。

「ご、ゴメン……。その、ローブ……」

「気にしないで。それより、もう大丈夫？」

「うん……。ありがとう。サクちゃんのおかげで、凄く落ち着いたよ」

それは良かった、とサクちゃんは流麗に笑む。その顔に僕は顔を
紅くして、視線を逸らした。

手に持ったペンダントを自分の首に掛けて、微かに微笑む。

「アキちゃん。これからどうするの？」

「……分からない。少し、休んだ後……エデラウンでも行こうかな
って」

「そっか……。ねえ、アキちゃん」

僕の手を握って、サクちゃんは身体を近寄らせてくる。また顔を
紅くしてしまう自分を恥ずかしく思いながらも、僕はサクちゃんの
顔を見つめる。

その表情は、どこことなく、僕を心配しているかのようなだった。

「暫く一緒に旅しない？」

「へ？」

「私は元々、恋人と2人で旅してたんだけど……ちょっとした理由
で別行動してるの。けど、1人旅よりも2人の方が楽しいと思うよ
？」

……サクちゃんと旅、か。

……僕なんかで良いのかな？

また、僕のせいでサクちゃんが傷付いちゃったりして……。

「ごめん……僕は――」

「クク……ころんなところに居やがったか、諏訪よお？」

ドクッ……。

男の声だった。僕とサクちゃんが視線を向けると、そこには黒い肌、ローブ、デュエルディスクをした男が見下すように僕を見ていた。

……デビル。

僕が、戦わなくちゃいけない相手――。

「は……はあ……はア……」

動悸が鳴り止まない。バッグからディスクを取り出して、腕に装着――。

あれ……。

取り付け、られない……？

そっか……震えてるんだ。

もう、精霊のファラたちと会話する事は出来ない。だというのに、デュエル中のファラたちも傷付いたら？ 破壊され、今度こそ本当に“会え”なくなったら？

「―――ねえ、貴方」

サクちゃんの声。その右腕には見た事もないような形の蒼白いデュエルディスクが取り付けられていた。

「あ？ テメエは……」

「狙いはアキちゃんのようにだけど……私が代わりにデュエルしちゃ駄目かな？」

「なっ……何言ってるの、サクちゃん！？」

そんなの、絶対駄目だよ！

「勿論、私が負けたら私の命もろとも、アキちゃんを好きにして良いよ」

「ほお……テメエ、良く見たら上玉じゃねえか……良いぜ、その条件、乗った！」

そんな……また、僕のせいで……！

無理矢理にでも僕がデュエルする！ そう決めて、僕は一歩足を踏み出した――。

ガクツ、と。

足は身体を支えられず、僕は地面に膝を付く。

「アキちゃん」

「サク、ちゃん……」

僕は、自分が思っていた以上に震えているの……？ デュエルディスクも地に落ちて、拾おうにも身体が自由に動いてくれない。

身体は、正直で。
恐怖が、僕を襲う。

サクちゃんは静かにローブを脱ぐ。初めて会った際にも着ていたワンピース型の服が露わになって、綺麗な脚が外気に晒される。

ローブの内側ポケットから1つの束を取り出して、サクちゃんは右腕のディスクにセットした。と同時に、オートシャッフル機能が使われる。

「アキちゃん、これ持ってた」

脱いだローブを渡される。少し、良い匂いがする……………あれ？
僕のローブよりも感じる重み。失礼だと思いながらも見てみると、そこには…………。

ローブの内側ポケットに、幾つも遊戯王の紙束が並んでいた。このローブのポケットは数多いタイプらしく、その殆どにデッキが仕舞われていた。

「今、私のメインデッキは訳あって使えないんだけど…………黒い御方。君にはこれで十分」

「はっ。言ってくれんじゃねえの…………後悔すんじゃねーぞ」

デュエル、と。

2人の声が響く――。

◇ ◇ ◇

私がユグルでアキちゃんを見つけたのは、サーヴァイルの食堂だった。

私はローブのフードを深く被っていたからアキちゃんは気付かなかっただろうけれど。アキちゃんは最後に会った1年前と変わらず、男とは思えない顔立ちだった。

その時は、2人の少女を連れて。食堂のウェイトレスが関係して問題を起こした時、私が動く前にアキちゃんはすぐに助けに向かった。

私は……そんなアキちゃんが、もっと好きになった。

だから、タッグデュエルトーナメントの際……優勝賞品のペンダントが彼にとって大切な物だということを“彼女たち”から聞いた時は、私も何とかしたい……そう思って。けど、私はペアが見付からずに出場は不可になってしまった。

そして、私が危惧していた通り……アキちゃんは大切な友達を守る為に、戦いへと勤しむ。

(全く、もう……)

本当に、アキちゃんと私は似てる。

昔……“別の世界”で。私が行った行動と同じ事をしてるんだから……。

「私の先攻。ドローしちゃうね」

そんな、自分を犠牲に出来るアキちゃんが、泣いた。

「ふふ。これは……」

アキちゃん。貴方は、

「そう……やっぱり、アキちゃんは精霊に物凄く好かれるタイプみたい。私と同じ——」

私が、暗い闇から救うよ……………！

「黒い御方。貴方の終わりだよ」

「ああ？」

「——私は《リチュア・アビス》を通常召喚！ このカードが召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、守備力1000以下のリチュアをデッキから手札に持ってくるよ。おいで、《シャドウ・リチュア》《ちゃん》」

私の音声を認識したディスクから一枚のカードが引き抜かれ、私はそれを手札に加える。

「そして、そのまま《シャドウ・リチュア》ちゃんの効果……手札から捨てて、デッキから《リチュアの儀式水鏡》ぎすいきようを手札に。さらにもう1枚の《シャドウ・リチュア》を捨てて、再び《リチュアの儀式水鏡》をサーチ」

「……ちっ」

私の連続サーチに、黒い御方が舌打ち。

けど、ね？

アキちゃんの命を狙う輩に、遠慮なんてしないから——！

「《儀式の準備》！ デッキからLV7以下の儀式モンスター……」

《イビリチュア・ガストクラーケ》ちゃんを手札に。さあ、手筈は整ったかな」

くす、と笑む。

リチュアの皆さん。今、“例”の諏訪晃ちゃんがピンチだよ。誰よりも貴方達と遠い存在、同時に誰よりも近い存在の彼が――……。

「《リチュアの儀水鏡》を発動！ 手札のガストクラーケちゃんをコストに、2枚目のガストクラーケちゃんを儀式召喚！ このカードが儀式召喚に成功した時、相手の手札を2枚まで確認して、その中の1枚をデッキに戻す――両端のカードを見せて」

「クソ……」

《暗黒界の龍神 グラファ》と《暗黒界の門》、か……。

どちらでも変わらないよ。

「取り敢えず、グラファをデッキに戻してね？」

グラファがデッキに混ざり、シャッフルされる。

「墓地の儀水鏡の効果。儀水鏡をデッキに戻して、墓地のリチュアと名の付いた儀式モンスターを手札に戻す……私はガストクラーケを手札へ回収。そして、2枚目の儀水鏡を発動！ 場のガストクラーケちゃんをリリースして、手札に戻したガストクラーケちゃんを儀式召喚！ そして、効果を発動するよ」

《暗黒界の取引》と《暗黒界の術師 スノウ》……。

「スノウちゃんをデッキへ。墓地の儀水鏡の効果を発動して、再びガストクラーケちゃんを手札に。そして、魔法カード《サルベージ

《!!》

「なっ!？」

「ふふ……私は墓地より、攻撃力1500以下の水属性モンスター……2枚の《シャドウ・リチュア》ちゃんを手札に戻すよ」

黒い御方。

アキちゃんの命を狙った罪は、重いよ――？

◇
◇
◇

凄い、の一言だった。

相手のデッキは暗黒界、だと言う事は分かった。けれど、《イビリチュア・ガストクラーク》の効果によりデッキに戻っていく。

サクちゃんは《サルベージ》により《シャドウ・リチュア》をデッキへ戻し、効果を使ってデッキに戻った儀水鏡を手札に加える。

そして、3回目……4回目とガストクラークが続く。

デビルの残りの手札は1枚。そして。

「それじゃあ……2回目の《サルベージ》を発動」

ああっ!？ と、デビルが声を上げる。それはそうだろう、流石に初ターンで手札を全てデッキに戻されたら……。

再び《シャドウ・リチュア》により、儀水鏡を手札に加えて5回目のガストクラーク。ガストクラークの効果は、2枚“まで”確認

だから、1枚の時でも発動することが出来る。
だから……。

「チイツ……！」

デビルの手札は0枚のまま、やっとターンが変わった。

「俺のターン、ドローッ！」

力強くデビルはドローする。その手札を確認して、唇を噛んだ。

「ターン……エンドだ……！」

「ふふ。後悔した？ アキちゃんを殺そうとした罰だよ。私のターン、ドローするね」

そして――――。

「アあっあアっあアあっアアアッ……！」

一方的なまま、デュエルは終了を告げた。

デビルは闇に吞まれ、姿を消す。いつの間にか僕の震えは止まっていた、サクちゃんのローブを手で静かに立ち上がった。

徐々に暗雲が晴れ、太陽の日の光がサクちゃんと僕を照らす。暖かい日光は、まるで僕らを抱き締めるかのように降り注ぐ。

その光が……僕の首に掛けられたペンダントを輝かせる。

サクちゃんは、僕に笑顔を向けて、こう言った。

「さて、どこ行こうか、アキちゃん」

第二章〜第二十五話 サクちゃんとペンダント（後書き）

少し前の番外編で出たばかりの朝霧朔夜がご登場です（笑）

丁度良いし、出しちゃおうかな、と暴走してしまった私……大丈夫かな＞＜

伏線とか立てるの苦手だぁ……誰か教えて下さいお願いしますm（

）m

ご感想、評価等、いつでもお待ちしておりますねっ！

第二章へ最終話 3度目の正直を（前書き）

第二章、一応完結です。

第二章く最終話 3度目の正直を

宿屋の一室。ウェーリアに入国してすぐのところにある宿屋の部屋の中で、朔夜は晃の寝顔を見つめながらふふ、と微笑んだ。

もう外は夜。薄暗がりの部屋の中で、窓の外からは月光が瞬く。

朔夜は晃の頭をそつと撫でると、布団から出てバルコニーに出た。冷たい風が長い銀髪を撫で、朔夜は流れる髪を耳元で押さえた。

「……………」

『お気になりますか、諏訪晃様が』

誰も居なくなつた街路を眺めながら呟く朔夜に反応したのは、ふわっと空中を浮いている白猫だった。

尻尾には銀色に輝くリングが嵌められ、片方の耳には1つのピアスが並んでいる。

『はっ。随分と気に入ってるみてエじゃねえの、サクっち。沙羅綺サラキが居るっつーのに、惚れちゃったか？』

そう言つてくく、と無駄に高い声で晒う、白猫の隣に現れた黒猫。3本の尾に1つずつ嵌められたリングは金色に輝き、左耳には3つのピアスが立ち並ぶ。

「ふふ。かもね」

『チッ。おめえにやからかい甲斐がねーからつまらねえ』

『……実際のところはどうかのです、サク様』

そう問われて、朔夜はそうだね……、と一瞬の間を置く。

「……アキちゃんは、私に似てるんだよね」

『それは何度も聴いたっつーの』

不満そうに尻尾が揺れる。

「……まるで、昔の自分を見てるみたい。アキちゃんの大切な人形ちゃんたちに聴いたところによると、どうやら自分の大切な存在が亡くなったのは自分の所為だっと思ってるでしょ？」

『そのようです』

同意するように、耳が動く。

「……私も、沙羅綺ちゃんに言われるまではずっとそう思ってたから。けれど、その悲しみは心の奥に仕舞い込んで、周りの人の為に身体を張る。ふふ、まるで鏡を見てるみたい」

『女装も似合いますし』

『おっ、言えてるぜ!』

ははっ、と黒猫が哂う。甲高い感じの声なのに、喋り方や仕草はかなり男っぽい黒猫だ。

「……私にはやるべき事がある。アキちゃんにもやるべき事がある。いつまで一緒に居られるかは分からないけれど、その間にもその手助けが出来たらな、って思っちゃうよ」

『けどよ、おめーは晃の“やるべき事” つつーの……知らねーだろ？』

「それでも、ね」

にっこりと微笑んで、朔夜は部屋の中でぐっすりと眠る晃を見つめる。

「私は、アキちゃんの友達だから」

月が、雲に隠れて。

闇が、世界を包む。



眼を閉じていた。

あんたん 暗澹とした世界の中で、力の限り翼を広げる。白い羽と黒い羽が交差し、天も地も無い空間を舞う。

一步――。

一步、一步――。

まるで人1人しか通れないほどの小さな道を歩くかのように、慎重に進む。

慌てない。静かに、ただ歩を止めずに。堕ちたら一巻の終わり、と心中で呟いて、眼を開いた。

瞬間。その空間に幾つかの裂け目が開いた。何十とあるその裂け目の先には、再び暗闇が広がっている。

もしもこの空間に居るのが普通の人間ならば、気がどうにかなってしまいうだろう。狂い叫び、歩を進めることも出来ずに息絶える可能性もある。

ただでさえ、墮天使として長い年月を生きて来たメフィリアンノもそうなりそうなのだから……。

「アキラ……」

それでも、彼女の心を支えるのは1人の少年が居るから。

もう、アキラが壊れるのは見たくない。もう……アキラが苦しい想いをするのは、見たくない。

“1度目”は、何も出来なかった。アキラが泣いて、泣いて、それでも尚誰かの為に笑顔をを見せていた彼を、自分は助けることが出来なかった。

“2度目”も、自分は役立たずで。アキラは謝って、謝罪し、自分の所為だと自己嫌悪して……彼は、自分の目の前で寝込んでしまった。

3度目の正直。今度こそ……！

「アキラ、待ってて。真名や滯名レナの時みたいに……貴方を泣かせはしないわ」

そう言って、メフィリアンノは異空間の裂け目へと身を投げ出す。

暗く寂しいその場所は、心地良いほどの静寂が包み――。

第二章く最終話 3度目の正直を（後書き）

第一章のラストは精霊たち。第二章は朔夜とメフィリアンノが締め括りました。

はてさて、第三章はどうなるのでしょうか……？

感想、評価等宜しくお願い致します！

番外編／第二章完結記念

作者「ふ〜……とうとうここまでキタっ！」

晃「……けど、予定してる最終章にはまだ3分の1も来てないよね？」

朔夜「それに、また“紫苑の槍”ちゃんに内緒で……………瀋名ちゃんって誰？」

作者「……………」

晃「……………」

朔夜「……………」

作者「さあ？」

晃「ちよっとっ!？」

朔夜「ふふ。全く、困った人だね」

作者「いやね、最終話を書いたのはかなりの寝不足時&引越しの準備とかで疲労困憊だったんだよね〜。だから、その時の記憶は酷く曖昧です（笑）」

晃「笑えないからねっ!？ 作者自身も分からないって!？」

作者「はて、どんな設定を考えたんだっけ……………」

朔夜「……書き直せば良かったのに」

作者「うーん、そうしたかったんだけど……最近は時間が無いんだよ。言い訳みたいになっちゃうけど、最近は本当に引越しの準備で荷物を纏めたりしなきゃならないから、時間の空きが少ないっ!」

晃「けど……番外編を書いてるって事は、結局、最終話を書き直すのが面倒だったんだね?」

作者・朔夜「気付いちちゃったー」

晃「なんでサクちゃんまでっ!? いやいや、凶星だったの!?! それ、自分は良いけど“紫苑の槍”様に迷惑だからっ!」

作者「大丈夫だよ。湊名ちゃんの事、洸司郎は知らないから。桜たちも知らないよ」

朔夜「あれ、設定忘れちゃってたんじゃないの、廃棄ちゃん?」

作者「やべっ、バレた!?! つか廃棄ちゃんはヤメテ!」

作者「さて、その話は取り敢えず終わっというて……“紫苑の槍”様の小説の話題に」

晃「君としては、実は結構インパクトあったんだよね。地球の事を描写するのはさ」

作者「まあねー。私もいつかは書こうとしてたんだけど、全然案が浮かばなくて、保留にしてたんだよ」

朔夜「でも良かったじゃない。その“紫苑の槍”さんのおかげで、ある1つのイベントが頭に浮かんだんでしょ？」

作者「そうそう。いやゝ、どの辺りでそのイベントを起こそうか………ねえ、その手にあるメモ帳は何？」

晃・朔夜「プロット」

作者「返せえっ！」

晃「あ……」

朔夜「……取り返されちゃった」

作者「はあ、はあ……全く、油断も隙もあったもんじゃない」

晃「それにしても……」

朔夜「……余り、感想来てないね」

作者「………特定の人はいっぱい下さって、私の栄養源になってるんだけど……他の人の意見も欲しいので、少しだけでもお願い致しますっ！」

晃・朔夜「お願いします！」

作者「では最後に、連絡……かな？」

晃「うん、だね」

作者「えっと、第三章なんですけど……一応第三章に起こるイベント等の案は出来上がっています。けれど、こちらの都合・我俣により“紫苑の槍”様と同じ日から第三章を始めたいのです」

朔夜「成る程……じゃあ、これからどうするのかな？」

作者「これから暫くは番外編が続きます。番外編とは言え、物語に関係のある重要なお話もあったりするので、どうぞそちらも見てくださいですね！」

晃「ただ、デュエルが少なくならない？ 二次創作として連載させて貰っているのに……」

作者「それが悩みなんだけどね。取り敢えず、次の話の番外編からはストーリーのように物語が続きます。えと、番外編第一話、みたいな」

朔夜「……あれ、その番外編のストーリー……デュエルが一切無いね」

作者「う、ごめんなさい……っつかプロットまたっ!？」

朔夜「あんっ」

作者「変な声出さないでッ!? 君、男でしようがーっ!」

晃「……………さて、收拾が付かなくなってきたので、この辺りで失礼致します」

晃・朔夜「これからも【遊戯王 僕たちの進んで行く道】を宜しく
お願い致します!」

作者「…………え、ハブられた?」

ちゃんちゃんちゃん。

番外編く第二章完結記念（後書き）

“紫苑の槍”さん、濔名の件……すみません。

読者の皆様、第三章や番外編の件……すみませんっ。

番外編のストーリーが終われば、デュエル有りの番外編も出てくる
と思いますので……本当にすみません（汗）

そんな小説ですが、感想、評価等お待ちしております！

番外編STORY No. 1 黎明期（前書き）

番外編物語、始まり始まり〜！

番外編STORY No. 1 黎明期

――2月4日。

少し前に滑り止めとして受けた私立高校の受験も終わり、残すは2つの公立受検のみとなった。

その公立受検の1つは洸司郎も一緒に受けるみたい。尤も、僕としてはその公立は滑り止めで、本命は違う高校なんだけど。

それはともかく……肌寒さも少しは無くなってきて、真名から貰った誕生日プレゼントのマフラーを手放すのも止むを得なくなってきた今日この頃。

僕はいつものように、真名が入院する病院へとやって来ていた。

「調子はどう、真名？」

「う、うん……最近調子は良いよ。倒れちゃう事も無いし……」

「そっか、良かった」

このまま、少しずつでも病気が治って行けば……元気になってくれれば良いのに。

何も出来ない自分が無性に歯痒くて、僕は1人になった時、いつも自己嫌悪に陥ってしまう。

真名を助けたくて、真名を救いたくて……けれど、僕みたいな子供じゃ、何も出来ない。ただ、真名の隣で支えてあげる事しか出来ない、弱い僕。

僕はベッドの横にある丸椅子を引き寄せると、そこに腰を下ろした。

真名が上半身を起こそうと身体に力を入れる。その背中に僕は腕

を廻して、起き上がれる手伝いをした。

「あ、ありがと……晃君」

確かに、出会ったばかりの時よりも顔色は良い。前までは頻繁に起こしていた熱も無くなって、見る限り薬の量も減ってきているみたいだ。

順調に治って来ているのかもしれない……淡い希望が胸に宿る。

「真名」

「え……？」

確か、真名は僕や洸司郎と同じ年の15歳だったはず……だよな。

「もし……もしもさ。先生が許してくれるなら……退院したいと思わない？」

「え、退院？」

「うん、そう。様子見の仮退院って事になるけど……身体の調子は良いんだよね」

暫しの静寂。真名は考え込むように視線を彷徨わせ、やがて瞳を閉じた。

そして、少しの時間が経った後、真名は真っ直ぐに僕の眼を見つめながら口を開いた。

「退院……したい。晃君と一緒に、外の世界を見てみたい」

「……そっか。僕が頼んで見るよ！ そしたら、いっぱいデートしようね、真名」

「あう……で、でーと………」

僕が直球に言うと、顔を紅くして俯いてしまう真名。出会った時から何も変わらない真名の姿に、僕は無意識に微笑んでしまう。

真名の悲しい顔は見たくない。辛そうな顔をさせたくない。

真名の笑顔が見れるなら……僕はナンデモする――。

「あ、ああああのっ……あ、晃君」

一際大きく真名の声が響く。

「もし……もしも、私が元気になったら――」

「はろ〜♪ 元気、お姉ちゃん！ おっ、アキ兄にいも居たんだ！
やっほ〜☆」

「あ……レナ滯名ちゃん。こんにちわ」
「……はう」

元気に声を上げながら病室には入ってきた女の子。真名の妹……
有宮ありみや滯名は、僕や真名よりも1歳年下の中学2年生だ。

桜よりも少し背の高いくらいの身長。健康的に焼けた肌は真名と対照的だ。滯名ちゃんが運動部だからだろうか。

ブラウンの瞳に明るい茶髪。左側に結ばれたサイドポニーの髪型は、元気に動く滯名ちゃんに合わせてぴょんぴょんと揺れていた。

ところで、真名は何を言いかけたんだろう？

「あれ、もしかしてお邪魔だったかなあ？」

「そっ、そんな事無いよ!？」

「うん。久し振り、滯名ちゃん」

「おっひさ〜。2週間振りくらい？」

「かな？」

確か、それくらいの期間は開いていた気がする。

漣名ちゃんは僕や洸司郎とは違う中学校で、女子校に通っている。小、中、高と続く一貫校で、結構なお嬢様学校だ。

水泳部の帰りなのか、漣名ちゃんは水泳バッグを持っていた。

「お姉ちゃんと2人きりだからって、変な事しなかった？」

「れ、漣名っ！」

「……相変わらずだね、漣名ちゃんは」

くす、と笑ってしまう。本当に対照的な姉妹だよ。

漣名ちゃんは水泳バッグを床に置くと、にゃふり、と不思議な声を上げながら僕に抱き付いて来る。

「れ、漣名!？」

「むふり、アキ兄は温かいにゃ」

……ちなみに、いつもの事である。

「お姉ちゃん、そろそろ慣れたら〜? アキ兄なんて、こんなに落ち着いてるのにさ」

「……諦めたとも言うけどね」

「うわぁ、アキ兄の肌って凄いすべすべ。そこの女の子なんて目じゃないねっ！」

……聞いてないですか、そうですか。

というか、僕的首筋や頬を撫でるのは止めて欲しい。背筋がゾクゾクしちゃうから。

「うきゃあつ!?!」

「あはっ☆ アキ兄、耳が弱いんだね」

「れ、濤名! そ、そんな羨ま……じゃなくて、晃君に迷惑だよ……!」

ま、まさか耳を舐められるなんて………流石に予想外だよ。

「……………アキ兄の……………味、か……………」

「え?」

「——お姉ちゃん、羨ましいでしょう? お姉ちゃんより先に、アキ兄は汚させて貰ったよん」

今………濤名ちゃん、何を言ったんだろう?

そんな疑問は、変わらずの騒がしさにすぐ忘れ去られてしまったのだった——。



もしも、真名が退院出来るのなら。

きっと真名にも友達が出来て、笑う回数も増えて……真名にとって、良い思い出になると思うんだ。僕としては、ちょっと寂しいけれど、正直僕のことなんてどうでも良い。

真名さえ、元気になってくれれば——。

僕は仮退院出来るか否かを先生に訊く為、白く長い廊下を歩いて

いた。厭に葉臭い匂いも慣れたものだ。

途中、知り合いになった看護師さんや患者さんに挨拶しながら部屋へ進む。今の時間なら、先生は休んでいるはず。

「あれ、どっちだっけ……？」

右と左に別れる道で、僕は首を傾げた。無駄に……もとい、かなり広いこの総合病院は、未だに僕も道を覚えきれていない。

近くに看護師さんは居ない。道を訊く、という選択肢は無いらしい。

僕は勘で右に進む。

——沢村恭治。さわむらきょうじ 真名の担当医師で、自称・世界一の医者らしい。

世界一とか、日本一とかは正直言い過ぎなんだろうけれど……看護師さんたちの話によると、結構なエリートだという。

“将来の”、と付け足してしまえば日本一、果ては世界一の医者になるのも夢ではないのかもしれない。

「さわむら、きょうじ……ここだ」

ちゃんと確認してから来れば良かった……。数分前の自分に喝を入れたい気分である。

僕は礼儀として、ノックをしようと右腕を上げて……。

「——そんな事、許されるはずがないでしょうっ！」

聞いた事のある男性の声……沢村先生の叫び声が、部屋の中から響いてきた。

「……君なら、そう言うと思っていたよ。しかし、将来の為なのだ、沢村君」

「そうかもしれませんが、それでは真名ちゃんはどのようなのですか！ 将来の為に、真名ちゃんを死なせてしまっても良いとっ！？」

ガタンッ……。

目眩がした。吐き気がした。まるで飲み込んだばかりの食べ物がこの上がって、外界へ出たいとでも主張しているかのような気持ち悪さ。

心臓の激しい鼓動は身体を震わせ、扉に当たってしまった。息をするのも忘れて、僕はその場に立ち尽くす。

今、なんて……？

「……君か」

「……………諏訪、君」

扉が開いて、僕の顔を見つめる2人の男性。見知った顔である沢村先生は居心地が悪そうに顔を歪ませ、髭を携えた初老の男性は溜め息を零していた。

この人は……確か、この病院の院長だった気がする。殆ど会ったことが無いから、酷くうろ覚えだ。

「……どういう、事ですか」

「……聞いていたんだね、諏訪君」

「どういう……事なんですかッ！」

ここが病院だという事も忘れて、僕は声を張り上げた。

「……君ならば、良いか。中に入りなさい」
「……………」

すぐにでも問い詰めたい。そんな想いを噛み殺して、僕は部屋の中に入った。がらがら、という喧しい音と共に扉は閉められ、部屋は密室になる。

沢村先生はまだバツの悪そうに視線を逸らしている。

「一度確認だ。君は諏訪晃。例の少女……有宮真名くんの恋人——そうだね？」

コク、と一度だけ頷く。

「……いずれ分かる事だ。君ならば、先に教えても良いだろう」

院長先生はそう自己完結して、口を開く。

諏訪晃、15歳。

有宮真名、15歳。

有宮滯名、14歳。

僕たちを囲む、ある1つの黎明期。れいめいき

番外編STORY No. 1 黎明期（後書き）

ここで、“諏訪晃”の1つの過去が明らかに。

……明らかになるのが、まさかその場凌ぎの番外編とは（笑）

今更ですが、この小説のキャッチフレーズを！

『遊戯王の二次創作なのに、デュエルが少ない遊戯王！』

って、駄目じゃん↑

感想、評価等お待ちしておりますね！

番外編STORY No. 2 出会い

私は、いつも1人……底の無い闇の中で、私は光を求めてさ迷い歩いていた。

まるで海のように。最初は明るく、希望に満ち溢れた道筋は徐々に暗くなり、やがて絶望へと変わり果ててしまう。

そんな時——私が彼、諏訪晃君に出会ったのは偶然だった……と思う。

私は、疲れていたんだ。外の世界を見る事も出来ず、自由に動く事も出来ない。お父さんやお母さんは私と滯名を残してどこかへ行ってしまったし、その滯名も最近、めっきり会う事が無くなった。私がこの病院に居られるのも、一重に沢村先生のおかげ。だけど、いつまでも迷惑を掛けたくないし。

「私が死んだら……もう、苦しまないのかな」

総合病院の屋上。数個のベンチが立ち並び、幾つかの花壇が花と共に私を見つめている気がした。

ここから落ちたら……死ねる、よね。

願ってはいけない淡い希望。私は自分の手に取り付けられたチューブを外そうと手を伸ばし——。

彼は、来た。

「良い眺めだね」

「っ……」

はっとなつて隣に視線を向けると、そこに居たのは見知らぬ少年だった。いや、少女……だろうか？ どっちとも取れる中世的な容姿に、少し自信が無い。

それ程、彼の容姿は可愛らしかった。私よりも少し高い程度の身長、華奢な身体付き、長い睫毛に綺麗な二重瞼。

男性にしては少し長めかも知れないその髪の毛は、流れる風に揺れている。

彼は掛けていた眼鏡を外すと、微かに微笑みながら町の風景を眺めていた。眼鏡を取ると、さらに女の子に見えてしまうのはどうしてだろうか？

「えっと、僕の家は……反対側か」

僕……ってことは、男の子かな？

内心首を傾げる。もしかしたら女の子で、一人称は「僕」なだけなのかもしれないけど……知り合いなんて皆無に等しい私。友達も居ないのに、私の常識なんて当てにならない。

「僕は諏訪晃。君は？」

「えっ……あ、あの……わたし、ですか……？」

「うん」

にっこりと笑って、彼（男性……ということにしよう）は頷いた。

「わ、私は……あ、有宮真名……です」

余り人と話したことが無い私の言葉は、尻すぼみに小さくなっていく。

それでも気を悪くした様子を見せずに、彼……諏訪さんはそっか、と言う。

「僕さ、ちょっと怪我しちゃって……治療して来いって、友達に言われて来たんだよね」

「怪我……ですか？」

「うん。まあ、大した怪我じゃないから見て貰ってはないけど」

確かに、良く見てみると右手の甲に傷があって、ズボンには小さな穴が幾つか空いていた。

——喧嘩。

そんな一文字が頭に浮かんで、少し身体が竦む。何度かこの病院に來た怖そうな人たちは喧嘩して傷付いた、という会話を聞いたことがあるからだ。

この人も……もしかしたら——……？

「あの子……大丈夫だったかな」

「え……？」

「え？ あ、ううん、なんでもないよ」

今……なんて呟いたんだろう？

諏訪さんの声は風に流されて、私の耳朶までは届かなかった。

「……ねえ、有宮さん」

「は、はい……？」

眼鏡を掛けて、諏訪さんは綺麗な笑みを浮かべる。

私なんかには眩しくて、向けられるには勿体無い程の微笑み——。

「デートしようよ」



僕が病院の屋上へ行くと、1人の少女が居た。

長らく切っていないのか、結構伸びた黒髪。車椅子から腰を上げて
いるから、その長い髪がゆらゆらと揺れて凄く綺麗だと思った。
けれど、彼女の顔は憂いに満ちていて……酷く思い詰めた表情で
風景を眺めている。

嫌な予感が、脳裏に電流を流した。

だからだろうか。僕は彼女に話し掛けた。放って置くことなんて
出来なかった。彼女がどんな心の傷を持っているかは知らないし、
癒せるとも限らない。

それでも、僕は――。

「デートしようよ」

僕の一言は、思った以上に有宮さんを驚かせてしまったらしい。
目を丸くして、凝視するように僕を見つめている。

僕はにっこりと笑って、彼女を車椅子に座らせる。そういえば、
今の時代は車椅子からチューブとかが伸びてるんだなあ……なんて
どうでも良いことを考える。

「え、えっ……?」

「大丈夫だよ。デートって言っても、庭までだから」

そういう問題じゃ……、という有宮さんからの眩きを僕は無視して、エレベーターに乗り込んだ。1階へと向かうボタンを押し、少しの間小さな揺れに身を任せる。

「あ、あの……どうして……………」

「ん？ ん〜と……一目惚れ……かな？」

「ふえっ!？」

勿論、それは恋愛感情って訳じゃないかもしれない。恋なんてした事無いから、僕にはまだ分からない。

けど、一目見て気になったのは確かだ。そういう意味では間違っていない。

有宮さんは顔を紅くして、俯いてしまう。こんな事言われるのは初めての経験かな？

——1階に着くと、僕は真っ直ぐに外へと向かった。

屋上に吹いていた肌寒さと呼ぶ風は無く、髪が流れる事は無かった。

僕は小さく深呼吸して、有宮さんが乗った車椅子を押す。歩くよりも遅いスピードは周りを見るのに最適だ。

「……色んな人が居るね」

木を見上げているお爺さん。その横には車椅子に乗ったお婆さん。身体は不自由だろうに、仲良さそうに話していた。

そこから少し離れた場所では、1人の男性が看護師さんに怒られていた。何かしでかしたのだろうか？

ベンチに座り、1人の女性が静かに本を読んでいる。頭にはニット帽を被っていて、そこからは髪の毛が見えない。

花壇の前を子供3人が走っている。男の子2人に女の子1人。元気に笑ってる……僕たちも元気が貰えそう。

「けど……1人1人、彼らは色んな事を悩んでる。あそこに居るお婆さんは認知症で、いつ夫であるお爺さんの事を忘れちゃうのか怖がってる」

「……………」

「あそこの怒られてる男の人。あの人は数週間前に交通事故に遭って大怪我を負ったんだ。そしてその事故で、両親を一気に失ってしまった」

皆……頑張ってる。

「本を読んでもあの女性は、生まれ付き声を出せないし、耳も聞こえない。たまにここへ定期健診に来てるみたいだよ。昨日、味覚さえ無くなっちゃったらしいからね……………」

「そんな……………」

「あの子達の1人……女の子は、実の両親に虐待を受けてた。男の子2人は双子なんだけど……生命器官が半分ずつに分かれちゃったらしくて、そのまま不自由に生きるか片方を犠牲にしなきゃいけないみたい」

皆……………頑張って、頑張って、生きてるんだ。

「……なんで……そんなに、詳しいんですか……………」

「僕って、結構この病院に来てるからさ。色々聴くんだよね」

……まあ、その殆どが喧嘩だったり、僕みたいな子供でも何か出来ないか来るばかりなんだけど。僕自身は大きな病気を患った事は無い。

「有宮さん。失礼だと思うけど……君の事も少しは聴いてる」
「えっ……？」

庭にある大きな木の下。そこに車椅子を止めた。

「有宮真名……病名はまだ付けられていない。どんな病気かも分からずに、生まれてからずっとこの病院で過ごしてる」

コク、と有宮さんは頷く。

「……ご両親は君と、君の妹さんを残して蒸発……担当の沢村先生のおかげなんだよね」

「……はい。わた、しの……せいで……お父さんも……お母さんも……どこかに行っちゃって……滞名も……もう、私の事なんか……！」

「——だから、死ぬつもりだったの？」

僕は立って、有宮さんは車椅子に座ったまま俯いている。だから表情を見る事は出来ない。

ただ……声は震えていた。泣いているか、若しくは瞳に涙を溜めているんだろう。

有宮さんも、頑張ってるんだ。正体不明の病氣と戦って、いつ訪れるか分からない死の恐怖を押し殺して……。

僕なんかよりも、ずっと強い。

そして……有宮さんは、死にたかった、と小さく零した。

「死んで、楽になりたかった……！ 私が死ねば、沢村先生にも迷惑を掛けなくて済むし、病院側の負担も無くなる……！ 滯名だつて、きつと嬉しいに決まって——」

真名の身体は、少し冷たかった。



抱き締められた。膝立ちになって、諏訪さんは私を優しく抱き締めてくれていた。

とても、温かくて。とても、優しくて。

「っ……」

その柔らかな温もりは、私に涙を誘う。

「……寂しかったんだよね。辛かったんだよね。ただ、誰かに傍に居て欲しいだけなのに……皆、居なくなっちゃったから……」

「わたし、私はっ……！！」

「これからは、僕が居るよ。僕が傍に居て、君を支えてあげる。一緒に泣いて、苦しんで……そしたら、一緒に笑おう？ 一緒に……幸せになろう？」

私は、泣いた。

生まれてから、碌に泣いた事も無かった私は、大声を出して泣いた。

諏訪さんに抱き締められながら、ずっと、ずっと。

——どれくらい経っただろう？ まだそんなに経ってないのか、それとも数時間経ったのか……分からない。

「……落ち着いた？」

「……はい。ありがとうございます」

どう致しまして、と諏訪さんは笑った。

………近い。

抱きしめ合っていて、今はそれを少し解いただけだから……凄く、近い。顔が熱くなる。

「ひうつ……！」

「僕の事は晃、で良いよ。僕も君の事は真名って呼ぶから」

「あ、晃……君？」

身体を離して、私は諏訪さん……晃君の名前を呼ぶ。

身体を離れた時、少し残念だっと思ったのは………秘密。

「うん。宜しくね、真名」

それが、晃君と私、有宮真名の出会い。

番外編STORY No. 2 出会い（後書き）

コメデイ？ 何それ、美味しいの？

ハッハ……私に出来るとも思いかい？ 私がそんな高度なもの

書ける筈がうわ何をするやめ……………。

湊名「全く、駄目駄目さんだね、うちの作者さんは☆ こんな駄目駄目さんが書いてる小説だけど、感想、評価とかお願いだよんっ」

番外編STORY No. 3 仲直り（前書き）

今回は珍しく携帯で執筆した為、少し違和感があるかもしれません。

個人的には違和感タツプリです（笑）

番外編STORY No. 3 仲直り

「ねえ、良いの？ お姉さんのお見舞い行かなくて」

「……良いのっ！ それより、着替えてから行くから先に行ってて？」

「……うん、分かった」

——私は、お姉ちゃんが嫌いだった。

「んー、何着て行こうかなー……今日は久し振りのお泊り会だし、派手にしようかなっ！」

——お姉ちゃんの所為で、お父さんもお母さんも……。

「良しっ！ これに決めたっ！」

——私はこの広い家で、一人ぼっち。



お父さんとお母さんは、いつも喧嘩していた。

幼い私は、両親の怒鳴り声にいつもビクビクして眠っていた。“ビョーキ”で、その怒鳴り声を聞かなくて済む姉を羨ましい、といったも思っていた。

そして、私が中学に上がる直前……お父さんとお母さんは、私た

ちの前から居なくなってしまった。

——お姉ちゃんの所為だ。

それから私は、お姉ちゃんの事が嫌いになった。

「あゝ……結構時間経っちゃったな。早く行こうっと！」

そう言って、私は友達の家へと走り出した。
その時。

どんつ、と。誰かに当たって、私は尻餅を搗ういてしまった。

「いってエな……」

「す、スイマセン！ ちょっと急いでて……その、」

「ヘエ……結構カワイイじゃん」

「なあ、ちよつとアツチで話さねー？」

そう言って1人の男の人が指差したのは、ひとけ人気の無さそうな路地裏。

ぞつとした。嫌な予感が脳裏を過ぎって、私はすぐにでもこの場から離れようと立ち上がる。

「ご、ごめんなさい……急いでて、」

「ぶつかって来といてそりゃねーだろ？」

腕を掴まれる。2人の男の人が、ニヤニヤとした笑みを浮かべていた。

嫌だ。

嫌だ。

誰か、助けて――！

「その子、謝ってるじゃん。許してあげれば？」

掴まれていた私の腕と男の人の手を外し、間に入りながら“その人”は現れた。

女の人みtainな柔らかくさらさらな髪。妙に似合っている眼鏡。幾分小さい身長に、結構華奢な身体。

正直、少し頼りなさげだったけれど……今の私にとっては、救世主のように見えた……………。

「んだよ？　ぶつかって来たのはソイツだろ？　テメエにや関係ねーよ」

「うーん……確かに関係無いかもしれないけど、この子、怯えてたし」

「チッ……ウゼエな、コイツ」

いつの間にか、注目が集まって来てる。

「じゃあ、テメエが落とし前付けてくれるっつーのか？　ああッ！？」

「……それで気が済むなら、どうぞご自由に」

そう言って、その人は男の人2人組に連れられて路地裏へ入っていく。

え……どうということ？　え？

暫し呆然とする。

と、そこへ焦った様子で誰かを探しているっぽい男の人が走って

くる。

「くそ……アイツの事だし、また厄介事抱えてるんじゃないか……？
有魅ゆうみとの電話が長引いちまった——なあ」

「え……」

私？

「えと……このくらいの身長で、眼鏡掛けてて……後、見ただけじゃ男か女か分からない奴見なかったか？」

「それなら……多分、」

あの人、だよな？

路地裏に指差すと、サンキュ、と言って男の人が走っていく。

駄目、まだ頭が混乱してる……。

もしかして……あの眼鏡の人、私を助けてくれた……？

「まったく……何かあったら俺を呼べって言っただろ？」

「ゴメン、ゴメン……あたた」

私はその場を動けずに居ると、暫くしてその2人が路地裏から顔を出した。

眼鏡の人は、ボロボロの姿で。

ズボンが所々穴が開いてしまってる。手の甲に傷が付いて、血をハンカチで止めていた。

——私の所為だ……。

「っ!!」

私は、その場から逃げ出した。
何か言われるんじゃないかって、怖くて、怖くて。

もしかしたら……お姉ちゃんも、怖いのかなって、走りながら思った。

そして、私は始めてお姉ちゃんの気持ちになってみて。

やっぱり、恐かった。



空は晴れているのに、私の心は曇り。変な皮肉を言ってしまうたくなるくらいに、私は沈んでいた。

「……お姉ちゃん」

お姉ちゃんの居る病院に、私は来ていた。

色んな人が居る……。中庭を通っていると、その事に気付いた。

老若男女問わず、色んな人。人。人。きっとその1人1人が、心の内に悩みや恐怖を持っている。

そう思うと、今まで私がお姉ちゃんに感じていた事なんて、ちっぽけな事なのかな、って感じてしまう。

「……あ」

お姉ちゃんだ。

車椅子に座って、肩を震わせている。隣には――。

（なんで……あの人が……？）

さっき、私を助けてくれた眼鏡の人が居た。

脳内に湧き上がる疑問を押し殺して、私はお姉ちゃん達に気付かれないように近付いた。

近くにあった木に寄りかかって、息を潜めた。

……なんでこんな事してるんだろう？

「死んで、楽になりたかった……！ 私が死ねば、沢村先生にも迷惑を掛けなくて済むし、病院側の負担も無くなる……！ 澤名だつて、きつと嬉しいに決まって――」

ちく、と……心臓に針が刺さったみたいに、痛くなった。

「……寂しかったんだよね。辛かったんだよね。ただ、誰かに傍に居て欲しいだけなのに……皆、居なくなっちゃったから……」

「わたし、私はっ……！」

「これからは、僕が居るよ。僕が傍に居て、君を支えてあげる。一緒に泣いて、苦しんで……そしたら、一緒に笑おう？ 一緒に……幸せになろう？」

ああ、やっぱり。

お姉ちゃんも、辛かったんだ……。

私だけ辛いなんて勘違いして、勝手にお姉ちゃんを嫌って……。

お姉ちゃんが、泣いてる。
私も、声を殺して泣いた。

暫くして、お姉ちゃんは勿論、私も落ち着いて少し。

「うん。宜しくね、真名」

……行こう。

お姉ちゃんに謝りたかったけど……こんなに涙の痕が付いてる姿は、見せたくない――。

「行っちゃうの、滯名ちゃん？」

「っ……!？」

き、気付かれてた……!？

振り向くと、眼鏡のお兄さん（幼く見えるけど）が立っていた。

「れ、滯名……!？」

「…………お姉ちゃん」

私の背後に廻って、背中を押してくれる。

なんで気付いたのか、とか……なんで私の名前を知ってるのか、とか……色々訊きたい事はあるけど。

「……ゴメンっ！」

「え……?」

「私、いつも自分の事ばかり考えてた。お姉ちゃんの病気の事とか、色々心配する事はあったはずなのに……………いっつも、自分の事しか頭に無くて……」

驚いたようにお姉ちゃんは眼を丸くしていたけど、やがて凄く大人っぽく微笑むと、お姉ちゃんは私を引き寄せて、抱き締めてくれた。

温かい。

「私も……姉らしい事してあげられなくて、ごめんね。ずっと1人にさせちゃって……ごめんね、濤名」

「おねえちゃん………」

私たちは、暫く抱き締めあっていた。



取り敢えずは一件落着、かな。

僕は抱き締めあう姉妹に軽く微笑むと、その場から離れた。病院の敷地から出ようと歩を進めていると、僕の視界に入る1人の男性が居た。僕が信頼する医師だ。

「こんにちわ、沢村先生」

「うん、こんにちわ。ところで、良く傍に濤名ちゃんが居るって分かったね？」

ああ、その事か。

「声が聞こえましたから。押し殺しても、結構聞こえるものですよ。」

女性の泣き声って」

「成る程ね……じゃあ、もう1つ。彼女が有宮滯名って分かった理由は？」

「そんなの簡単です。あの状況で僕たちを盗み見して、且つ涙を流してくれるなんて、ご両親が滯名ちゃんだけでしょう？」

「……それもそうだね」

沢村先生は、全体を見てる。

真名や滯名ちゃんの事は勿論、病院内に居る殆どの患者さん……それに、良くこの病院に足を踏み入れる僕のものも。

こう言ったら父さんに失礼だけど、正直、父さんよりも沢村先生の方が尊敬してるんだよね、僕。

「……やっぱり、僕の思った通りだったね」

沢村先生は、真っ直ぐに真名と滯名ちゃんを見つめている。未だに抱き締めあっているところを見ると、感動の再会はまだ続きそうだね。

「僕よりも、晃君の方が彼女たちの事を分かってあげられる」

「そんな……買い被り過ぎですよ」

「いんや。事実、彼女たちはああやって和解できたじゃないか」

……そう言われると、否定出来ないなあ。

「これからも、あの2人を支えてあげて欲しいんだ」

「これからも……ですか？」

「そう」

沢村先生は頷く。

「彼女たちはもう、両親が居ない。出来るだけ手を尽くすけど、真名ちゃんの身体もどれだけ持つか分からない……だから晃君には、」

「あの2人を支えて欲しい、って訳ですね」

「——そうだよ」

やれやれ、と僕は肩を竦める。

「沢村先生に頼まれちゃ、断れませんよ。それに——」
「それに？」

——真名には、惚れた弱みがあるからね。

口には出さずに、僕は口元を笑みで歪めた。

番外編STORY No. 3 仲直り（後書き）

新しい遊戯王の二次創作も連載を始めたので、そちらの方と合わせて、感想や評価、お待ちしておりますっ！

番外編く桜VSファイジーく(前書き)

はい、今回は番外編の番外編ですっ!!
(何)

番外編く桜VSフィジーく

作者「わくわく、番外編だく」

フィジー「どんどんぱふぱふ」

リズ「それは良いんだが……何故こんな中途半端なんだ？」

作者「その理由は3つ。1つは、番外編STORYのキリが良いから。もう1つは、流石に遊戯王の二次創作（以降FF）なんだし、デュエル書かないとなー、と」

桜「それで、もう1つは？」

作者「新しい遊戯王のFFを連載し始めたから、宣伝しようかな、と」

ローラ「それが主な目的ですよねっ!？」

作者「……………（凶星突かれて視線逸らしてる）」

晃「それはともかくとして。この番外編では、ヒロイン勢で誰が一番強いのか、決めるみたいだよ？」

桜「お兄ちゃん! ……あれ？」

作者「本編では未だに再会出来ていない晃とヒロインたち。番外編とは言え、なんか会わせちゃイケナイな、ということでこの晃はプログラムであり、偽者です」

ファイジー「むう……意地悪」

作者「こっちだって必死なのさ！　新しい遊戯王のFF書いて、時間が少ないんだからっ！」

リズ「自業自得だな」

ローラ「見切り発車なんてするからです」

ファイジー「……………はぁ」

桜「お兄ちゃん……………ぐすん」

作者「ロリ担当の2人が地味にキツイっ！？　そ、それはともかく、この番外編ではまず、ロリ担当の2人からデュエルして貰いましょう！」

ローラ「その前に質問良いですか？」

作者「どぞどぞ」

ローラ「この小説だと、色んなオリジナルカードを使っていますけど……この番外編でデュエルする際のデッキはどの時点での構築なんですか？」

作者「取り敢えず、精霊界に行く前です。ですので、フィーは《スクラップ・バード》などを使っていませんし、桜は殆どシンクロしません」

リズ「成る程……メフィリアンノ、だったか。彼女に出会う前、という訳だな？」

作者「はい、そういう事ですね。では、どうぞッ！」

◇ ◇ ◇

「デュエルっ！」

桜LP8000.

フィジーLP8000.

先攻はフィジー。

「……ドロ……むう」

手札を確認して、静かに唇を尖らせる。どうやらそこまで良い手札では無かったらしい。

「……《スクラップ・シャーク》召喚」

屑鉄で出来た鯨がフィジーの場に現れる。

「カードを1枚伏せる………エンド」

「行くよー！ わたしのターン、ドロっ！」

元気にドロースる桜。よし、と活き込んで、まずはと1枚を抜き取る。

「《サイクロン》！ その伏せカードを破壊っ！」

「《呪われた棺》……」

「あのカードはセットされた状態で破壊されたら効果が発動するカードだね。相手は自分フィールド上のモンスターを破壊するか、手札をランダムに1枚捨てるかを選択するんだ。ただ、今桜の場にモンスターは居ないから、自動的に手札を捨てる効果になる」

ホログラムの晃が解説役である。お疲れ様。

むう、と唸る。ディスクがランダムに選んだカードは、

「あぁっ！ 《仮面竜》が！」

リクルーターだった。

「……《スクラップ・シャーク》の効果……《サイクロン》の効果処理が終わった為、自壊………デッキから《スクラップ・サーチャー》を墓地へ」

「うう……計算狂ったよ……わたしはモンスターをセットしてターンエンド」

「わたし……ドロース。《スクラップ・エリア》発動。デッキからスクラップのチューナー………《スクラップ・ビースト》を手札に」

フィジーの手札は5枚。序盤の流れはフィジーが持って行ったらしい。

「《スクラップ・ビースト》召喚……バトル。ビーストでセットモ

ンスターに攻撃……」

「モンスターは《ガード・オブ・フレムベル》！ 守備力は2000だよ！」

「っ……」

フィジーLP8000↓7600.

「……ターンエンド」

「わたしのターン、ドロっ！ うう……仕方ないよね。わたしはフィールドに居る《ガード・オブ・フレムベル》を除外して、《レッドアイズ・ダークネス・メタルドラゴン》を特殊召喚！ 効果で墓地の《仮面竜》を特殊召喚して、バトルフェイズ！」

《レッドアイズ・ダークネス・メタルドラゴン》……通称レダメと《仮面竜》はどちらも攻撃表示だ。

「レダメで《スクラップ・ビースト》に攻撃っ！」
「っ……！」

フィジーLP7600↓6400.

「続いて、《仮面竜》でダイレクトアタック！」

フィジーLP6400↓5000.

一気にライフ差が開く。

少し離れた場所で見ているリズがほお、と息を吐いた。

「わたしはエンドだよっ！」

桜の手札は3枚。残念ながら、その手札にモンスターは居らず、伏せるようなカードも無いらしい。

桜は元々、ブラフなどを伏せるタイプでもない。

——尤も、それはフィジーやローラ、リズにも言えることだが。

「良く考えたら、この小説内のメインキャラでブラフを伏せるのは僕くらいのものだよね」

「ううん。私もやるよ?」

「あ、そうなんだ」

……………解説の晃と招かれざる客（失礼）の朔夜が会話しているが、フィジーは気にせずターンを進めた。

「……ドローフェイズ、ドロー……………。……リクルート効果なんて……使わせない。わたしは《簡易融合》発動。1000ライフをコストに……《音楽家の帝王》を特殊」

フィジーLP5000↓4000.

カップの中から、ギターを持った派手な男性が顔を出す。弦を歪ませて、音を響かせながら華麗に登場。

……カップから出てくる音楽家とは、随分とシニールである。

「……《スクラップ・キマイラ》召喚。効果で墓地の《スクラップ・ビースト》特殊」

ビーストが守備表示で特殊召喚された。

「……こ、これは……………!?!?」

「LV5、《音楽家の帝王》にLV4の《スクラップ・ビースト》をチューニング……」

人間と屑鉄の獣が交わる。ギターが分解された。そのギターを見て涙ぐむ音楽家なんて無視である。

……流れた涙と共に、彼は星となった。合掌。

「募る鉄屑が……双龍となりて復活せん……。その身に宿る2つの魂よ……荒神の如くその場を荒らせ……！ シンクロ召喚……轟け、《スクラップ・ツイン・ドラゴン》……！」

「き、来たー……」

様々な鉄屑が重なり、1匹の龍へ。2つの頭は、相手のフィールドを狙い撃つ。

「効果を発動……対象……わたしの場の《スクラップ・キマイラ》……レダメと《仮面竜》……」

「うう……邪魔できない」

バウンスされるドラゴン2体。

「その時……墓地の《スクラップ・サーチャー》の効果……キマイラが破壊されたから、特殊召喚」

守備表示だ。

「バトル。スクラップ・ツインでダイレクト」

「きゃああっ！」

桜LP8000↓5000.

2人のライフが近付いた。

「カードを1枚伏せる……ターン終了」

作者「あ、言い忘れてたことがあるんだけど」

「わっ？ どこから現れたんですかっ!？」

作者「気にしない気にしない。それはともかくね？ このヒロイン勢のデュエルで一番強かった人には、晃との番外編……まあご褒美があるから」

「……それ、本当だね？ 本当なんだねっ？」

作者「さ、桜が怖い……ほ、本当だよ。本編とは全くと言って良いほど関連無いけど……番外編とは言え、好感度は上がるコト必至だね」

キラーン、と。

皆の眼が光った気がした。

特に、只今デュエル中のロリ2人が。少なくとも、ホログラムの晃が身震いするくらいには。

「ふ、ふふ……わたしのタアアアアン、ドロオオーっ!！」

……気合いの入りが違う。最早捕食者、狩人の瞳である。

「《仮面竜》召喚！ 除外してレダメ特殊召喚！ 効果で手札の《青氷の白夜龍》特殊召喚っ!！」

ブルーフェイス・ホワイトナイトドラゴン

攻撃力2800と3000のドラゴンが並ぶ。

「バトルッ！ ブルーアイスでスクラップ・ツインにアタック！」
「……相打ち」

攻撃力は両方とも3000だ。だが、

「スクラップ・ツインの効果……相手によって破壊されたから……
墓地の《スクラップ・ビースト》を特殊……守備」

「……………忘れてた」

さっきのテンションはどこへやら、桜の肩はがっくりと落とされた。

「う、うう……」

「さて、アキちゃん。桜ちゃんはどっちを攻撃すると思う？」

「うーん……どうだろう。僕も迷っちゃうかな。ビーストはチューナーだから、残しておくに怖いし……サーチャーを残すと、キマイラでまたスクラップ・ツインが出てきちゃう」

「そうだね。まあ、どっちにしても……」

「うん。《スクラップ・ゴーレム》1枚で巻き返されちゃう状況かな」

「れ、レダメで《スクラップ・ビースト》を攻撃っ！」

特に邪魔も無く、獣は破壊された。

「ターンエンドだよっ！」

「……ドロー」

フィジーの手札は3枚。引いたカードを見て、むう、と呟いた。

「……モンスターセット……エンド」

「よ、良かったー……わたしのターン、ドロー！」

「さて、どう見る？ アキちゃん」

「……フィー、結構事故ってるんじゃないかな。スクラップって結構バック……魔法、罠カードで戦うデッキなのに」

「うん。桜ちゃんも、主軸のキングドラグーンを出せてないし……」

「レダメの効果発動！ 墓地のブルーアイスを再び特殊召喚して、バトルフェイズに入るよ！ レダメで《スクラップ・サーチャー》に攻撃！」

次に、ブルーアイスが攻撃態勢を取る。

「《青氷の白夜龍》でセットモンスターに攻撃！」

「……《スクラップ・ゴブリン》……戦闘では破壊されない」

う、と桜の勢いが詰まったように言葉が止まる。

ゴブリンは守備表示で攻撃されたバトルフェイズ終了時に破壊される。が、セットされた状態で攻撃されたので破壊されない。

しかし、厄介なのは確かだ。

ゴブリンも“スクラップ”モンスターでありチューナー。自信の効果で破壊された扱いになり、墓地のスクラップ……つまりはキマイラを回収出来るのだ。

「……メイン2。カードをセットしてエンド」

「……ドロー」

フィジーの苦い顔は変わらない。

そのターンは、カードを1枚伏せるだけでターンが終了した。

「わたしのターン、ドロー！ ……やっと来た！ レダメの効果発動！ 手札の《神竜 ラグナロク》を守備表示で特殊召喚！」

しかし、相手モンスターは守備表示の《スクラップ・ゴブリン》。

「………ええい！ 洗司郎が言ってた！ 攻めなきゃ負けるって！ バトル！ レダメでゴブリンに攻撃！ その時、リバーズカードオーブン！ 《竜の逆鱗》！ わたしのドラゴンたちは皆、貫通効果を得るよ！」

「っ……！ チェーンして、《サイクロン》……！ ……《竜の逆鱗》を破壊」

「う……！」

貫通することは叶わず、ゴブリンはレダメの攻撃を耐え切った。

「《サイクロン》だったかー……仕方ないね。わたしはこのままバトルフェイズを終わるね」

「……ゴブリン自壊……効果でキマイラを回収」

「それじゃ、エンドだよ」

「……ドロー……！」

変わらずにフィジーの手札は3枚。しかし、フィジーの眼には光が宿っていた。

「アッキーとのデート権……わたしが貰う……！」

「デートとは言っていないよっ!？」

「《スクラップ・キマイラ》召喚……! 効果で《スクラップ・ビースト》を特殊……! そしてそのままシンクロ召喚……!」

L Vの合計は8。

「眠れる魂が動き出す……犠牲を糧にただ、破滅を願う……! 鉄屑の演舞を眺め、傍観するが良い……躍動せよ、《スクラップ・ドラゴン》ッ……!」

スクラップデッキの主役。屑鉄の龍は、咆哮を上げる。

「カードを伏せる……スクドラの効果発動。わたしのセットカード……《青氷の白夜龍》を破壊……」

《青氷の白夜龍》は、対象になった魔法、罠カードの効果を無効にする効果がある。しかし、それはモンスター効果に対応していない。

「わたしが破壊したのは《荒野の大竜巻》。セット状態のこのカードが破壊されたから……レダメを破壊する」

「わわっ?」

荒れた竜巻がレダメを巻き込み、破壊する。

これで桜の場には守備表示のラグナロクだけだ。

「バトル……《スクラップ・ドラゴン》でラグナロクに攻撃する」
「あぁっ」

これで場もがら空き。手札はお互いに1枚だ。

「ターンエンド……」

「まだ……！ ドローっ！ ……モンスターをセットして、エンドだよ」

「ドロー……カードセット……スクドラ効果。セットカードと……桜の場のセットモンスターを破壊」

セットカードは《簡易融合》。セットモンスターは《融合呪印生物一闇》。

「《カード・ガンナー》召喚……効果で3枚落として、バトルフェイズ」

《カード・ガンナー》ATK400↓1900.

「……はあ、負けちゃったか」

「――《カード・ガンナー》でダイレクトアタック」

桜LP4000↓2100.

「――《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック」

桜LP2100↓0.

◇
◇
◇

作者「それじゃ、勝者はフィーみたいだね」

桜「うう……」

作者「唸らない唸らない。それじゃ、フィーは晃とのデート権に一歩近付いたわけだね」

晃「え、デート確定？　ねえ、確定なの？」

フィー「勿論。夜の営みまで」

桜「それは駄目え！」

リズ「……フィー。それは、もしも私やローラに負けた時、自分の首を絞めないか？」

フィー「……しまった」

ローラ「気付いて無かったですか！？」

朔夜「皆が羨ましいよ。出来れば私も参加して、アキちゃんとのデート権をゲットしたかったな」

ヒロイン勢『貴方は洒落にならないから駄目』

晃「凄……息ピツタシだ」

朔夜「ふふ、残念。まあ良いよ。今の私は、本編で晃と2人きりだし」

桜「う……恨めしい……もとい、羨ましい。ううん、両方？」

朔夜「勿論同室」

フィジー「……………敵」

朔夜「一応は同性だし、同じお風呂もアリかな」

ローラ「い、一緒にお風呂……………はう」

朔夜「私は恋人居るけれど…………アキちゃんだけは特別、良いかも」

リズ「く……………なんという強敵」

晃「……………ねえ、当事者って僕だよね？」

作者「……………うん。多分」

晃「……………しかも、まだ朔夜と皆って会ってないよね？」

作者「……………うん。多分」

晃「……………僕、どうなるの？」

晃「……………僕、どうなるの？」

作者「色んな、カップリングが出来ると思うよ……晃×朔夜とか、晃×洸司郎とか」

晃「……………」

作者「世界は、残酷だね……」

晃「君って残酷だねっ!？」

真名「と、とにかく……えと、『遊戯王 僕らの進んで行く道』と……」

濤名「もう片方の、『遊戯王 LEGENDS 伝説の名の元』を宜しくねっ☆」

真名「よ、宜しくおねがいしまちゅっ……………あうう」

晃「番外編だからって真名たちまで出して良いの!？ しかも結局宣伝有りっ!？」

ちゃん、ちゃん。

番外編く桜VSフィジーく（後書き）

勝者はフィジーでした。

恐らくこれから、番外編STORYが3話続く毎にデュエルが開始されます。多分。

こちらはプロットを作っているので、凄く楽です（笑）

作っていないLEGENDSとは違う……（汗）

感想、評価等お待ちしております！！

番外編STORY No. 4 遊戯王

——晃君が「退院したくない？」と私に言って来て2日が経った。

今日……晃君は用事があるとかで来れないらしい、というのを話してくれたのは晃君の親友で、榊洸司郎君だった。

日曜日という休日の今日……晃君が来ないのは凄く残念だけど……その分、榊君と晃君の妹である桜ちゃん、そして滯名が来てくれて……私は心が少し弾むを感じた。

「もうすぐバレンタインデーだね、お姉ちゃんっ！」

……うん。

私は頷きながら、少し緊張していた。

「実はお姉ちゃん、アキ兄の為にチョコを作る練習してるんだよね」
「？」

「れ、滯名っ!？」

「あ、そうなんだ。わたしは作れないしなー」

桜ちゃんがはあ、と深い溜め息を零していた。

私が入院しているこの総合病院は、1階にキッチンがある。料理好きの看護師さんが造って貰ったみたいだけど、今の私は凄く感謝していた。

「滯名ちゃんはどうするの？」

「私? んー、私も作れないから、市販になっちゃうかな」
「はあー、こういう時にお兄ちゃんの凄さが分かるよねえ」

榊君の料理が上手い、というのは晃君から聞いているけれど、その当の晃君も結構料理が上手い。近くに榊君が居るから謙虚なだけだと思う。

桜ちゃんの話だと、“お菓子作り”というだけなら榊君にも負けていない、らしい。

「そういえば晃……今年はどうすんだろうな」

今まで黙っていた榊君が、小さく呟いた。

「え？ 何が？」

「え？ あーいや……晃さ、昔からバレンタインになると俺にチョコくれるんだよ。試しに作ったからあげるってな」

「「「えっ!?!」」」

あ、晃君……そんな……。

凄く可愛いらしい晃君が、凄く格好良い榊君にチョコを渡す。何故か……笑い飛ばす事が出来ません……。

それは濤名と桜ちゃんもそうなのか、仲良く固まっていた。

「そっか……道理で前日、お兄ちゃんが張り切ってると思った……」

「け、けど貰ってるのは俺だけじゃないぜ？ 確かに一番気合い入ってそうだったけど、クラスの奴等皆貰ってるし」

「アキ兄……モテるでしょ？」

「……まあ、な」

何故か遠い目をする榊君。

……何か嫌な予感がする。これ以上追求するのは止めておこう、

かな……。

「……お兄ちゃんのことだし、わたしたちにも作ってくれそうだなあ……」

「逆チョコって奴？」

「そうそう。お兄ちゃん、お菓子作りに嵌り出してから毎年作ってくれるもん」

そうなんだ……少し、羨ましいな……。

「……それが凄くレベル高くて……女装させた時も可愛いし……華奢で色白で……なんか、女としてのプライドズタボロ、みたいなの？」

「女装………じゅるり」

「滯名……涎」

「はっ!？」

涎を垂らす妹に溜め息を零しかけるけれど、この場に誰も居なかったら私も妄想して、涎くらいは垂らしていそうだった。

晃君の女装……女の子の格好………。

「お姉ちゃん、鼻血鼻血」

「っ……!？」

ああ……は、恥ずかしい………。

近くに置いてあったティッシュを鼻に当てながら、私は顔の体温が上がるのを感じた。

「正直、お兄ちゃんの女装はレベル高いよ! こう言ったら失礼かもだけど……その、わたしや滯名ちゃん、真名さんよりももしかしたら……」

う、益々見たい……。

「その、写真とか撮って来て欲しいなあ、なんて……」
「えっ？」

う……やっぱり駄目かな？

望み薄で呟くも、桜ちゃんは何変な事言ってるの？ という感じで首を傾げた。

「当たり前だろ……流石に、晃もことわ——」

「ここでやって貰うんじゃないの？」

「桜っ!？」

こ、ここで………!!

なんかもう面白いくらいにティッシュが真っ赤に染まったので、それをゴミ箱に放り込んで数枚のティッシュを取り出した。

再び鼻を押さえる。

「ぜ、是非ここで……!」

「お姉ちゃん、なんか必死だね。分かるけど」

晃君の女装晃君の女装晃君の女装………。

ああ……頭がクラクラする。まるで麻薬のように私の心を侵食した。

「晃……ドンマイ」

「え？ 洗司郎もする？」

「しねえよっ!」



憎たらしい程に差し込む太陽の日差し。涼しい筈の風は妙に生暖かく、僕の体温を上昇させていく。

まだ2月だというのに、なんだろう、この暑さは。数日前までは雪も降っていたというのに、どんな異常気象だ、と愚痴を零したくなる。

僕は朝早くから家を出て、今は僕や真名のいる場所から数箇所隣の町まで来ていた。

「え、と……沢村先生の話だと………」

地図なんて無い。沢村先生が洩々、と言った感じで伝えてくれた住所を何度も確認しながら、僕は見知らぬ町を歩く。

額に浮かぶ汗を拭い、バッグを背負い直す。汗でずれて来た眼鏡を掛け直して、僕は一度大きく深呼吸した。

——もう少しだ。

いつも着ているようなレディースの服では無く、僕が着ているのは唯一持っているメンズの私服だ。

地味な色で揃え、髪の毛もワックスで整えた。ハードスプレーも使ったから、触るとカチカチである。

早朝だというのに仕事へ行く直前だった父さんと母さんが僕の姿を見て言った言葉が、「似合わない」なんだから……失礼だよね。自覚してるけど。

なんて、考えて。いつの間にか、僕は目的地の前に来ていた。

小さな家だった。古ぼけた壁は所々滲んでいて、扉も古めの引き戸だ。開くと、ガラガラと鳴るタイプ。

家の殆どが木造……昭和に建てられた家だろうか。

尤も、今の僕にそんな事は関係ない。決意を新たに、向かうだけだ。

「――行こう」

その玄関の表札には、綺麗に整った文字で“有宮”、と記されていた。



「それじゃ、キングドラグーンで直接攻撃。わたしの勝ちだね」

「うう……もう一回！」

「良いよ？　どんどん掛かって来なさい！」

2人とも……病院内は静かにね……。

滯名と桜ちゃんが遊戯王デュエルモンスターズをやっている。元々物覚えが早い滯名は既に桜ちゃんと戦ってる。

一方の私は、ルールブックを読みながら榊君に教えて貰っている状態だ。

欲を言えば、本当は晃君に教えて貰いたかったんだけど……滯名と桜ちゃんが、「アキ兄（お兄ちゃん）を驚かせる」、と意気投合してしまった為、私も巻き添えを喰らってしまったんだ。

それにしても。

「チェーン……スペルスピード……？ ゆ、優先権？」

もう何がなんだか……。

榊君はゆっくり憶えれば良い、って言うてくれたけど……漣名も私と同じ時に教えて貰ったのになあ……。

それに、榊君の話だと、榊君自身は勿論晃君もすぐに憶える事が出来たとか。

桜ちゃんは私と同じで苦労したみたい。ただ、それが普通なのだから。

それから数十分。榊君の教え方が上手いのか、ある程度は憶える事が出来た私。

榊君が晃君から借りて貰ったデッキを使って、私は漣名とデュエルする事に。

ちなみに、漣名が使っていたデッキも晃君のデッキだ。

「それじゃあ、えと……私の先攻、だね。ドロー」

えと……さっき教えて貰った廻し方だと……。

「て、《テラ・フォーミング》発動……デッキから、《魔法都市エンディミオン》を持ってきて、発動するね」

「エンディミオン……？ 効果見て良いかな？」

「う、うん」

確か効果は、お互いに魔法を使う度に魔力カウンターを乗せて、破壊される場合魔力カウンター1つで破壊を免れる効果。

後、魔力カウンターを使うカードの効果はこのカードに乗ってるカウンターを代わりとして取り除く事が出来る、だったかな……？

「うん、良いよ♪」

「えと、じゃあ……《魔力掌握》。このカードの効果でエンディミオンに魔力カウンターを1つ乗せて、」

榊君が自分で持ってきたサイコロを乗せてくれる。1の目だ。

「デッキから《魔力掌握》を持ってくるね」

このターン、《魔力掌握》は使えないから、連打は出来ない……。

「後、効果が解決した時に、エンディミオンに魔力カウンターが乗るな」

2の目。

「み、《見習い魔術師》召喚……！ このカードが召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、魔力カウンターを乗せられる……」

3の目。

「と、罠カードを1枚伏せてターン終了だよ」
トラップ

「真名さん、罠って言っちゃ駄目だよ」

「あっ……」

つ、つい……。

よおし、と活き込んだ湊名は勢い良くカードをドロースする。

「私は《太陽の神官》を特殊召喚するね！ このカードは相手の場にモンスターが居て、私の場にモンスターが居ない場合特殊召喚出来るんだよ！」

な、成る程……口で説明されてちよつと混乱しそうになったけど、なんとか理解する。

「それじゃ、私は《赤蟻アスカトル》召喚！ LV8でシンクロ！
《太陽龍インティ》をシンクロ召喚♪」

こ、攻撃力3000……！

「カード……を伏せるのは後の方が良いんだっけ？ それじゃバトルフェイズ！ インティで《見習い魔術師》を攻撃！」

えと、《見習い魔術師》は400の攻撃力だから……2600ダメージ……。

隣で桜ちゃんが計算してくれてる。これで私のライフポイントは5400だね。

「《見習い魔術師》が戦闘破壊された時、デッキから……えと……み、《見習い魔術師》をセット」

「あれ、これって言わなきゃいけないの？」

「ああ。《見習い魔術師》のセット効果は公開情報だからな」

隣で桜ちゃんと榊君が話してる。

ビックリしたよ……失敗しちゃったかと思った。

「メイン2！ カードを2枚伏せて、ターン終了だよ」

「わ、私のターン……ドロー。《見習い魔術師》を反転召喚して、

効果で魔力カウンターを乗せるね」

4個目だ。

「う、うーん……《見習い魔術師》をリリース？　して、マジカル魔法の操り人形・マリオネット》をアドバンス召喚」

榊君曰く、晃君のお気に入りカードの1枚らしい。

「そのカードは……？」

「このカードもお互いに魔法を使う度に魔力カウンターが乗って、その数×200ポイント攻撃力が上がるんだよ」

「そ、それと……魔力カウンターを2つ取り除いて、モンスターを1体破壊できるんだ」

「う……それって、エンディミオンで代用出来る？」

勿論、という意味を込めて私は首肯する。

「じゃ、じゃあ《月の書》！　《魔法の操り人形》は裏守備表示ねっ！」

「あう……それじゃあ《魔力掌握》でエンディミオンに魔力カウンターを乗せて、デッキから3枚目を持ってくるよ」

「あ、後《月の書》の時の魔力カウンター、置き忘れてるよ」

あ、そっか……。

これで合計7個。モンスターのエンディミオンは出せる数だけけれど、残念ながら手札にも墓地にも存在しない。

伏せカードも《マジシャンズ・サークル》だよ……。

「えと、コレでターンエンド……かな」

「ふっふー。私のターン、ドロー！ えっと、確かアキ兄の箱の中に……あった、あった」

湊名は1枚のカードの効果を念入りに見て、うん！ と大きく頷いた。

「えと、まずは墓地の《太陽の神官》を除外して《ソウル・コンヴェイ霊魂の護送船》を特殊召喚！ それで伏せから《リミット・リバーズ》！ 《赤蟻のアスカトル》を特殊召喚するね！」

合計レベルは……8？

「再び8でシンクロ！ 私は《スクラップ・ドラゴン》をシンクロ召喚するね！」

《スクラップ・ドラゴン》……？

私は少し拝借して、効果を確認する。

えと……つまり、自分のカードと相手のカードを1枚ずつ破壊するんだよね？

「効果発動！ 私の場の残った《リミット・リバーズ》と……」
「え……の、残るんだ？」

「《リミット・リバーズ》はモンスターが“破壊”された時、自身も破壊するカード。シンクロに使われたりした場合は“破壊”じゃないから、対象が居ないまま場に残るんだ」

成る程……難しいなあ。

「気を取り直して、私の場に残った《リミット・リバーズ》とお姉ちゃんの場にいるセットモンスターを破壊するね」

あ……《魔法の操り人形》が……。

「バトル！ 《スクラップ・ドラゴン》でダイレクトアタック！」
「あ……」

私の残りライフは……2600……。

「最後！ インティでダイレクトアタックだよん♪」
「うう……負けちゃった……」

遊戯王って、難しいなあ……。
これで色んな大会の上位に行ってるらしい晃君と榊君には、尊敬の念を抱いてしまう。

少なくとも、私には無理そう……。

「お姉ちゃん！」

「え？」

「一緒に頑張って、アキ兄を驚かそうね☆」

にっこり笑う滯名。

私はそれに同意を込めて頷く——直前に、私はあることを思い出して溜め息を零してしまう。

「……私はその前に……チョコ作り、頑張らないと……」
「……うん、応援してる」

私は作る気ゼロ、と暗に言って来た妹に、私は苦笑で答えたのだ。
った。

番外編STORY No. 4 遊戯王（後書き）

ま、間に合ったー……。

これを書き終えたのは投稿日の昼。ギリギリでした（汗）

いやー、アニメばかり見ていると駄目ですね。小説の事は忘れて見入ってしまったています（苦笑）

それはともかく……題名を考えるのが大変です。既に気付いてしまっている方もいるかもしれませんが、番外編STORYの題名は“三文字”で造られています。

今回の題名、“遊戯王”で……いや、間違っは無いですけどね？

感想、評価等お待ちしております！

番外編STORY No. 5 話の茶

緊張で汗が頬を垂れる。僕はその汗を袖で拭いながら、震える手をインターホンへ近付けた。

滯名ちゃんの話では、今滯名ちゃんが暮らしている家は結構広いらしい。勿論、その家は真名の家でもある。

けれど目の前に居る家は、お世辞にも広いとは言えないし、綺麗だとも言えない。

……だけど、この家の中に居るんだ。

僕は大きく深呼吸して、インターホンを押した。

独特の音が鳴り響いて、数秒。

扉が、がらがらと音を立てて開いた。

「……どちら様ですか？」

出てきたのは、女性だった。どこことなく真名や滯名ちゃんに似た容姿は、少しやつれているようにも見える。

間違いない。

真名と滯名ちゃんの——母親だ。

「僕は諏訪晃と申します。ありみやアキナ有宮明菜さんで宜しいですか？」

「……そう、ですけど」

沢村先生の情報はやっぱ正しい。

有宮明菜。真名の母の名前だ。そして父親の名前は、ありみやカズキ有宮和樹の
はずだ。

「本日は、有宮真名さんと有宮滯名さんの事でお伺いしました」
「ッ……！ 帰って！」

扉を勢い良く閉めようとする。僕はそのドアに足を挟んで止めた。
……痛い。スッゴク痛い。

「大事な話なんです。お願いします……！」

「帰って！ 私は話なんてしない！ 帰ってよ！」

「お願いします……お願いします……！」

頭を下げ続ける。良いって言うまで、僕はこの頭を上げちゃいけないんだ。

——なんで、真名を置いていったのか。

——なんで、滯名ちゃんを独りにしたのか。

——なんで、明菜さんは泣きそうな表情をしているのか。

「……どうした、明菜？」

男性の声だった。

扉の向こう……明菜さんのさらに向こう。1人の男性の人影が近付いて来ていた。

「貴方……」

「有宮和樹さん、ですか？」

「そうだが」

良かった……和樹さん、仕事は休みなんだ。ナイスタイミング。
力の弱まったところを見計らって、僕は扉を開く。

脚を畳み、地べたに膝を付く。正座、という奴だ。

「有宮真名さんと有宮滯名さんのことで、大事な話をしに伺いさせて頂きました」

「っ……真名と滯名の、だと？」

「はい。少しでも良いんです。どうか、話を聴いて下さい。お願いしますッ！」

土下座。少しでも誠意を見せられれば、と思って思いついた行動がこれだけなんて僕は相当馬鹿なんだろう。

けど、僕は馬鹿で良い。

馬鹿しか、ご両親にお話することが出来ないのなら……僕は一生、馬鹿で良い。

「……入れ」

「あ……あ、ありがとうございます！」

がらがら、と……扉は閉められた。

◇
◇
◇

「うーん、ちょっと苦いかな」

「あうう……まだまだだね」

榊君と桜ちゃんが帰って、私は滯名と共に調理室へ来ていた。滯名が買って来てくれたチョコの作り方を参考にしながら作って、

その1つを漑名に食べて貰った時の感想が「苦い」。

……やっぱり、難しいなあ……………。

「頑張って、お姉ちゃん☆」

「うう……………」

漑名も作れば良いのに…………なんて、言っても聞かないだろうから口を閉ざしておく。

と。

調理室の扉が開く音が聞こえた。

「やあ。お疲れ様、真名ちゃん、漑名ちゃん」

「さ、沢村先生」

いつものように白衣を身に纏った沢村先生が来てくれた。

「聞いたよ。今日は晃君、来ていないんだってね」

「…………は、はい」

うう…………やっぱり、人と話すのって少し怖いなあ…………。

晃君のおかげで少しは慣れてきたけど…………あう。

「用事があるんだってー。なんだか知ってる、沢村せんせー?」

「ん…………まあ、ね」

沢村先生、晃君の用事、知ってるんだ…………。

「あのっ…………あ、晃君の用事って………………?」

「うーん、彼には秘密にして欲しいって言われてるんだけどね…………」

「余計気になるよっ！　お願い、教えて先生♪」

腕を組んで、ううんと考え込む沢村先生。
秘密……私や滯名には教えられない用事、ってこと……だよな？

凄く、不安。

もしかしたら、可愛い女の子と会ってるんじゃないかって……
…。

「うん、分かった。教えるよ。君たちには知る権利があるからね」
知る、権利――。

一拍置いて、沢村先生は口を開いた。

「彼はね。今、真名ちゃんと滯名ちゃんのご両親の元へ行っているんだ」

「――え？」

「執拗にご両親の住所を聞かれてね。その熱意に負けて、僕は晃君に教えてしまったって訳。一応、2人のご両親とは連絡を取っているからね」

勿論、お金を取る為とか、そんな目的は無いよ？

そう言葉を続ける沢村先生。
なんで？ どうして？

晃君――お父さんとお母さんのところに？

「晃君は、君たちの為に走ってるよ。そんな彼に、君たちは何が出

来ると思う？」

「私たちが……出来る、こと………」

「そう。良く考えて。今、一番真名ちゃんと滯名ちゃんの幸せを願っているのは、他でもない晃君なんだからね」

そう言い残して、沢村先生が調理室を後にする。

その場に残されたのは、静寂と、答えを求める私たちだった。



出してくれたお茶には手を出さず、僕は正座をしたまま部屋を見渡した。

失礼かもだけど、狭い部屋だ。寝室も、布団を2人分並べればもう足の踏み場も無いだろう。

テレビも無し。勿論パソコンとかも無い。あるとすれば、必要最低限の生活用具だけだった。

「話、というのは？」

「……和樹さんと明菜さんは今、真名さんと滯名さんの様子を知っていますか？」

いや、と首を振る和樹さん。

沢村先生の言っていた通り、真名と滯名の話はしていないらしい。

「――数ヶ月前。僕がまだ、真名さんと出会ったばかりの頃……真

名さんと滯名さんは、顔を合わせることもしませんでした」

「……………」

「滯名さんは、真名さんの所為でお2人を失った、と考えていたからです」

和樹さんの眉がぴくりと動く。

「それから、お2人は和解し、今では仲良くしています——と同時に、僕は今現在、真名さんと交際をさせて頂いています」

「何……………」

「真名さんには僕から声を掛けました」

緊張する。本当に、これ異常ないほどに。

それでも、僕は口を止める事はしなかった。

「僕は、真名さんが——真名が、好きです。僕はまだ中学生の子供ですけど……………将来、僕は真名と一緒にになりたいと考えています」

「な、何言ってるの!?! 真名は病気なのよっ! 結婚なんて……………!!」

「本気です」

真っ直ぐに、明菜さんを見つめる。

「子供の戯言、と捉えて貰っても構いませんが、僕は本気で真名と共に有りたいと思っています。その上で、お2人に問いたいことが御座います」

これからが本題だ。

この会話によって、真名と滯名の未来は、変わる。

言葉は慎重に選ばないと。

「お2人は、何故——真名と滯名ちゃんから、逃げたのですか？」
「っ……！」

逃げた。

僕はワザとその言葉を使って、2人を問い詰めた。

「に、逃げた訳じゃないわ！　だって、治らないのよ！？　どんな病気かも分からない、どんな治療をすれば良いのか分からない……仕方無いじゃない！」

「治らないと決まった訳じゃありません」

「子供の言い分ね！　今まで私たちが、どれだけ真名の為に動いてきたと思うのっ！？　病気のことを探して、探して、探して！　何も見つからなかった私たちの、何が分かるって言うのよっ！？」

「分かりませんね」

「っ……！？」

僕は断言する。

「分かりません。分かりたくも有りません。自分の苦労ばかりを考えて、病気に罹っている本人なんて無視して……治るかもしれないという可能性を捨てた親の気持ちなんて、分かるはずも無いでしょう？」

「……！　私たちは——！！！」

「では逆に問います。貴方たちは、親に捨てられた子供の気持ちが分かりますか？」

「……あ……」

分からないだろう。

分かるはずも無いだろう。

「真名は……ッ！ 自殺しようとしたんですよっ!？」

「じ……!」

「病氣も治らない、滯名ちゃんに寂しい思いをさせてしまった、両親に捨てられた！ そんな人間が、正常で居られるはずが有りません！」

そう……悪く言えば、“異常”なんだ、真名は。

僕なら、発狂しているかもしれない。真名が考えるよりもっと幼い時に、自殺しようとしていたかもしれない。

「……君は、どうしてそこまで真名の事を？」

「……決まっていますよ」

僕はさっき、その答えを言っていた。

「真名が、好きだから」

多分それは、和樹さんと明菜さんも同じはずなんだ。

そうじゃなきゃ、今滯名ちゃんが暮らしている大きな家は自分たちが使っているはず。

それに、僕の予想だけど、和樹さんと明菜さんはきっと、まだ病院にお金を払っているはずだ。

そうじゃなきゃ、いくら沢村先生が色々言ったって、真名が病院に残ってられるはずが無いんだ……正直な話。

「……そうか。君は俺たちに、何を望むんだ？」

「もう気付いているんじゃないですか？」

ふ、と和樹さんが笑みを浮かべる。

明菜さんはまだ表情を濁したまま俯いていた。

「……明菜は、俺から説得しておこう」

「ありがとうございます」

僕はテーブルの上に出されていたお茶を手に、一口、口に含んだ。
少し時間を掛けて飲み込む。

お茶の入った椀を再びテーブルの上に置いて、僕はにっこりと笑った。

「お茶……ご馳走様でした」

番外編STORY No. 5 話の茶（後書き）

あゝ、題名が適当過ぎて……もう逆に笑えてくるww

そしてこの小説って……遊戯王ですよね？ 遊戯王なんですよね？
シリアス満点やで……最早ファンが逃げていくレベルじゃないだ
ろうか。

物凄く、不安です。

出来ればそこら辺あわせて、感想、評価等して下さるととても嬉しい
です！

番外編STORY No. 6 潤う心

——あれから、3日が経った。

あの日から真名と湊名ちゃんの様子がおかしいのに疑問が湧く。沸くけれど、僕に相談してくれないと言う事は、多分それぞれが抱える悩みなんだろう、と思って僕は追及していない。

気付いていない振りをして、僕はいつものように2人と接しよう。

……………そして、今日も今日とて中学が終了し、放課。

僕が真名の病室の前に到着すると、親しき仲にも礼儀あり、に倣ならってノックしようと手を伸ばし——。

「久し振りだな、真名……湊名」

中から、男性の声があった。

少し前にも聞いた事がある、低く響く声……和樹さんだ。

「なん、で……？」

「……親が来ては、いけないか？」

「親って……！ 2人とも、一度は私たちを捨てたじゃん！ 突然親面して、私たちの前に出てこないでよッ！」

それは、最もな言葉だった。

今頃中では、真名は俯き、湊名ちゃんは実の両親を睨んでいるところだろう。

僕は近くの壁に寄りかかって、成り行きを見守る（見てないけど）。

「……俺たちの話を、聞いてくれないか？」

「聞かないっ！ 私たちは——」

「晃君……ですか？」

「っ……！」

意外にも、湊名ちゃんの声を遮ったのは真名だった。

……関係ないけど、ドア越しなのに良く聞こえるなあ。僕が耳を澄ましている事も関係あるんだろうけど……閑話休題。

「……ええ」

明菜さんが答える。

和樹さんの説得が成功したらしい。来てくれたんだね。

ありがとうございます、明菜さん。和樹さんも。

「アキ兄が……」

少しの沈黙。もしかすると、湊名ちゃんが椅子に座るまでの時間だったのかもしれない。

「……どんな、話を……したんですか？」

親に対して、丁寧な敬語で接する娘。酷く滑稽で、哀しい事だろう……僕はそう思った。

「何故俺たちが、真名と湊名から逃げたのか……問われたよ」
「逃げた……」

「ああ。真名の病気が治らないと決め付け、俺たちは家を出て行っ

てしまった。滯名の事も置いて……諏訪君の言うとおりでろう。俺たちは2人から、逃げたんだ」

沈黙。

「……………諏訪君は、良い青年だった。いや、見た目はかなり幼く見えたが……………」

余計なお世話です。

「……………誰よりも、真名と滯名の事を考えてくれていた。それこそ、俺たち親よりもずっと……………真名と滯名を大事にしている、という事が分かった」

それはどうだろう、と僕は首を傾げる。

確かに僕は真名が好きだし、大事だ。恋愛感情ではないにしろ、滯名ちゃんも好き。絶対に守りたい、という決意を持っている。

けれど——僕みたいな一介の一般人が、親の愛情と比較して良いのか、と僕は疑問だ。

僕は愛情、親は親愛……………比べるようなものではない、と僕は思っている。

「諏訪君が去った後、俺たちは話し合ったんだ。これから、俺たちはどうすれば良いのか、と——」

「私はね、真名、滯名」

静かな口調で、明菜さんが口を開いた。

「……………怖かったのよ」

怖い——そう告げて、明菜さんは続ける。

「正直、今でも怖い……だって、真名、いつ死んじゃうか分からないのよっ!？」　今こうしている間にも、真名は……真名は……っ!」

正体不明……実質、不治の病……そんな子供を持った親の気持ちちは、僕なんかには分からない。

それでも……自分の大切な存在が死んでしまうのは、怖いだろう。それが家族であるならば、尚更。

僕もお父さんやお母さん、桜が突然、亡くなるなんて……想像したくも無い。

「……だから、逃げた……?」

「……ええ、そうよ。どうせ居なくなるなら、私の方から消えれば良いつて思ったの!　滞名も……いつかは、私たちの前から居なくなる。そんなの……絶対に嫌……ッ!」

静かな空間が場を支配した。静寂、という言葉がぴったりだ。

……数秒か、数分か。

その静寂を破ったのは、真名だった。

「確かに……私は、もうすぐ死んじゃうかもしれません……」
「っ……!」

小さな呟きも、僕の耳朶を叩いてくれる。心地良いソプラノ声。

「けど、だからこそ……私は……私……私たちは、お父さんやお母さんと一緒に過ごしたい……」

短い、時間だけど。

それが……真名の、本音。

「だって……………」

僕はその場から、静かに離れる。

「大好きだから」

◇
◇
◇

お母さんが、私と滯名を抱き締めてくれる。

温かい……愛、という象徴的な表現に包まれている感じがして、私は目頭が熱くなるのを感じた。

それは滯名も、お母さんも同じだった見たいで……3人で泣いた。傍で、お父さんも涙ぐんでいるのが見えた。

……数分間、私たちはそうしていた。

お母さんが離れて、私と滯名は涙を拭う。お母さんも自分のハンカチを取り出して、目元を拭いていた。

お父さんも……袖で拭っている。

「それで、お父さんとお母さんって、これからどうするの?」

滯名が疑問に思っていたことを訊く。

「家に戻るわ。滯名……また、一緒に暮らそう？」

「お母さん……」

「見舞いには毎日来る。真名の病気は治る……そう信じる事にした」
「っ……うん……！」

本当は、私はもう治らないんだな、なんて諦めていた。
けど……。

私の病気は治る、って信じてくれる人が増えた。滯名、お父さんとお母さん、沢村先生、桜ちゃんに榊君……そして、晃君。私も、諦めない……いつか絶対、元気になってみせる。

「諏訪君に言われたんだ。治る可能性がある事を捨てて、逃げてしまった親の気持ちなんて分からない、とね」

「……晃君が……」

「ああ、それと、こうも言っていたわよ？ “真名が好き”だってね」

「すっ……！」

頬が紅潮していくのが自分でも分かる。

あうう……。

「大事に思われているのね。真名と滯名の事、態々話に来てくれたくらいですもの」

「そりゃ、私たちのアキ兄だよ！？ 私もアキ兄の事、大好きだもんねー」

「あら。モテモテね、諏訪君」

ふふ、とお母さんが笑う。

さっきまでの雰囲気嘘のように和やかな空気が流れる。

「お姉ちゃんがアキ兄の事捨てたら、私が貰っちゃおう」と

「す、捨てないから……ッ！」

「お姉ちゃん、アキ兄にベタ惚れだもんねっ？」

「……はう」

そ、そんな直球に……否定出来ないけど………！

「聞いて聞いて！ お姉ちゃんに告白したのはアキ兄からなんだけど、今じゃお姉ちゃんの方がアキ兄の事、愛してるんだよ！」

「れ、濤名っ！」

「ほう、成る程。そういえばその辺り、彼と詳しく話をしなければならぬな……」

お、お父さん………？

「それにしても、今日、アキ兄遅いね？」

「え……あ、う、うん」

そういえば、そうだ……いつもなら、そろそろ来ても良い頃なのに。

「そう、だね……遅いな、晃君………」



——コンコン、と扉と手の骨が奏でる音が鳴る。

「沢村先生、諏訪です。今大丈夫でしょうか？」

「……？ 大丈夫だよ、入っておいで」

「失礼します」

今の時間は特に仕事をしていない、という事は知っているけれど、マナーとして声を掛けてから中に入った。

最早年齢の離れた友達のような感覚だけれど、さっきもそうしようとしたように、“親しき仲にも礼儀あり”、ってね。

「どうしたんだい？」

「ちょっと、ご相談がありまして……」

「相談？」

許可を貰えるかどうかは分からない。いや……駄目、とにかく無く断られる可能性の方が圧倒的に高いだろう。

「真名に、仮退院をさせて欲しいんです」

「……仮退院？」

こく、と首肯した。

「最近は調子も良いみたいですし、近頃は点滴も少なくなってきました。治った、とは一概に言い切れませんが……少なくとも、発作は有りませんし」

「……………」

「特に今年に入っただけくらいからは、元気な部類だと思います。運動は出来ないにしろ、良く自分の足で病院内を散歩している、という話も聞きますから」

様子見、という事で仮退院は出来ないだろうか。今の僕の望みはそれ一色である。

両親との邂逅も解かれたのだし、少しでも長く同じ時間を共有して欲しい。その分、僕と真名や滯名ちゃんとの時間は少なくなるだろうけど……それは仕方ないだろう。

「……そう、だね……それは、僕も考えていた事なんだ」

「え……そうなんですか？」

「最近は何調もいいし、笑うようになってきた。それに、最近分かってきたことなんだけど、どうやら真名ちゃんの病気は心の動きが重要になってくるみたいなんだ」

心の動き……？

「楽しい時間、嬉しい時間……そんな日々は、心が良い影響を受ける。逆は勿論、悪い影響を受けてしまう」

「……そういうこと、あるんですか？」

「あるよ。結構少数だけどね」

流石に過去の病気の記録は良く分からない。けれど、信頼する医者が言っているんだから事実なんだろう、と僕は頷いた。

「……分からないかい？」

「え？」

……何が？

僕が首を傾げるのを見て、沢村先生はふっ、と肩を竦める。

「真名ちゃんの体調が良くなって来たのは、君と出会ったからだよ」

………！

「君と出会う前の真名ちゃんは、いつも孤独だったんだ。僕にも他の仕事があるから、ずっと真名ちゃんと一緒に居られる訳じゃない。両親もいなくなって、湊名ちゃんも来なくて……ずっと孤独だったからね。だからこそ、発作も起こり易かったし、歩くのも億劫になっていた」

真名に友達は……居ない。

真名にとって、僕は始めての友達であり、恋人であり、心の支えだと言う。

「けれど君と出会って、彼女の心は潤っていった。君を中心に、桜ちゃんや洗司郎君という友達も出来て、湊名ちゃんと仲直りして……ご両親も……ね？」

潤い、か……僕の行動の1つ1つが、真名にとって良い方向に進んでいるなら僕にとってこれ以上の喜びは無い。

……相変わらず、ベタ惚れだなあ、僕。

「沢村センサー」

「はい。呼ばれたから、そろそろ行くね」

「あ、はい。その、仮退院の方……」

「うん。僕の方でちゃんとしておくよ。正式に決まったら報告するから」

「はい。ありがとうございます」

僕がそう言って頭を下げると、その頭に少し大きめだけど細い指をしている沢村先生の手が乗った。

「君はもう、僕の弟みたいなものだからね。弟の頼みは、ちゃんと叶えるよ」

「……………はい」

本当、沢村先生は尊敬出来る。僕もこんな大人になりたい……………。

「それじゃあ、またね」

「はい。また——」

僕はそう言って、部屋から退室した。

そろそろ、真名の病室へ行こうか。それとも、今日は家族水入らずという事で、邪魔者の僕は帰宅しようか……………。

そんな事を思考しながら、僕はその場を後にした。

番外編STORY No. 6 潤う心（後書き）

……題名3文字って辛くないッスか？ 4文字なら楽だったのに……！

廃棄人形です。例の如く題名は悩みに悩んでセンス0でした。本当に（ry

ところで前の後書きにも書きましたけど、これって遊戯王？ 遊戯は遊戯でも、私が二次創作で無茶して“遊戯”してるんじゃ………。

え、日本語でok？ すみません……（汗）

次はちゃんと遊戯王です！ ヒロイン達のデュエルですから！ ……多分！

感想、評価等して下されば返信致しますう。お願いしますう……！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7136t/>

遊戯王 僕らの進んで行く道

2011年12月3日14時55分発行